

デスクリムゾンBLIED～刀～

K.T.G.Y

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

北海道某所、サバイバルゲームを楽しんでいた横溝は、謎の遺跡に迷い込み、そこで真紅の銃・クリムゾンを手に入れ、戦国時代にタイムスリップさせられてしまう。

岐阜城城下にたどり着いた横溝は織田信長に仕えることになり、否応なしに血なまぐさい戦場を走り抜ける事になってしまう。

しかしそこは同じように「銃」を所持した『渡人』が戦局を左右する奇妙な戦場だった。

突き動かされる衝動と共に、戦い続ける横溝を待ち受けているものは、果たして何か…。

「こりゃあ、キツイ!!」

「ゲームに点数を付けるという行為に限界を感じた一本」

「これマジで出すんですか？」

「さっさとバーチャガン置いて家に帰りました」

そいつの名は……、

この物語は1990年代のクソゲーブームの渦中にスーパー스타として称えられマイナス方面にメガヒットした快作『デスクリムゾン』の89次創作です。

ああ、あと、この物語はあくまでフィクションです。登場する実在

していた・していない人物・各団体・名称、事件等は全部架空であり、
実在のものとは関係ありません。多分

あとすつげえつまらないです。ファミ通で2点ぐらい。それでも
よければどうぞ。

あと時系列や考証なんかも滅茶苦茶です。文句つけたい評論家の
方々はどうぞ自由に。

目次

浅井編	①	1
浅井編	②	11
浅井編	③	21
朝倉編	①	35
朝倉編	②	44
朝倉編	③	51
本願寺編	①	64
本願寺編	②	70
本願寺編	③	76
上杉編	①	90
上杉編	②	101
上杉編	③	109
上杉編	④	119
足利編	①	127
足利編	②	136
足利編	③	147
足利編	④	157
徳川編	①	165
徳川編	②	172
徳川編	③	181
徳川編	④	192
徳川編	⑤	199
徳川編	⑥	207
毛利編	①	213

エピソード	294
決戦⑤	289
決戦④	282
決戦③	272
決戦②	261
決戦①	255
毛利編⑤	246
毛利編④	238
毛利編③	230
毛利編②	221

浅井編①

北海道——札幌郊外。某所……。

本日は晴天に恵まれ、絶好のピクニック日和ではあるが、集まったメンバーがこれからやろうとすべき事はまた違う。

サバイバルゲーム。

大の大人達がマムシやヒグマの恐怖と戦いながらプラスチック弾が発射されるアサルトライフルを構え、

敵と対峙する大衆娯楽である。

昼飯は買った。夜はススキノで乾杯だ。そちらも楽しみの1つでもある。

しかし晴天といっても季節は7月。気温は25℃を超えている。ベテランの挨拶では熱中症にならないよう。水分はきちんと取り、単独行動は極力控えるようにと通達があった。

「……まあ、当然だな」

その中に一人、テニスサークルではなくわざわざテニス部を選び体を黒く染めた男が一人……。

横溝 由貴（よこみぞ ゆき）。

某大学のサバイバルゲーム同好会所属の22歳（浪人1年）。大学卒業後の進路は既に市内の食品会社の営業で決まっている。悠々自適というやつだ。

横には同じ同好会の小林雄介という男がいる。彼はまだ19歳。横溝の強引な勧誘に押し切られるように同好会に所属したが、今ではすっかりハマってしまった。

「では、各陣営、準備について！」

ベテランの号令により、東陣営と西陣営に分けられ、一斉にメンバーが駆け足で陣地に着く。

今回のルールはシンプルなフラッグ戦。両軍奥に設置されたフラッグ近くのブザーを先に鳴らしたほうが勝ち。ただし時間切れもある。

「では、始め——！」

拡声器を使つての呼びかけ。

いよいよ戦闘の時間、いや、人によつては狩りの時間だ。一発喰らえば（ヒット）終わりとはいえ、最近は一アクティブに動く陣営の方が多し。

勿論守り役を数名置いたほうがいい場合もあるが、「やりたくない」人の方が多いのが現状だ。理由は簡単。暇だから。

「それじゃあ、行くぞ、小林くん」

「はい、先輩！」

他メンバーの前衛部隊に合わせ、二人も前へと動く。これなら開始5分程度で撃ち合い必死な状況になるだろう。

バン！ バン！ バン！

ババババババ！

案の定開始5分で銃声が響く惨状となった。

プラスチック弾が雨霰のように銃口から飛び散る。まったく環境破壊しまくりである。もつとも、そんなこと気にしてる側から死ぬが。

といっても最近は一バイオBB弾が普及して弾も数年経てば分解され自然に帰るようになってるので昔ほど環境は破壊してない。

「ヒット！」

「くそ、ヒットだ！」

開始そうそう何人かやられたようだ。こういう場合、両手を挙げて降参の意を示すのがマナーである。

当たったのに当たってないふりするような奴はいずれ仲間に入れてもらえなくなる。

一方、横溝と小林は側面から背面側に回りこんでいた。こうなると敵の動きは丸見えである。

出来るだけだけ数を減らし、意気揚々とブザーを鳴らしに行く計画だ。

バン！ バン！

バン！ バン！ バン！

「ぐあっ！ ふっ、ヒット！ 痛っ！」

「俺もヒットだ！ つぁ背中痛え！」

横溝の2発は正確に相手に命中していた。一方、小林の3発はやや掠めた程度で命中には至っていない。次回に期待しよう。

「先輩、エイム上手いっすねー」

「腕と経験の差よ」

あと相手が匍匐前進など当りにくい体勢を取らなかったことが敗因にあげられる。

やったねパパ！ 明日はソーブランドだ！（ちなみに北海道は青少年健全育成条例が甘く18歳以上から風俗で働ける。つまり高卒1年目のソープ嬢を抱けるのだ！）

「さあこの調子でガンガン攻めるぞ！」

「了解です、先輩！」

ずぼっ！

「え、ずぼっ……？」

突如踏み出した足が深みに沈む。ぬかるみか、それとも天然の落とし穴か、横溝の体をすっぽりと包むほど穴は深かった。

「何だこれ!? 深いぞ！ うあああっ！」

「先輩！ せんぱーい！」

小林の伸ばした腕も届かず、横溝の体は、はるか奈落の底へ沈んでしまった。

「痛い痛い痛い！ ちょ、な、なんだこれ!? ま、まだ沈むのか!? うわああっ！」

横溝はまだその体を落とし穴の奥へ、奥へと沈めていた。それも微妙にぬかるんでいて腕や足で踏ん張れない。

このままいつまでも堕ちていく……いや落ちて行くのかと不安になったが、ようやく終点が見えてきた。

「うおおおおっ!」

ガンツと横溝の尻が石にぶつかる。ここまでの沈み込みで一瞬意識を失いかけたが、気合で持ち直す。

「あいててって、どうなってんだ？ 俺は戦時中に作った防空壕にでも落ちたのか、それとも金塊が眠る穴にでも落ちたのか……？」

どちらにせよ、問題点が一つある。

(どうやって戻ればいいんだ……？)

「……まったく、今日は厄日だな」

それを考えるとぞつとするが、改めて、穴の底を調べてみる。幸いもしものことがあった時のために水筒や懐中電灯は持ち歩いている。

だが、それを取り出す前に、穴の底で異変が起こった。

シュボツ。

「うわっ!？」

備え付けの松明に突然火が灯ったのだ。立ち上がり、改めて穴の底を見ると、それは実に浮世離れした光景だった。

下は綺麗な石畳、松明は10本、その先には扉が3つ。扉の上には青、赤、緑の石がはめ込んである。

「これって……」

横溝はある光景を思い出していた。それもゲームの光景を。

『汝よ……』

「うああああつ!？」

腹から変な声が出た。

突如、部屋にエコー、いや、エコーがかかった声が響き渡った。

「いきなり声出すなよ！ 流石の俺でもびつくるするじゃねえか！」

『汝よ……3つある扉、その1つを選べ。開かれるのは1つ。残りは決して開かれる事はないであろう』

「おいおい……」

とりあえず目の前の扉を調べる。どれも似たような扉で、大きな差はない。

ならば横溝、答える扉は一つ……！

『汝、答えよ……』

「あーもう、しょうがないな。分かったよ。お約束ってやつだろ？」

横溝は空間に向かって皮肉を呟いた。聞き手は誰もいなかった。

(少々こっ恥ずかしいが、仕方ないか……)

「せっかくだから、俺はこの赤の扉を選ぶぜ！ ……これでいいんだろ？」

横溝は伝説のクソゲー『デスクリムゾン』の有名な台詞で答えた。それは脳髄に刻まれた、魔法の言葉……（一度言ってみただけ含む）。

そう、横溝はかつて19XX年、時はクソゲー・バカゲー全盛期。そこで販売されたゲームになけなしのお金をつぎ込み、皆と共有して遊んでいた三国一のおおたわけであった。

その中であつた伝説のクソゲー『デスクリムゾン』。今なお、一部のユーザーの心に深く刻み込まれた奇跡の一作である。

ギギギギイイイイイイイ……。

「……本当に開きやがった。はは、これで奥にクリムゾンがあつたりするのか？ んなわけねーか。あれは所詮ゲーム、空想の銃だからな……」

横溝は扉の奥へと進む。そこには台座があり、真紅に輝く銃が確かにあつた。

「ま、マジでありやがった。あーでも、クリムゾンって100万人に一人しか使えないはずじゃ……」

『汝よ……』

「あーまたこの不意打ち話しかけ。もう慣れたよほんつと」

『汝は選ばれた……。これからその真紅の銃を持って飛翔んでもらう。時は戦国……日本がもつとも血なまぐさいといわれた時代へ……』

「へ？ それってタイムスリップ？ ちよ、ちよつと待てよ。人の都合を考え……」

『汝よ、苦難の中で呪われし銃を使いこなし、戦うべし……戦うべし……。健闘を祈る……』

「だから待てて！ こんなありきたりの流れで飛ばされるなんてマジ勘弁なんですけど！ って少しはこちらの話の聞けー！」

瞬間、部屋は白い光に包まれ、光が消えた頃には横溝と真紅の銃はなくなっていた。

「……………」

目が覚めた時、横溝は草原に仰向けになって、体で大の字を作って横たわっていた。

流れる風は心地よく、鳥のなく声も耳に入る。

徐々にだが意識がしつかりしてきた。そして右手には、あの真紅の銃「クリムゾン」が握られていた。ご丁寧に、右腰ベルトにはホルスターが付いている。

ゆつくりと体を起こし、立ち上がる。クリムゾンをホルスターにしまい、辺りを見渡す。

「……が戦国時代か……？」 随分と静かだな。まあ、戦場のど真ん中に転移させられるよりかはマシか。ていうか、どうせならガチの異世界転移でチートハーレムがよかったなあ」

愚痴を零しつつ、改めて荷物を確かめる。

エアガンは落ちてくる前に手放してきたので今ここにはない。後ろの腰ポーチには昼飯用の菓子パンと携帯食のカロリーメイト。

腰ベルトには左側に水筒。右側にはホルスターに入れた真紅の銃。

胸元のポケットにはスマートフォンが入っているが当然電波は存在しない。つまりまで電池が持つかも危うい。

後はエアガンのマガジンに、手袋の替え、頭にはプラスチック製のヘルメットよし。目元にはゴーグル。

「こんなもの万屋に持っていったっても売れるかね。ま、捨てるのは後にして、あ、そうだ。あれがあつた！ 双眼鏡！」

慌てて荷物の中を確かめると、左胸ポケットに双眼鏡はあつた。首からぶら下げられるように紐も付いている。

「これがあるとないとじゃ大違いだよ。どれどれ……」

辺りを見回す。何か手がかりがあるといいのだが。期待をこめて北、西、南と見ていくと南方に大きな城が見えた。

「城があるってことは、城下がある。城下があるってことは人がいる。つまりこの近辺に街道がある筈だ。よし……」

苦難の中こそせつかくだから、とは誰が言った言葉か知らないが、

もう毒を喰らわば皿までの思いで、横溝は走り出していった。

「おー、ここが城下町かー。テーマパークみたいだな。テンション上がるぜ〜」

街道はそれほど遠くなく見つかった。城まではおよそ3里程度と遠かったが、横溝は無事城下に辿り着いた。

(ざわざわ……)

(ぼそぼそ……)

しかし周りからはやたら目立っていたため視線を感じるが。

(何か、周りの視線を感じるといいうのは、全く恥ずい……。でも大丈夫だ。ここは日本なんだ。日本語は通じるはずだ)

「さあ、いらつしやい！ いらつしやい！」

目を付けたのは、威勢のいい声で客ヒキをしている魚屋。

「あんだ、ちよつといいかい?」

「ひ、ひえっ!? なな、な、な、な、何かようですかい……?」

「そんな怯えなくてもいいよ。こっちは取って食おうってわけじゃあないんだ。ここらへんで仕事を探してるんだが、何かいい所はないかい?」

「え、えー……そ、それでしたら、あつちを三軒ほど行ったところに万屋さんがあつてね、そこで仕事をする人を募集しているはずですな」
「分かった。有難う」

一礼をして、横溝は立ち去ろうとした。

「……」

「……」

振り向き、「な? 取って食おうとしなかっただろ?」

「は、はい……」

今度こそ、横溝は立ち去った。

(……あれはまさか御触れの……えらいことだ。城の人に來てもらわなきや!)

「ちわーす」

「へい、まいど……ってうああっ!」

「……俺を見た奴は皆同じ反応をするんだな。大丈夫。取って食ったりしねえよ」

「そ、そうかい、それで何用ですかい？」

「仕事を探してるんだ。後買い取れるものがあるなら買い取ってほしい」

「そ、そうですか……今なら2軒先でかい建物を作るっていうんで大工の手が欲しがってたかねえ……」

「大工か。力仕事ならこう見えても自信あるよ。たまに大学のジム設備使わせてもらってたからな」

何なら丁稚に案内させる、ということではまどまった。後は買取の件だが……、

「駄目ですな」

「ダメなのか？」

「いい物なのは確かなんでしよう。けどこんなもの誰が欲しがるか検討もつかないんですよ。つまり買い手がいないから買い取れないってことです」

「んー、そうか。それならしょうがないな」

「大工の件は至急案内させます。おーい、二七、二七はいないか!？」

万屋の奥からドタドタと音がした。

「番頭様、お呼びですか？」

「来るのが遅いぞ二七！ 次来なかったら閉め出すからな！」

「ひええ、それは勘弁を！」

「この方を例の建築のところまで案内してあげろ。丁重にな」

「はい！ では渡人（とじん）さま、こちらに……」

「ん……、渡人？」

「二七！ 余計な事言うんじゃねえ！」

「ひええええす、すいません！」

こうして、横溝は二七という丁稚に連れられ、目的地へ向かった。一方、番頭は、

（あれが渡人か……あんな力のなさそうな奴が強いとは思わないが、まあいい。岐阜城に言付けを頼まなきゃ……）

「ここです」

「ん、ありがとう」

「んん、なんだあんたはって……ひええ、と、渡人!？」

「……無限ループって怖くね？」

「この方がここで働きたいそうです」

「え、あ、ん、そ、そうか？ そうなのか？」

「そうだよ」

「……………。あー、分かった。丁度人手が足りなかったんだ。人手は
幾らでも欲しいが力仕事になるからきついぞ」

「大丈夫だ。問題ない」

「ほーう、じゃあまずはあその丸太五十本の皮を丁寧剥がしてく
れ。丁寧にな」

「分かった。薪割りに比べればいくらか楽だな。早速始めるよ」

「お、おお、任せませ」

(おい、あの渡人のこと、城に報告しなくていいのかよ?)

(大丈夫です。多分番頭さんが既にやってるはずですよ)

「ぞりぞり、ぞりぞり、ぞりぞり、と」

幸い日陰を用意されたので、体力の消耗はさほどない。手は決して
器用な方ではないが、三本ほどやったらさすがに慣れた。

しかし残り四十七本である。根気のいる仕事だ。

だがこれをやらないとおまんまくいあげなのである。こんなこと
なら寝袋の一つでも持つてくれば良かったなあ、と横溝は空を見上
げ、一人呟いた。

そこに、予期せぬ来訪者が……、

「失礼! 私、岐阜城から来た者だが、例の渡人はここか!？」

「お、おお、はい、今ここにいます?」

「ん……誰か来たのか」

横溝は誰か来たのかな、ぐらいに思い、手を休めず皮を剥いでいく。

「その御仁、少し手を休めよ」

「へ、俺のこと?」

「他に誰がいるというのだ」

「……そういう事なら、座って応対するのは無作法さんだね」
横溝は立ち上がった。

「で、あなたは？」

「拙者は織田家家臣、村井貞勝と申す」

「織田家？　するつていうと、ここは……」

「ここは岐阜城城下、城主は織田信長様でおらっしやられる！」

「え、マジ、織田信長つて、美少女にされたり放火マニアにされたり巨大化したり仏像になったりした、あの信長？」

「……何を言ってるか分からんが、とりあえず織田信長様で間違いない。で、その信長様がそなた渡人を所望だ」

「……とじん？」

「うむ。我々はそなたのようなまるで別の日ノ本……、いや別の世から来たような輩を『渡人』と呼んでいる」

「へえ、成る程ね（周囲の目がただ怯えていただけじゃなかったのはこれか）」

「仕事のところ悪いが、一緒に来てもらいたい」

「……ここで仕事を止めると賃金が入らなくて無一文なんだけどなあ」

「それは城の方でなんとかする！　とにかく、急ぎ、来られよ」

「分かった。じゃあ棟梁さんに挨拶してくるよ」

「ここにいるぞ。お前さん、とにかく行って来い。仕事の方はこちらでなんとかする。気が向いたら明日また来てくれ。銭も払う」

「恩に着る。じゃあ村井殿、行こうか」

「馬を用意してあるが、乗るか？」

「ああ、悪い、俺乗馬はしたことないんだ。それにその馬、見たところ、一人乗りだろ？　二人は無理そうだ。横に付いて走るよ」

「ふむ。了解した。（こやつ、あつさり馬の状態を見定めるとは、渡人とは目も肥えているのか？）」

（織田信長に会えるー！）

横溝の目は子供のように輝いていた。

浅井編②

現代で言う応接間。その中央に横溝は座布団の上に正座していた。左右には織田家武将が鎮座している。村井殿の話によると、織田家武将のオールスター、すなわちほぼ全部がいるらしい。

左側には、柴田勝家、明智光秀。

右側には前田利家、佐久間信盛、そして彼を連れて来た村井貞勝。錚々たる顔ぶれである。

（ピリピリしてるねえ。なんか大きな戦いの後なのか、はたまた俺みたいなき場違いの人間囲んでどうしようとしてるのか、まあなるようになれ、だな）

「殿の、おなーりー」

襖の裏から声がすると、全員が頭を下げる、つられて横溝も頭を下げる。

（これで島崎信長が出てきたりすると笑えるんだがなあ……）

ゆつくりとした足取りで、一人の武将が入ってきた。

「……全員、顔を上げい」

「はっ……！」

織田信長。

諸説、天下取りのために戦い続けた。誰よりも謀反人を殺した。あらゆる城を焼き払い皆殺しにした。

そしてその眼は、海よりも空よりも深い、地獄の淵の闇を見てきたかのように黒く淀んでいた。

これが人の眼か……！ 横溝は内心戦慄し生唾を飲み込んだ。周りの人間はまだ人の眼をしているのに、信長からは生気はあるのに人の眼が宿っていない。

「……そち、名を申せ」

「ああ、横溝 由貴だ。横溝でいい」

「横溝、で、あるか……ふむ……」

「……他になにか？」

「お前を知るために、ひとつ……試したい事がある……」

た。

「首を胴体にくっ付けてみる」

「……………」

言われるままに胴体を動かし、首をくっ付けてみる。そんなことでくっつく筈が、と思つたら、案外あっさりくっ付いた。激痛は止まらないが。

「体の調子はどうだ？」

「すごく痛かった。というか、信長、ボク、あたまがヘンになっちゃったよお……………」

激痛と血を流した際の貧血で体はフラフラである。できればこのまま床について寝たい。

「言いたいことはあるだろうがまずは儂の話を聞け。退出は許さぬ」

「…………相変わらず強引な奴だ。家臣も苦勞するだろうなあ。なあ、皆の衆」

揃っていた織田家家臣は何も言わなかった。

「…………きっかけは朝倉を攻めていた時のことよ」

「朝倉か。勢力は多いが積極性に欠ける連中だと聞いているが」

「うむ。我々は揃えた鉄砲隊と弓矢隊を並べ、前陣、中押さえに壊滅的な打撃をくわえ、戦局を有利に進めていた。しかし……………」

「なんだ？ どの家でも裏切ったか？」

「その通りだ。我が妹、お市を嫁がせ、同盟を結んでいた筈の浅井家が突如裏切ったのだ」

「…………（ま、正確には親父の久政が先走ったんだろがな）」

横溝は詫びに出された茶を一口飲んだ。

「朝倉家は退却し、我々は浅井家との連戦になった。それでも我々はなんとか戦局を拮抗状態まで持ち直した。しかし……………」

「しかし？」

「そこに短筒を構えた、奴らが『渡人』と呼ぶ者が現れたのだ……………」

信長も茶を口に含み、一呼吸置く。

「恐ろしい相手だった。奴は無限とも言える弾を撃ち続け、火縄で

撃つても死なぬ、槍で心の臓を貫いても死なぬ、拳首を斬りおとし
ても死ななかつた。

これにより織田軍の士気は急激に低下、撤退を余儀なくされた。何
よりも殿（しんがり）を任せた三佐を死なせたのが心残りじゃ……」

「三佐……森可成のことだな？」

「そうじゃ。朝倉が先に退却したからよかつたものの、我々は貴重な
家臣を失つた。そして考えたのだ。我々にも『渡人』たる者が必要だ
とな」

「そこへ、現れたのが俺、つてわけか」

信長はにやりと口元を曲げた。

「その通りよ。報告を聞いたときは言葉にならぬ、これが天啓かと
思ったぞ。そちよ、儂に力を貸せ。否定は許さぬ」

「しかし……仮に俺がいたとしても、戦局はそう変わらないんじやな
いか？」

「いや、変わる。儂は一つ仮説を導き出したのだ。『渡人』を倒せるの
は『渡人』のみ、という仮説をな」

「で、実現できなければ俺を処罰する気だな？ まったくあんたは酷
い君主だよ」

横溝は茶を飲み干し、お代わりを頼んだ。そして、

「……いいぜ。その話、乗ってやる。俺も元々は戦うためにこのクリ
ムゾンと共に来たんだ。

何より天下取ろうって躍起になつてる織田信長の頼みだ。受けな
きゃ男じやねえ」

「ほう……」

この男、案外骨のある真情をしておるわ、と信長は内心想つた。

「ただし、俺はあんたをそこまで信用しているわけじゃあないんでね
え」

「何だ？ 欲しいものがあるのか？ 土地か？ 地位か？ 大抵の無
理は聞くつもりだぞ？」

「俺は戦国大名じやないんだ。地位にも土地にも興味がないんだ。そ
の代わり……」

横溝は腰のポーチを開け、中から菓子パンを取り出した。包み袋を開け、信長にぽいつと投げる。

「これは……なんぞ?」

北海道の誇るローカル製パン屋、日糧製パンが誇る最高傑作。チーズ蒸しパンよ」

「ちいずむしぱん?」

「そいつを毒見役無しで食えたら信用してやってもいいぜ。ああ、紙の部分は外して食えよ」

「信長様、それは危険です。やはり毒見役を……」

「まて光秀。面白い座興ではないか。いいだろう、乗ってやる」

（ふむ、嗅いだことのない香りだな。だが腐っているわけではなさそうだ。しかもこの独特のふんわり、というべきか、上質の絹のような弾力……）

「我慢できぬ! 儂は食うぞ」

信長はがぶりとパンに喰らい付いた。

「……………美味しい」

「ええっ!」

周りにいた家臣一同もたまげる。

「うう、美味しい! なんだ、この独特の甘さは! 柿とも小豆とも違う! それでいてこの食欲をそそる独特の香り。うおお、止まらない!」
「ふっふっふっ……」

（そうだ。俺はこの姿が見たかった。信長が栗鼠の様にパンを貪るその姿がな……）

「お、おまえ、これを大量に作ることは出来るか!」

「流石に今の技術では無理だなあ……」

「そ、そうか……」

信長はうなだれた。

「ははっ、案外可愛いところもあるじゃないか。じゃな。これからもよろしく頼むぜ」

「何処へ行くつもりですかな?」

「ん、バイトの続きだよ。俺はこう見えて半端な仕事はしたくないん

だ」

近江国・佐和山城。織田との戦いより少し後の事である。

「うわっはっはっはっ、でかしたぞ渡人殿！」

浅井長政の父・久政は先の戦いの戦果を記念して酒盛りの真つ最中であつた。

「いや、俺一応『白田 徹』って名前があるんだからそっちで呼べよ……」

「いや失礼！　だがそなたの活躍で織田軍を退けることができた。これは銭5000貫に相当するわ」

「銭ねえ、まあ後で有難く頂戴しておくけど、こっちは槍で心臓貫かれるわ首斬りおとされるわで大変だつたんだけど」

「ふはは、真に無敵の城壁も同然だな。死なぬのだから！」

「まあ、ねえ……（一応ここに来る前に『渡人』の唯一の弱点を知らされて飛ばされてきたんだけどな、まあ言わないでおこう）」

「がっはっは。今日は気分が良い。あの織田信長に一泡吹かせる事ができたのだからな！　ささ、もつと飲んでくれ。今日は無礼講じゃ。部下も飲んでいいぞ」

「はっ、有難うございます！」

「はっはっは！」

久政は信長が嫌いだった。それこそ暗殺でもしてしまいたい程嫌いだった。だが信長の妹、お市と息子の長政との間で婚姻が行われた以上、迂闊な手出しは出来なかった。

しかし此度の朝倉と織田の戦いに我慢がならず長政の静止を振り切つて出陣してしまった。

それも勝算があつた。城下に突如現れた『渡人』、初めはまともに信用していなかったが、死なないという事を証明した結果、勝ち目はある、と確信した。

同盟を破棄することになったが、今となってはもはやどうでもいい。こっちは負けない。決して負けない。それだけの『駒』を手に入れたのだから。

「がっはっは！ 今日には浴びるほど飲むぞ。酒だ、酒持つてこい！」
「……（これが上司で大丈夫か俺？ まあ本当の上司は長政殿と思っ
ておけばいいか）」

——小谷城。こちらでは戦果に浮かれず神妙な面持ちの男があぐ
らをかいて座っていた。

浅井長政。久政の息子であり、織田とは同盟を結んでいた男であ
る。

それが一方的に破られた。全ては浅井側の責任である。

「長政さま……」

「市か」

襖を開け、部屋の中に自分の大切な妻であり、信長の妹であるお市
が入ってきた。

「……すまない！ 此度の件、全ては私の力不足が招いたことだ」

「そんな、長政さまがお謝りになるなど」

「父上は驕っている。あの『渡人』さえ手に入らねば、朝倉に援軍とし
て向かう事はなかったかもしれないというのに……」

「長政さま、あまり父上を悪く言わないであげてください」

「市よ、今ならまだ間に合う！ 織田へ戻れ。そうすれば少なくとも
お前の命は……」

「それはなりません！」

お市はきつぱりと拒絶した。

「分かっております。所詮乱世の時代では女は政治の道具だと。しか
し長政さまは私を暖かく迎えてくださいました。家臣の皆様もそう
です。私だけが織田へ戻るわけには参りません！」

「市よ……」

「だから私は何があっても長政さまと運命を共にします。例え命を失
う事になろうとも！」

「……市よ。有難う。そこまで言ってくれるなら私も腹をくくる。織
田と戦う。そして必ずや勝ってみせる！」

「はい……武運を、長政さま」

この戦、辛い戦いになるのである事は長政も確信していた。だが、逃

げるわけにはいかない。自分を信頼してくれる部下の為にも。そして市の為にも。

(……大丈夫だ。小谷城は難攻不落。信長と言えどそう簡単には落とせんはずだ。墨俣の砦は機を見て打ち壊せばよい。大丈夫、大丈夫な筈だ……)

「さて、と……」

横溝は昼にいた大規模建築物の前まで戻ってきていた。

夜という事で日の灯りはないが横溝には懐中電灯がある。それに織田城から少量の油と細縄も貰ってきた。準備は万端である。

(チャッカマンが懐に入ってたのを忘れてたぜ……)

昼いた所に腰掛ける。残り丸太はざつと30といったところか。削り用の短刀はすぐ近くの地面に刺さっていた。

皿に油を盛り、細縄を少し油で濡らし、チャッカマンで火を灯ける。ぽう、つと縄の先に火が灯った。

「これで灯りは万全、つと。さ、夜が明ける前に終わらせてしまおうか」

横溝は独り言を呟きながら一人、丸太の皮を剥がし始めた。

「そりそり、ぞりぞり、つと。まるで大根のカツラ剥きだな」

なお、朝に棟梁達が来たとき、残りの丸太の皮が全部剥がされ、横溝に横溝が寝ていて驚いたことは余談である。

その後、あれこれ話し合った結果、横溝はしばらく岐阜城に居候になった。仕事は続けていたが。

働かざるもの食うべからず、である。

そんなある日の事である。横溝が岐阜城に居候してからおよそ一ヶ月弱が流れたころか。

織田家家臣が再び集められた。中には横溝の姿もある。

「……浅井を、攻める」

信長は皆の前でそう言った。

「浅井……朝倉ではなく、浅井を攻めるのでありますか？」

「随分早急な戦でありますな」

「そうだ。浅井だ。『渡人』が手に入った今、朝倉より脅威な浅井を先に叩く！」

「それは浅井が小谷城から動かないという見込みも込みで、ですか？」
「そうだ。三佐の弔いもあるが、儂にもちゃんと策はある」

信長は口元を白い歯が見えるくらいにんまりと歪めた。

「そして、横溝よ……」

「おう」

「主にも存分に働いてもらおう。頼むぞ」

「お、おう……そこまで頼られちゃ俺もせつかくだから人肌脱ぐぞ」
「といつても横溝は不安だった。」

それは腰に差したクリムゾンである。この銃、照準が合わないことで大変有名な銃なのだが……、

城の庭に的を置いて試しに撃つてみた結果、案の定、である。弾は明後日の方へ飛び、せいぜい的を掠める程度であった。

（勝てるのか、俺……？ 鼻と鼻がくっつくくらいに近い距離からの発砲じゃないと当たらないくらいアテにならない銃を片手にドンパチやらかすなんて。

……まあ戦極姫をパッチなしでやるよりはマシか）

こればっかりはレベルを上げて物理で殴ればいいものでもない。
現状八方塞がりだった。

「村井は戸板と釘と丸太を大量に用意しろ。光秀は間者の募集のお触れを出せ」

「ははっ！」

「了解しました！」

『間者』。今でいう、流れの傭兵のようなものである。

尾張は弱兵、これは信長が自虐るほど有名であった。なにせ土着の部下がほとんどいなかった。そこで駒不足を補う為に金で雇っていた者達が間者だ。

ところが彼らは忠義心などまるでないため、死にそのような局面となればすたこらさつさと逃げ出してしまふ。

こんな調子なため、駿河や美濃で「尾張の兵は付近で一番の雑魚」と言われるくらい弱かった。

しかし流れ者でもいいところはある。補充が利きやすく、こちらの都合で軍を動かせるというメリットもあった。

そんな間者をどうやったら上手く扱えるか、信長はずっとそれを考えていた。

例えば繁農期で田畑に人が取られて相手が忙しくなる時期を選んで戦いを仕掛けた。鉄砲にもいち早く眼を付け、鉄と火薬を買占め、量産し、訓練をさせた。

それでも戦いに安定はしなかった。危ない橋を渡るような戦も数多くあった。実際信長が最前線で戦うような戦もあった。

こんな調子でも信長は諦めなかった。そして遂に「勝ち」を左右するほどの大きな戦術を編み出したのだ。

「……して、信長様、その『策』とは？」

「ふっふっふ……」

「信長あ……勿体ぶらずに早く教えてやれよ。指示するのはお前さんだが、動くのは部下達なんだぜ」

「……………」

「名付けて、「付城（つけじろ）戦術じゃ」

浅井編③

長良川西岸——墨俣砦。

「秀吉様、岐阜城から信長様が来られました」

「な、なんだとー!? し、至急おもてなしを、といってもここには茶席もないし、美味しい食い物もない、ど、どうすれば」

「というかもう来たぞ猿。墨俣の防衛、大儀であった」

「と、殿お、会いたかったですぞ！ こっちは何度も攻められいつ地獄に行くか気が気でならなかったものを……」

「はっはっはっ、それでも守り通したのだから重畳ではないか。褒めて使わす」

「そんな、私めに、感謝の言葉もございません」

（好かれてんだなあ……そりゃ出世もするわけだ）

「お、そちらの者が噂に聞く『渡人』でござるか？ 始めましてでございます。木下秀吉と申す。以後よろしくお頼みもうす！」

「ああ、横溝 由貴だ。まあよろしくな」

信長と秀吉は旧知の仲、などでは決してない。だが信長は身内びいき、もとい、その上昇志向を大いに買っていた。

だからこそこの墨俣砦の防衛を任せただけが……。

「心配するな猿よ。儂が新たな策を見出した。この方法なら浅井など丸ごと平らげてくれるわ」

「なんと！ して、その策とは？」

「くつくつく、まあ見ておれ」

佐和山城。

「殿、大変です。織田側に動きがありました」

「なんだ。わしは昨日は飲みすぎて痛飲中じゃ。年は取りたくないものじゃなあ……」

「そんな余裕ではありません！ 織田に……囲まれました！」

「はあ!？」

「正確には織田が建造した砦……実に10を越える数です！」

「何いっ！」

久政は慌てて、城下の先を見下ろす。するとどうだ？ 一夜墨俣城どころではない。だが建設中の砦が佐和山や小谷城を囲むように建設されている。

10どころではない。ざっと合わせて20はあるのではないだろうか。

「う、打て！ まだ建設中の砦を落とすのじゃ！」

「打つといっても、何処を仕掛ければいいのですか!？」

「そ、それは……」

「もう無理です。分散し過ぎているし、砦自体が深いところにあります。これでは手出しが出来ません！」

「の、信長あ……」

事態は当然小谷城にも告げられた。

「これは、一体……」

「長政さまこれは……」

「市よ、どうやら我々は文字通り囲まれてしまったようだ……」

「そんな……」

付城（つけじろ）戦術。それは相手の城の周り、いや回りを囲むように砦を建造するというものである。

これも間者が多い織田だからこそ出来る戦術だった。

やってることはただの土木作業だが、これは恐ろしい程の効果があつた。

第一に守りに徹することができるので犠牲が格段に減る。そして相手は砦を落とそうと援軍を送ってくるだろうがこちらは砦にこもって弓や銃で応戦していればいい。

やがて敵は無理と悟って引き返していく。

そうすれば後はこっちのもの。降伏させるも干殺しにさせるも思いのまま、ということだ。

間者だつて出動回数が多いので銭はたらふく、なのに危険は低い。まさに万々歳というわけだ。

一週間後、浅井側は結局何も出来ないまま全18個の砦の建立を許す。まさに織田の電光石火の建立だった。

その後は嫌がらせのように織田軍は攻める。そして引き返す。攻める。の、繰り返し。

浅井側は兵糧と兵力が尽きぬことを祈りながら攻める、砦はひたすら守る。守りを破れず退却の繰り返し。

どつちが有利なのかは、最早誰の眼にも明らかだった。

「結局戦で最後に物を言うのは兵でもなく忠義でもなく、戦略でもなく、銭、というわけですか……私の立場がありませんね……」

秀吉に付いていた軍師・竹中半兵衛が状況を見ながら一人呟いた。

「さて、この調子では埒が明かない。埒を明けるためには切り札を出すしかない。と、なれば……」

「死なないことを武器に戦場を駆け回る渡人を切らざるをえない、つてわけだろ？ 分かっているって」

「頼むぞ。おまえが死ねば全てがひっくり返るのだ」

(……この時代、松明灯けば火の灯りで丸見えだもんなあ。少なくとも夜襲はない。昼に来るしかないか)

「信長……」

「何だ？」

「必要になるかもしれない。刀を一本、銃を一丁貸してくれ」

「……ふふふ、初陣ということであぬも人並に緊張するか」

「ま、まあね……」

「くそつ、朝倉勢は何をしているのだ!? このままでは我々は……ええい、待っておれん！ 白田を呼べ！ こちら一千の戦力であの砦を

まずは落とす！」

久政が選んだのは比較的前に出ていた小規模な砦だった。まずはあそこに穴を開け、返す刀で両脇を落とす算段である。

「呼んだか？ 久政」

「お主にも存分に活躍してもらおうぞ！ 先の戦い以上のな！」

「やれやれ、仕方ないな」

「出陣だ！ 法螺を吹けー！」

「伝令です！ 敵に動きがありました！ おそらく久政の勢力かとい！」

「ならばおそらく渡人もいるな！ 出番じゃ、横溝！」

「はいはい、それじゃ、慣れない馬で推参といきますか！」

「横溝殿、拙者も行くでござる。ご安心なされよ！」

横から秀吉が着いて来てくれた。

（頼むぞー。流石にドンパチは慣れてないぞー。あく震えが止まらねえ。向こうの渡人もそうなのかねえ？）

「良いか、無理をして合戦を行う必要はない。弓矢と銃で応戦せよ！」
砦を守っていたのは明智光秀の勢力だった。

（くっ、だが今回は数が多い。守りきれるか？）

しかしここは付城の利点。防衛に徹すれば少なくとも負けることはないという点を生かす。火矢も投げ込まれたが雨水も溜めておいた為消す事は造作もなかった。

「だが今回は久政自らが合戦に出てきている。となれば、おそらく、あの渡人も……」

「くそっ、攻めろ！ 攻めろ！ 数ではこちらが優位なのじゃ！ くそっ、ええい、なぜ落とせぬ！」

久政は戦場の中歯軋りしていた。この程度と思いきや、あいにく敵の防御は固い。

例えるなら、凍えるような川の水の寒さに震えながら対岸の敵に向かっていくようなものであった。

しかしこの光秀勢有利な戦局は一変する。

パアン！ パアン！ パアン！

「ぐわあっ！」

「き、来た、砦左側にと、渡人です！」

「やはり来たか！」

「渡人の白田だ！ 死にたい奴から順に並びな！」

流石に槍で刺されたり首を斬りおとされたりすれば人間不思議とクソ度胸が付くものである。そしてこの時代の鎧兜ではピストルの

弾は到底守れやしない。

「くそっ、またか……またなのか！」

光秀の顔面が蒼くなつていく。また一人、そう、たった一人の敵のせいで全ての戦局が覆され……、

「光秀殿お！」

「秀吉殿か！」

「援軍に参ったでござるよお！ さあ、もうひと頑張りでござる」

「有難う秀吉殿。そうだ。ここがふんばり所と思え！ 敵を押し返すのだ！」

一方、渡人同士の戦いも始まっていた。

横溝は砦の角に立ち、相手をけん制しながら銃を撃つ。明後日の方向に。

「下手糞が！ 悔しかったら当ててみな！」

「うるせーよ、馬鹿野郎！」

（奴の持つてる銃、グロック17cじゃねーか！ 俺が大好きな銃だよ！ ちくしよー羨ましいなー譲ってくれないかなー？）

1対1の銃撃戦だというのに、横溝は何処か呑気だった。あまりに現実離れた局面に脳が付いていってないのかもしれない。

パアン！ パアン！

「うおっ、危ね！」

砦はほぼ木製な為、ピストル弾では簡単に貫かれてしまう。いや、下手をすればこのまま隠れていても撃ち抜かれてしまうかも……。あいつ、何か頭のあたりを積極的に狙ってる気がするな。……ああ、そうか、ヘッドショットか。確かに有効的だもんな。だとするとまずいぞ（

無限に弾が撃てるといってもリロードなしだところちはたったの6発。相手は初期モデルなら17発だがどのみち連射が出来る事に変わりはない。

つまり、初っ端から大ピンチである。

（くそっ、俺には何かないのかよ！

突然マッチョマンになるとか

ジャクソンロボに変身するとか……!)

あれこれ考えてはいるが、所詮天は横溝に味方はしてくれない。戦国時代と言っても所詮ローファンタジーすれすれの何でもありに限りなく近く歴史好きが次から次へと押し寄せそれは違うと連呼して終いには同族同士で喧嘩を始める世界なのだ。

そして、マインドシーカーをプレイしても超能力がつくわけでもないのと同じである。結局、持つてる武器で何とかするしかない。

「このままじゃ、ジリ貧だな。よし……」

横溝は腰に構えていた種子島銃を取り出し、チャツカマンで火を付ける。信長が言ったところ、既に火薬と弾は装填済みな筈だ。

一方で渡人・白田、間合いを詰めて一気に潰すかどうか算段を決めかねていた。

(奴の銃と腕前は大した事ない。なら一気に決めてしまおうか!?)

緊張と緊張が両者を結ぶ糸のように張り詰めたその時——、糸が緩んだ。先に動いたのは横溝だった。種子島銃を構えて。

バアアン!!!

戦火の一撃が白田を襲う！ その弾は白田の肩を正確に貫いた。

「ぐああああっ!」

「よしっ!」

たまらず肩を抑えて悶絶する白田。その好機を、横溝は見逃さなかった。

鞘から刀を抜き、一直線に走る。

「う……、うあああああっ!!!」

(何で銃の撃ち合いをしないのか、そう思うだろ!? 出来ないんだよ! こっちは!)

直線一気、間合いを詰め、刀を大上段から振り下ろす。

白田も負けじと頭を狙いグロックを撃つ。しかし肩に重症を負った傷では、狙いは定まらない。その一発は虚しく耳の横を通り過ぎるだけだった……。

「せいやあー!」

横溝の一撃は白田の銃を持つ利き手を肩口からばっさり切り落と

した。

言っておくが本作は本格的(?)で迫真(?)な銃撃バトル小説ではないのでご安心めされい(ちよつと武士)。

「ぐああっ……あああっー!」

更に横溝は白田の体をタツクルで倒し、馬乗りになる。そしてホルスターから役立たずのクリムゾンを抜いた。

白田の眼前に向けられるクリムゾンの銃口。

「ひ、ひいつ、や、やめ……!」

「流石にこの位置なら外さないだろ。観念しな」

「ああっ……ああ……」

「大丈夫。俺に残虐行為手当が付くだけだ」

「ひいつ……!」

「なさけ むよう」

バアン!

クリムゾンは白田の眉間を捉え、脳にまで達し、髄を貫通した。

「あ……ああっ……ああ……」

すると渡人・白田の体に異変が起きた。体がどろどろと泥の様に溶け始めたのだ。

「……!?!」

横溝もたまらず馬乗りを止める。白田の体はさらに溶け、皮膚、臓物、ついでに衣服まで溶かし、後には何も残らなかった。

「どういう事だ……? 今が奴の急所だともいうのか……?」

あ、そうだ! グロツク……って土くれになってるじゃねーか。ちっ」

横溝は軽く舌打ちした。

「そうか……眉間を打ち抜くことで渡人は倒せるってことか……うっ!?!」

瞬間、横溝の体に激痛が走った。クリムゾンは禍々しく赤く輝いていた。たまらず朝餉をもどしてしまう。

「横溝殿、大丈夫でござるか!?!」

近くに秀吉がやってきた。

「へへ……緊張の糸が切れたみたいだ。朝のものをもどしてしまつた……勿体ねえ。それより久政だ！ 逃がすな！」

「おお、そうでござつた！ この日のために、ここまで辛抱してきたのでござつた。逃がすかー！」

「どうして、どうして……こうなつたのだ！ くそっ！」

久政は戦場のど真ん中で一人呆然としていた。仕掛けた砦は破れない。戦力は大幅に削られた。そして渡人が死んだという伝令まで届いた。

「くそっ！ どいつもこいつも役に立たん！ 佐和山城まで戻つて出直しだ！」

「そうはいくかー！」

久政の陣を秀吉が強襲する。こちらにも戦力は手薄だが、この状況で物を言うのはやはり勢いだ。

「この日を……待ち遠しかつたでござる。墨俣城で幾度となく攻められ死ぬような思いをし続け、やっと訪れた好機、必ず物にしてみせるでござる！」

「ひ、ひいつ！」

「もらつたあああああつ！」

秀吉の刀が遂に、大将首である久政まで届いた。全ては執念、この日を耐え忍んできた執念の勝利だ。

「召し取つたりー！」

刀の先に久政の首が付けられた。

「久政様がやられた!?」

「に、逃げろー!!」

「伝令です！ 光秀殿、砦を死守！ 横溝殿、相手渡人を撃破！ 秀吉殿、大将首久政を撃破！ 以上です！」

「おお、でかした！ 全員見事な働きよ！ しかし光秀も秀吉もようやくだったが、陰の功労者はやはり横溝だな。わしの仮説に狂いはなかつたようじゃ」

「その横溝殿ですが、調子を崩してしまい、戦線を離脱したいとのこと

です」

「む、そうか……。奴にとっては始めての戦だからな。仕方あるまい。よし、我々はこのまま佐和山城を落とす！ 大将のいない城など怖くもなんともないわい……！」

その後、佐和山城はあつけなく落ちた。信長は得意の皆殺しを行い、余った兵糧や水は全て没収した。ついでに朝倉に助けを呼びに請うとした者も殺した。

(まあこんな姿はあやつには刺激が強すぎるからのう、まあええわい。この期に及んで朝倉が動かんという事は浅井を見捨てて腹積りじゃな。くつくつく、ならば遠慮なく小谷を取りに行くまでよ)

1週間後。砦を更に増やし、小谷城を万全に囲んだ。もはや援軍が入る隙間もない。

一カ月後。小谷城からやけくそにも思える2千の強襲が行われた。しかしこちらの損傷は軽微。向こうは被害甚大で虚しく引き返した。

三カ月後。小谷城から降伏する者が現れた。話を聞くとところによると、城の中はもうほぼ干上がっている状態らしい。信長は案外持たなかったな、とほくそ笑みつつ降伏してきた者を軍に引き入れた。

一部、裏切りそうな武将は殺した。殺しには横溝も入れられそうになったが、俺血を見るの苦手なんだよね、あんた達でどうぞ。とぶつくさ言いながら参加しなかった。

半年後。頃合良し、と見て織田軍は一斉に小谷城を取り囲み、城攻めを行った。

「それぞれ、丸太をぶつけて城門をぶち破れ！」

「俺も陰ながら助力するぜ」

横溝はかんぬき周りの木材をクリムゾンで正射を行う。待つことおよそ1時間ほど経ったか、遂に城門がぶち破られた。

「敵は完全に干上がっておる。臆せず昇級首を取ってまいれ！」

信長の号令が響き渡った。

(やれやれ、サバイバルゲームやってただけのただの男が、何の因果か織田信長の部下とは、笑えないな……)

小谷城内、天守閣――。

「市よ……」

「長政さま……」

「父上は織田に討たれた。城門も破られた。この戦、我々の負けだ」
「そんな……!」

「私は城を枕に自刃して果てる。お前は万福丸や息子達を連れて逃げろ」

「嫌です!」

お市はきつぱりと否定した。

彼女にとつて、長政は誰よりも大切な夫、それを見捨てることなど、どうしても出来なかった。

「長政さまと離れるくらいなら……離れるくらいなら……!」

お市は長政の胸に顔をうずめ、泣きじゃくる。自分だつて分かっているのだ。武士が戦に負けることがどういふことなのかを。

それでも、この悲しみを止めることは出来なかった。長政を失いたくない……! それだけしか考えられなくなっていた。

「市よ、あまり私を困らせ……」

バァン!

襖が蹴破られ、横溝が乱入してきた。

「おー、どうやら間に合ったみたいだな。二人とも元気そうで何よりだ。腹は空いてるか? 水は飲んでるか?」

「っ?! 織田の手の者か!」

「浅井長政よ、お命頂戴いたす!」

横溝から光秀や柴田が刀を抜き、今にも飛びかかろうとしてくる。

「ここら、先に見つけたのは俺だぞ。俺の言うとおりにしろ」

「ええっ……!?!」

横溝が二人に静止を促す。

「そなた、何を企んでおる……?」

「んー……」

横溝はニヤリと白い歯を覗かせた。

「この二人、手え縛つて織田陣営まで連れて行くぞ。長政殿は刀を捨てよ。お市殿は毒など持っていたらこの場で投げ捨てておきな」

——織田陣営。

「敵の大將。浅井長政とその妻お市、万福丸ほか子供達をお連れしました」

「なんだと!? 殺してないのか! 誰がそうしろと言った!」

「いやその、渡人の横溝殿が……」

「何い!? ……あやつ、何を考えておるのだ」

長政達は信長の前に座らされた。

「久し振りよなあ、長政」

「兄上……介錯役をわざわざ用意してくれるとはこの長政、まことに嬉しゅうございます」

「この儂をまだ兄と呼ぶか! 恥を知れ!」

「長政さまを悪く言わないでください、お父様!」

「おお、お市か。こんな下品で恥知らずな男など捨てて織田に帰ってくればこれまでのごと、帳消しにしてやってもいいぞ」

「下品なのはあなたです! 織田信長!」

お市は甘言などなくそとばかりに誘いを否定し、実の父を睨み付ける。

「もし長政さまを殺すようなことがあれば、このお市、織田家に末代まで祟り、呪い潰しましょう!」

「言うたな! もはやお前など、妹でも何でもないわ!」

「おい、信長、盛り上がっているとこ悪いが、この二人を先に見つけたのは俺なんだぜ。生殺与奪の権利は俺にあると思うんだが」

「なんだと……。お主、何を企んでいる!?!」

「ふふーん♪」

横溝は長政の目の前に立ち、長政を見下ろした。

「織田の渡人か……。ふつ、私達を殺す度胸もないか」
「……………」

横溝は足を振り上げ、

「ばーか言っつてんじゃ……………」

そのまま踵落としの要領で足を振り下ろした。しかし安全靴なの

で結構痛いぞ！

「ねえ！」

「ぐあっ!？」

「男が、夫が、妻と子供残して勝手に死のうとするんじゃねえ！ 地に這い蹲つてても生きようとするのが道理だろうが！」

織田陣営が、しいんと静まり返った。

「横溝殿、残念ながらその道理は通りませんぞ」

横から光秀が答える。

「あなたがいた時代は別にして、今は乱世、国取りの時代なのです。手柄を立てれば銭が貰え、昇級首を得れば更に上、大将首ともなれば領地とその成果は計り知れませんが。」

それが戦国の慣わしなのですよ」

「ふん……そんなもの、信長の鶴の一声で召し上げられて終わりよ」
「なっ……!？」

横溝の言葉に、誰もが生唾を飲んだ。当の本人は明らかに怒気を孕んでいた。

「信長という男の真の強さは、どこまでも非情になれることよ。敵にも、味方にもな」

横溝の言葉に、皆は今度は生唾を飲み込めなかった。飲んだら同意とみなされ殺される、そうと分かっていたからだ。

「さて、と。改めて長政さんよ、お前さんの処遇についてだが……」

横溝は長政を見る。長政も横溝を見つめる。横ではお市が睨みつけている。

「お前さん、大きくていい体してんな。健康そうだし、部下にも慕われてそうだ。……うん、よし、決めた」

「な、何を決めたのだ……?」

「お前さん、刀置いて、大工になれ」

「なっ……だ、大工……?」

「ああ。お前さんなら高いところも大丈夫そうだし、体は頑健、妻もいるし、子供も育てなければならぬ。と、するならばカタギにするのが一番だ。」

どうせ信長は浅井領さえ貰えればそれでいいんだし、部下の命も保障してやるさ。これ以上血が流れるのは俺としても不服だしな。いいよな？ 信長？」

「……ふんっ！ もう勝手にせい！ わしや知らん！」

「じゃ、決まりだな。光秀さん、柴田さんから、生きてる部下は離してやってくれ。それでも長政に付いていくという奴がいればそれでいいや」

「……やれやれ、殿が勝手にしろと言った手前、我々はあなたの意見を曲げるわけにはいきませんな。しょうがない。何とも肩透かしですが、いいでしょう」

「渡人よ、そなた、名は？」

「……横溝。横溝 由貴だ」

「有難うございます。横溝殿、このご恩は一生忘れませんぞ……！」

「本当に、本当に、有難うございます」

「横溝殿、そなたは変わった方なのでね」

「そうか？ 万福丸、だっけ？ 父親を支え、立派な男になるんだぞ」

「はい！」

「横溝お！」

信長が叫ぶ。

「これは貸しだ。いつか返してもらおうぞ!!」

「ああ。俺もちゃんと奉公するから心配するなっ」

こうして、織田・浅井の戦いは幕を閉じた。日本史に照らし合わせればこれは「小谷城の戦い」になるが、朝倉は殆ど関与していないし、当然渡人の存在も本来はない。

拳句、織田軍にすれば徳川軍の援助も頼んでいない。

渡人が歴史を大きく変えてしまった、とは言いきりかもしれないが、実際それに似たことが起きたのは確かだ。

浅井領は織田に、浅井棟梁浅井長政は大工へ転進した。なお、後に安土城の建設に関わるのは余談である。

横溝にも一応建前として褒美を選ばせた。横溝は自分は戦国大名

じゃないから、という理由で城下に屋根付きの家を所望した。

「信長様……」

「光秀か」

「やはり、渡人は危険な存在であると思います。戦国の慣わしにまで口出しするなど……。機を見て幽閉したほうがよろしいのでは？」

「……今はダメだ。今は、な」

「……。承知しました。では、そのように……」

（そんなもの、信長の鶴の一声で召し上げられて終わりよ）

（信長という男の真の強さは、どこまでも非情になれることよ。敵にも、味方にもな）

「横溝か。中々食えん奴よ。いや、異文化を持ち込んでくる時点でこのような事になるとはある程度想像は付いたが、な……」

「奴を生かすか殺すか、この信長は見えない力に試されてるといこうと……で、あるか」

渡人の出現によって、おそらく横溝の知る日ノ本の歴史はまったく違うものになるであろう。

だから信長はあえて聞かなかった。わしは天下を取ったのか、と。

今後の日ノ本の歴史は言わば荒馬のように動く。信長は誰よりも先にそれを感じ取っていた。ただ渡人を駒として扱うのでは駄目だということも。

「……………」

一方、その横溝は、

「げ、また水加減失敗した！ お粥になってるじゃねーか！」

「ご飯を炊くことに苦労していたそうなの……」。

朝倉編①

「玄米が欲しい?」

「ああ……」

もはやすっかり岐阜城下の顔なじみになった横溝であるが、今日は行きつけの万屋に相談にきていた。

この時代、米は既に精米されて売り出されているのが殆どで、あの白く輝き、湯気立つ炊きたての米こそ庶民の有り難味の源であった。

しかし米屋を幾つか回ってみたが、米俵の中身は全て白米であった。

別にチーズを買いに行くわけでもないのに、色々難儀するのがこの時代である。

こうして何とかならんもんかと足を運んだのが、かつて仕事を紹介してもらった万屋というわけだ。

「……ない、こともないんですがね」

「本当か!」

「ええ、米屋はともかく、農家には精米作業を面倒くさがる奴もいましたね。そんな半端物がたまに出回ることもあるんですよ。確か、うちにも数本……」

「買う!」

「ええっ!? 本当ですかい!」

「俵ごと買う。売ってくれ!」

「……ま、まあ買うってんなら準備しますし、どうぞお買い上げ有難うですけど」

「サンキュ、恩にきるぜ」

「さ、さんきゅ? ……まったく、渡人の考える事はよく分かりませんなあ」

横溝にとって、玄米は主食だった。これさえ食べればビタミン、ミネラル、食物繊維を豊富に取り入れられるため、毎日健康、かつ快便。

大学時代からよく食べていたものだ。なくては困る。

「なんだ、今日も足を運んでくれたのかい?」

「おお、大旦那か。まあね。ちよいと欲しいものがあってな。買い付けにきたわけよ」

「大旦那、この渡人さん、玄米が欲しいって言ってきましてねえ」

「玄米？ ああの茶色い白米の紛い物呼ばわりされてる、あれか？」

「そう思うのはこの時代のお前さん方だからさ。玄米食べてりや毎日健康でいられるぜ。1度試してみな」

「はっはっは、機会があったらね。ところでこの前は味噌を買いに来てたっけ」

「そうなんだよ。この時代、味噌は一家に一つちゃんと熟成させたものがあるらしくてな。俺も試してるんだけど、まだまだ時間がかかるからな」。

味噌蔵から直接買おうかと思っただがまだ熟成が足りないからって言われて売ってくれなかったんだ。ひよつとして俺、袖の下でも要求されたのか？」

「その可能性はありますねえ。美味しい味噌を作る味噌蔵ほど融通がきかないってことはよくありますよ」

いつの世も得体の知れない者とプライドの高い者は相容れないものらしい。

「まあその腹いせとして、たまり醤油をたつぷりと貰ってきたけどな」
「たまり醤油？」

「味噌作る過程で出来る上澄みだよ。いずれこれは塩、味噌にならぶ日本食になくってはならないものになると思ってる。

……いや待てよ、せつかくだから自分で作ってみるのもいいな。塩だろ、小麦だろ、大豆だろ、あとは軟水と麹菌があれば……いけるじゃん！」

（ふっふっふ、せつかくだから醤油を始めて作った創始者になるのもいいなあ。幾つかの試行錯誤はあるだろうが、ふふっ、楽しみが増えたな）

「……大旦那、何か渡人がなにやら企んだ顔してますよ」

「あんまり言ってやるな。俺たちとは考え方が違うんだ」

確かに考え方はこの時代の人間とは異なるだろう。だが、横溝は気さくな性格ではあった。

挨拶されれば挨拶で返すし、困ってる人を見れば何とかしようとする。こういった性格も大学時代に培われたものだ。

高校時代までは他者を省みない、自分さえ良ければいいし、趣味も偏っていた。しかし、このままではダメだ！ 将来この性格で必ず苦勞する時がくる！

と、そういう理由からの猛特訓が横溝の性格を大きく変えた。

それはやはり将来社会人になるのだから明るい性格の方が受けが良いからという打算的な計画もあったし、

テニスサークルではなくテニス部に入っていたのも運動をやっていない人間と差を付けるためだった。

まあそれなりに優しい両親の元で育ったので根は優しい性格なのかもしれない。おかげでこの戦国の世では苦しむ事多々であるが。

「それじゃ、台車借りるぜ」

「へい、毎度有難うございます。次回もご鼻屑に」

横溝は重い米俵を乗せて、信長から貰った家へと去っていった。

「さて、と……」

横溝は重い米俵を降ろし、転がし、台所まで持っていく。

「♪♪♪♪♪」

ファミコン初期の魔王『元祖西遊記スーパーモンキー大冒険』を口ずさみながら。

ここでの生活もだいぶ板についてきた。洗濯、掃除、自炊、その他もろもろ。

最初のうちは慣れずに洗濯板を使った洗濯は練習用に雑巾でやってみたが、あつさりボロボロにしてしまったし、

掃除も思うようにちりとりでゴミが入らなかったし、

自炊もご飯を美味しく炊けずに粥にしてしまったりと難儀したが、今では随分慣れた。

庭は畑に改良した。長桶を逆さまにして頭をくりぬきコンポスト

代わりにし、生ごみと枯れ葉を片っ端から捨てるという感じになってきた。

植えているのは素人でもできる根野菜が殆どだ。肥料も多く必要になるものばかりではあるが。

さすがに家庭菜園に人糞は使えなかった。ともかく、収穫が楽しみではある。

たまにはカレーが食べたくなるがこの時代では流石に無理だった。「後やっぱ肉が食いたいなあ。鶏肉はたまに売っているが高くて流石に手が出しにくい……。卵も欲しいなあ、鶏でも飼うか……」

岐阜城から幾ばくかの給金を貰っている者とは思えない男の愚痴であった。

そうそう、岐阜城といえば先日こんなこともあった。

「おお、絶景かな、絶景かな、岐阜の城下は見事であるぞよ、ってね」
その日は晴天に恵まれ、せっかくだからと登った岐阜城の天主から双眼鏡で見下ろす城下もまた見ごたえがあった。

「……あなたが、殿の言っていた渡人さんですか？」
「ん？」

振り向くと上質の着物に身を包んだ、少々おっとりとした性格が滲み出ている女性がいた。

「こうしてお会いするのは初めてですね。始めまして、織田信長の正室、帰蝶と申します。濃姫とお呼びしても構いませんよ」

「おやまた、これは噂の通り、日ノ本史上一の美女ですなあ。改めまして、横溝 由貴です。よろしく」

「あらあら、ではお由貴さんと呼べばよろしいですか？」

「……横溝でいいです」

「ではそのように。……あなたには殿が随分とお世話になったようで、1度お話をする機会があればと思っていました。特に、市も……」
「お市さんか、先日長政殿のところ顔を出したが、お互い吹っ切れたみたいだな。いい顔をしていたぜ」

「そう……」

帰蝶は改めてお辞儀をした。

「あなたには感謝しております。市は長政殿と心中するつもりだったと聞いております。それを止めてくれただけでも、感謝の言葉もあります」

「……俺は別に、いらぬ血を流すのはナンセンスだと思ってるだけだ。武家の弔いなど知らん」

「なんせんす？ と、とにかく、二人を生かしてくれたことは感謝しております。

ただ流されるだけで妻として矢のように飛ばされ、最期は折れて散ってしまうものかと私は気が気でなりませんでした」

「信長は許してはいないだろうがな」

「……そうでしょうね。殿も二人は二度と城の敷居を跨がせるかと言っておりますし……」

「あなたも苦勞するでしょう。あんな短気で根に持つ冷血漢の妻なんて」

「ふふふ……、それは言いすぎです。ああ見えて、お優しいところもあるんですよ」

「あなただけにしよう」

「いや、そんな」

「ほう、だれが短気で根に持つ冷血漢なのだ？」

「そりや勿論……て、げえ!? 信長!?!」

帰蝶との話が弾む直前だった。信長が黒ずんだ眼をぎろりと向けて歩いてきた。

「貴様、最近姿を見せぬと思つたら、わしの帰蝶を口説いておつたのか？ いかん。いかんぞ。帰蝶はわしの妻だ。誰にもやらんぞ」

「あらあら、殿つたら。ふふふ……」

「おやまあ、愛されてるねえ」

「ふん、はぐらかしおつて。また首を斬りおとされたくなければ戦の時以外は大人しくしていることだな」

「はいはい、こう見えて結構殿のことは敬っているんだぜ。何も逆ら

うことはしませんよって。ギャルゲじやあるまいし、女だって口説きませんよー」

「くつ、渡人という者は信用ならんわ。……ところで話は変わるが、お主の手に持つてるそれは何だ?」

「何って、双眼鏡だけど」

「ほう、それはどのように使うのだ?」

「んー……これは実際に使った方が早いかなあ」

百聞は一見にしかず、と簡単に説明する。こちら側の眼に両目を置き、遠くを見るように促す。

瞬間、信長は飛び跳ねた。

「こ、こ、こ、これは何だ!? 遠くのものがるで近くにあるかのように見える。これはとんでもない技術だぞー!」

「殿、何やら面白そうな物ですので、私にも使わせてくださいな」

横から帰蝶が双眼鏡を取ろうとしている。

(まあ眼鏡はともかくこれが普及するのはまだまだ先だからねえ。それまではオーパーツだよな、これは)

「気に入った! お主、これをわしにくれ!」

「ええ、くれておい、俺も使いたいんだが……」

「……浅井長政」

「は?」

「あの時、お主にはこれは貸しだからいつかは返せと言ったよな? ならば今この場でそれを返せ」

「ええ!? 人の命がそんな物と引き換えでいいのかよ!?!」

横溝の突っ込みも、もつともではある。

「もし、これが完成し、織田家で独占し、戦で使うようになれば……これがあるのとないのとは大違いではないか! うむ! 決めた決めたぞ!」

「……まあこれは凄い代物ですこと。城下の人々があんなに近くに……」

横から帰蝶が取り上げ、城下を見下ろしていた。

「……ああもう分かったよ。好きにしてくれ」

いい年した天下取りを狙う男が、双眼鏡一つで駄々こねられたら笑い話にもならない。横溝は仕方なく承諾した。

「早速、城の工房に直行じゃ。善は急げだ。お前も付き合え！」

「はいはい、分かったよ。こんな姿、他の家臣の者に見せるなよ」

「ああ、そうがんきようが、何処かへ……もつと見ていたかつたのに」

唯一、そこへ取り残されたかのような帰蝶は何処か寂しげであった。

「これが、ネジなのですか……なんとも、小さな……」

ここは岐阜城一階に設けられた。特製の工房。鉄砲の分解もかつてここで行われた。ここには熟練の鍛冶師でないと出入りすら敵わない。

「ああ、この十字の凹みに同じような大きさの十字の凸型のネジ回しを差し込むことで初めてネジが回る仕組みになっている」

「種子島銃を分解したときも驚きましたが、これを分解するのはいささか時間がかかりそうですねあ」

「できるか？」

「その十字の凸型の細いネジ回しを作るところから始めますし、なにより、これは種子島銃よりずっと小さいですから。時間はかかるでしょう」

「出来る限り早く頼む。何ならこの研究に残り時間を全て費やしても良い」

「分かりました。殿の仰せのままに……」

「まあ頑張ってくれ。君なら出来る！ 君だから出来る！」

「渡人に応援されるのもなんですが、分かりました。とにかくやれることはやってみましょう」

「中々ままならぬものよなあ……」

「そりゃあ、俺が来た時代と今とじゃ技術が違いすぎるからな」

「わしはそこに追いついてみせる、と思ってるのだがな」

「そりゃあ夢追い人つものだけ。殿」

「ふん……、武士が夢や野望を追って何が悪い」

信長と横溝との関係は今のところ問題はない。だが、それがやがて溝ができ、二度と埋まらない事を横溝は内心知っていた。

それが、織田信長という男なのだということ。

一方、信長は横溝と顔も合わせず散歩していた。銭だけでは技術の差は埋められぬものよなあ、と考えながら。

銭。そう、銭である。大判小判がぎっくぎく、とまでは言わないが、織田はこの当時どこよりも銭だけは持っていた。

浅井を攻めていた時の間者にしてもそうだし、それ以前の岐阜城の再建をするにも莫大な銭が掛かるはずなのに、信長はそれをやってのけている。

例えば当時、織田家は港湾都市である津島などを支配下においており、伊勢半島や三河半島へ行き来する船便に手数料を徴収していた。

これは領内の安全保障と権利確認を記した朱印状の発行のためである。

この伊勢湾水運は織田家に莫大な収益をもたらす。

こればかりではない。楽市楽座令を奨励して自由に商売をさせて更に銭を流通させたし、関所も撤廃した。

もつとも、これらは都合のいいところをパクっただけであり、関所撤廃は今川家も以前から始めていたのを真似しただけなのだ。

……とまあこんな調子で信長は銭をそりやあもうたらふく持ち、経済を発展させることだけは何処よりも早く成功した。

その金で朝廷に数千貫も献金したり、神社の修理費用として更に数千貫も寄付したりしていたので信長は朝廷関係者や権力者には特に受けが良かった。

室町13代將軍足利義輝に会うために上洛したときも、金銭的援助は惜しまなかった。

……なお、銭とは別問題が生じて、結局室町15代將軍義昭とはやがて対立することになったのだが……。

(今は他の家臣も將軍家や領地の統治で忙しい。朝倉を攻めたいところだが、今は、ダメだな。もう少し様子を見て好機を見定めるしかない)

（あーこの前奮発して買った鳥のささみ部分は美味かった。もつと頑張って仕事続けなきゃな。あの頃の棟梁は元気かな？）

朝倉編②

「そういえばふと思ったのだが、横溝よ……」

「ん、何だ？」

「お前が腰に構えているその短筒。『くりむぞん』といったが、それは強いのか？」

「弱いよ」

横溝は即答した。当然である。ファミ通のクロスレビューで13点を取るほどの代物である。強いわけがない。

「浅井を攻めている時、渡人と戦ったが、種子島と刀がなければ負けていた。そのくらい弱い銃だ。持ってみるか？」

横溝はホルスターからクリムゾンを取り出し、信長に手渡してみる。

瞬間、バチイツ！と雷が落ちたような衝撃が走り、信長はクリムゾンを地面に落としてしまった。

「な、なんだこの短筒は!?!」

「あーやっぱダメか。流石の信長もクリムゾンを使える資格者ではなかったようだな」

「これは、持ち主を選ぶのか?」

「ああ。こいつを持てるのは100万に一人と言われている。その上照準は合わないし、持ち主の精神を蝕む呪われた銃だ。並みの者には扱えない」

「精神を蝕む? 狂うということか」

「それに近いかな。つまり、俺はこの時代で精神を蝕まれ、最終的に狂い死ぬことになっている……」

「なんだと……!?!」

「しかしこんな銃でも頼りにしなければならぬのがこの俺の悩みの種だ。ま、その時が来たらさよならだ。骨は拾ってくれ」

「……貴様、正気か?」

「少なくとも、今は、な……」

横溝は手を振り、去っていった。

信長は呆然とした顔で彼を見送っていた。

(いずれ死が確定していると分かって、それでも戦うというのか、あやつめ……！)

信長の横溝への印象が、少しだけ変わった。

それから一カ月後、『双眼鏡』の分解作業が終わった。

横には信長と好奇心に連れられた帰蝶の姿もある。

「あらあら、せっかくの『そうがんきよう』が、あられもない姿になってしまつて……」

「ふむ、中の造りは、特別難しいものではないようだな。この透明な『甲』を通して『乙』を見れば遠くのも物が近くに見えるようになる、そういう仕組みのようだ」

「あいにくこれはプラスチックという素材で出来ている。こればっかりは今の技術では多分どうにもならないぜ」

「代用品は何かないのか？」

「そうだなあ、南蛮人が使つてるガラス……これで代用が出来るかもしれない。なにせ初めて作られたのが今から1500年前の代物だ。それを改良すればあるいは……」

「1500年前ですか。途方もない年月なのですな」

「俺が知つてる知識の中にもガラスの造り方は入つてない。こればかりは、なあ……」

「いや、あるぞ」

信長が濁った眼をギロリとさせてプラスチックのレンズ部分をそつと板上に置いた。

「ルイス・フロイス……」

「フロイス……？ ああ、ポルトガルから来たキリスト教の宣教師か」
ルイス・フロイス。日本に渡つてきた、キリスト教の宣教師である。

同時に日本の戦国時代を描いた『日本史』が歴史史料として何度も写本されている。

「奴の元へ行くぞ。馬を出せい！」

「おいおい、善は急げというが、幾らなんでも早急しすぎやしないか

「？」

「良いのだ！ これで、のう。がはは」

「おお信長様、遠いところわざわざお伺いとは、まことに有難うございます」

「フロイスよ、今日はそちに頼みがあつてきたのだ」

「頼み、と申しますと……？」

「そちの所に透明なガラスはあるか？」

「透明なガラス、ですか？ 色をいれていない透明……透明……ああ、それでしたら多少はありますが」

「あるのか！ 悪いが譲ってくれ、頼む。褒美はきりすと教の写本五百冊を岐阜の方で作らせる、という条件でどうだ？」

「そ、それでしたら願つてもいいことです！ そうだ。ガラスならば作れるものが確かいた筈ですが、いかがなさいましょう」

「まさに渡りに船だわ！ その者、貸してくれ」

「はあ、分かりました……」

フロイスはこの時、信長はガラス細工を工芸品として売るのかな、ぐらいにしか思っていなかった。

なにせ現在の日ノ本の国は一向衆が大半を占め、中々宣教師としての務めが果たせない日々だ。だからこそ、有力者に触れ、布教を頼むような真似をせざるをえなかった。

というより、キリスト教自体がこの日ノ本の国では理解し難いものであった。

かつて宣教師としてやってきたザビエルもキリストという『GOD』の布教には手を焼いた。

なにせ日ノ本の国は八百万の神がいるのが普通で、その頂点に『天皇』がいるというのが世の教えだったからだ。

そこでフロイスは信長と出会った時も色んな工芸品や手芸品などの飴玉を送り何とか布教のための足がかりを手にいれようと苦心したものだ。

そうやってようやくフロイスはキリスト教布教の朱印状を信長から貰い、イエズス会の本部を置くことに成功したのだ。

今の活動も苦勞の賜物なのである。

もつとも、彼の『日本史』での信長の觀察記録はかなり厳しめなのだが。

こうして信長は透明なガラスを手に入れた。ついでにガラス職人も手に入れた。

ガラスは一旦割り、削り、磨き、楕円形にしてみた。ガラスを造る材料のケイ酸塩も運よく手に入る場所があり、それを伊勢湾交易で流通させた。

後は竈と腕に自信がある職人を何人か集めれば準備は整う。

そして急ピッチで遠眼鏡の製作が開発されていく。

短氣の信長がじれてくるのをぐっと抑えていたのも全ては『技術』を発展させるためだった。

「渡人」から吸収できるものは何も戦力としてだけではないことに信長はいち早く気付いていた。だからこそ待てた。

ああ、そういえばあの時に食べた「ちいずむしばん」とやはら美味かったなあ、と時より思い出しながら。

それから秋が訪れた。横溝は稲刈りのアルバイトに精を出した。

冬が訪れた。横溝はこの時代の屋敷の密封性のなさに苦勞しながら寒さに耐えた。

そして冬が終わりに近づき雪解けが始まる直前——遂に『遠眼鏡』は完成した。

使っているのは木製の筒と、『甲』レンズと『乙』レンズのみ。

だが完成した品を覗き込んだ時、配下の者達は一同に戦慄した。

「こ、これはまた、凄いものですねあ」

「いやはや、これは実に素晴らしい品物ですぞ、殿！」

結局、造りをシンプルにするため片眼鏡にしたが、それでも現物の一品たるや、正に一閃の如しであった。

「わしはこれを織田家の者達のみ配る。もし戦闘中に奪われそうになったら、躊躇なく破壊しろ。持って行かれては困る！」

「でしような。これで覗き込まれた日には我々の動きも筒抜けになっ

てしまいますからな」

「これを持ち、雪解けを待つて春に朝倉を攻める。皆の者、準備をして
おけ」

「ははっ！」

「しかし信長、やったもんだなあ。本当に造つてしまうとは、俺も驚き
だぜ」

「当然だ。これがあるのとないとでは合戦は天地ほどの差があるわ。
人事を尽くして天命を待つのも悪くはないが、万事を尽くして帰結を
待つ姿こそ本来だ。」

さすれば、勝利はおのずとこちらに転がり込んでくる」

「言うねえ……」

「ともかく、朝倉攻めは近い。おまえも準備しておけ」

「お任せください、殿」

「……。貴様に殿呼ばわりされると苦虫を噛み潰したような顔になる
な」

「じゃあ、信長で」

「そうだ。貴様はそれでいい。その道理で結果を出せ。そうすれば後
は何も言わん」

かくして、春が訪れ、人々がいよいよ農業に精を出す頃合を見て、織
田勢は朝倉に進軍を開始した。

現地近くに到達した信長は、さっそく陣を張った。

「今回も付城でいく。だが、いきなりはダメだな。朝倉勢も必死だ。
野戦を挟むことになる。弓矢隊と鉄砲隊は多めに配置せよ。囲んで
雨のように降らせるのじゃ」

「はっ！」

「光秀と佐久間は左翼に陣を構えよ。正面の足輕隊は柴田に任せる
！」

「はっ、お任せを！」

「それから光秀よ、多少やりにくい相手かもしれんが、戦は迷ったほう
が死ぬ。肝に銘じておけ」

「……分かりました。必ずや殿に吉報を！」

ちなみに光秀はかつて朝倉家に仕えていたことがあり、やりにくさを感じていたなら迷いは捨てるときつく命じていた。

今回は秀吉は浅井領地の統治で忙しく戦場に来れなかった。なにせ……、

「えーと……今いる所が長浜で、ここが大溝、坂本は明智殿が協力してくれたから良いとして……、

陸路も整備しなきゃならないし、小船を付けられるような港も作らなきゃならないし、それでここをこうして、ああ、それだとそつちがまずいから……、

……ああああああ！ 無理！ 無理でござる！ 信長様、いくら琵琶湖で水運を作るからって拙者一人では荷が重過ぎるでござる！ 第一拙者学がこれっぽっちもないのに……。

せめて丹波殿か明智殿を軸にやってくだされ。信長さまああああああああっ!!」

と、まあこんな調子であった。手紙を貰ったが、墨俣の時より胃の痛い日々を過ごしているそうなの。

「横溝は正面の足軽隊に加われ。刀と種子島を貸す。上手くやれよ」

「ああ、なんとかな」

「そして、家康……」

「はっー！」

今回は徳川軍も同行することになった。

「おまえには右翼を任せる。戦果を期待しておるぞ！」

「お任せを。なにせ浅井攻めでは出番がなかったですからなあ、今回は奉公させてもらいますぞ、信長殿」

片眼鏡のおかげで敵の動きはほぼ丸見えであった。どうやら朝倉勢は正面を厚くして足軽の槍隊と騎馬隊で一気に切り崩す算段とみた。

（ふっ、馬鹿め。朝倉よ、学習能力がないわ。目にもものみせてくれるわ）

信長は一人ほくそ笑んだ。

朝倉編③

「……とても、思っているのだろうか、信長は」

所変わってここは朝倉陣地。大将の朝倉義景は信長の動きを見ながら一人ほくそ笑んだ。

「くつくつく、まさか朝倉も『渡人』を手に入れているとは夢にも思うまいて」

「……ですが、信用できるのですか？ あやつは」

「誰も信用などしておらん。最後に信長に勝てればそれでよい」

「そ、そうですか……」

朝倉家家老・山崎吉家は内心これでいいのか、と思っていた。義景様も浅井久政のように驕ってしまっているのでは、と考えてはいたが、口には出せなかった。

「真柄、斎藤、そなたらにも存分に暴れてもらおうぞ」

「おう！」

「ふんっ、任せておけ義景。朝倉家に下ったのは、全て信長に一泡吹かせるためよ。美濃を追い出した屈辱、必ずこの戦地で晴らしてみせるさー」

「そして、渡人……、名を何と言ったかのう？」

「おいおい、俺の名前は何度も言った筈だが」

「すまんすまん、近頃物覚えが悪くなって……これも年かのう……」

「ちっ……」

（こんなのが大将で俺は大丈夫なのか……？ まったく、貧乏くじを引いたものだけ。どうせなら俺も織田に仕えたかったな）

「ヒーロー……霜野 比色だ。ちゃんと覚えておけ」

「おお。そうであった。霜野よ、そちの活躍、期待しておるぞ」

「分かってるさ。俺とこの銃、M4カービンに任せな」

「そして光秀、わしを見限った無礼をこの戦で思い知らせてやる……」

全軍、陣を敷いたな！ 突撃！」

ワアッアアアアアアアアアアッ!!!

戦乱の響きが聞こえ始めた。

対する織田軍は動かず、相手を引き付ける。恐怖で手足が震える。重圧に怯えながら、勇気を振り絞りながら。

誰とて戦は怖いものだ。なにせ人が大量に死ぬ。戦場には死体がごまんと転がる。

だがその恐怖に勝てた者のみが、戦という大一番に勝てるのだ。

「よしっ、ここだ！」

「弓矢隊、鉄砲隊、一斉掃射！ 朝倉の前陣に風穴を開けてやれ！」

矢が宙を舞い、鉄砲の爆音が戦場に木霊する。

遠眼鏡で見ていた信長には、朝倉の足軽と騎馬が崩れ落ちる様がかつきりと見えた。

「よおおし、絶好じゃ！ 見事也、光秀、佐久間！」

「くそっ、相変わらず織田の鉄砲隊は厄介だぜ！」

「弓も比べず槍も競わず、ただ遠くから撃ち殺すのだからな。確かに厄介だ。今までなら、な……」

「負傷した者は一旦下がらせる。奥の手が動くぞ！」

「ようし、我らも動くぞ！ 柴田隊、突撃じゃ！」

柴田勝家もここで動く、揺さぶりをかけた朝倉の前陣に喰らい付き、昇級首を取らんと動いた。

だが、世は所詮、好事魔多し……！

ダダダダダダダダダッ！！

「うわああああっ！」

「なんだ、この攻撃は、と、届かないっ！」

「はっはっは、どけどけどけいっ！ 撃ち殺されなくなったらさっさと逃げな！」

敵の奥から『渡人』霜野 比色がアサルトカービンを持ち突撃してきた。

「な、何事か!？」

「……げ。あれは、俺と同じ渡人じゃねーか。まずいぞ……」

そして二人は偶然、戦場の一瞬の時、目と目が合った。

(おいおい、よりによってM4アサルトカービン弾数無限だど!? あんなのがあつたら手に負えないぞ……!)

(なんだあいつの銃、赤く光ってるピストル、見たことねーな。厨二銃か何かか？ どのみち警戒する必要はなさそうだが)

「ここで横溝が伝令役を呼ぶ。」

「伝令！ 伝令役はいるか!？」

「はっ、ここにいます。」

「信長の元には護衛がいたよな？」

「はい。護衛として鉄砲隊が50名ほど……」

「充分だ。信長に伝えてくれ」

「分かりました。どういった内容で？」

「内容は……」

「ははっ、信長隊、面喰らってやがるぜ」

「さあ、反撃開始だ」

「ん？ そのわりには、下がっているような……毘か？」

「……いや、それはないはずだ。引き続き、足輕を前に出せ。槍で押し込むぞ」

「ダメです。柴田隊、本陣に向けて下がっていつています」

「正気か？ ここを抜けさせれば、信長の本陣まで一直線だぞ……!」

「いや、よく見ろ、柴田隊は下がりながら西の方へ迂回しているようだ。もしや弓矢と鉄砲をもう1度使いやすくさせる算段かもしれん」

「馬鹿か？ 弓矢はともかく、鉄砲は隊が邪魔で撃てないぞ」

「ふん、ならば遠慮なく側面から切り崩すまでよ!」

「隊を2つに分ける！ わしと真柄隊は柴田を追う。渡人殿と斎藤殿は信長本陣だ。一気にいくぞ!」

戦局は明らかに朝倉優位になっていた。

たった一人の銃を持つ者が戦局をあっただという間に変えてしまう。その恐怖心を信長は嫌というほど知っていた。

「うぬぬ、朝倉め、調子に乗りおって。いや、調子に乗っていたのはわしの方が。くそっ！ 横溝は何をやっておる!？」

「信長様、その横溝殿より伝令を預かってきました」

「あやつが!?! して、その内容は!？」

「はい、信長本陣の護衛鉄砲隊を馬防柵いっぱいまで前に出し……」
そして、信長本陣を狙う隊は、やはり調子に乗りすぎていた。斎藤の騎馬隊は後ろに、その前方に渡人を。

「後はいいつが信長の喉笛に喰らいつこうとした瞬間に一気に間合いを詰めて信長の首を取る……！」

これにより、霜野は戦場で僅かながら孤立してしまった。
そしてその目の前には……、

「よう、朝倉の渡人、やっと二人つきりになれたな」

横溝が戦場のど真ん中で仁王立ちしていた。

「……おまえさん、馬鹿か？」

「馬鹿で結構よ。ついでだ。渡人同士の倒し方も知ってるんだろ？」

せつかくだからサシで勝負しようぜ」

「なんだと……（やっぱりこいつ馬鹿だ。ただのピストルと俺のアサルトカービンの射程の差を知らねえ）」

「……こういう時、互いに戦場では名を名乗るんだっけな」

「じゃあ冥土の土産に教えておいてやるぜ。霜野 比色だ。お前が聞く、この戦国の世で最期に聞く『ヒーロー』の名だよ」

霜野がアサルトカービンを構える。

「……横溝 由貴だ。けど俺は弱いからな。一人では勝負しないぜ。そう、一人では……な！」

横溝が左手を挙げる。その瞬間、背後にあった馬防柵の先から、鉄砲がギリリと並び、構えられた。

「構わん！俺ごと撃てえ!!」

「何っ!？」

ドオオオオン！ ドオオオオン！ ドオオオオン！ ドオオオオン！
ン！

虎の子の鉄砲隊の一斉掃射が、横溝と霜野、両者を巻き込んで放たれた。

「ぐあああああああつ!!!」

「があああああああつ!!!」

骨に、脳に、髄に、腱に、臓に、神経に、肉に、ありとあらゆる部

位に鉄の弾が直撃する。まるで雀蜂の巣をついたように。

それを見ていた斎藤は啞然呆然としていた。

二人が全身から血や体液を流しながら倒れこむ、だが二人は傷は深くとも死にはしない。眉間に特殊な銃の弾丸をくらわない限り体は再生し、痛みもやがて徐々にひいていく。

だが、それにはタイムラグがあつた。そしてその激痛の苦しみからいち早く歯を食いしばって立ち上がったのは、かつて信長に首を斬り落とされ、耐性が付いていた横溝の方だった。

「……………て、鉄砲隊、な、ナイス……………！ 残機は減つたがな……………」

横溝は激痛に耐えながら前に走る。足取りは重かったが、アサルトカービンの射程入るには充分な距離を稼いだ。

そして霜野の不覚は体を起こすべく、真正面を向いてしまったことだ。

「喰らい……………やがれええっ！」

パアアン！

クリムゾンの一射撃が、霜野の眉間を深々と貫いた。

照準が合わない事で有名な銃だが、此度は横溝に味方した。

「ぐあっ……………！ あっ……………ち……………くしよう……………！ てめえ、サシだなんで大嘘吹きやがって……………え……………」

霜野の体が泥のように溶け始める。やがて、その泥は全身に広がり、服をも溶かし、最期には何も残らなかつた。

「悪いな……………俺は、ついていい嘘はつく主義なんだ……………ぐっ……………んんんん!!? ああああつつ!!!」

瞬間、再びクリムゾンの呪いが発動したのか、はたまた嘘の代償か、横溝の体に激痛が走り、それは未だ痛む体と相成って、全身に広がり、口から大量の血を吐き出し、ばたりと倒れてしまった。

ともかくこの勝負、横溝の勝ちであつた。

それを遠眼鏡で見っていた信長は、

「横溝め、己の体を投げ出し敵と相打ちを望むとは、つくづく、食えぬ男よ」

（俺が左手を挙げて合図したら、俺ごと相手の渡人を種子島で撃つてくれ。その後は気合と根性で何とかする。多分……）

「ふん、あやつめ……」

信長は何故か笑みを溢した。横溝のあまりの滑稽なザマに笑わざるを得なかったのかもしれない……。

「徳川軍に伝令じゃ！ 敵は浮き足立っている。攻め時じゃ。一気に囲み、殲滅せよ！」

「ははっ！」

「渡人がやられただと……くそっ！ だが信長の本陣までは目と鼻の先だ。進め！ 進めえ！」

斎藤が号令を出す。しかし、斎藤は知らなかった。信長本陣の種子島は、既に装填済みであることを。

加えて右翼に布陣していた、光秀隊がそおつと斎藤を狙って距離を詰めていた事を。

「目標。前方の騎馬隊、放てえい！」

「目標。騎馬隊の横っ腹、撃てえっ！」

同時に2方向から鉄砲の一斉射撃と矢が舞う。これは油断していた、斎藤隊において、致命的な一撃だった。

「うわああああっ！」

「む、無念……！」

「ぐはっ……！」

そしてその鉄砲の一撃が、大将・斎藤の鎧の隙間の急所に命中する。「くっ、こ、ここまでか……ちくしよう、信長、お前とは、サシで殺り合いたかった……ぜ……！ ぐふっ……！」

斎藤は馬から落ちた。これにて、斎藤龍興隊。全滅。

（信長……信長よ……俺は最期に立派に戦っていたか……？ 無理だろうなあ。一矢報いることすら出来なかったもんなあ……へっ！）

斎藤隊と渡人の死亡はすぐさま伝令により山崎・真柄隊にも知らせが届いた。

「何……じゃと……？」

「渡人が死んだ……!? こりやまずいぜ。山崎のおっさん。渡人がこっちに來たらこの騎馬隊、すぐさま切り崩されちまう！」

「ぬうう……これは退きどきじゃな。全軍に伝えよ。この戦、我々の負けじゃ。すぐさま退却しなければ全滅するぞ」

「逃がすかあ!!」

「あれは……」

「柴田隊じゃ。おのれ、もう体勢を立て直したのか!？」

それだけではない。徳川軍もこの好機を逃すまいと相手を包囲しようとして騎馬を動かす。

「動け！ 動くのだ。ここで柴田殿を死なせるわけにはいかん！」

戦場においてもつとも効果の高いのは追撃戦と包囲戦である。

この包囲が完成してしまえば逃げ腰だった山崎隊と真柄隊はもはや逃れる術すらなくなってしまう。

「くっ、しまった！」

「……もはやここまでだな。山崎殿、あんたたちだけでも逃げろ。ここは俺が食い止める！」

「何じゃと!? 真柄、お前さん死ぬ気か!？」

「死ぬ気じゃなければ柴田隊は止められないだろうなあ。大丈夫だ。

鬼柴田、相手にとって不足なし！ 必ず生きて戻ってみせるぜ！」

「……約束じゃぞ、真柄。死ぬなよ。生きて戻るのだぞ！」

「……おう！」

「やあやあ我こそは朝倉家一の大太刀使い、真柄直隆！ 信長軍に柴田ありと言われた鬼柴田と一戦交えたい！」

「ほう、ならばこの柴田勝家、相手にとって不足なし！ この首取れるものなら取ってみるがよい！」

真柄と柴田の一騎打ちが始まった。両者は一歩も引かなかった。この一番だけは、誰も加勢をしなかった。お互いのプライドをかけた大一番であった。

序盤は真柄の大太刀が柴田を捕らえようと攻めていた。柴田は防戦一方だった。

しかしそこは百戦錬磨、馬で真柄を旋回させ、攻める。これなら馬さばきだけで真柄の間合いに詰め寄る事ができる。

真柄は思うように間合いに入れずジリ貧状態。この辺りはやはり経験の差か。

「くそっ、相手が正面にきてくれなきや太刀の力は半減するつてのに……！」

「その通りよ。中々の太刀さばきじゃったが、相手が悪かったな。既にお前の間合い、わしの手の内じゃー！」

そして遂に柴田の槍の一撃が真柄の胴体を捕らえた。真柄にとつてこの一撃は文字通り致命傷だった。

「ぐはっ……うっ……！」

「ぬううんっ！」

追撃の2撃目が更に真柄の急所を深々と突き破る。大量の血が地面を赤く塗らす。

「くっ……見事……見事なり、鬼柴田……！」

「中々の手垂れであつたが、やはり最後にモノを言うのは経験の差じゃったな」

「ふっ、じじい臭いこと、言つてんじゃねえ……よ……！」

真柄が騎馬から落ちた。ここに勝負は付いた。

織田と朝倉との野戦は、織田・徳川連合軍の勝利で終わった。

一方、戦場から帰った横溝は、

「うっ……おえく……げほっ！ げほげほっ！ おえっ！ がっ！」

口から大量の血を流しながら体にめり込んだ鉄の弾を吐いて出していたという……。

「あやつのは、一体どうなつておるのじゃ……？」

信長もこれには呆れ顔だった。

「あああつ！ あわわわわわっ、ど、どうしよう、どうすればよいのじゃ!？」

一方こちらは命からがら逃げてきた朝倉陣営。場所は太嶽砦。

戦前の余裕もどこへやら、朝倉義景は改めて此度の合戦の惨劇を思

い返していた。

「真柄も斎藤も、そして『渡人』も戦死した。どうすればいいのだ……？」

もうじき信長も攻めてくるというのに、この大嶽砦は堅牢とはいえ、浅井のように砦で囲まれたらひとたまりもないではないか！

そ、そうだ。比叡山延暦寺に逃げ込もう！ あそこなら信長とてそう攻めてはこれぬはずじゃ。馬を、馬を出せー！」

「義景様……それはあまりに無茶な話です……」

「そうじゃ、山崎！ 皆が戦死したというのに、お前だけ生き残るとはどういうつもりじゃ！ 責任を取れ！」

「む……」
そうだ。自分が退却の指示を出さなければ朝倉勢は全滅に等しい打撃を受けていた。しかし指示を出したのは自分。その上、真柄も戻らない。

（奴め、必ず戻ると言っておきながらわしをおいて逝きおつて……）

「分かりました。ではここで自刃を……」

「違う違う！ わしを延暦寺に連れて行け！ 命を賭してもじゃ！」

「そ、それは……」

「そんな話につき合うことなどないぞ、山崎！」

大嶽砦に見知った男が現れた。

「あ、あなたは……」

「景鏡……！」

朝倉家筆頭家老・朝倉景鏡であった。

「景鏡様、あなた様が何故ここに……」

「そ、そうじゃ、景鏡、お主なせ」

「喝!!」

「ひいっ！」

景鏡の怒号が響き渡った。

「何が渡人じゃ、何が見たこともない銃じゃ、そんなものに驕り、足元を掬われおつて！ 此度の戦、何が勝敗を分けたかなど、火を見るより明らかじゃ！」

「うううっ……」

「もはや貴様もここまで。潔く腹を詰めよ！」

「そ、それは……」

「山崎は黙っておれ！」

「……。分かりました」

「ま、待て。勝手に話を進めるな！ わしは死にたくはない！」

義景の思い切りのなさに景鏡も呆れ顔であった。これが神輿を担いだ総大将の様な、と。

そうだ、こいつは昔からいつもこうだった。ここぞという時に失敗する臆病者だと。

「案ずるな、お主の首は大切に埋葬し、織田の手に渡らぬようにしておく」

「あ、ああああ……」

義景はその場にへなへなど座り込み、恐怖のあまり失禁した。

これが朝倉家筆頭か、と誰もがその存在を疑った。

「そうか、腹を詰める度胸もなしか。ならばわしがどうにかするしかないな……」

景鏡は鞘から刀を抜く。

「や、やめてくれ景鏡、わ、わしはまだ……」

「これも戦国の習いだ！ 覚悟！」

「うわあああああ!!」

ザンツと、肉と骨を切る鈍い音がした。義景の首から上は宙に浮き、ごろんと土の上に転がった。首の下は大量の血が流れ、遺体が倒れた。

「……ふんっ」

景鏡は刀に付いた血を拭き、鞘に収め……ようとはしなかった。

「さて、次は、わしの番だな……」

「そんな、景鏡様……！」

「言ったであろう、これも戦国の習いよ。朝倉家筆頭を斬ったのだ。儂も責任を取らねばなるまい」

「景鏡様……まさか最初からそのつもりでここに……」

「わしも男だ。戦国の男だ。ならば最期はそれらしい散り様をみせてやろうではないか」

「やはり、最初からその気で……」

「そして、山崎よ。頼みがある。朝倉は死ぬ。しかし武士達に罪はない。もしお前がその気なら……」

「その気なら……」

「織田軍へ全員まとめて投降せよ。なあに、一人ぐらいそのような武将がいてもいいだろうて」

「……。分かりました。この山崎、朝倉軍全て請け負います。そして必ずや一人の死者も出さずにこの話を纏めて見せます」

「うむ。よくぞ言った。それでこそ朝倉家最後の家老に相応しい。では、ついでに介錯も頼む」

「分かり……ました」

「朝倉領は一向一揆も未だ多い。不覚は取らぬ様にな」

景鏡の眼は、どこか安らかだった。これから腹を切る男とは思えない程に。

そして山崎は織田に投降した。事情を信長に話し、これ以上無益となる戦は止めていただきたい、との旨を語った。

信長は、そうか、朝倉は死んだか……とぼつり眩き、山崎の提案を承諾した。二人の昇級首を取れなかったのは心残りじやがな、とは言ったが。

こうして、織田家と朝倉家の戦いはひとまず終結した。

「……いささか消化不良ですなあ。次こそは吉報を届けるといふ事で、此度の件は勘弁していただきたく存じます」

「そうじゃな。家康。もうじき武田が動くかもしれん。死ぬなよ」

「はっ、徳川軍全勢力をもって死合いますゆえ」

暫定的ながら朝倉領は前田利家と通称美濃三人衆（稲葉一鉄、安藤守就、氏家卜全）といった武闘派で固められた。これは朝倉領内で一向一揆が激しいことが理由となった。

山崎は朝倉軍の一部を連れて岐阜へ向かった。しばらくは信長の下の世話をさせられる、という信長の冗談は置いておいて、書類整理に勤しむこととなった。

そんなある日、山崎と横溝が出会う時があった。

「あなたが客人として織田家に仕えている渡人殿ですかな？」

「俺は織田家に仕えてるわけじゃないよ。第一戦国大名じゃないし。天下取る気もなければ土地にも金にも興味ないんだ。日々の生活が暮らせる最低限の銭さえあればそれで満足さ」

「ほう……、変わった方ですな。朝倉にいた渡人はいましたが、義景様はあまり重要視しておりませなんだし、名前すら覚えようとしませんでした」

「そりや嫌な奴に仕えたもんだな。渡人というのが何人いるか知らないが、いい思いをさせてもらってる奴は少数だろうなあ……」

「聞きましたぞ、あなたは霜野殿と相打ち覚悟で銃を放たれ、そこから逆転したとも聞きました。いつもそんな綱渡りのような戦いをしているのですか？」

「まあな。俺は他の誰よりも弱いからな。リスク背負って立ち向かわなきゃ勝負にすらならない」

「りすく……？　ふむ、なるほど、やはりあなたは信長様とは別の意味で変わった方のようだ」

「褒めても何も出ないぜ。……っと、茶が沸いたようだ。飲んでいてくれ」

その後、横溝はというと、

「うーん、造り方はこれであつてと思うんだけどなあ。ただ熟成に長い年月が掛かるわけで、これで失敗してたらまた数年やり直しかな」
大桶の前でぶつぶつ言っていた。

「やっぱリスク管理のために色々作っておくのがいいか。うん、そうしよう。俺も完成には興味あるしな。それまでは、たまり醤油で我慢だな」

醤油の醸造に苦心していたそうなの……。

本願寺編①

その日の岐阜城は朝から慌しかった。

「報告します。朝倉領の一向一揆、前田利家様の果敢な攻めで無事退けられました」

「……………」

「報告です。南近江の一向一揆ですが、佐久間信盛様が鎮圧しました」

「……………」

「ほ、報告します……。伊勢長島で起きた一向一揆ですが、滝川一益様が出陣して一揆に攻めかかりましたが、その……大変申しにくいのですが、返り討ちにあいました」

「……………」

「一向一揆はそのまま尾張領に攻め込み、信興様のいる小木江城まで攻め込みましたが、明智様が盛り返し、何とか退ける事に……信長様？」

「うぬぬぬ……一揆！ 一揆！ 一揆！ 何処もかしこも一向一揆！

もううんざりじゃわい!!!」

信長の寿命が、5年は減った。

「苦勞してんな、信長」

「……横溝か」

そこへ現れたのはもはや馴染みの『渡人』、横溝 由貴である。

「そうカツカすんなよ。寿命が縮むぜ。ほら、深呼吸だ。リラックスリラックス」

「わしを馬鹿にしておるのか貴様は？ まったく、儂の苦勞も知らんで……」

「分かるさ。一向一揆の『いろは』ぐらい。すぐ暴徒になって、焼く、壊す、殺すは当たり前、統率も取れていなくて滅茶苦茶やる集団だろ？ まあ最近は統率する組織が現れ始めているようだがな……」

「成る程、大体の知識は持っているようだな」

「ま、今日はカリカリしないで気分転換しな。せつかくだから、いいも

のを持ってきた」

そう言うと、横溝は風呂敷の中から奇妙な形の木箱とツボを取り出した。

「おまえさんの大好きな「技術」だよ。まあ見てってくれ」

蓋をパカッと開けると、中からツンとした酢の香りが漂う飯の上に、生魚がイカ、ハマチ、カニ、タコ、タイと豊富に乗っている。

「何だこの匂い、腐っている……わけではなさそうだな。これは、酢か？」

「そうだよ。酢で和えた白米の間には山山葵を塗って昆布じめした鮮魚を乗せ、上から押し作ってみた。これを押し寿司……いわゆるバツテラにした」

「寿司……バツテラ……どちらも聞いた事がないな。『鮓詰め』なら知っているが」

「まあ、あれに近いかな。そして、こいつを……」

ツボから杓子で何かを取り出す。それは黒ずんでおり、ドロツとした粘液状の代物だった。

「まさか……墨ではあるまいな？」

「違うよ。こいつは塩、味噌に並ぶ日ノ本3大調味料、「醤油」さ」

「醤油……？」

「舐めてみな」

「う、うむ……（発酵臭がするな……味噌と同じく熟成させたものか？）」

信長、半信半疑になりつつ、醤油とやらを一舐めペロリ。

（こ、これは……何だ？ 塩辛さもあるが、味噌とも違い、ほのかに甘い。甘じよっぱい、と言えば適切な液体だな）

「後はこのバツテラを適切な形に切り分け、醤油を付けて食べれば完成だ。さあ、食ってみてくれ！」

「う、うむ、よし、いただくぞ！」

信長は小皿に醤油を入れたものにバツテラの先をちよん、ちよんと付け、一気に口の中に入れた。

「む、むむむむ……！」

(こ、これは……!? 口一杯に酢飯のツンとした香りと、山山葵がツーンと鼻にきて、鮮魚はとても柔らかく、醤油とやはらはとても甘く感じる)

むっしやむっしやと口の中で米を噛み砕くように食べていく。ひとしきり味わうと、ごくりと喉に飲み込んだ。

「横溝お！」

「気に入ってくれたかな？」

「おかわりじゃ！」

「はいはい……」

結局、信長は朝餉を食べたばかりだというのに、バッテラ寿司を全部残さず平らげた。

「うむ、ご馳走様じゃ」

「お粗末様でした」

「腹も膨れれば機嫌もようになるのう。一揆は腹の立つ連中だが、ひとまずは落ち着いたわい」

「そうそう。腹が立ったら飯を食べば大抵の事はどうでもよくなるもんさ」

「しかし連中は収穫前の米にも火を点けるから始末に終えん。年貢の意味を知らんから出来ることじゃて」

「しかし、生の魚がこれほど美味しいとは思わなかったぞ」

「これが流行るのは今から数えて大体百年ぐらい先だからな。魚だつて新鮮なうちにしめないと簡単に腐っちゃう。いい保存方法が生まれて初めて出来る代物なんだよ」

「食べ物に腐りかけが一番美味しいとは、あながち作り話でもなさそうじゃなあ……」

「ところで、今日は頼みがあつて来たんだが……」

「ん？ なんだ？ 今のわしは機嫌がいい。大抵の無理は聞くつもりだぞ」

「さつき使った「醤油」なんだが、あれには結構な熟成期間が必要でな、城の者と連携して作っていきたいんだが……」

「おお、そんなことか。ならば造り方を教えろ。そうすれば味噌蔵ならぬ醬油蔵を城下に作つてもよい」

「いいのか？」

「あれは確かに美味かった。あれを塩や味噌とは違うものと売り出せば必ず売れる！ 銭が増える。農も歓迎するぞ」

「恩に切るぜ」

「あれがあれば飯の献立も……」

ドタドタドタ……！

「報告です。浅井領で一向一揆が発生。秀吉様は出来れば援軍を寄越してほしいとのことですよ」

「……かぁーっ！！ 折角いい気分が台無しじゃー！」

「そりゃあなあ、浅井領、朝倉領を取り、天下に前進しつつあるのは分かるが、その分敵も増えるからな」

「それが武将と言うなら農も納得するわ！ ただし一揆の先導をしているのはおそらく……」

「……石山本願寺。だろ？」

「おぬし、奴らの存在まで知っておるのか？」

「まあ、色々な意味で有名な連中だからねえ。一向一揆……倒しても倒しても蛆の山の如く現れ、武功も上げられず、死んだら丸損だからな。

まさにクソゲーに金と時間を費やす（自分の事）が如く……。このままじゃ信長、尻の毛まで筆られるぜ」

「坊主に毛を筆られるとは酷い皮肉じゃな。くうう、ほんと頭の痛い話じゃわい。何とかできぬもんか、のう？」

「なんとかか……なんとかか……かぁ。その前に敵をよく知る必要があるよなあ。……信長」

「……ん？」

「本願寺法主 顕如に会いたい。部下の道案内人を一人貸してくれ」

石山本願寺。寺院勢力でありながら信長の天下統一を10年は遅らせたと言われる集団。

その頂点に立つ傑物こそが、戦国時代のカリスマ坊主こと、本願寺法主・顕如けんじよその人だった。

この時代、寺社勢力は数あれど、本願寺なくして寺院は語れない。顕如が法主となったのは先代がなくなった若干12歳の頃。嫡子ではあるがその時既に大器の片鱗を見せていたと言われている。

まず顕如は財政難に喘いでいた朝廷に対し活発な資金援助を行った。

その甲斐あって、本願寺は准門跡、簡単に言うと天皇陛下の御一門になり一気に勢力を拡大する事に成功する。

本願寺が門跡となり権勢がさらに高まると、顕如は周辺の寺院の大部分を吸収して浄土真宗に組み込み、一大勢力を築き上げる。

そこから得られる寄付金は信長の伊勢水運や楽市楽座などとは比べ物にならなかった。

信長もまた、朝廷への援助で権力を得て戦国の世をのし上がってきたが、顕如と比べてはひとたまりもない。

いつしか二人は財力と権威で争うもの同士になっていった。

そして顕如がここまでのし上がったものこそ、カリスマ性、言わば「人気」だった。

彼が説法をとけば人々が涙を流して感動する。彼こそが仏陀の再来だと言う者さえ存在した。これは戦国武将である信長には決して「ない」ものだ。

組織力。財力。権力。寺院勢力でありながらそれら全てを手に入れた顕如。

正史では織田信長と10年以上も戦い続けたというのも領ける話であろう。

そして今回、そんな織田家と一触即発の状態、というか既にぶつかっている勢力にわざわざ出向こうという横溝の案内をすることになった貧乏くじを引いたものは……、

「こうして馬で出歩くのは、あの日、初めて会った時以来だな、村井さん」

「まったく、久々に岐阜城に戻ってこれたと思っただら……。手荒な真似事は禁止ですぞ、横溝殿」

京から帰ってきたばかりの、織田家家臣、村井貞勝むらいさだかつであった。

思えば何も知らずに賃金を得ようとバイトに勤しもうとしていた横溝をスカウトしに来たのが村井であった。

あの頃は「渡人」の登場で戦局を180度ひっくり返されての敗走で城内が沈痛な面持ちだったというから横溝の存在はまさに救世主だったかもしれない。

もつとも、当の本人は綱渡りも同然の戦術で勝ち続けてきたわけだが。

その戦い振りを見られなかったのは、いささか残念だったと後に横溝に語っている。

それを聞いた横溝は、ただ一言だけ「有難う」と返した。

本願寺編②

「ここから先は寺院勢力圏内になります」

「賑わってるな」

「大きな寺院周りは何処もこんな感じですよ。京の都が幾度となく戦火に包まれ焼け野原になっても復興できたのは寺院勢力と門下の人々が頑張ったおかげです」

「よし、馬はここに置いていこう。あと帯刀もなしだ。俺もクリムゾンを置いていく」

「なっ……!?! 丸腰で行くのですか?」

「相手は坊主だ。刀は無粋だろ?」

「はあ……」

「顕如さまがいらっしやっただぞー!」

「ああ顕如さま……! 今日も我々をお導きください……!」

寺院の門が開き、本願寺法主・顕如が姿を現す。その姿、まさに後光が差すが如く……。

「皆様、お集まりくださいませ、有難うございます」

（へえ、さすがは仏陀の再来なんて言われてる人だ。声に気品があるな）

「皆様、今は戦乱の時代です。だが、そこから目を背けてはなりません。ただ南無阿弥陀仏と唱えれば、あなた方の御霊は極楽浄土へ行ける。そう信じるのです……」

「おお顕如様、有難や有難や……」

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

「はっはっは……おや」

視線を向けた先には横溝と村井の姿があった。横溝は平常心だが、村井はここは敵地のど真ん中も同然だと感じているため、震えを抑えるのがやっとだった。

「あなた方二人は、あまり見たことがありませんね。そちらにいる方は、鬘を結つているということは、武士ですか?」

「えっ、いや、そ、それは……」

「俺たちは織田家の者だ」

「なっ!?!」

どうしてバラすんですか!?! と村井は思ったが、時既に遅し、織田家の者は仮想敵だと本気で信じている者達が棒や鍬で武装を始めた。

「貴様ら、織田家の者だったのか!?!」

「頭如様に仇なす者め!」

「ここに来たが百年目、覚悟しなよ!」

周囲の者達が横溝と村井を囲む。しかし一触即発の雰囲気の中、横溝は全く動じていなかった。

クソゲーによって鍛え上げられた横溝の精神は伊達ではない。星をみるひとすらクリアしたのだからその度胸は常人とは比べ物にならない。

だからといって良い子のみんなはくれぐれもクソゲーをプレイするのは……やめようね。禿げるから。

「……やれるものならやってみろや」

「なんだと!?!」

「……その代わり地獄に墮ちる覚悟は、ちゃんと出来てるんだろうな?」

「なにっ!?!」

「俺たちに手を出してみろ、お前らに極楽はなく、ただ地獄に墮ちるだけだぜ」

「なっ……!」

「地獄の閻魔の裁き、いっぺん試してみるか?」

横溝は動じない。どうせ武士などすべからず地獄行きなど分かってきっていることだ。

しかし武士達はこんな乱世の世を終わらせるために刀を持ち、死線を潜っているのだ。そこから畑を耕しているだけの連中とは格が違う。横溝はそう「信じている」。

「このっ……男らしくない奴じゃのう」

「死にたくないから閻魔にこびへつらうのかい」

「ほう、じゃあ大の男が得物持って、丸腰の男を袋叩きにしようとする

のは男らしいのか？」

「うっ……」

「ええ、何とか言ってみろや!!」

横溝渾身の喝が決まる。男達はたまらずたじろいだ。

「皆さん、そこまで。あなた方の負けです。武器をしまいなさい」

「け、顕如さままで……」

「しまいなさい」

今度は顕如の有無を言わさぬ喝が決まる。

「は、はい……」

「わかりました……」

(ふむ、流石は上に立つ者、メリハリが利いてるねえ)

「突然のご無礼、失礼しました。改めまして、本願寺で法主を勤めさせております、顕如と申します」

「拙者は織田家家臣、村井貞勝と申します。いやはやお互い血の氣の多い人々を抱えているようすな」

「……皮肉と受け取っておきましょう」

「俺は横溝 由貴。織田家にやつかいになってる『渡人』だ。以後お見知りおきを」

「ほう……あなたが」

顕如の視線が横溝に集中する。まるで相手を見透かすように。

「私も『渡人』の噂は聞いておりますよ。浅井勢、朝倉勢を討つ時に切り札になったとか……。織田が急激に強くなったのは、あなたのような方がいるからかもしれませんな」

「……俺は大して強くないよ。偶然と幸運が重なっただけ。他の誰よりも弱い。だが、だが弱いからこそ驕らない。それが強さになる」

「禅問答のようにも聞こえますが、成る程……あなたは自身がよく見えているようすね」

「恐縮だね」

「……どうです？ あなたも仏の教えを志してみては？」

「……俺に、仏を信じろと？」

「ええ、そうです。この戦国乱世の世、人の心までもが荒れ果ててしま

いました。あなたのような聡明な方までその血に染まるのは賢明ではないと思います」

「……………」

「いかがでしょう?」

「…………フツ」

横溝は鼻で笑った。

「せっかくだが、悪いが俺は仏も神も信じない事になっている。ましてや現実で起こりうる災難を退けるために験を担ぐことは、特に」

「…………ほう」

「…………俺が大学受験に精を出していた時の事だ。俺は合格目指して毎日必死に勉強していた。インフルエンザのワクチンすら打った。万全の状態を受験に望むつもりだった。

しかし……、俺はセンター試験当日、インフルエンザにかかった。毎日の勉強で体力が落ちていたせいもあったかもしれない。だがあの時、天は俺を見放したと強く感じた。

這つてでも試験会場に行こうとする俺を、親は必死に止めた。そんな状態でまともに試験が受けられるはずもない、と。正論だった。

俺は布団の中で悔し涙を流しながら天を呪った……。追試でも精彩を欠いた俺は、結局、一年浪人した。そして俺は絶対神と仏に復讐してやると、固く誓ったのさ」

「……………」

横で聞いていた村井は、横溝が何を言っているのかちんぷんかんぷんであった。

だが、聡明な顕如には、横溝が何を言っていたのかある程度理解した。

「ふむ……、要点をかいつまんで言うのと、重要な本番の行事の前に病気にかかり、泣く泣く好機を逃し、今までの努力が水の泡と化した、ということでしょうか?」

「あんたそこまで分かるのか。流星だな」

「人の言葉に耳を傾けるのは法主の勤めですので」

だが、顕如は横溝という男に強い仏への憎悪と、現実主義の考えを

見た。この男はこちら側に引き込むのは無理だということも悟った。「どうやらあなたに仏の教えを伝えるのは難しいようですね。残念です」

「すまん。俺はあの時に背負った悲しみを……最大の『厄日』を、一生忘れないで生きていくと決めたんだ」

両者の間に一陣の風が吹いた。まるで相容れない事を示すかのよう

うに。

「今日は、これで帰るよ」
「そうですか。帰りの道中お気をつけて。……ああ、一つだけ言っておきます」

「なにかな？」

「信長は我々の『敵』です。それだけはお忘れなきよう」

「……分かった。本人にもそう伝えるよ。……村井さん、帰ろう」

「は、はい……」

横溝と村井が帰る背中を、顕如はじつと見ていた。

(そう、信長は敵なのです。ゆめゆめお忘れなきよう……渡人殿)

「ふう……」時はどうなることかと思いましたが」

村井は何とか命を取り留めたかのような気分になり、額の汗を手ぬぐいでぬぐった。

「大丈夫大丈夫。あそこで手を出すのを止めないようじゃ、本願寺法主も大した事のない人物だって認めるようなものさ」

「しかし、あなたはつくづく綱を渡るような挑発が好きなのですな」

「……ははっ、信長に似てきたのかもな」

「およろしくだされ、信長様のような人が二人もいたら流石の私も手に負えません」

「不敬だぜ、それ。だが、収穫もあつたな」

「あの対話の何処に収穫があるのですか」

「法主の顕如さん、ああ見えてかなり面子を気にするタイプとみた。あと案外保守派だな。さあて、どう纏めていくかな……」

「また何かをやらかすつもりですか……頼みますよ、危ないことは」

横溝はまた、いやらしい目付きで帰り支度を初め、また、岐阜の方へと帰っていった。

「おう、今帰ったぜ」

「横溝か。あいにく今日のわしは疲れておる。悪いが休ませてくれぬか?」

「まあ待て。改めて噂の頭如さんに会って来たんだが、あの人、かなり聡明な人だな。それでいて民草の人氣も高い。信長じゃあの人には勝てないぞ」

「なんじゃ、嫌味か」

「いや褒めてるのさ。両方を。ところで、一向一揆を解決するウルトラCを思いついたんだが、協力してもらえるか?」

「うるとらしい? ……お主、今度は何を企んでるつもりじゃ」

「それはだな、ま、ここじゃ何なので場所を変えるか?」

「それじゃあ織田家が軍法会議に使ってる部屋があるからそこまで付いて来い。言っておくがな、半端な案や知恵なら許さんぞ」

「ま、それは聞いているのお楽しみ、ってことで」

信長と横溝は移動していった。

「……どうやら、私の公務も今日は終わりのようですね。お腹も空きました。飯にしましょう」

取り残された村井はてくてくとその場を去っていった。

なお、その後、会議に使ってる部屋でどつたんばつたん大騒ぎになっっていたのは余談である。

信長の、そんな案受け入れられるかー! と、いった声や、横溝の、摩訶摩訶RTAするよりマシだろー、と、いった声を城の者が聞いたらしいが真相はよく分かっていない。

それを知るのは、少し先の話になる。

本願寺編③

横溝が岐阜に帰って来てから数週間後。

石山本願寺前……。

「顕如さまがいらつしやったぞー!」

今日も寺院周りは大盛況だった。

「皆様、今日もお集まりいただき、まことに有難うございます。さあ皆様、唱えましょう、南無阿弥陀仏と。さすれば皆様の魂は極楽浄土に導かれる事でしょう……。」

「顕如さまー!」

「ああ、ありがたやありがたや……。」

お勤めを終え、寺院内で一息つく本願寺顕如。

「これはまた香りのよいお茶ですね」

「ええ、駿河の方から取り寄せました。新茶でございます」

「うむ、美味しい茶には菓子などいりませんな……。」

するとそこへ、門番を任せていた者から伝えが。

「失礼します。顕如様、来客が現れました。いかがなさいましょう?」

「来客……? 一体誰でしょう?」

「はあ……男は織田家の渡人、横溝と名乗っておりますが……。」

「横溝、ああ、あの面白い御仁ですか。そうですね、何があるか分かりませんが通しても構いませんが……。」

「それが、顕如様にちよつと出てきて欲しいというのですが……。」

「ふむ……。」

「お久し振りです、渡人の方。説法でも聞きに参りましたか?」

「おお顕如さん、お勤めでお疲れのところ失礼してるぜ。実は会ってほしい人がいてな、連れてきたんだ」

「ほう……一体どなたでしょう?」

「それが、な」

横溝はわざと一拍置き、

「信長が来てるんだわ」

「がっはっは、わし、織田信長!」

「なっ……！」

さすがの本願寺顕如も絶句した。あれほど『敵』と言い伝えていたはずの男がまさか目の前に現れたのだ。これには従者もぽかんと口を開けて驚いている。

「よう、本願寺顕如、こうして顔を合わせるのは初めてだな、岐阜から遠路はるばる来てみたぞ。あくまで来客としてな。無論、帯刀はしてないぞ」

「あ、いえ、そ、そういう問題では……。横溝殿、私は織田は敵だと伝えて欲しいと言った筈ですが……」

「ああ、伝えたよ。伝えた上で、信長は来たんだ。中に入っいいかな？」

「……………」

しかし従者には露骨に嫌悪感を抱く者がいた。

「顕如様、あの織田信長です。これは討ち取る絶好の好機！」

「今すぐこの場で切り伏せてしましましょう！」

「……いえ、それはなりません。分かりました。横溝殿、信長殿、我らは来客として振舞いましょう。どうぞ寺院内へ」

「け、顕如様……………」

本願寺・寺院内。

「お茶です……………」

「あ、どうもお構いなく」

横溝も信長も一切躊躇することなく茶に口をつける。毒が入って可能性もあるのに、である。

「信長殿……………」

先に口を開いたのは顕如の方だった。

「遠いところをわざわざお越しいただいたのはご苦勞な事です。しかし、我々はあなたが出した通告、あれはいかげなものなのか問いたいのですがね」

さてこの辺がややこしいのだが、信長は本願寺に宣戦布告を出していない。

しかし史料『本願寺史』によると、『顕如が発した檄文の中に「信長から確かに本願寺を破却せよ」という通告があつたのでそれに対抗する』という旨がある。

その主張で、本願寺顕如は信長と戦うことを決意したようである。しかしこれは今でも本願寺側の主張しか史料が確認されていない。

だが石山本願寺は当時とすれば極めて重要な軍事拠点になるので信長が本願寺を破却しろという主張をした可能性も充分にありえるのだ。

「うむ。その件については心から謝罪する。どうか許して欲しい。この通りだ。頼む」

平身低頭どころではない。信長は間違いなく顕如に対して『土下座』した。

これには顕如も言葉に詰まったところではなかった。

(わ、私は夢でも見ているのか……？ あ、天下を取らんと動いている織田信長が、一介の坊主に過ぎないと見ている筈の私に、土下座……!?)

「あ、頭をお上げください。私もそのような態度を取られては、逆に立つ瀬がありませんので」

「ふむ、では頭を上げるとしよう」

信長は頭を上げ、手元の茶をまた一口ふくんだ。

「あのような文を送ったのは、ひとえに本願寺とそなたが脅威に思えたからよ」

「脅威……ですか」

「うむ。銭は度を超える程にうなり、民草に人気もある。どちらもわたしにはないものだ。もしこれを動かされたら、そう思えば儂ですら震えが止まらん」

「……寄付金は皆のご好意の賜物に過ぎません。人気といつても、この戦乱の時代を救世しなければという、私の決意によるものでしかありません」

「儂は武の力で近畿を平定したいと考えておる。無論、行く道は険しかろう。だがやらねばならぬ」

「それは何故でしょう。他に方法はなかったのですか？」

「ないな。それが『武士』という男の生き方だからだ。そなた達寺院の者は『徳』の力で人々を纏め上げればいい。そこで、だ……」

場の雰囲気が一瞬と張り付く。顕如も感じた。成る程、ここからが本題ということか、と……。

「取引を、せぬか？」

「取引……ですか」

「うむ。わしは幾多の寺院勢力と布教活動に一切手を出さない。そのかわり、お主達寺院勢力は織田の統治地域で一向一揆の扇動を起こさない、というものだ」

「成る程。しかし、その取引、どう纏めるおつもりで？」

「ここにわしが政に使っている花印がある。そなたも同じものを用意してほしい。その上で書簡を造り、義昭公に預かってもらう」

「ほう……」

「書簡には互いの名も入れる。さすれば手打ちは完了じゃ」

「……」

顕如は考えた。これはかなり細い綱渡りである。罫、といってもいい。我々石山本願寺といえど、その勢力に対抗せんとする寺院勢力は未だ多い。

だが、仏教と言っても根っこは同じなのだ。そしてなにより、天文の錯乱のような農民・宗派の反乱を二度と起こしてはいけないという事は分かっていた。

今までは一向一揆は戦国大名に対する嫌がらせで行ってきたが、こちらが潮時かもしれない……。

仏陀を眠らせるわけには、どうしてもいかなかった。本願寺のような寺院勢力が一枚岩であればどれほどよかったか……。

この取引はそれを今一度考えるきっかけになるかもしれない。顕如はそう思った。

「……分かりました。その条件、飲みましょう。各地の門下にはきつく言っておきます。一揆を起こさないように、と」

「おお、そうか。それなら一安心だわい」

「ですが、勘違いなさらぬよう。これは石山本願寺と織田家の和睦ということになります。くれぐれもそちらから横紙破りをなさなぬよう」

「元よりそのつもりじゃ。それではさつそく、書類を造り合おう。これが互いの為になるように、な……」

書類には互いの署名と花印を入れ、丸めて書簡とした。後はこれを義昭公に預かってもらえば事は済む。

「これで良し。顕如よ、此度の取引がよいものになることを期待しておるぞ」

「お互いの急所を握り合うような取引ではありませんがね」

「うむ。ではわしは帰るとしよう。……おっと、主にもう一つ、伝えておかねばならぬ事があつたな」

「なんでしよう?」

「わしは『武』の他に『法事』を民草に伝えることはできまいかと考えておる。そのために寺子屋を開き、子供に読み書きを教え始めるつもりだ」

「なんと……!」

「俺が言つたんだよ。学問は銭の源になる。そこで投資したものは後に何倍にもなつて帰つて来るから、つてな」

横から横溝が言う。

「主らも真似してみてはどうだ? 『徳』の力だけでは人はついて来ても物を覚えることはできまいて」

「……善処しましょう」

「では、またな」

信長と横溝は去つていった。

「信長も愚かですなあ」

「義昭公が作った信長包囲網はまだ生きていくというのに」

「浅井、朝倉が消えたとはいえ、我々本願寺勢力が健在ならまだ信長を追い詰める事はできませんよ」

「……それでもありませんよ」

いささか楽観的な坊主数人に比べ、顕如はあまりいい顔をしていなかった。

「今回の取引、いや、駆け引きでいったら我々の負けでしょう」

「そんな、こんな書簡など、握り潰せばよいではありませんか」

「それをやったら義昭公の面子まで潰すことになるでしょう、信長はその辺は抜け目ない人物ですから」

「うむむ……ですが一向一揆はあくまでその土地で起こる偶然なるものとしては……」

「そこまで話の分かる人物ではありませんよ。とにかく、至急、門下生にお触れを出しなさい。一向一揆を止める様にと。条件を突きつけたらそれに応じるとします」

「そんな……我々はそこまで信用なりませんか？」

「信用してくれるかどうかはこれからの我々の布教活動次第でしょうね。私は明日から畿内を周り、浄土真宗派と話し合いの場を設けに行きます」

顕如が気になったのは、信長が『法事』で近畿を纏める、という一文だ。その為に学問の場を設け、人々に伝えると言った。

この先行投資が広まれば確実に我々『徳』の力で勝負している寺院勢力は弱体化する。

（武士である信長がそんな考えを起こす筈はない。だとすればこの案を出したのは、あの『渡人』でしょうね。いやはや、まんまとやられてしまいましたよ）

「やれやれ……横溝殿、あなたは、とんでもない狸だったようですね」
自虐めいた笑みを浮かべる顕如であった。

帰りの馬上。

「……上手くいったようだな」

「本当か？ 本当にあれでよかったのだろうか!？」

「問題ないだろう。相手は取引に応じたんだ。応じ続けるならそれでよし、もし破るようなら……」

「ふむ。たしかに合理的でわし好みの案ではある。だが……」

信長は横溝を睨みつけた。

「よくも、わしに、坊主に、土下座をさせたな。この貸しはとてつもなく高くつくぞ！」

「あー。やっぱりそうくるか」

「当たり前だ！ わしは昔から根に持つ性格なんじゃ！ 大体貴様はなんじゃ!? わしを傀儡のように扱いおって！」

「上手くいったんだからそれでいいだろう。何より打ち合わせどおり演じてくれて俺も感謝してるよ」

「ぐぬぬ……」

横溝の案は、こうだ。

向こうは自分達を権威ある勢力だと思っている。そして自分も権力者だと思っている。それが落とし穴だ。

こちらがわざと下手に出て、褒めて褒めて褒め倒せばコロツと条件に応じるぜ。

基本、これだけである。

しかしこれが石山本願寺という巨大勢力にハマった。顕如は取引に応じたのである。

もし信長がいつも通り慇懃無礼で俺に足を向けて寝るなとばかりに振舞えば本願寺は絶対に首を縦に振らなかったであろう。

頭まで下げ、寺院勢力を脅威とまで持ち上げたからこそ、相手は誠意ある行動とみてくれたのだ。

「ええい！ 帰ったら早速飯じゃ飯！ その後は利休を叩き起こして茶の湯じゃ！ そして風呂に入ってぐっすり寝てやるぞ！」

「俺もお呼ばれしていいかな？」

「ダメに決まっているだろう！ おまえ如きに茶の湯が分かるかわしだって最近覚え始めて間もないのじゃぞ！」

「はいはい……」

信長の寿命が、やっぱり5年ほど減った。

ところで、ミシシッピー殺人事件とプロ野球？殺人事件！ではどちらがクソゲーとして上だろうか。

それから数ヶ月が経過した。

問題となっていた一向一揆は、まるでそこになかったかのようにぱたりと止まった。

本願寺側が迅速に手を回したからだろうが、まさかここまで手が早いとは思わなかった。

そして本願寺顕如は畿内行脚で各寺院勢力に説明に向かった。しばらく本願寺を空けるので皆さんよろしくお願いします。と頼んで。

しかし様々な寺院勢力を歩き渡り、信長の脅威とその対抗策に一向一揆はもはや過去の戦術になるであろうと説明しても、中々良い言葉は受けられなかった。

言いだしつぺはあなたでしよう、と。

しかしここで折れるわけにはいかない。顕如は辛抱強く説得を続けた。

その甲斐あってやっと説得に応じる寺院も現れ始めた。そして今こそ我々浄土真宗宗派は一つにならなければいけないと話しを続けた。

しかしそういった中でも、比叡山延暦寺だけは、寺院内に入ることも許さないほど頑なだった。

顕如はやれやれ、と溜息をつき、延暦寺の説得は難しそうですね。ここは後回しにして他を回しましょう。と、従者達に伝えた。

結果、延暦寺だけが宙ぶらりんの状態になってしまった。

「後は、越前や越後のような遠くの所ですね。あそこは苦しいことになりそうです……」

顕如の行脚は当初の予定より大幅に遅れることになった。

一方で信長は横溝の条件を飲み、城下に寺子屋を幾つか建てさせた。それも学ぶのに金は一切必要なし、飯も岐阜城もちという破格の待遇でだ。

書物はとりあえず中庸に、韓非子の2種類に絞った。勿論紙も硯も買う必要なしだ。

「後は古事記と古今和歌集も欲しいな。岐阜城の方で写本を作れぬか？」

「岐阜城のそれなりに学のある人たちを総動員しても全て行き渡らせるのは難しいでしょう……」

「ならば平仮名で始めるものも入れよ。童にはそこからでもよからう」

「はっ、承知しました」

お触れを出した途端、希望者は瞬く間に埋まった。教師役は岐阜城から山崎吉家ほか数名が選ばれた。明智光秀や丹羽長秀など各武将も折を見て参加した。

これは信長の策である。幼き子が織田家の武将と出会うなど滅多にないこと。彼らの向上心を高めるためだ。

横溝もなんでもいいから教鞭を取れ、と信長は言った。横溝はなんでもいいんだな、と答え、醤油の造り方を伝授させた。

やがてこれは日ノ本の国の調味料をひっくり返す代物になるからしかと学んでおけ、と教えた。

無論、信長とて最初はいい顔をしなかった。しかし、横溝の優秀な部下が少ないというなら1から人材を作れという意見を受け、渋々納得した。

なにせ織田家の土着の部下が殆どいない実情は現在もあまり変わってはいない。人材不足は目に見えて明らかだった。

もし横溝の「優秀である必要はない。だが城の公務を任せられる人材は今後絶対に必要になってくるぞ」という進言がなければ、信長とて首を縦に振らなかつたであろう。

(あやつという言葉は少々腹が立つが、もつともな意見ではあるな……)

なお、遠眼鏡を作る過程で生まれたガラス工芸品は城下で飛ぶような速度で売れており、生産が追いつかないほどだった。

他の地方からも買い付け人が現れるほどである。

しかし信長はあれを戦時道具として使おうという輩は現れないことは承知していた。

(こちらは銭を生んでくれるから良し、と……)

と、なると、あとは軍事的な考えに至る。

（浅井、朝倉は討った。本願寺も一時的に大人しくなった。後は、武田か……。しかし、正直信玄公とは戦はしたくないわい。織田軍と援軍の徳川軍かき集めても倒せるとは思えん。

だが信玄公は必ず天下を取らんと上洛してくるだろう。さて、どうするか……）

「ええい、今は考えても仕方がないわ。利休に茶でも淹れさせよう」

「信長様、随分と難しい顔をしておりますな」

茶席にて千利休は茶をたてながら一言呟いた。

「……分かるのか」

「ふふ……茶の湯は楽しきもの。そう般若の面をもてなしては私もしささか困り果てますゆえ……」

「まったく、おぬしは抜け目ないな。こうただ座っているだけでこちらの心の内まで見透かすように振舞う。悪い癖じゃぞ……」

「申し訳を。ですが、私も業深き者。茶の道を極めんとすればついつい心に血が昇ってしまいます」

「……ふん」

利休が茶をたて終わり、信長の元へ置く。信長は利休を信用している故、毒見役は置かない。

「美味しい……」

「ほう、分かりますか」

「そよ風に揺れる草原とそこに立つ大きな一本杉が見えた……と言えば言いすぎか？」

「いえ、そこまで言っていたら、この利休、無常の喜びであります」

「だがわしは悪戯心が過ぎるからのう、つい菓子が欲しくなるわい」

「ははは、信長様も天邪鬼ですな。良いお茶ならそれだけで甘露ですが、……ふふ、この利休、まだまだ修行が足りないよう」

「はっはっは」

「ところで信長様、信長様は一人の『渡人』を招いていると聞きました」「ああ、横溝のことか。あやつならわしの機嫌を損ない過ぎたとかで

しばらく城には姿を見せんと言うておったわ」

「……その方、お呼びすることはできますでしょうか？」

「あやつをか？」

「ふふ……風の噂では、その方も相当の業を背負いし方と聞きました。この利休の茶席には相応しいかと」

「むう、考えておこう」

「有難うございます」

「よう、お久し振り」

ある日、横溝が信長の元へ現れた。

「またおまえか横溝！ わしの機嫌はまだ治ってはおらん。もう少し謹慎しておれ！」

「そういうなよ。実はある人物を連れて来たんだ。お目通りを許してくれないか？」

「……誰じゃ？」

「いや、信長も会った事のある人物だよ。それじゃ、入ってくれ」

襖の置くから信長より老いた人物が現れた。

「お久しゆうございます、大和国大名、松まつなが永久秀ひさひでにございます。信長様には義昭公の上洛以来ですな」

「なっ……!?!」

「話によると、寺子屋を開き、人材を育てているとか、そこでこの老体の身なれど、お手伝いができないものかとここまで来ました」

「……横溝よ」

「ん〜？」

「こやつがどういう者か分かって連れてきたのだろうか？」

「ん、勿論」

「こやつはたいそうな男よ。將軍を殺し、主君をのっとり、大仏をも焼き払った。天下に名だたる極悪人じゃぞ」

「……はっはっは」

久秀は笑った。

「この横溝殿に出会った時と同じ事を言うのですな」

「いや、見事な城だね」

「横溝殿、と名乗りましたかな？ そなたは信長様の使いで来たのですかな？」

「いや、違うよ。俺の独断で来た」

「……ほう」

「今、岐阜城の方では人材不足を補うために寺子屋を開いて人々を必死に学ばせている最中でな。名だたる武将も参加してるんだ。あなたならよい教師役になれんもんかと思つて来たんだよ」

「わたしに教鞭を取れ、と？ これは酔狂なことですな。この穢れた身で人に物を教える資格など……」

「あんたが、穢れ？ 何を？ 冗談はよしてくれ」

「……わたしは將軍義輝公を殺し……」

「あんた永禄の変の時ずっと大和にいたじゃん。むしろ義輝公を支えてきた身じゃん」

「……わたしは主君の立場を乗っ取り……」

「長慶は病死だろ？ 長男も弟も同じ時期に失つて心労で倒れたんだから。ま、運が悪かったというか因果応報というか……でもお前さんは三好家に忠誠の覚悟を認めた手紙まで書いている。殊勲なことだな」

「……わたしは奈良の大仏を焼き……」

「三好三人衆が大仏殿に立てこもる方が悪いよなあ。それに、その後大仏殿再建のために尽力してるだろ？」

「……」

「他に何か言いたいことは？」

「……横溝殿、と申しましたか？ あなたには何が見えているのですかな？」

「少なくとも信長よりあなたの身の丈は知ってるよ。それだけ」

「……」

「人間、冤罪を墓の中まで持つていくには重過ぎるだろ？ 解決できる事は解決していくように努力すればいいんだよ」

「むう……」

久秀の眼が少しだけうるんできた。

「もう1度、人の為に働いてみないか？」

「……………ははっ、そこまで悟られては、助力しないわけにはいきませんな」

「はいはい。これで一本釣り完了つと」

「つて、事があってね」

「わたしも『渡人』とは『時渡りの人』と聞きましたが、あながち冗談でもなさそうすな」

「ぬう……」

「当代きつての文化人が教鞭を取ってくれるんだ、これほどいい話はないだろう？」

「ええい、分かった！ 久秀、教師役、頼むぞ！ 横溝は此度の働きにより特別に不問にしてやる！」

「サンキュ、信長」

「はっはっは、意外と、信長様も甘いようすな」

「茶化すな久秀！ では早速……」

「た、大変です!!」

城内に悲鳴に近い声が響き渡った。

「信長様、大変です!!」

普段は伝令役をやっている男が、ものすごい勢いで部屋に入ってきた。

「なんじゃ、騒々しい。一体、何があった？ 詳しく説明せい！」

「はっ！ つい数日前、上杉と武田が領土近辺にて一戦交えたようなのですが……」

「上杉と武田が？ まああの二人はしょっちゅう小競り合いを繰り返しているらしいが、それで、何があった？」

「……………全滅です」

「はっ」

「上杉勢の攻撃により、武田騎馬隊1万5千、全滅!! 信玄公も退却しきれず、討ち死にされたとのことです!!」

「な、何じゃとお!!」

その場にいた信長、横溝、久秀が驚愕した。

「馬鹿な!! 武田の騎馬隊が全滅!! 一体どんな打ち出の小槌を使ったのだ!？」

「さあ、詳しい事は分かりません。ただ……」

「ただ、なんじゃ!？」

「死亡した武田兵と馬には、まるで蜂の巣のような無数の鉄砲で打たれた傷があったそうで……」

「……!!」

(蜂に刺されたような無数の弾痕だと……!?)

横溝は震えだした。

「どうした? 横溝?」

「武田勢がやられた仕掛けに、何か覚えがあるのですかな?」

「……ああ、間違いない。上杉が武田を殺ったのは『渡人』の銃。それも……」

「……ガトリングだ」

上杉編①

突如、伝令役から伝えられた武田勢の全滅と信玄公の死亡。

そして横溝が青ざめるほどの銃の正体……。

「間違いない。武田を殺つたのは、ガトリングだ……！」

そこにいた信長と松永久秀も横溝の表情に目付きが鋭くなった。

「がとりんぐ。で、あるか………」

「横溝殿、それは一体どのような銃なのですか？」

「……硯と紙と筆を用意してくれ。あと信長、城内にいる家臣に大至急集まるように言ってくれ」

「ふむ、分かった」

上杉領。越後・春日山城。

本来なら家臣達が一同に集まるこの場合は、今や酒池肉林の地獄絵図と化していた。

「ククク……ひゃーはっはっはっは!!! オラオラ、もつと腰を動かせえ！ 俺様に奉仕しろ！」

男が侍女を犯していた。侍女がもうこれ以上は体がもちませんと懇願しても、

「そんな甘いこと言ってるじゃねーよ！ 孕むまで犯し続けてやるからなあ！」

と、聞く耳を持たない。

酒をがばがばと飲み、女にもがばがばと飲ませ、ただ腰を振り続ける。

その光景を、家臣一同は歯を食いしばりながら見守っている。

死ぬのは怖くない。だがここで口を出しても男が増長するだけだ。

もはや家内の秩序もあつたもんじやない。

——櫻井隆。上杉家に現れた『渡人』であり、先日、武田軍勢1万5千をたつた一人で撃ち殺した男は、毎日、昼夜を問わず女を犯し続けていた。

始めはただの目つきの悪い男としか印象に残っていなかった。そ

の男がある日こう言った。

糞生意気な武田をぶち殺してやる。それが達成できたらおまえら全員俺に従え。

耳を疑うような言葉だった。だが、男が持ち込んだ奇妙な銃が、それを達成してしまった。

武田家は幾度となく戦い続けてきた宿敵であり、ある意味盟友の間柄でもあった。それがあの日、この男の手によって無惨に砕かれてしまった。

信玄公の死亡を伝えられた家臣は、まさか、そんな馬鹿な、と耳を疑った。あれほどまでに強く、あれほどまでに気高い信玄公がこんな外道に殺されてしまうなんて、と。

櫻井の女好きはここに現れた頃からの悪癖であり、もはや春日山城で彼に抱かれていない女性にはほぼいない。

抱かれていないのは、醜女だけであった。
フエミニストが怒るぞ。

喰い足りないと思えば、櫻井は城下に赴き、良さげな女を手当たり次第拉致した。連れて行かないでくれと抵抗した男は櫻井に斬られた。

ある男は叫んだ。謙信様は何故こんな男に従っているのだ!? これが越後の龍とまで謳われた男のすることか!?! と。

櫻井はそんな男も生意気と判断して斬り殺した。

こうして、春日山城は櫻井というたった一人の渡人のものになってしまった。

「おうおまえら、ちゃんと見とけよ。あーそうだ、確かお前らにも妻や娘がいる奴がいたよなあ? 今度ここに連れて来い。俺様が可愛がってやるからよお!!」

「なっ……!?!」

「あー勿論嫌だとは言わせねえよお。俺様は無敵なんだからなあ。クッククク……」

「くっ……貴様、もう勘弁ならん! 越後に巢食う毒蛇め!」

一人の家臣が我慢ならぬとばかりに刀を抜いた。

「死ねえええええっ!!」

男の刀が櫻井に迫る。その刃は、櫻井の体をばっさり引き裂いた。

「……………痛えじゃねえかあ、クソツタレ!」

だが櫻井はまるで何事も、いや、確かに痛みは感じているが、それほど効いた様子もなく、男に迫った。抜き身の刀を持って。

「おまえらも以前ブチキレて試したよなあ!? 俺を手当たり次第に斬りまくってよお!? で、どうなった? 俺は、死んだか!」

「くっ……………」

「死になあ!」

ズバツ! と鈍い音がした。男の首がごろん、と室内に転がった。

「うっ……………」

櫻井は家臣の死んだ光景を見ながら射精した。櫻井は性的サディズムでもあるのだ。武田勢を撃ち殺した時は20回以上? 30回以下? 何回射精したか分からない。

「ひゃーはっはっはっはっは!! 俺様は無敵の櫻井様だぜ。刀も毒も効きはしねえんだあ! 俺を殺す事なんざ、誰もかれも無理なんだよお!!!」

櫻井は血が零れたままの刀を振り回しながら嘲笑った。

(へっへっへ、この戦国時代に飛ばされた時はどうなるかと思ったが、まさか夢にまで見た不死身のチートハーレムを築けるとはなあ。やっぱ神様は俺を見てくれてるんだな!)

幼少時から、櫻井の性癖は歪みまくっていた。母親はSMバーの店長で、父親はSMを受けて喜ぶガチのマゾヒストでその店の常連。そして自分は虐待されていた。

恨み、憎しみ、恐怖、そんな感情がグラグラと煮え立つ中、やがて櫻井は動物殺しの趣味に没頭していった。

初めて勃起したチ○コを突っ込んだのも犬の尻穴だった。そして櫻井は犬猫の肉を食って飢えを凌いでいた。親からはろくに食事を与えられていなかったからだ。

学校にも通わせてもらえなかった。最終学歴は小学校中退。そして櫻井は店の小間使いをさせられた。

オンナの好みは美女がメインだったが、恋はしなかった。あの女を犯したらどんな声で喘ぐのだろう、といった歪んだ感情であり、それは世間一般の恋とはかけ離れていた。

しかし強姦はできなかった。したくても世間が、常識が、大人達が、それを許してくれない。

そのフラストレーションたるや、常人の何十倍に相当しただろうか。

最終的に櫻井は母親を強姦殺人し、父親を刺殺し、リベンジを達成させている。

そして少年院で偶然出会ったのが、俗に言う「なろう小説」だった。作者の自己投影と読み手の願望が露骨に出た、無敵でモテモテな主人公があらゆる敵を蹂躪していく話。櫻井はそれにすっかり心酔してしまった。

いつか自分もその中に入ってやる、異世界に転移してチートハールムを築いて快樂を貪る日々を過ごす、と本気で考えていた。俺こそ、この主人公に相応しいと。

それが遂に報われる時が来た。櫻井はそう思った。

だからこの檻から解き放たれた野獣の所業も、彼にしてみれば神様からの頑張ってきた自分へのご褒美としか思っていなかった。

だからといってこのような行為が許されるわけではない。メタな言い訳をするならば本作は全年齢作品なのだ。成人向けではない。

こいつ一人のせいでUNEIから文句を言われたらどう責任を取るつもりだ？ クソが。

「ちっ興が覚めちまったあ。終わりだ、終わり」

家臣達は櫻井の終わりという言葉にほっ、と胸を撫で下ろした。ようやくこの狂宴が終わるのか、と。

「おい、直江ー！」

「ほっ」

櫻井は直江と呼ばれた一人の女性を呼びつけた。

「出かけるぞ！ 銃を使う。馬車の手筈をしろお！」

「……分かりました。して、どちらに？」

「ふん、噂によれば俺様の暴虐？ つぷりに怒り狂った連中が一向宗とグルになって近辺の寺院に集まってるらしいじゃねえか」

「それで、いかように……？」

「皆殺しだ」

「……！ 皆殺し、でありますか？」

「そうだよお！ 皆殺しだよお！ 寺院の壁にかぎ穴を開けて、一向宗も城下の奴らも撃つて撃つて撃つて撃つて皆殺しにするんだよお！」

「……っ！」

「返事はあ!？」

「分かり……ました……」

「そうだよそれでいいんだよお。お前のことも夜にたつぷり可愛がつてやるからよお。期待して待つてなあ！」

「……………」

直江と呼ばれた女性は、何も言い返せなかった。

一方で、岐阜城。

家臣が集められた中、横溝はサラサラと紙にガトリングを描いていった。

「できたぞ」

「よし、皆で見ようではないか」

信長の命により、一同が紙の元へ寄り、目をやる。

「これが、俺の知るガトリング銃だ。といっても、これはかなり旧式のものなんだがな」

実際、横溝の描いた『ガトリング』はクランクで銃を回し、弾を装填する随分旧式な代物だった。

「正直、相手がどんな形式のガトリングなのかは今のところ分からない。まあこれは「叩き台」と思って考えてくれると助かる」

「ふむ、穴が複数ありますな」

「これは車輪のようすな」

「この取っ手は一体……」

「横に繋がっているのは、これは弾ですか?」

家臣達も興味津々という面持ちで紙を凝視する。

「ガトリングの恐ろしさは何と言つても凄まじい連射力だ。これはクランクと呼ばれる取っ手を回せば勝手に弾が装填され、撃ち続けることができる仕組みだ」

「撃ち続けるとは、具体的にどれほどなのですか?」

光秀が問う。

「そうだなあ、これはかなり旧式のものだから、一分で200発つてとこだな」

「200!?!」

家臣達がざわめき始める。

「こんなもので驚いてたら次の話が聞けないぞ。で、これが手動から自動になって、あーさらに重くなるんだが、まあ時代が移り変わるにつれ重量の問題も解消される。で、だ」

横溝が合間を縫うように茶を一口含む。

「やがてガトリングの難点だった弾詰まりや部品がすぐ破損してしまふという欠点は解消され、後には相手をなぎ倒す鬼畜兵器が誕生したわけだ。

あと射程も凄いぞ。種子島なんて目じゃないくらいだ」

「ぐ、具体的には……?」

「んー、この時代の距離で数えると、最終的には、およそ12町ぐらいかな?」

「12町!?!」

家臣達がまたざわめいた。

「ふむ、横溝殿、つまり、『がとりんぐ』とは、一本だけで百人力の銃ということですか?」

今度は久秀が問うた。

「百人力? 冗談じゃない。……0が一つ少ない!」
「壱千!?!」

(……最終的に一分で4千発弱の弾を発射できるようになることは言わないほうがいいかな?)

「馬鹿な!? たった一人で千人力の鉄砲だ?!」

「そんなものに一体どうやって戦えというのだ!？」

「いや、戦いようがない! もはや足軽も弓兵も鉄砲隊も壁にすらならんぞ!」

「静まれい!!」

信長の一喝が場を静めた。

「お主達、なんたる動揺振りか! まったくもってならん! 織田兵はそこまで軟弱者の集まりか!」

信長の喝に、一同は何も言い返せなかった。

「こういう時にしつかり場を収める。やっぱあんたは最高の大将だよ、なあ」

「ふん、おまえに褒められても嬉しくもなんともないわ!」

「……むむ、確かに動揺はしましたが、これで武田勢が全滅した理由が大体見えてきましたな」

松永久秀が言葉を発した。

「ほう、久秀、お前さんなら分かるか?」

「ええ、信長様。おそらく武田勢は騎馬隊で正面から突撃したのでしよう。何の策もなく、ただ単純に」

「そこへ『がとりんぐ』で蜂の巣になった。まあ当たり前の事じやろな」

「殺し間によろこそ、つてやつね」

「武田自慢の騎馬隊が本領を発揮するのはあくまで平地よ。だが言い換えれば相手からは丸見えだったということじゃ」

「むむ……確かに」と光秀。

「ならば答えは簡単。こちらは息を潜めて待ち、平地ではなく狭い、理想は街道か山道などで待ち伏せる。これしかなかろうて」

今回は付城も何もない。ただ単純な奇襲になる。それでも一步間違えれば全員が奴の『がとりんぐ』の餌食になるのだ。

「光秀、そなたは間者を雇い、上杉領で情報を集めるように指示しろ」

「ははっ！」

「足だ。足が肝心だ。情報を持ち帰るのが遅くなり、奴らの進軍を許せばこちらの勝利への望みは薄くなる」

「信長様、私はいかように」

「久秀か、おまえは予定通り、城下の寺子屋に赴き、築城のいろはでも教えてまいれ。畿内が安定すれば、やがて新しい城も必要になるだろうからな」

「分かりました。ふふ、腕がなりますな」

「とにかく、家臣一同は表向きはいつもの通りの公務に励んでくれ。情報がなければ我々は動きようもないからな」

「ははっ、了解しました！」

「……………」

（よりよつてガトリングか。これは難儀する銃と戦うハメになったもんだぜ。あー、しんどいのは嫌だなあ、俺……）

横溝は城下へ降りながら一人呟いた。また危ない綱渡りをするはめになる。それも今回は今までで一番の。

顔は少々青かった。

「ここだなあ、クツソ生意気な連中が出入りしてるつてのは」

「はい……」

「おいおいテンション低いなあ！ これから面白えもん見せてやるんだからよお！ もっとアゲていこうじゃあねえか、お？」

ヘラヘラと笑いながら、櫻井は昂揚を促す。しかしこれから起こる事が想像出きる家臣の人間にとっては、心中穏やかではなかった。

「けっ！ まあいいさ。さあ頑張つて連中を蜂の巣にしてくれよお、俺のガトリングちゃあん」

櫻井が馬車のガトリングに舌なめずりした。

彼の銃は『GAU-8』。通称『アヴェンジャー』。本来は軍用の武装へりに搭載し、対戦車用として用いる最強火力のガトリングだ。

発射速度は毎分3900発、銃口初速は1,067m/sと超高速で、有効射程距離は1220mといわれており、アメリカ軍が所有す

る航空機用のガトリング砲としては最大級の火力を誇る代物である。当然人間相手にはオーバーキルもいいところで、本来歩兵相手には使わない。

「さあ、つてと……クツクツク」

「全く、謙信様は何をやっておるのか、今こそ決起の時ぞ！」

「そうだそうだ！ 俺たちはもう我慢ならねえ！」

「俺なんか妻を連れ攫われた」

「俺なんて娘をだ。それもーかそこらの愛娘をだぞ！」

「我々は上杉領内で大規模な一向一揆を起こす！ 毘沙門天様が眠っている今、今こそ我々浄土真宗がやらねばならんのだ！」

「オオオオオオオオオオオオッ！！！」

決起集会に参加したものは浄土真宗の坊主に、町人、農民と幅広い。今や民の怒りは爆発寸前だからこそ、これだけの数が集まってしまった。

「さあ、今こそ槍を持って！ 鍬を持って！ 遺憾だが越後の龍に一泡吹かせて……」

「た、大変です！」

「どうした、騒々しい……」

「う、上杉軍がこの寺院を取り囲んでいます！ 中には例の渡人の姿もいます！」

「な、なんだと!? ええい、向こうからやってきたか！ 構わん。どうせ死んでも極楽浄土よ、勇気を出して抵抗するのだ！」

「し、しかし……ぐわあああつ！」

ドドドドドドドドドドドド!! ガガガガガガガガガガ!!

「クツクツクツ……ぐひやひやひやひやひやひやひやひやひやひやひや!!!! 死ぬ死ぬ死ぬえええ！ 一人残らず死んじまええええ!!」

櫻井のアヴェンジャーが本堂に降り注ぐ。この時代、当然寺院は木造である。無数の弾丸なぞ防げるはずもない。

壁が粉々になり、柱は無惨に砕かれ、寺院境内の装飾は全部吹き飛んだ。

「ぐあつ！ ぐあああああつ！」

「た、助け……!」

「ほらほら逃げろ逃げろ逃げろお! 早く逃げないと、蜂の巣だかがー!!」

櫻井は精道から沸き上がるものをしかと感じ取りながらガトリングを乱射した。手を使わないで済むのはまことに楽ではあるが、そういう問題ではない。

結局、本堂にいた集会人全員は櫻井のアヴェンジャーによって皆殺しにされた。寺院内は人々の飛び散った血肉で酷い有様になっていた。

「……今戻りました。生き残っている者は、……一人としていませんでした」

「ああっ!? 当たり前前に決まってるだろお! 俺様は無敵! 銃も無敵! 誰も敵う相手なんかいやしねえんだ! つよ!」

「死体は、いかなさいますしょう? やはり、手厚く葬って……」

「馬鹿かてめえは、こいつらは全員張り付けにして鴉と鷹の餌にでもしちまいな! 全員残らず、手厚く見せしめよ! もう2度とこの領内で悪きなんか起こさないようにな!」

「なんと……」

「言っておくが、反論は認めねえぜ。さあ、春日山城に凱旋だ。ひゃーはっはっはっはっはっはっ!!」

「くっ……」

(あの男には、死ねば仏という言葉もないのか……!?)

家臣の一人は、あまりの怒りと己の無力さに我を忘れそうになったが、もはやどうしようもなかった。

事件の経緯は、石山本願寺にも伝えられていた。

「顕如様、上杉領内の一向宗徒から手紙が届いております。打倒謙信の為に、躍起してほしいとのことですよ」

「……残念ですが、それは出来ませんね。上杉の渡人、あれは地獄から来た鬼です。人では鬼に勝てません」

「では、見捨てるのですか?」

「勿論、それもしません。領内の一向宗に本願寺まで戻るよう檄文を造りましょう。とにかく領内の宗徒を諫めるのです。」

そして、鬼には鬼を当てます。織田軍の横溝殿に任せて、今は身の安全を最優先してほしい、と伝えましょう」

「それで相手が納得するでしょうか？」

「納得してもらわなければ困ります。ましてや織田領内で一揆を起す事だけは避けなくてははいけません」

「はっ、ではそのように」

「……しかし、上杉謙信様は本当に何をやっているのか。幾らなんでも渡人の暴虐振りに目を瞑るとは思えません。」

もしや、謙信様の身に何かあったのでは……。

情報が欲しいところです但我々が動くには限界がありますか……」

(このような事を祈る立場でないことは重々理解しておりますが……、頼みましたよ、横溝殿)

上杉編②

——夜の春日山城。

「へっへっへ……」

櫻井は裸にひん剥いた女子二人を見てニヤニヤと下種な笑いを浮かべていた。

月明かりに照らされ、その素肌は輝いて見える。

一人は、直江と呼んだ女性。そしてもう一人は……、

「俺様もとんだ拾い物をしたもんだぜえ。まさか、あの上杉謙信が絶世の美女だったとはなあ……」

「……」

上杉謙信と呼ばれた者は、確かに女性であつた。年は18、19といったところか。この時代では行き遅れともいえるが……。

「いえ、私は父上とは……」

「なあに、親父がどうかは関係ねえよ。今はおまえが上杉謙信。それでいいだろうお？」

「……」

「さあ今日も朝が来るまで抱かせてもらうぜえ。必ず孕ませてやるからよお。隣の直江ちゃんも一緒になあ」

「っ……っ……」

(毘沙門天様よ、あなたは我らを見捨てたのですか……!?)

翌日の岐阜城下・寺子屋。

「……と、このように、築城とは奥深くも面白いものなのだ……」

「おおおー」

受講していた者たちは皆感嘆した。

「どうだ、わしは単なる助平爺などではないぞ」

松永久秀は寺子屋で築城のイロハを教えるべく教鞭を取っていた。

街の大工関係者が多い。

「今は防御の為に山岳に城を築くことが多い、しかし、しつかりとした土台や堀などを築けば平城でも充分な防御が得られるのだ」

松永は文化人である。築城は勿論、茶道や書道などにも造形が深い。人に教える側とすればこれほどの適材もない。

「信長様は畿内が安定すれば大きな城を築く計画があると聞く。この建築に加われれば大きな功績となる、皆の者精進せよ」

「は、はい！」

「では本日の授業はここまで。皆は今回の内容をしかと復習しておくように」

「よう、久秀さん」

「……横溝殿ではないですか。ちょうどいい、私はこれから利休殿に会いに行こうかと思っています。よければ、横溝殿も一緒にいかがですか？」

「茶の湯かあ、俺はどちらかといえば酒のほうがいいんだがな。いつそ名物に酒を注ぐか？　こう、なみなみと……」

「はっはっは、それは面白い余興ですな。検討しましょう。では、お二人で」

「あ、ああ……せつかくだから行こうか」

（ふふ、横溝殿は、昨晚の「がとりんぐ」のことでやや気が落ち込んでいると見える。茶席でもてなしてみるか）

（……俺、確実に足痺れるな……）

「これはこれは久秀殿、お待ちしておりますぞ」

「やあやあ利休殿、こちらが横溝殿です」

「ほう、この方が業にまみれし短筒を持つ渡人……ほほほ、中々面白い」

「よ、よろしく」

「そう畏まらないでいただきたい。茶の湯は楽しきもの。心にイガを持っていたままでは勿体無いですからなあ」

「……………」

利休の茶席が始まった。部屋は狭いが、一定の道具は揃っている。湯が沸き、茶粉を煎じ、湯を注いでいく。その動作には隙がない。

刀持たせてもこの人は結構いいところまでいくんじゃないか、と横溝は思った。

「今日は茶だけでなく、山で採れた薬草も煎じてみました。お口に合うかと」

「ほほう、では私から……」

久秀が茶を一口含む。

「……美味しい。流石ですな、利休殿。苔生した山岳と穏やかな青空が見えました。登山にはよい日ですな」

「ええ、わたしも試飲しましたが今回は良い茶になりました。自信作かと。さあさあ、横溝殿もどうぞ、一口」

「ああ、では、いただきます……」

横溝は緊張しながら茶を一口飲んだ。

「……苦くて美味しいな」

「そうですか。それでこそわびさびが輝くというものです」

利休の茶席は穏やかな空気に包まれていた。いや、そうでなければ横溝もここまで気を落ち着けて楽しめない。こういうものもいいな、と内心思った。

「さて、今日はひとつ、名物を持ってまいりましたぞ」

久秀が持ち込んだ袋を開ける。

「ほう、長船ですか……!」

「実はこれに般若湯を注いでほしいとの横溝殿の願いでしたな」

「なんと、名物に酒とは……! これは業深き所業ではありませんか……!」

「わたしも少々緊張しておりますぞ、さあ注いでみようではありませんせんか。この名物に、酒を、なみなみと……!」

久秀の手で酒が注がれていく、三人の目が名物に集中する。

「では、私から……」

まずは久秀が酒を一口含む。

「おお……おお……、刻の流れが見えましたぞ……!」

「久秀殿、早く私にも」

「そう慌てなさるな。ささ、利休殿」

続いて利休が酒を一口。

「むむ……むむむ……! 如来像が垣間見えました。何という業であ

りますか……！」

「はっはっは。さあ、最後は横溝殿、どうぞ……」

「お、おう……」

最後に横溝が気合を入れてぐびりと酒を一口飲んだ。

「……ふっふっふ、いいねえ。夜空に輝く満天の星空が見えるぜ。昼なのに、夜空とはこれいかに、なんてな」

「はっはっは。横溝殿もいいますな」

「ふっふっふ、私もまだ興奮が冷め遣りませぬ。いやはや、お互い業の塊のような人生ゆえ、このような余興もまた楽しいものですな」

茶席はいつしか酒席に変わってしまったが、三人は満足していた。

「くっ……！」

その日の深夜のことである。

昼間の楽しい酒席の興奮もどこへやら、横溝の体は激痛でとても眠れる状態ではなかった。

なにもこれが始めてというわけでもない。これで三度目である。しかも決まって深夜だった。

昼間に起きていればとてもまともに動ける状態ではなかっただろう。だが横溝はこの痛みの原因が何であるか、分かっていた。

「クリームゾンめ、俺を苦しめるか……！」

そう、持ち主の精神を蝕み、最後には呪いをもって狂い殺す銃、クリームゾンのせいであることを横溝は知っていた。

なにせ寝室に置いているクリームゾンがまるで横溝を嘲笑うかのようになにに紅く光っているのだから……。

ひよっとしたらこの症状はKOT症候群かもしれないがムササビはいても血清を作る方法を横溝は知らない。しかもこの時代には注射器もない。お手上げである。

「せっかくだが、俺はおまえの思い通りにはならない、ぜ……！」

痛みに耐えながら、歯を食いしばり、横溝はクリームゾンを睨み付ける。

ちなみに渡人の持つ銃は捨ててもすぐに持ち主の元に戻ってくる。

銃とは一蓮托生なのだ。

「ち、くしよ、う……！」

結局、その日は一睡も出来なかった。

しかし、クリムゾンの因果は、横溝にほんのわずかの恩得をもたらすこととなる……。

「よう、信長」

「なんじゃ、横溝か。……お主、顔色が悪いぞ」

「……まあ色々あつてな。それよりこれ、見てくれ」

横溝はホルスターからクリムゾンを抜く。

「ん、なんじゃ、前よりちと形が違うような……」

「クリムゾンが進化した」

「……は？ お主、また何わけのわからぬことを言っておるのじゃ」

「まあそうだろうな。実はクリムゾンにマシンガンモードが追加された」

「ましんがん？」

「そうだ。秒間なんと15連発！ 相手を粉碎する脅威の連射力よ」

「ほう……。確かにそれは凄いな」

（本当は凄いかどうか良く分かんのだが……）

「まあ一戦につき一回が限度だがな。とっておきのタイミングで使うまじょ」

「……まあようするにその短筒が強くなったんじやな。最初からそう言え。お主の言い方はいまいち良く分かん」

「こりゃ失礼。まあ次の上杉戦では期待していてくれ。俺も腹をくくった。必ず敵の渡人を討ち取ってみせる」

「ほう、そこまで言うなら頑張るのじやな。織田軍が蜂の巣になるかどうかはお主の働き次第だということを」

「ああ……」

おそらく、上杉の渡人を倒せば、横溝の体はより一層蝕まれ、痛み
に耐え抜くことになるのだろう。

だが横溝は半ば諦めていた。これが運命なら最後までとことんや

るしかないと決めた。

突き動かされる衝動と最後まで共に。これが悲しくも横溝の出した結論だった。

それから三ヶ月が経った。

間者からの伝令により、越後の上杉領の様子が次第に判明しつつあった。

上杉の渡人は城下の妻や娘を攫い、城にはべらせていること。躍起しようとした一向衆と農民、町民が皆殺しになったこと。城から上杉謙信の説明が何一つないこと等……。

「なんと、上杉領はそのような有様なのか……！」

信長もこれには驚愕し、そして激怒した。上杉謙信といえば誇り高い武将の筈。それがそんな悪鬼を飼って何一つ弁明もなしとは、と。

「俺も鬼畜・陵辱系は大好きだが、ガチの鬼畜はさすがに引くね」

横から横溝がポツリ呟いた。横溝はアダルトゲームにも造詣が深いのだ。フルプライスでIGないゲームやバグだらけのゲーム等は大好物である。

Leafの最高傑作と問われれば迷うことなく『零』と答えるし、他人に面白いゲームを貸してくれと言われれば躊躇いもなくBlack cycの『夢幻廻廊』を貸す。

勿論どちらもまごうことなく名作である。興味がある人は是非プレイしてみよう。

閑話休題。

更に間者は続ける。これだけの所業を犯して謙信様が何一つ動いていないということは、もしや謙信様は既に死亡しているのではないかと。

「ふむ、可能性としてはありえますな」

「大将不在の上杉領ですか。攻め入るには好機ですが、なにせ例の「がとりんぐ」持ちの渡人がいるとなると、難しいですな」

「よし……」

信長が一計をめぐらした。

「間者よ、そちは再び上杉領内に赴き、春日山城の武將を一人でいいから寝返らせよ」

「は……裏切らせるのでありますか?」

「うむ。城がそんな惨状なら、一人ぐらいは裏切るものが出てきてもおかしくはない。そして上杉の渡人はそんな奴には目もくれないし、気付かない」

「成る程……」

「そして奴をなにかと理由を付けて城からおびき出すのじゃ。『がりんぐ』を持って進軍させてな。後は我々は街道に身を隠し、奴を迎え撃つのよ」

「それなら出来れば夜がいいな。夜に火矢を使うのがいいと思うぞ」

横溝が横から口を出す。

「ふむ、夜襲か。我々はあまりしたことがないが、敵は小規模となればいけるかもしれぬな。よし、横溝の案でいこう。間者よ、頼んだぞ」
「ははーっ」

岐阜城がまた慌しくなった。

それから一週間後。

信長は悪い知らせをもらい、急ぎ小木江城に馬を走らせた。弟信興が危篤との知らせをもらったからだ。

横溝は、今日は信長いないのか。と不思議がつっていたが、柴田の言葉でそれを察した。何でも咳が止まらず吐血もしているらしい。

結核かな、横溝はそう思った。だとすればこの時代の医学ではどうしようもない。悲しいが、信興殿もここまでかなと思った。

「ゴホッ! ゴホゴホッ! ガア! ハアハア!!」

「信興! しつかりしろ! 諦めるな。お前の病、必ず治してやる。だから……それまでの辛抱じゃ」

「うっ……父上、どうやら信興は、ゴホッ! ここまでのようです」
「何を言うか! そんな病など儂が、簡単に治してくれるわ!」

「……不出来な弟で、申し訳ありません。ゴホッ! でも父上は大丈夫だ。私などとは違い、どこまでも高みにいける方だ……ゴホッ!」

「そんな、そんな事を言うな。儂一人で高みに上つてなんとする。誰もいない高みなど猿山の大将と同じではないか……」

「父上、……父上が天下を取る姿を見られなくて、申し訳ありま、せん……ゴホッ！　ゴホゴホッ！　ガハッ！　グハッ！」

「信興……」

その後も吐血は止まらず、信興は亡くなった。最期を父に看取ってもらっただけ、まだ幸せだったかもしれない。

……信長は薄情者に見えて、肉親への情は厚い。なにせ幼き頃から親族に命を狙われていた身だ。

肉親同士で争わない、織田が未永く暮らせる道こそが、己にとって本当の天下の在り方だった。だからこそ信興の死は身にこたえた。

岐阜城に戻った後も、信長はずつと沈んだ面持ちだった。何も言うな、一人にしてくれ、越後を取るまでには戻ると、口数も少なくなつた。

男だつて素直に落ち込んでもいいのだ。支えてくれる妻もいるのだから。

上杉編③

それから三ヶ月が経過した。

上杉家からの造反は家中・直江の判断で秘密裏に達成された。

「上杉家家臣が一人。謙信様の養子の一人で山浦景国やまづらかげくにと申します」

「儂が織田信長だ。そしてこいつが、織田家の渡人の、横溝 由貴じゃ」

「横溝だ。ま、よろしくな」

「なんと……」

「ん？ どうかしたのか？」

「あ、いえいえ、上杉の渡人は、その……噂通りの悪鬼なので、一体どんな鬼なのかと心配でしたので……」

「酷い言い草だな。俺はそこまで鬼畜じゃないぞ」

山浦は春日山城の惨状を怒気を含めて話した。まず前提として、上杉謙信は他界したこと。今の謙信は2代目で、養女の銀姫様が行われていること。

「どういうことじゃ……あの謙信が他界して、今の謙信は女子と申すか」

「はい。その通りです。先代の遺言では、自分が死んだ後は後継者争いが行われることを想定した上での抜擢です」

「……俺の時代にも上杉謙信女性説があるが、いやはや、世も分からんもんだね」

「ごほん、話を続けましょう」

現在のの上杉家は、先代の謙信様が一人では可哀想とのことで、家老直江兼続様は時を同じくして冥府のお供を仕っており、その後は娘である梅姫様が直江 愛を名乗り城を切り盛りしているらしい。

「その者も女子と申すか！」

「はい。銀姫様と梅姫様は子供の頃から縁が深く、二人揃えることで大きな支えになればとの兼続様の遺言でございました」

山浦は更に話を続ける。順調にいていた上杉家だったが、渡人・櫻井隆が全てを覆してしまった、と。

銀姫様と梅姫様は每晚櫻井の慰み者にされ、城の秩序もあつたものではなくなつた。もはや彼に同情するものはいない。今すぐにも殺してしまいたいけれどもできない。

藁にも縋る思いで織田を訪ねてきたと山浦は言った。

「お願いします。櫻井を、あの男を殺してください。その為ならこの山浦、死んでも構いません。何卒、何卒……！」

「ふむ、そちよ、おまえは上杉の為に命を落とす覚悟はあるのだな？」

「無論です。同じく家臣の中にも同じ志を持つ者は多数います！」

「ふふふ、それなら手段は簡単だ。クク……」

「あ、信長、また悪巧みを考えてやがるな」

「うむ。だがトドメ役はそちよ。その覚悟はできているのであろうな？」

「ああ、いいぜ。ここまでお膳立てしてもらつてやらなきや男じゃねえな。本当は怖いがな……」

「よし、山浦よ、そちは一度春日山城へ戻れ。そして何としても渡人を城から引きずり出すのだ」

「ははーっ！ この山浦にお任せあれ！」

これで作戦は整つた。

何も知らずに街道を『がとりんぐ』と共にこのこと出てきた渡人に夜襲をかける。

合図と共に、火矢を放ち、馬車を繋ぐ縄は切る。時間を稼ぐために、付き添いの者は渡人に襲い掛かる。

そして全ての事が成しえた時、満を持して横溝が敵の懐に潜り込み、眉間に弾を撃ち込む。これしかない。

「以上が作戦だ。皆は準備しておけ」

「ははっ！」

「では私は一度春日山に帰ります。何としてでも奴を引きずりだしてご覧にいれましょう」

「うむ。期待しておるぞ」

「そーいや横溝、先ほど本当は怖いと申したな……」

「……ん、何だよ。悪いかよ」

「いや、なあに少しぐらい怖い方が慎重に事が進んでよい場合もある。気にするな、ということじゃ」

「なんだよ。今回はやけに優しいじゃないか」

「……織田の繁栄の為にはおまえの力が必要じゃからな。発破をかけたまでよ。その為なら猫でも杓子でも何でも使おう」

「ちつ、分かったよ。存分に働きますって。あの鬼畜野郎の退治は俺に任せな」

——春日山城。

「ククク……今日は誰を抱いてやろうかなあ……?」

「櫻井殿、一つ相談があるのですが」

「ああん?」

口火を切ったのは、やはり山浦だった。

「櫻井殿は天下に向けて動くつもりはないのでありますか?」

「ああつ!? 天下あ!? はー、アホくさ。なんで俺がそんなクツソ面倒くさいことをやらなきゃいけないんだよ! 女だ。俺は女が抱ければどうでもいいんだよお!」

思ったとおりの言葉が返って来る。だがこれは想定内。

「しかし、時代は乱世の世。天下を取らんと動かなければいずれ上杉は滅びますぞ」

「はあつ!? ぬーなわけねえだろうがあ! 俺様は無敵だぜ。あのガトリングさえあれば俺に勝てる奴なんかいねえんだよお!」

「いや、おりますぞ、櫻井殿」

今度は横から直江が口を開いた。

「あああん!」

櫻井は直江の首根っこを捕まえた。

「織田家の渡人、横溝という男です」

「横溝……だとお!」

「ええ。浅井、朝倉との決戦では切り札として活躍し、既に2人の渡人を葬っております。更に外交手腕にも長け、搦め手を用いて石山本願寺を黙らせる事にも成功しました。」

織田家が急速に勢力を拡大できたのも、横溝という渡人の力によるものであることが大きいかと」

直江は徹底して横溝を褒め称える。これは織田家から聞かされた情報をより飛躍させている。

そもそもまともに照準が合わないクリムゾンでは戦で無双などできるはずもない。だから横溝の活躍は対渡人と対外交渉によるところが大きい。

まあそれでも充分過ぎる成果だし、よくもまあ信長は無礼千万な男をちゃんと飼っているものだと思っただろうが。

しかし、この挑発めいた説明は、勝手気ままにやり放題をしてきた櫻井に十分な効果があった。

「横溝……横溝……横溝……横溝……。気いゝにいらねえなあ。何が外交だ!? 何が渡人を殺しただあ!? ふっざけんなって! それが渡人のやることかよお!」

櫻井はどんつ、と直江を壁に叩きつけた。

「くっ……」

「渡人の仕事はよお! クツソ生意気な奴を殺しまくって、女を犯しまくることだろうがよお! なくに調子ぶっちゃってんの。あーくそ!」

櫻井はその場で地団駄を踏んだ。思い通りにならない奴と思った通りにならない事は大嫌いなのだ。

所詮好き放題して頭のネジがとうに抜け落ちた男である。そんな奴は生かしておかないという考えに至るのも当然だろう。

「上等くじや、ねえか! そんなクツソ生意気な野郎、俺様がじきじきに撃ち殺してやるよお! ついでに織田家も滅ぼしてやろうじやねえか!

おい直江え! 出陣の準備をしろ! あー、だが大軍引き連れて行くのは俺の性に合わねえ、数人俺様のお世話をしてくれる奴だけではないからなあ!」

「出陣……でございませうか」

「あーそうだ! 早く準備をしやがれ! それともまた俺様に犯され

てえかあ!？」

「……分かり、ました」

櫻井は知らない。春日山城でもはや櫻井の味方をしてくれる者など誰一人いないことを。

ならば予定通り織田家の罠にかかり因果応報、死んでもらうことにしよう、直江は心の中で少しだけ抵抗した。

(至急織田家に伝えよ。渡人がまんまと動く)

(はっ、急ぎ伝えます!)

「ククク……ケケケツケツケツケ、それじゃ、しゅっぱ〜っ」

櫻井の進軍が始まろうとしていた。

「頼みます。櫻井殿。家臣一同、吉報をお待ちしております」

(……ふふ、吉報を待っている、か。間違つてはいないがな)

「おうよ、良かったなあ、直江。謙信ちゃんも、しばらく犯されずに済んでよお!」

「あ、いえ、それは……」

「まあいいや。織田家なんざ勝負にならねえつてところを見せてやるかなあ!」

櫻井は特注の馬車に乗り、城下の怯えた人々を尻目に城の外へと出て行った。

なにセガトリングは非常に重いのだ。木造では底が簡単に抜けてしまうので、底は鉄板敷きになっている。

当然馬車は重く、持ち運びも容易ではないので、馬車に繋いだ馬は7頭にも及ぶ。

付き添いは山浦他数名のみで、基本櫻井の下の世話から飯を食べさせるといった仕事を担当する。

「皆も櫻井殿の事を頼むぞ。苦しい仕事だが、何とか持ちこたえてくれ」

「はっ、お任せを!」

櫻井は知らない。彼らは2度と上杉領内には戻ってこれない事を。

(……頼んだぞ、皆の者)

最後の悪鬼がいなくなったことで、人々は一時的な平和を噛み締め

ることとなった。

「ここから先は山道になります。道も険しいので、くれぐれも落ちませんよう」

「へっ、俺様がそんな馬鹿やらかすかよお！」

「ですが、なにせ『がとりんぐ』は重いですので、馬には厳しい道になるかと」

「途中に宿がありますが、このままでは夜になってしまいますが、よろしいですか？」

「あーあーいちいち男と話すのは面倒くせえや。はいはい、よろしいですよ。だからさっさと行け」

「はっ、承知しました」

ここまででは予定通りである。櫻井は地理に疎い。ここから宿など朝にならないければ辿り着けない距離であることすら知らない。

知っているのは周りの家臣達だけである。

つまりこの夜が、彼らの『死場』だ。

——数刻後。

「暗くなってきましたな。全員、松明を持って」

「はっ！」

「おいおい、まだ着かねえのかよお!？」

「あともう少しです。辛抱してください」

(……くそっ、これなら女の一人か二人連れてくるんだっただぜ。野郎ばかりに先導されるなんて息が詰まらあな)

「あーイライラしてきた。早く俺に横溝とかいうクソ野郎を殺させろ……!」 早く俺に織田家を滅ぼさせろ……!」

「……………」

(……見えたな、合図の松明だ)

(全員、矢先に油を塗れ。速度だ。速度が肝心だ。火をつけるのに遅れたら『がとりんぐ』の餌食になると思え)

(しかし、本願寺も律儀ですな。矢銭5千貫を差し入れてくれるとは)
(それだけあの渡人が憎かったのだろうよ。何にせよ、使わせてもら

おうではないか)

(横溝殿、大丈夫ですか)

(ああ、さつき立ちションしたから小便漏らすことはなくなった)

(全員、位置に付いたな。やるぞ……!)

「おいおい、まくあだ着かないつてのかよ!?!」

「いえいえ、あともう少しで……」

家臣が言葉を言い終えるより先、山道の両脇から火矢が放たれた。

勿論これは直接当てるともりではない。渡人・櫻井の周りを照らす

ための『光』だ。

「な、何事だ!?!」(棒読み)

「わ、分かりません。山賊の類とは思えませんが」(棒読み)

「おいおいおいおい、なんだってんだこれはよお!」

「旗を上げろお!」

夜の山道、星と月と火がきらめく中、織田家の旗がたなびいた。

「あ、あれは木瓜紋……! 織田家です! 織田家の夜襲です!」

「織田家だあ!?!」

「はっ! わざわざそっちからやられに来たつてのかよ馬鹿が! 俺様のアヴェンジャーで一人残らず……」

「死ねええええっ!」

言い終わるより早く、山浦の刀が櫻井の喉元を貫いた。

「ぐははっ……がががgg……!」

「櫻井殿、お命頂戴!」

「最後の毒蛇め。ここが貴様の墓場だと思え!」

さらに刀が連続して櫻井の全身に突き刺さる。これはあくまで時間稼ぎだ。仕留められるとは思っていない。

「そらっ!」

山浦が時間を稼ぐ間に、家臣の一人が馬に繋がれた縄を切り裂いた。馬は悲鳴を上げながら何処ぞへと走っていった。

「くっぞ、てめえら、裏切りやがったなああっ!」

傷が塞がった櫻井怒りのガトリング掃射が家臣一同に突き刺さる。

「ぐああつあ……！」

「上杉……万歳……！」

「けっ、ゴミが、どいつもこいつも役に立たねえうえにすぐたて突きやがる！ 次は織田だ！ てめえらも皆殺しだ！」

「くるぞー！ 全員、伏せろ！」

ドドドドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ!!

「うわああああつー！」

「ひいひいひいっ！」

合図が迅速だったため、織田軍に被害はなかった。数秒遅れていたら蜂の巣にされていたことだろう。

そして、この的確な判断が織田軍に幸運をもたらす。

山道の上に生えていた木々の根っこ付近を打ち抜いてしまったせいか、土砂崩れが続き続々と木と土砂が山道側に倒れてきてしまったのだ。

櫻井、痛恨……！

「うわっ、てめえ、くそっ、たかが木だろうが、どけどけ、オラァー！」

櫻井はガトリングで木々を破碎させようと弾丸をバラ撒く。しかし木はともかく土砂は銃では撃ち抜けない。そしてこの好機を織田軍は見逃さなかった。

「第二射、放てえー！」

火矢が飛ぶ。飛ぶ。飛ぶ。鉄砲ではなく、火矢が飛ぶ。

なにせ此度の戦は夜戦だ。火の灯りだけが頼りになる。そして周りを火で囲んでしまえば、向こうは見通しが利かない。

『がとりんぐ』は確かに強力なのだろう。こちらを殲滅する程に。だが、それを扱う男は、戦においてズブの素人である。そしてただのイカレである。

「そして『がとりんぐ』では、火は消せない。信長様が言っておられた」
『だから言ったであろう、光秀。戦は頭を使った方が勝つと』

「くそっ、熱っ！ ああああああ！ イライラするぜえええ！ なんでええ俺がごんな目にあわなぎや、いげねえんだよおおおっ!!」

それが因果応報というものである。調子乗りすぎた結果である。

頃合よし。

「横溝殿お！」

「おうよおっ！」

「なにいつ!? 横溝だとおっ! どうこだあ!? どこに、いやがるんだあっ!?!」

横溝はジャンプ一番、火の中へ飛び立っていった。その位置、アヴェンジャーの真上。ガトリングの『死角』……!」

ドガン!

もはや火でボロボロの荷台の上に、横溝は降り立った。完璧な着陸である。

やはり、横溝には『渡人』を相手にしたときのみ幸運がもたらされるような『何か』があるようだ。

「よお、エロ野郎、せつかくだから来てやったぜ」

「げっ!?!」

「……クリムゾン・マシンガンモード。一斉掃射!」

横溝は櫻井の股間目掛けて秒間15連射を行った。惜しい。高橋名人より1発少ない。

……ガガガガガガガガガガガガガッ!

「うとううぎやああああああつ!!! 俺の金玉がああああああち○コがああああああ!! あぎやあああああひいいいいいつ!」

一時的に去勢され、足をバタバタさせながら悶え苦しむ櫻井。

まあそのうち再生するだろうが、これは精神的にもかなりきついダメージと言えるだろう。

「これは前戯だ。本命は、こっち」

横溝はクリムゾンを構え直した。

「あばよ、エロ野郎」

ズドンッ!

櫻井の眉間にクリムゾンの弾丸が突き刺さった。こうなればいつものパターンである。櫻井の体は次第に崩れだした。

「あ、あれ……なんだよお……なんで俺の体が崩れていくんだよお……? 俺様は無敵だぞ。チートハーレムなんだぞお……ああ

ああああ……………あ」

崩れ始めた体はもう止まらなかつた。櫻井の体も、衣服も、全て崩れ、後には何もなくなっていた。

アヴェンジャーは土くれになつていた。

その光景を高台から見ている織田軍は歓声を上げた。我々は勝つたのだ。あの千人力と言われた難攻不落と思えた鉄砲を相手に。

「……………まったく愚かな奴だ。パツチなし戦極姫あたりから出直してきな……………うっ！」

ああそうだ、渡人を殺した後はこれが待っているんだつた……………。横溝は忘れてくても忘れられない罰ゲームを実感した。

全身の血液が沸騰したかのように煮え上がり、血管と神経は剥き出しの状態で全身を覆う。

まさに感度3000倍！ 衣服が触れただけでもイって……………、ではなく、激痛が走る。

思わず脱いで全裸になりたいところだが戦国のTPOがそれを許さない。

「ああっ……………うがあっ……………っ……………が……………あっ……………ぎぎ……………うああっ……………んぐっ……………い……………あ……………っ……………あああっ……………ぐはっ！」

「横溝殿、大丈夫ですか!？」

降りてきた光秀が肩を貸す。だが脳と皮膚がはち切れそうなほどの激痛だ。肩を貸すのもやめてほしいがやめてくれとも言えない。

(くっ、頭の中が真っ白になりそうだ。目もチカチカする……………痛すぎで感覚がなくなっていくようだぜ……………!)

結局、横溝が一番近い宿まで戻って休ませてもらうことになった。織田軍も泊まったためあつという間に大所帯である。

上杉編④

そして翌日、光秀と滝川は疲れた体を引きずるように春日山城に赴き、事の全てを伝えた。家臣達は泣いていた。無論、上杉謙信も。

早速城下に櫻井戦死の報を知らせる木札が立てられた。同時に捕らえられた女性達は解放するよう伝えられた。人々は皆歓声に沸いた。

そして謙信は、全てのケジメを付ける為、城下の者を集めるようお触れを出した。人々はなんだなんだとすぐに集まった。

まず始めに、謙信は女の身でありながら2代目上杉謙信であることを皆に伝えた。民衆は驚いた。

そして次に、春日山を苦しめていた悪鬼・櫻井は織田の手で葬られたことを改めて伝えた。民衆は2度目の大歓声を上げた。

なおも謙信の言葉は続く。父である上杉謙信は病で急死しており、養女である自分が2代目を継いだ事。それを皆に伝えられなかった事を深く謝罪した。

しかし自分の力不足により民には多大な迷惑を掛けた事を続けて謝罪した。

次に自分は第一線を退き、今後の上杉家は養子である景勝・景虎兄様の二人で二重政策を行うつもりである事。

越後は今後織田の領地となるが領民には決して不自由な暮らしをさせないことを固く誓った。

「……………」
領民はぼかんとしていた。予想外の事が続いて、頭の整理がついていってないようだった。

(……………)これでいい。民はわたしを糾弾するだろうがそれも身から出た錆……。それを素直に受け入れ、表舞台から退けばよい。

今日をもって上杉謙信は死んだ。後は剃毛して尼となり、織田家に下ればいいのだ。父上。申し訳ありません。やはりわたしでは荷が……………)

「なんだ、そんなことだったのかい」

「おかしいなー、と思つてたら先代はもう死んでたつてことかい」
「水臭いぜ謙信様。どうせなら早く言つてくれればいいのに。そうしたら墓に献花でもしに行つたつてのにさ」
「えっ……」

謙信は驚いた。

「あんただつて色々辛かつただろ？　なのに一人で抱え込むような真似して、そんなのわたしたちが許さないよ」

「男とか女とか関係ありませんや。あんたは誰が何と言おうと上杉謙信様なんだ。もつと自信持つていいんだぜ」

「そうだそうだ。悪いのは全部あの畜生なんだからよ。それが死んだのならこれほど嬉しいことはねえ。今日は酒で乾杯だな」

「あんたはただ飲みみたいだけでしようが」

予想外の反応である。謙信はてつきり自分に言いたい事の一つでもあると思つていたのだが、まさか受け入れてもらえるとは。

「あ、あの、わたしは……」

「いいんだよ。そりや言いたい事の一つや二つあるかもしれないが、それを口に出すのは野暮つてもんでしようよ」

「謙信様も女なんだ。今度は女の幸せでも見つけてみちやどうだい」

「そうだな、例えば俺の嫁に……」

「ちよつとあんた、あたしじゃ不足だつてのかい!？」

「ひいい、冗談だよ」

民衆はがははと笑つた。謙信は必死に涙を堪えた。それを静かに見つめていた人物がいた。直江 愛だつた。

（謙信様。今日あなたは、ようやく上杉謙信となりましたね……）

その表情は、どこか嬉しそうだった。

それから数週間が経過し、織田と上杉による合同事後処理がひと段落したところ、謙信と直江は岐阜城に呼ばれることになった。

（謙信様、どうかなさいましたか？）

（直江か、私は思ったのだ。おそらくわたしは二度と越後の地を踏むことは許されないだろうとな）

(そんな……民は謙信様を許したではないですか)

(人の心とはそこまで甘いものではないよ。時間が経てば種火は燃え上がり、はらわたの一つでも煮えくり返るものだ)

(謙信様……)

(だがわたしは悔いはない。わたしでは無理だったが、兄様達と織田の者であれば民が穏やかな日々を過ごせる地になるだろう。わたしの役目は終わったのだ)

(そう、でしょうか……)

(でもな、愛が付いてきてくれればわたしは嬉しい。これからも公私共々よろしく頼む)

(……。はい。分かりました。銀姫様)

(ふふふ、頼むぞ、梅よ……)

「始めまして。父の遺言で2代目を努めさせていただいていた、上杉謙信と申します。銀とお呼びください」

「同じく、父の遺言で家老の座を努めさせていただいていた、直江愛と申します。梅とお呼びください」

「うむ。わしが織田信長である」

(ほう、あれが上杉謙信か……)

(何とも絶世の美女ではないか……)

(……ふん、家臣達が色気付いておるわ。まあ、気持ちは分からんでもないがの)

「此度は上杉に巢食う悪鬼を祓っていただき感謝の次第もございませぬ。本件を持ちまして、越後は織田の傘下の末席に入れていただければこれ以上の喜びはありません」

「離れ小島の佐渡からはよい金が出ることで有名です。信長様も気に入っていただけるか」と

「ほう、金で、あるか……。では越後のついでに有難く貰っておこう。もっとも、今は越後にどの武将を派遣するかはまだ決めておらんかの」

「ここにきて織田家の武将不足が目に見えてきた。畿内の事を考え

れば、光秀は論外。秀吉も手元に置いておきたい。

佐久間という手もあるがそれでは筆頭家老の座を降ろさざるをえなくなる。久秀は大和の統治で手一杯だし、勝家もそういうタマじやない。

(……仕方ない。滝川あたりに行ってもらうか)

「殿、差し出がましい事なのですが……」

「ん、なんじゃ光秀」

「城下の寺子屋で教鞭を取っていたところ、それなりに優秀な人材が3名ほどいました。彼らなら政務の一部を任せてもよろしいかと」

「ほう、光秀、お前の眼に適う者か？」

「はい。後でお目通りを許してはもらえませんか？」

「む、分かった。ではその者に異例の立身出世を許そうではないか」

「有難うございます」

(人材を育てる、か……。渡りに船か、はたまた泥舟か、今は分からんがそういう者が芽吹くとわしも嬉しいがな。と、なると……)

「あー、こほん。ところで謙信と愛よ、そなたらの処遇についてじゃが……」

「殿、この二人を是非わが嫁に!」

「こら、一気食いとは無礼じゃぞ! わしにも一口よござんか!」

「いやいや、殿、是非私に!」

「やかましいわ貴様ら! いい年した男が猿のように色気付くでないわ!」

(しかし、改めて考えて、どうするか……。市の件もあるし、もう政略結婚の類はうんざりじゃわい。うーむ……。あ、いるではないか。丁度いい男が!)

「おい、横溝はどうした?」

「横溝殿、でありますか? たしか、昨日の夜は寝付けなかったのので下の階で眠っているらしいですが……」

「今すぐ叩き起こしてここに連れて来い!」

「は、はあ……」

「呼んだか、信長?」

まだ眠いのか、目元を擦りながら横溝が部屋に入ってきた。

「おう、よく来たな。今この娘達をどうするか考えていたところなんじゃが……」

「ふーん、で？」

「銀と梅、此度の渡人を屠った褒美として貴様にくれてやる。好きなようにせい」

「はあっ!？」

人殺しを頑張ったら嫁が二人も付いてきた件について。

「何でだよ。何で俺なんだよ。信長、おまえが貰えばいい話だろ。子孫繁栄は戦国武将の慣わしだろうに。そこらじゅうで子供作ってるだろうが」

「いやあわしも最初はそう考えたんじやがのう。たまには貴様にも飴玉をくれてやらんと謀反を起こすかもしれんからのう。いやあわしも優しいのう」

(うわあ、滅茶苦茶からかってやがる……!)

「ほう、さては、お主、ひよつとして……女を抱いた事がないな？」

「いきなり何をいい出すやら……。あるよ。ススキノのソープで2回、

テニス部時代に後輩と1回……」

「ススキノ？ なんじや、夜鷹にでも行ったか？」

なお夜鷹は江戸時代の造語なのだが笑って許していただきたい。他にいい表現が思いつかなかったんです。

「違うよ。札幌の歓楽街だよ」

「さっぽろ？ 何処じやそこは」

「今でいう、蝦夷だよ」

「蝦夷お!？」

これには家臣達も大騒ぎ。

「何じや、お前さんの時代は、蝦夷がそこまで栄えておるのか？ あんな僻地に？」

「そっだよ」

「むむむ……時代とは変わるものじやのう……つと、話がそれたな。とにかく、貰っておけ。嫌だと思ったらまた首を斬り落とす」

「ふん、そうだったら暴れん坊天狗のように、首がもげてても動いてみせるわ」

「照れるな照れるな。いいから、わしの餞別じゃぞ。潔く受け取るがよい」

「勘弁してくれよ。それやったらただの同人誌になっちまう……」

「二人は、異論ないな」

「……わたしは信長様のお考えに異を唱える立場にありません」

「……わたしも同じく。この方に着いて行けというのならそれに応じましょう」

「そうかそうか。それは良かった。横溝、よかったな。結婚するのなら早めに言えよ。引き出物を考えておくからな。がっはっは」

「……(男・横溝由貴。今度こそ本気で謀反を考えたくなったんだがどうしよう。)」

で。

「結局こうなるわけね……」

「不束者ですが、よろしく願います」

「これでも女の嗜みは覚えておりますのでご安心を」

夜の横溝宅。二人の姫が深々と頭を下げていた。

「……あのさあ、先に言っておくが、俺はお前達と結婚するつもりはないから」

「ええ、構いませんよ」

「私達は形だけは信長様の命に従っただけですが、あなたであれば異論はありません」

「それとも……わたし達のように穢れきった女では不足ですか？」

「俺は穢れとかそういうのは気にしないよ。ますます優しくしたりして。まあ、二人の事情は一応分かっているからな」

「まあ、そうですか、横溝殿はとても優しい方なのですね」

「本当は、あの時信長様に、くれてやると言った時、顔が綻んでましたよね、銀姫様」

「こ、こら梅、それは言うな！」

「まあそれに気付いたのはわたしぐらいなものですけど……ふふ」
これ以上惚気話を聞いてると頭がおかしくなりそうだなと横溝は思った。

確かに二人は美女だ。それを貰った自分は果報者なのだろう。しかしクリムゾンの呪いがそれを許さない。どうせそう長くない身なのだ。

だから素直に喜べなかった。ゲームでもアニメでもなく、生身の女性に惚れられるのがこんなにごつ恥ずかしいとは思わなかった。

(どうすればいいんだろうね、俺……どう言えばいいんだろうね、俺……)

「な、なあ梅よ、さつきから横溝殿が何も話さないのだが、わたしたちは気に触ることをしたのだろうか？」

「いいえ、銀姫様。照れているのですよ。顔を見れば分かります」
「んぐっ……おまえらまで俺をからかうか」

横溝は顔をポリポリと搔いた。二人の姫君はニコニコと笑っていた。

「だが、気がかりなのはわたしの腹だ。ひよっとしたらもうあの悪鬼の子を孕んでいるかもしれない」

「その時は、素直に産みましょう。この方なら、それも祝福してくれるでしょうし」

「あ、ああ。そうだな」

「……………」

「……………」

「……………」

「ぶちっ。」

とうとう間が持たなくなった横溝が立ち上がった。

「……………あーもう、誰が信長の思い通りになってたまるか！ 俺は寝る！ 朝まで寝てやるからな！」

横溝は布団に潜り込んでしまった。

「あら、意外な方。」

「純情なのか甲斐性なしなのか、本当に変わった方なのですな。ふふ

……」

「ふむ、ではわたしは横溝殿の左側で寝るとしよう」

「ではわたしは右側で。銀姫様とで挟み込むとしましょうか」

「くー……くー……」

「すう……すう……」

(眠れねええええええええええつ!!)

その日の夜は少し、いや、だいぶ長かった……。

足利編①

「ん……」

朝である。まごうことなき朝である。それでいて実に快晴な朝である。

横溝は寝不足の目を擦りながら周囲を見渡す。直江はまだ夢見心地というほど熟睡しているが、謙信の姿はない。

トントン……トントン……

台所から包丁の快適な音が聞こえる。

(そういや、そろそろ大根を片付けてしまわないと腐ると思ってたんだがな……)

重たい体を起こし、台所へ向かう。

そこには謙信の姿があった。

「……おはよう」

「あ、おはようございます、横溝殿。あ、あああつ、台所に入ってきてはなりません。ここは女のいる場所です」

「……………」

(こいつ、完全に新婚気取りでいやがる……)

昨日、予期せぬ出来事が増えた家人二人。それも片方は2代目上杉謙信で女性。もう片方は家老の直江愛でこちらも女性。

そんな見目麗しき女性二人を信長の気まぐれで褒美として貰ってしまったのだ。横溝の意思とは無関係に。

かといって、やったー両手に華だひゃっほーい、などと浮かれる気はさらさららない。

真紅の銃・クリムゾンがそれを許さないのは分かっていたからだ。

どうせ奴は呪いで俺を苦しめるに決まっている。持ち上げてから落とせば威力は倍だ。できれば甲斐性なしに徹したい。

「もうすぐご飯が炊けますが、この米でよろしかったのでしょうか?」

「玄米がどうかしたか?」

「いえ、わたしはお寺出身なので玄米の存在は知っていましたし何度も食べていますから」

「じゃあいい。炊けたらそのまま盛ってくれ。三人分な」

「はい、分かりました」

「こら、直江、起きないか」

「ん……むむ……ふわあ……あ、ああ、す、すいません、横溝殿、私、朝は弱いのです」

「お前たちのせいで急遽布団を二人分用意するはめになったんだぞ。ちやつちやと起きて布団を畳め」

「ふあい……わ、わかりましたあ……」

頭を揺らしながら、直江が起きる。元は謙信とは幼い頃からの友達であり、時代が時代なら習わしによって梅姫として嫁ぐ筈だったが、今はこの家の一人。英語で言うルームメイト。

決して愛人ではない。多分。

(信長め、いらん事しやがって……)

その後、井戸水で顔を洗い、髪をとかし、朝日に向かってのびをして、体を整えたところで謙信に呼ばれた。

居間には既に配膳の準備が整っていた。

お膳には玄米ご飯と大根の味噌汁。それと副菜としてこんにやく、くわい、タケノコを醤油で煮詰めた横溝の特製品である。

「いただきます」

「いただきます」

横溝は箸でご飯を口に運ぶ。硬すぎず柔らかすぎず適度なご飯であった。流石自ら台所に立っただけのことではあって、女性の嗜みはそれなりに覚えているようだ。

「横溝殿はいつもこのような質素な物を食べていらっしやるのですか？」

「俺は大名じゃないんだ。給金だつて大したことない。だから贅沢をする気はない。ま、信長にとっては最高の駒だろうがな」

「はあ……」

「だが、せっかくだから二人が来た祝いはしなければな。後で肉屋に鳥を買いに行かせるが、いいな」

「はい、勿論です」

「場所は後で二人に伝える。頼むぞ」

「はいっ！」

そう言い終わると、味噌汁の中の煮えた大根を口に含む。あいにくこの時代、味噌汁にはダシがない。横溝は味噌を作る際に意識して昆布を削ったものを混ぜている。

(……なんか信長の事を口に出したらやっぱむかついてきた。後で岐阜城に行つて一言ぐらいは言つてきてやる)

「俺は準備ができ次第岐阜城に行つてくる。後の事は任せる」

「はい、分かりました」

「信長、おはようさん」

「おお横溝か。……何やら眠りが浅そうな顔をしておるな。で、どうじゃ？ 昨日の夜は？」

「……いつも通りでした」
ぺしっ

信長に頭をはたかれた。

「阿呆め、儂に嘘をつくところくなことにならんど。ほれほれ、素直に言わんか」

「………長い夜だった」

嘘は言っていない。

「おお、そうかそうか！ お主もやることはやったか！ めでたいのう、引き出物は何がいいかのう……」

「………」

やっぱりこの場でクリムゾンで撃ち殺してやろうかと横溝は思った。

「それにのう、同時にあの二人を守るためでもあるのだぞ」
「………は？」

「横溝よ、何故儂が帰蝶を正室として迎えたか分かるか？」

「そんなもの武家の習わしだろう」

「……阿呆め。帰蝶はな、儂の一番の理解者だからじゃよ」

なんだ、いい年した親父の惚気話でも聞かされるのか、それなら御免だぞ、と言いかける前に信長は話を続けた。

「この乱世の時代、武士の妻とは因果なものよ。子を作らねばならぬ、いつ死ぬとも分からぬ夫を支えねばならぬ、地獄へ寄り添わねばならぬ、やる事は山積みじゃ」

「ふうん……」

「じゃがな、例え地獄の閻魔を前にしても、私の愛した夫は天道に恥じる行為は一つもしていない、そう答えねばならぬ。その覚悟がある者だけが武士の妻となれるのじゃ」

「あんたじゃ地獄の閻魔も素足で逃げ出すと思うがねえ……」

「褒めてくれるな。戦に出る時も笑顔で送り出し、戻ってきてても笑顔で迎え入れる。例え心中は不安でたまらなくても、な。帰蝶はな、それだけの肝が据わった女じゃよ。儂には勿体ない程にな」

「……やっぱり惚気話じゃないか」

「話は最後まで聞け。対して、謙信と直江はどうじゃ？ 少なくともその資質はあるまい。」

しかも渡人にやりたい放題させていた責任を取れずに自刃して果てることも出来ずにお主の家に転がり込んだ。もはやあやつらは、越後に戻ること適わんじやろう」

「……………む」

「じゃから、お主が居場所を作ってやれ。そのくらいの気概なくして、何が男じゃ。渡人じゃ」

信長からは年長者特有の説教臭さはある。だが不思議と悪い気はしなかった。天下を取らんと動いている筈の男が、ただの駒を心配している。背中がむずがゆくなる思いだ。

(……ちっ、言いたいことの一つや二つかましてやろうかと思っただが、クリムゾンの照準のように外してしまったか。流星は、織田信長、つてことか……)

「幸せにしろ、とは言わん。せめて居場所を作れ、それぐらいならお主でもできるじやろう？」

「あーもう分かったよ。いつ朽ち果てるか分からん身だが、それなり

に頑張ってみるよ」

「そうじゃ。それでいい。大切にしていってやれ。で、話は戻るが引き出物は何がいいかのう?」

「……………」

やっぱりからかわれるのだった。

(選択肢は『はい』か『イエス』って辛いなあ……)

「おや、横溝殿ではありませんか」

「あ、松永殿。こんちわ」

そろそろ家に戻ろうかと思っていたが、そこで松永久秀に出会った。

「私もそろそろ一旦大和へ帰ろうかと思いましたが、ここで会えるのは僥倖、といったところですか」

「そんなに大げさなことでもないだろう」

「ふふ、この久秀、横溝殿には多少たりとも恩ができてしまいましたかな。年を取るとどうにも別れが辛くなるのですよ」

「そういうもんかね……」

「ところで横溝殿、越後から上杉謙信と直江愛という、見目麗しき女性を引き入れたと聞きましたが、夜の具合はどうですか? よければ黄素妙論をお貸ししますが」

「いらないよー!」

やれやれ、今日は信長に続き久秀殿にも茶化されるのか、と横溝は頭痛がしそうな頭を必死に抑えた。

「ですが、同時にあのお二方を守る事にもなりますぞ」

「え……」

「越後は織田家の者と景虎・景勝両名の協議制となりましたが、未だ油断は出来ませぬ。どちらかが、と争ってもおかしくはありません。例え織田の監視があるとしてもです。

関係が悪化すれば上杉側は謙信・直江両名を強引に持ち出して責任を押し付ける可能性とて充分にありまする」

「……………」

信長と同じような事を言うんだな、と横溝は思った。

確かに大名同士、考えは似ているのかもしれない。横溝は政治は分からないからこそ、余計に耳にくる。

「そうなれば行きつく先は、原因不明の病という建前で謀殺されるのが道理。それは横溝殿とて本意ではありませんまい」

「ああ、確かに、な……」

「だから今は二人を守る術は、二人を政から遠ざけるのが一番かと。普通に女性として愛してあげればいいのではないかと、まあ大きなお世話かもしれませんが」

「忠告は感謝するよ。俺のできる範囲で、二人は守ってやるさ」

「それでいいかと。ではこれにて失礼。良ければいずれ大和にもお尋ねください。平蜘蛛でおもてなししますぞ」

「……………」

(年の功ってやつかね……)

横溝は松永の背中を目で追いながら、心の中で、有難う、と一言呟いた。

その後も横溝は岐阜城内にて様々な武将に茶化されたり進言されたりと同じ言葉を繰り返し聞いた。

「……………」

二人は武将であるのか、それともただの女性に過ぎないのか。それは、今はまだ分からない。

あれこれと考えながら横溝は帰路に着いた。

見慣れた家の前には、上杉謙信と直江愛が台八車に大量の食材を上げておろおろと困っていた。

「……………」

「ああ横溝殿、お帰りなさいませ」

「これは何だ？ 俺は鶏を買ってくればいいと言った筈だぞ」

そう、台八車の上には鶏に魚に野菜に惣菜、あらゆる食材がでんと乗せられていた。

「あ、いや……………」

「実は……」

お使いに出た二人は、周囲の視線が気になるほどの別嬪さんだった。男なら誰もが振り向くほどの。

(……なあ梅よ、わたしたち、何か見られてないか?)

(仕方ありません謙信様。この街ではわたし達二人は新参。見慣れぬ者を警戒するのは当然です)

(そ、そうか……。ど、どうしようか)

(堂々と歩きましょう。下手に声をかければ警戒されるかもしれません)

それを見ていた町人達。

「はえ、なんだあの別嬪さんは」

「着ている着物も上等な代物だよな。一体何処から来たお嬢さんなんだ?」

「へっへっへ、俺、知ってるぜ」

「何だって!? おい、詳しく聞かせろ!」

「実はな、昨日の夕方、横溝の旦那が大急ぎで布団を二つ買いに行つて戻ってくるのを俺は見たのよ」

「え、じゃあ……」

「俺は気になってこつそり後をつけてみたらな、あの別嬪さん達が旦那の家に入っていくところをしかと見たのよ!」

「そ、それじゃあ」

「おうよ! 横溝の旦那、遂に結婚しやがったのよ!」

「何だって!?!」

「多分婚姻の儀は岐阜城で済ませたんじゃねえかなあ。で、もう一人はいわゆる側室つてやつじゃねえかな?」

「そうかそうか。何にしろめでてえ話じゃねえか!」

「おうよ! おまえら間違つてもあの二人に手え出すんじゃねえぞ!

旦那が怒るし、岐阜城から首切り人が来てバツサリだあ!」

「ひええええつ、おつかねええ!」

人の口になんとやら、二人の存在は瞬く間に町人の間に知れ渡るこ

とになるわけだが、それはまた、数日後の話である。

「へい、らっしやい！」

「横溝殿の使いで来ました。鶏を丸ごと一羽いただけませんか？」

「おお、お客さんはぶりがいいねえ！ ……ん、横溝の旦那？」

「え、あの、いけませんか？ お金ならここにありますが」

言葉も聞かず、店主は二人をじろじろと見ている。そして横溝の旦那。頭の中をぐるぐると回転させ、やがて一つの結論が出た。

「おお、そうかそうか！ 旦那、結婚したんだな。いや、いい娘さんをもらったもんだ！」

大声で拍手をする。

「え、ええ……！」

「ようし、分かった！ こいつに釣りはいらねえ。引き出物代わりだ！ ただで持つていきな！」

「そ、そんな……」

「なあに横溝の旦那には日頃から世話になってるからよお！ ま、お返しみたいなもんさ」

「なあにい？ 横溝の旦那が結婚!？」

店の周りは瞬く間に人でいっぱいになった。

「おう、それじゃあおいらも奮発しねえとな。この野菜、持つていつてくれ！ なあに遠慮はいらねえよ」

「お、てめえやるじゃねえか。じゃあ俺はこの魚を出さず。どうせ売れ残つて腐つて捨てるようなもんだ。持つていつてくれ」

「じゃあうちからは椎茸を出さず。こいつは上物だぜ」

「それじゃうちからは糠漬けを出そうかねえ」

「あたしからは味噌漬けを出すよ。もつていきな」

まさに食材の大盤振る舞いであった。そして謙信と愛は、突き返すことも出来ずに黙って受け取るしかなかった…。

「とまあ、そういうわけです……」

「おかげでこのような有様に……」

「……………」

（早とちり？ 早合点？ どっちを使っているか分からねえ。あー頭が痛え）

「横溝殿、街では人気者なのですな」

「村八分状態にならないように努めたからな。しかし今回ばかりは完全に裏目に出たな…」

「しかし、どうしましょう？ この大量の食材…」

「運び込むしかないだろ」

かくして、横溝の家は食材で溢れんばかりになってしまった。

日持ちがするものは良しとして、問題は肉と魚だ。魚は干物にするという手もあるが、それでも全部は難しい。肉は論外である。あいにくこの時代に冷凍庫はない。

「仕方ない。今晚は鍋にしよう。適当な大きさに肉と魚と野菜を切って味噌を入れれば完成だ」

（来賓用に大きめの鉄鍋を買っておいて良かった。これで夕飯は鍋パーティーにしよう）

「どうしましょうか」

「ではその役目はわたしが担いましょう」

謙信はやる気まんまんという表情で台所に行ってしまった。

足利編②

「ふう……」

今日は岐阜城に行つて、帰ってきたらこの有様で、さすがの横溝も精神的に疲れた。できればお腹を満たしたら風呂に入りに行つてさっさと寝たい。

「……横溝殿」

「ん、どうした直江」

「横溝殿にご質問が」

「何だい、かしこまって」

「昨夜は何もしませんでしたね。何故ですか？」

火の玉ストレートが飛んできた。

「そ、それは……」

「わたし達に遠慮する必要などありません。この家に来た時点で覚悟はできています。それに……」

「それに？」

「謙信様……銀姫様は横溝殿をお慕いしております」

「そんなエロゲみたいな都合のいい展開……」

「あります」

愛はエロゲという単語は何かは知らないが、多分恋文のようなものだろうと勝手に思った。

「あなた様が岐阜城にて初お見えした時、わたしは銀姫様の表情がぱあつと明るくなるのを見逃しませんでした。ああ、これは一目惚れだな、と」

「惚れやすいのか、謙信は」

「いえ、あなただからです。……話を続けます。なればこそ、二人は相思愛の間柄になつていただきたいのです」

横溝は、うわーこんな時代にまさかモテ期が来るとは思わなかったなー誰だよこんな都合のいい展開思いついたの、と思った。

「同時に、わたし達二人を守るためでもあります」

「……」

横溝は信長や久秀が言っていたことを思い出していた。たしか、二人はもはや越後に帰ることはできない。ならばおまえが居場所を作ってやれ、だっただろうか。

「この家に転がり込んで、何時も経っていないことは重々承知しております。ですがわたし達に選択肢はなかった。信長様は我々二人を持って余したのは明白です」

「……だろいな」

「お願いします。わたしはどうなっても構いません。ですが、せめて銀姫様だけは恋人のように接してあげてください。これ以上。あの子の目が曇らないように」

深々と頭を下げられた。

よもや彼女がここまで思い詰めていたとは、さすがに予想外だった。立場的に、自己犠牲を強いても尽くしてきたのだろう。

横溝は思った。これでいいのか、人として、男として、ここまで言わせた者の想いを突っぱねることができるのか、と。

答えは、もう横溝の中で出ていた。

「……分かった。謙信は俺の出来る範囲で幸せにしてやる。……結婚は、しないがな」

「有難うございます……」

「それから直江、おまえも、な」

「はい。喜んで、尽くさせていただきます」

それから一刻ほどして、謙信は何とか鍋を完成させた。

当然全てあった食材は入りきらず、後から追加していくことになる。既に魚の一部は開いて干物にして軒先にぶら下げているが。

「「いただきます」」

鍋は美味しそうにぐつぐつと煮だっていた。肉、魚、野菜とこれはもう豪華料理である。

3人は鍋に箸をつけた。

「美味いな」

「ええ。横溝殿の使っている味噌はいいものですね。香りもいい

し、味がにじむように出ています」

「私は猫舌なので、取り皿に入れながら少しずつ食べていきましよう……」

直江愛。意外とぽんこつなのかもしれない。

「俺も熱いのは苦手だ。取り皿を使う。だが味噌汁も飲めよ。出汁が出て美味いぞ」

「はい。……はふっはふっ、うーん。美味しいですね」

「お代わりもありますから。梅、これを3人で全部平らげるのだ。覚悟をしておけよ」

「ははっ、銀姫様、どうぞお手柔らかに」

横溝は煮えた葱や椎茸にかぶりつく。火は通っていて、実に美味しい。

次に肉に手を付ける。こちらもいい味だ。

出汁が出た味噌汁も一口吸う。体が火照り、何度でも味わいたくなる味だった。

(残ったら飯を入れて雑炊にでもするかな……)

などと考えながら魚を口に、だが硬い骨が口に刺さった。

「……謙信よ、できれば骨はちゃんと取り除いてくれ」

「えっ!? まだ残っていましたか!? す、すいません、注意して取り除いたつもりなのですが」

「ははは、横溝殿も不覚を取られましたな」

「茶化すな、梅よ」

「ふふ……」

こういうのもいいな、と横溝は思った。やはり飯はみんなで食う方が美味しいのかもな、と。

(大学入ってからはずっと一人暮らしだったからなあ……一応正月は家族の元へ帰郷したけど)

ところで、である。

横溝は、あれ、を切り出すことに決めた。

「謙信よ」

「…はい、何でしょう? お代わりですか」

「いや……今夜、その、やることやるからな。風呂に入って身を清めておけ」

「……!!」

謙信の顔が真っ赤になった。横溝の言わんとしたことが瞬時に理解してしまったからだ。

「わ、わ、分かりました。こんな身でよければ、よ、喜んで」

「銀姫様、そう緊張なさらないでください。わたしも同伴しますゆえ」

「あ、ああ……」

「……………」

（いやー改めて考えると、すっげーこっ恥ずかしいこと言ってるわ、俺）

「あ、お代わり」

「は、はい、どうぞ」

夜は少しづつ更けていった……。

そして何とか大量の食材を鍋という手段で平らげた三人は、夜でもやってるお湯屋に赴き、汗を流した。

更に時は流れて深夜、遂に三人は結ばれ……、

なかった。

その夜、クリムゾンの呪いが発動した。

横溝は全身の血管が浮き出、瞳孔は開き、口の中は瞬時にカラカラになる。激しい痛みと苦しみ。

謙信と愛は押さえつけるように横溝をなだめた。

結局、三人がめでたく結ばれたのはそれから三日後の夜であった。

「クリムゾンめ、覚えてやがれよ……」

「そんな短筒、捨ててしまえばいいではないですか」

「以前肥溜めに落としてやったが、翌日あっさり戻ってきた」

「……恐ろしい呪いの鉄砲なのですな」

クリムゾンは嘲笑うかのように昼間から紅く輝いていた。

それから数か月が経ち、岐阜城に新年がやってきた。

家臣全員、信長の息子たちが一同に揃い、信長に新年の挨拶をする特別な場である。

「殿、あけましておめでとうございます」

「父上、あけましておめでとうございます」

「うむ、苦しゅうない」

……しかし横溝にとつては、退屈この上ない場でもあった。

信長とはいつも軽口を言い合ってる仲だし、家臣にも改めて挨拶をするのも変な感じがする。結局、息子達に挨拶をして、新年の挨拶は一通り終わった。

年末も差し迫る中、横溝は信長に一つの料理を振舞った。

「天ぷら」である。

作り方は至って簡単。水でといた小麦粉に材料を絡めて高温の油で揚げるだけ。これだけである。

しかし信長はこの天ぷらを随分と気に入った。なにせ作り方が簡単なのでおかずに最適だし、火を通すから腹を下す恐れもない。

横溝はあんまり油を取りすぎると胃がおかしくなるぞ、と口を挟んだが……。

今回の新年でも酒と共に天ぷらは振舞われた。皆で思い思いの材料を油にくぐらせ粗塩を付けて食べるのである。雑煮よりもこちらが主役になってしまったほどだ。

それから更に数日、正月の気の緩みをピシッと引き締めるべく、信長がある計画を提示してきたのだ。

そういえば、今年はどこかいいことをやるとか言ってたな、と横溝は思い出していた。

「……して、殿、何をお考えで？」

「うむ。畿内に大きな城を建てるのよ」

「築城……ですか」

「そうじゃ。浅井・朝倉が落ち、越後も我が手に下った。甲斐の武田は虫の息、本願寺も大人しい。で、あればここは新しい城を建立し、儂はそこに移るつもりよ。」

なにせ畿内から岐阜はいささか遠いと思っておったからな」

「いい案だと思います」

光秀が我先に声を上げる。

「私はてつきり甲斐に赴き、武田を完全に滅ぼすと思っておりますがな」

「それは家康に任せようと思う。いい加減奴らにも知行の一つも与えてやらんと反乱の火種になるからの」

「戦国の世では一寝すれば味方が裏切る……嫌な世の中ですな」

「して、殿、一体何処に城を建てるといいますか？」

「なんじゃ猿、分からんか？ お前もよく知っている場所じゃぞ」

「え……」

信長は畿内の地図を広げ、ある一点を指さす。

「ここじゃ」

「安土……ですか」

「……残念じゃが、琵琶湖水運は思った通りの成果を出しておらん。風に弱いし、舟も小さな物が多くて大きな物を持ち運べないときて。それなら陸路を整備した方がましだと思つたわけよ」

「うう……あんなに頑張つたのに……信長様、どうか拙者の失敗は大事にしないでください……」

「ま、誰に任せても似たような結果になつたと思うがな。でもまあ、結果は結果じゃ。猿、しばらく謹慎しておれ」

「ははあ……ねねと小作りにでも励むとするか」

「じゃが拠点にするなら琵琶湖に面したこの位置は強いぞ。飢饉に強く、水に富み、商業の拠点にもなりうる。実によい場所じゃ」

「では、大量の石材と木材、大工など様々な人員と材料を用意する必要がありますがな」

「しかし、この位置では本願寺が何というか……」

「くつくつく……その本願寺じゃがな、間者を派遣しておつたのだが、ここにきて面白い情報を掴んだのじゃ」

「面白い情報……ですか」

「ふふふ……越前の加賀一向宗の強硬派で知られる七里頼周と穩健派

の下間頼照が身内争いを初めて今にも爆発寸前らしい」

「なんと……！」

「加賀一向宗は土着の豪族の集まりじゃ。本願寺の命があっても、はいそうですかとは言えんらしい。そこにきて遂に、というわけじゃよ」

「どこからそんな情報を……いやはや殿の目には千里眼でも付いていらっしやるのですかな？」

「だが、これは好機に間違いないぞ、ならば七里に勝ってほしいですな。下間が勝つてもこちらにうま味はない」

「うまくいけば一気に本願寺撤去までいけるかもしれませんなあ」

「そういう事じゃ。では家臣一同、本年の命令を与える！　しかしと聞くがよい！」

「「「「ははあー！」「」」」」

織田も騒がしくなってきたようだ。

新年から更に数日、織田家の各々の家臣たちが今年統治する区域を指名され、岐阜城を旅立っていった。

その一方、御所……室町幕府15代将軍・足利義昭公にも新年のご挨拶をする必要があった。

そしてもう一つ、安土の築城のために本願寺にお伺いを立てることもしなければならなかった。

家老佐久間は岐阜城に残り、政務を担当することになった為、選ばれたのは……、

「こうして二人で馬を歩かせるのは初めてだなあ、明智さん」

「そうですなあ、しかし横溝殿も一緒にとは、殿は何を考えているのやら……」

家老・明智光秀だった。そしてもう一人、用心棒役として横溝も参加することになった。

「まずは本願寺だな」

「……手荒なことは止めてくださいいね」

「ああ、なんとかな。帯刀しなければ問題ないよ。俺も以前本願寺に

行った時はクリムゾンを置いていったものだ」

「成程、我々はあくまでお話をしに来た、と。中々横溝殿も頭が冴えるお方で」

「頭と言えば……明智さん、随分禿げたなあ。もう鬚も結えないんじゃないか？」

「私は殿よりずっと年上ですから。戦で死なない限り、先に死ぬのは私でしようなあ」

「信長にからかわれなかったか？」

「ええ。『今日からお前の名は金柑頭じゃ！』と……」

「……それ、怒ったよな？」

「殿は人にあだ名を付けるのが好きな御方ですが、さすがに……無言の圧力を返しました。そうしたら、そんなに怒ることないじやろう、と。ふふ……」

「あんたも大変だねえ……」

「安土、ですか……」

本願寺頭如は信長の畿内進出を聞き、いささか顔を歪めた。

もはや畿内で織田家に対抗できる勢力など、我ら本願寺しかなくなってしまう。しかしここで信長を畿内に固定されれば明らかに不利になる。

かといって、これを止めるとなると、あれこれ考えるがいい案は思いつかなかった。

(もはや、ここまでののでしょうか……しかし民の平和を考えればあの天魔を畿内に固定されるというのも、癪ですねえ)

「まあ頭如殿、そう難しく考えなさるな。信長様の考えゆる『天下』とは畿内平定の意味が近いのです。何でしたら、互い手を取り合うことだつてできましよう」

「そう上手くいくでしょうか。信長が文字通り畿内を平定すれば、更に、西……毛利や九州まで喰らおうとするのでは？」

「それは分かりません。ただ毛利のような大きな勢力は出来れば分断させたいでしような」

「そうでしょう。ならば我らは同調する道を取るのは難しいと考えます。確かに本願寺は大きくなりすぎた。信長ならば、その勢力を何とかしよう、はつきり言えば潰すと考えるのが筋では？」

「ですが、武士が僧を相手に戦いを続けるのも、時代錯誤であると私的に思います」

「ふむ……」

お互い、金玉を握り合うような、交渉事である。果たして、天秤はどちらに傾くのか……。

と、いう緊迫した状況の中、空気をあえて読まない男が一人。

「おい、顕如さん、それから明智さん、話し合いも疲れただろう。せっかくだから面白い料理を作ってきたぜ。寺の台所を借りてな」

横溝は料理を片手に、顕如の前に置く。

「なっ……また天ぷらですか。横溝殿、僧は一応厳しい食事制限が」

「大丈夫。肉も魚も使っていないから」

「いや、そういう問題では……」

「ふむ……これは天ぷら、というのですか？」

「ああ。水でといた小麦粉を手頃な大きさに切った野菜に絡めて高温の油に潜らせただけのものだ。粗塩をかけてお召し上がりを」

「ほう……では、いただきますようか。あなたなら毒見の必要もなさそうですしね」

サクツ……

「……っ！ これは、熱い油に熱され、野菜の旨味が引き立っている。小麦粉の感じも面白い。いやはや、何とも面白い美味でしょう」

「これ、信長に教えたら大絶賛だな。油さえあればいいからおかずがいらないうて。顕如さんも是非試してみてください」

「はっはっは、毎日これを食べたら臓が焼け崩れてしまいますよ」

「そうか？ まあ多量に油を摂るのはお勧めしないが」

「……まったく、横溝殿、あなたは本当に狸ですね」

（笑っている。あの顕如様が、横溝殿に、この二人、案外気が合うのかもしれんな）

「明智殿」

「はっ、なんでしよう」

「安土の築城の件ですが、さすがにこちらからは何も言いませんし、邪魔建てもしません。門弟にもそう伝えておきます。どうぞ、ご勝手に」

「……はっ、有難うございます！」

「しかし、横溝殿も色々しでかしてくれますな」

「そうか？ 交渉事つてのは基本こうやるんだよ。美味しいもの食つて、腹も満たされて、気分がよくなれば、それでよし。昔から皆がやってたことだ」

「まあ天ぶら一つで事が済んだのですから、今回はよし、としておきましようか」

明智は正直、横溝を内心羨ましくも思っていた。

殿である信長とは傍から見ても一番の友人関係にあると思うし、おそらくは肅清の可能性もないと考える。

その自由奔放ぶりはかつてたわけ者と言われた信長を彷彿とさせるのではないか、とすら評価していた。

一方、自分は家老という立場こそあれ一度の失敗で肅清される可能性は充分にある。

明智はそれを恐れていた。しかし本来ならわが身を支えてくれていた熙子は1年前に死んでしまった。

一説では、度重なる重労働で調子を落とした夫・光秀の看病で調子を落とし、そのまま亡くなってしまったと言われている。

倒れた明智の元には信長も見舞いに来たが、正直、痛々しい程やつれていて心配したのだが、何とか復調した。しかし、妻はもうこの世にはいない。

光秀はそれを十分に悔いていた。だが、せめて長男である光慶が元服の儀を終えるまでは死ねないと自分に言い聞かせていた。

明智光秀。その悲壮感の行き場は果たしてあるのか……。

「……明智さん？」

「ん……！ ああ、すいません、少々考え事をしていました」

「……？ もうすぐ京の都だな」

「ええ。都は賑やかですよ。しかし、義昭公にはくれぐれもご無礼な態度は取らないでください」

「どうかねえ。あちこちから『悪御所』なんて言われているところだろう？ 信長だつてあまりいい気はしてない筈だぜ」

「いや、それは……。でも一応殿の上司も同然の御方ですから、くれぐれも……」

「んー、ま、考えておく」

「はあ……」

（……仏よ。願わくばもうしばらく私に猶予をお与えください。私はまだ死ぬわけにはいきません）

「……そういえば明智さん」

「？ はい？」

「お前さんは俺と信長が親しいと考えているようだが、それは少し違うぜ」

「……！ そ、そうですか。正直、そうは見えませんが」

「今は渡人は戦において重要な価値があるから信長も手元に置いて比較的自由にさせている。だが裏を返せば必ず邪魔になる時が来る。

そして、信長は邪魔な男を放っておくほど甘い男ではない」

「……！」

「ま、その間だけの付き合いだな……」

「……」

（……横溝殿、それが分かっているながら、あなたはなぜ信長様に仕えておるのですか？ 私には分かりません……）

足利編③

「おー、ここが京の都かー」

「相変わらず都は豊かで人も多いですね。これでも幾度となく戦火をこうむってきたのですが」

その京の都が幾度となく荒れ果てても復興してきたのは、ひとえに寺院勢力が頑張ったからだと言われている。寺院は人を集める力を持つ。それが大きな寺院であれば尚更だ。

その畿内筆頭が石山本願寺であり、支援も何度も行ってきたのだが。

「で、御所に行くのはすぐかい？」

「そうですが、飯を食べる時間はあると思いますが、いかがでしょう」

「さすが明智さん、頭が冴える」

「これが、冷麦ですか。水にさらし、冷やして食べるとは」

「俺の時代にもこれはあったぞ。ただ、この場合鯉節や昆布などで出汁を取った黒ずんだ汁に付けながら食べるんだ」

「これは、どちらかと言えば暑い夏に食べたいですな」

「そうだな。冬の新年に食べるものじゃあないなあ。あ、でも味はいいな。麦麦してる」

「そうですね。味はいいです」

「そうだ、すいませーん、熱燗二つ」

「横溝殿、これからご挨拶ですぞー」

「少しだけならいいだろー」

「……まったく自由な御方だ。信長様は何故にあなたに自由にさせているのか、時々分からない事があります……」

京。室町幕府の御所。天皇を含め、日の本で一番偉い人が集まっている場所である。

その15代将軍、足利義昭は、一時間も正座させるぐらい明智と横溝を待たせておきながら詫びの一つもいれず部屋に入ってきた。

自分も新年ということで公家衆にうんたらかんたら、などと言いつつしながら。そして、眉間にはしわを寄せていた。

「……明智光秀よ。新年のご挨拶ということで遠路はるばるご足労願ったのはありがたい」

「ははっ！」

「じゃが、どうして信長を連れてこなかった!? 織田信長を直接連れてきて挨拶をさせるのが筋というものじゃろう！」

「も、申し訳ありません。あいにく殿も年が明けてからは忙しく……」
「ふん、言い訳はいいわ。つまり、どうあっても信長は来ないというのだな!? 儂に挨拶はないというのだな!？」

「……はい」

「……ちっ、信長の奴め、儂を誰だと思っておるのじゃ!」

(……権力者はこれだから)

「で、そちの横にいる者は何様じゃ!? 何処の者だ!？」

「織田家に力を貸していただいています、渡人の横溝殿です。今回は用心棒役として連れて参りました」

「よろしく。將軍様。趣味はクソゲー蒐集です。好きなクソゲーは里見の謎です」

「……!」

(こいつか、浅井、朝倉を滅ぼすのに一役買ったという人物は。織田め、いよいよ儂の首でも取りに来たか……!?)

「義昭將軍、少し落ち着けよ」

「な、なんじゃと!？」

「いや……室町の威光も地に堕ちたにも関わらず、今なお將軍を続けなければならぬ可哀想な將軍、とでも言うべきかな」

「にや、にいおう……!」

「横溝殿、失礼な態度は取らないと事前に約束したはずですよ!」

「そ、そうだ、貴様、少し生意気が過ぎるぞ! 儂を誰だと思っている!」

「だから言っただろ。過去の栄光にしがみ付いた將軍だと」

横溝は睨み付けるように將軍・義昭を見つめる。その目には殺意こそないが、どこか軽蔑した眼差しでもあった。

「応仁の乱から何年経っていると思ってる。200年だぞ200年。」

今の人々に幕府を敬う気持ちなんて残っているものか。武士の台頭、公家の凋落、戦国の世は始まるべくして始まったんだ」

「う、うとうう……！」

「その点、13代将軍義輝殿は立派な方だったのだろう。劍豪将軍の名を欲しいままにし、最期は三好に討ち取られるも一步も退かなかつた。あんたなら精々押し入れの中でガタガタ震えるのが関の山だろうな」

「うとうう……！」

「あんたは信長のおかげで将軍になれた。だが、その信長にあんたは何をした？ 俺は全部知っているぞ。あれは個人的な不快感か？ それとも嫉妬か？」

「あの、横溝殿、義昭様は信長様に一体何を……！」

「悪いが、今は俺の口からは言えないな」

「……………」

将軍、義昭は横溝の態度に腸を煮え繰り返しながらも、圧倒され、すっかり縮こまってしまった。

その姿は、成程確かに、威光とは程遠い将軍の成れの果て……、こちらの童のようであった。

「やはり、そう思うか……………」

下を向いていた将軍が、ぽつりと呟いた。

「義昭様、落ち着いてください。横溝殿は後で念入りに叱りつけておくので……………」

「いや、その必要はない！」

今度は将軍・義昭がぴしゃりと場の空気を変えた。そこにはある決意もあった。

「確かにそなたの言うことももつともじゃ。言い過ぎ、ではあるがな……………」

「そんな……………」

「先ほども他の公家衆から陰口を言われ戻ってきたところよ。…………義昭は見てくれだけのダメ将軍だな。俺には気づけば周りに仲間や友人さえおらんようになってしまった……………」

「將軍様……」

「光秀よ。先ほどの事を話そう。儂は確かに信長の事を好ましく思っているなかった。嫌いじゃった。儂を傀儡のように操り政治も何もかも決めてしまおうところがな」

「信長包囲網……」

横溝がぼつりと呟いた。

「ああその通りよ。儂は浅井、朝倉、武田、本願寺に書状を送り、信長を仕留めてもらうつもりじゃった」

「……！ 言質は取った、とみてよろしいですか」

「ああ好きにせい。とにかく、儂は信長を本気で倒すつもりでいたのよ。だが事はことごとく上手くいかなかった。その渡人のやらの活躍のせいかのう……」

「俺は特別なことはしていない。信長が頑張った、それだけだ」

「ふふ、家臣でもないくせに、随分と忠義に厚い奴よのう……」

この時、將軍義昭の胸中はどうだっただろう。やけくそだったかもしれないし、疲れていたのかもしれない。全てを投げ出してしまったかったかもしれない。

だが仮にそうであったとしても、將軍の立場でそれはできない。

義昭公は孤独だった。それだけははっきりしているだろう。

「光秀よ、そちに頼みがある」

「は、なんなりと」

「織田信長に伝えてほしい。儂に代わり征夷大將軍となり、幕府を運営してはくれぬか、と」

「えっ……ええっー!？」

「正直、儂は疲れた……。儂も足利を抹消し、ただの人となって余生を過ごしたい……」

「随分とさっぱりするんだな」

「ああ。これが儂が心の底で思い描いていた未来の儂そのものよ。光秀殿、どうか儂の願いを聞き入れてくれぬか。この通りだ」

將軍義昭は遂に明智光秀に頭を下げた。

「義昭様。義昭様の意向。しかと心に刻みました。岐阜に戻り、必ず

「この計画を成立させてみせます」

「おい、明智さん、確約はしない方が……」

「良いのです。何とかしてみせましょう。そうでなければ、將軍様があまりにも可哀想だ」

「そうか……。これで儂もやつと、休めそうだぞ」

「……………」

「そうそう、土産代わりじゃ。そちらには名前をくれてやろう。信長には前右府、光秀殿には惟任じゃ。気に入ってくれると嬉しいぞ」

「なんと、しかと拝領いたします！」

「うむ、うむうむ」

「まさかこんな結果になるとはなあ……」

「横溝殿」

光秀は横溝を睨み付けた。幾ら齒に衣着せぬ物言いをする横溝でも、今回の言動は流石に目に余ると感じたようだ。

「あ、はは、す、すまんとおもうておる……」

「謝つても許しません。本来ならあの場で打ち首にするところです」

（うわあ、明智さん怒ってるよ。でも一つ目標はできたし、って今は何を言っても無駄か）

「あなたの慇懃無礼な態度には私も腸が煮え繰り返るところです。簡単に死なない体であることをよしとしてください」

「うう……申し訳ない。今回ばかりは反省する……」

「ですが、これで岐阜に戻る前に寄るところが出来ましたね」

「……………？ 何処だよ」

「決まっているでしょう。石山本願寺です」

「なんと！ 上様がそんなことを!?!」

「嘘ではありませんまいな!?!」

「間違いありません。この明智光秀、將軍義昭公からしかと伝えられました」

將軍義昭の幕府を終えたいという意向と、織田信長を征夷大將軍に

したいという意向。どちらも本願寺にとっては衝撃的なものだった。そしてこの発言をもつとも重く受け止めたのが他でもない、本願寺頭如であった。

(上様がそこまで思い詰めていたとは……この頭如、不覚の至りですね)

「して、本題に入りましょう。頭如殿」

「はい……」

「仮にこの話が纏まれば畿内平定を目指す信長様にとって本願寺は目の上のたん瘤となります。しかも半ば強制的に本願寺は解体の疎き目に合うと考えられます」

「……でしょうな。信長がここをいつまでものさばらせておくはずがない」

「すぐにとは申しません。ですが決断の時はやってくるでしょう」

「そうですねえ……絵に描いた餅でいいなら伝えましょう。仮に本願寺が解体されたならば、京のお膝元に移行するか、関東に出向を考えられています」

「関東に出向……ですか」

「あちらはまだ一向宗が根付いてませんから。これを機会にと考えておりました」

「ふむ……」

光秀は冷静に頭如の意向を分析していた。

まずは京のお膝元に移行する、という案だ。

確かに京の一向宗派となれば本願寺のような巨大勢力ならその影響力をさほど落とさず信仰を続けていける。

しかしこれは結局単なる引越に過ぎないのではないか？ 石

山本願寺が京に下ればむしろ織田にとっては不利なのではないか？

もう一つは、関東に出向する、という案だ。

こちらはむしろ万々歳であり、石山本願寺の巨大勢力を纏めて他方に放り投げるも同然となる。少なくとも畿内に本願寺の影響力はなくなるだろう。

だがそうなれば畿内の人々の反旗が問題だ。織田が本願寺を追い

出した、そういう様にとらえられれば再び泥沼の一向一揆は避けられなくなる。

現状、やはりあちらが立てばこちらが立たずなのは分かっているのだ。はてさて、どう話を持っていけばいいのか……。

ドタドタドタ……！

「た、大変です！」

一人の坊主が、慌ただしく部屋の中に入ってきた。

「実は……お、とと、すいません、織田の者がいる以上、話すことは……」

「ふーん、顕如殿、なんなら席を外そうか？」

横溝が言う。

「横溝殿、今は黙っていてください。これは織田にとって聞き逃せない報告のようだ」

明智がそれを制する。

「……でしょうね。やむを得ないでしょう。話してください」

本願寺顕如が報告を伝えることを許可する。

「は、はい。実は、越前で加賀一向宗の七里頼周殿が下間頼照殿の寺院を武力で強襲。下間殿は……殺されたとのことですよ」

「なんですと!?!」

「馬鹿な！ おのれ七里め、あれほど今は本願寺に従っていると通達したのに!?!」

(明智さん、これって……)

(ええ、信長様の言うとおりにになりましたね)

「して、七里頼周はその後どうした!?!」

「加賀一向宗を率いて旧朝倉領地に侵入。一向一揆を開始しましたが、元朝倉家家老・山崎吉家の活躍により失敗、越前に戻ったとのことですよ……」

「何という事だ……」

「下間殿……」

「皆さん、落ち着いてください。いや、落ち着けないかもしれませんが今は静かに手を合わせておきましょう」

「頭如様、七里は？」

「決まっているでしょう。破門です。以後彼は我ら本願寺一向衆派の敵として扱います」

一方、越中。旧朝倉領内では、

「皆の者、今回の動き、まことに大義であった。雪を砦に戦いを仕掛ける、という戦術が功を奏したな」

山崎吉家が部下の働きに誠意を込めて感謝していた。

「しかし……信長様からこのような動きがあるので注意されたと聞いたときは、まさか、と思ったが、現実になるとはな。世の中分からないものだ」

山崎にとつては久方ぶりの一向一揆との戦いであった。しかしこつちは年季が違うのだ。あれ程苦戦していた戦いも今や苦戦しなくなっている。慣れとは怖い。

「以後、加賀一向宗は敵として扱う。雪解けを待つて逆賊七里頼周殿を討ち取るものとする。皆、奮起しておけ」

「しかし、妙だな」

横溝が頭如達の話に割って入るように言葉を放った。

「横溝殿、妙、とは？」

「いやね、いくら加賀一向宗といってもさ、さすがに単独で織田に立ち向かうには分が悪すぎると思うんだよ。何処かに後ろ盾があるんじゃないかなって」

「言われてみれば」

「確かに……」

「いえ、じつは……その後ろ盾の正体も、判明しております」

「……何処ですか」

頭如が腸煮えくり返ってるぞ、という面向きで聞いたでした。

「……比叡山、延暦寺です」

「あ……」

「ここにきてあの困りものの名前が出てきた。」

「はあ……」

これには顕如もため息をつく他なかった。以前行つた時も門前払いで終わってしまったが、よりにもよつてこのタイミングで、とは……。

「顕如殿」

すかさず、光秀が攻める。

「我ら織田家と、石山本願寺の間で、信仰の妨げはしないかわりに一向一揆の扇動は行わないという協定が、義昭公の元に預けられていた筈ですが」

「あなたも痛いところを付きますね。知らぬ存ぜぬを貫きたいところですが仏がそれを許しませんね。あれの横紙破りをするのは織田家側だと思つてましたが、まさか我々とは……」

「本件に関しては七里殿が破門になつたので不問ということにさせていただきます」

「え……」

「ただ比叡山延暦寺に限つてはどうなるかは分かりません。義昭公に相談して逆賊と見なされれば討つことになるでしょうが」

「いえ、できれば自分の尻は自分で拭きたいものですね。この件に関しては……」

「それも踏まえてよく考えて延暦寺と話し合つてください。それから、義昭公の意向も、しかと胸に刻んで、皆で話し合つてくれると助かります」

「そうですね……一度京を訪ねておきたいと考えております。上様が考え違いとする可能性もあるので」

「では、今日はこの辺で、横溝殿、帰りますよ」

「あ、ああ。それじゃ顕如さん、せっかくだから俺は失礼するぜ」

「よろしいのですか？ 話がうますぎますよ」

「いいも悪いも、あの場で加賀一向宗の話が出た時点で我々は先手を打たれたも同然、言わばまな板の鯉、というやつですよ」

しかも明智殿は、何の交換条件も出してこないときてる。あれは横溝殿以上の狸ですね。戦国武将にしておくのが惜しいくらいですよ」

「信長の威光を守りつつ、こちらには無言の圧力をかけてくる。流石は織田家家老に鎮座する男だ。見事な立ち回りで腹も立ちませぬ」
「これは近々石山本願寺皆揃って引越せざるを得ないかもしれないかもしれませぬ。いやはや、年明け早々、困った話ですよ……」

足利編④

明智光秀が岐阜城に帰還した後、光秀は早速信長に謁見した。

將軍義昭公が信長に征夷大將軍の座を譲りたい方針であること、加賀一向宗が爆発したこと、石山本願寺が京か関東に出向したいという予定があること。等々。

「……事後報告ですいません。私の一存で本願寺には退去命令を出さずに戻りました」

「で、あるか……石山本願寺の件はお主に任せておったのじゃ。お主が良しとしたならばそれで良いのじゃろう……」

明智は内心ほつとした。場合によってはこの場で激高し首を切り落とされてもおかしくない賭けだったからだ。

「しかし、義昭公が儂に、征夷大將軍を、と？ 笑えぬ話じゃな」

「ですが、事実です。……横溝殿が話を引きずり出したからでもあります」

「あやつは徹底して場の空気を読まんからの。後で天ぷら200個作らせる刑にでもするかろう。しかし、うーむ、儂が征夷大將軍？

うーむ……」

信長は考えた。考えに考えた。畿内平定。天下の在り方。織田家の未来。果たして征夷大將軍という地位はそこにたどり着くものであるのか、と……。

「光秀よ……」

「はい」

「皆をここに集めてくれ」

「信長様が征夷大將軍ですって!?!」

「それは年明け早々めでたいことはありませんか!」

「こちら、まだ本決まりではないのだ。早合点してはならぬ」

集まった武将達は一々報告された話題を歓迎した。信長の腹の内も知らぬまま。

「ですが、信長様が征夷大將軍の地位に着けば、外部の敵に脅かされることもありません」

内部の敵には、あるかもしれないが……。

「毛利との決戦も無効に出来るかも知れませんが」

「ふん、毛利は將軍義昭公が織田の傀儡に成り下がった、と宣伝するだけじゃわい」

「う……」

「やはり、毛利との決戦は避けられませんか……」

「将来的には、な……奴らが我々の支配下に下るとなれば話は別じやが」

まずは、話を順に纏めていきましょう、という光秀の進言に皆は乗ることになった。

「まずは、本願寺から参りましょうか」

「うむ、信長様の言うとおりの結果になったな。加賀一向宗は爆発し、死者も多数出た。そして下間は破門……」

「遠慮なく本願寺退去を命ずることはできませんが、何処に行くかまでこちらで決めてしましましょうか……?」

「いや、その前に奴らに力を貸したという、比叡山延暦寺じゃ。あいつらこそ織田の顔に泥を塗ろうとした張本人よ。」

あいつらだけは許さん。場合によっては、織田軍を動かしてもいいくらいじゃ」

信長が言う。思えば過去にも頭如を門前払いしたという報告すらあった。できればこちらの手で叩かねば腹の虫が収まらない、といった気分だった。

「光秀、この冬……、延暦寺を叩く準備だけはしておけ」

「……! ははっ!」

「では次は信長様の征夷大將軍即位の問題ですな」

「信長様は、この意見に乗り気ではなさそうですな」

「まあ、もう……」

確かに、信長の目指すところの天下の在り方とは、『織田が未永く暮らしていける世』であった。

「しかし、聞けば、義昭公は儂の命を、と思っていたそうではないか。その希望に乗ってやるのも面白くないのう……」

これについては集まった武将達も口を閉ざした。

信長の活躍によって畿内平定はあと少しのところまでできた。しかしその過程には多くの死者が出た。義昭公にもその責任はある。

だが、將軍一生の願いを、適当にはぐらかすのも武家の器に欠ける立ち振る舞いともいえる。

「のう、横溝、そちはどう思う？」

信長は平定の間横で面倒くさそうに正座させられている渡人に意見を聞いた。

「……いいじゃねえか。なっっちゃえよ、征夷大將軍」

「ほう……」

「俺もおまえさんが天下を平定し、世を裁定するところを見てみたい」「そち、それは褒めておるのか」

「勿論褒めてるんだよ」

「ふむ……」

信長は横溝の煽てに乗せられて多少は嬉しくなった。こやつもこやつで織田家の事を考えておったのか、と。

そしてしばし熟考し、結論を出した。

「……光秀、義昭公に書状の準備をしろ」

「はっ、して、その内容とは？」

「この織田信長、征夷大將軍の件しかと承った、とな。ただし、条件として、1年ほど待つてほしい。そして、幕府は安土で運営するものとする、と」

「なんと、京には赴かないのですか」

「幕府の運営に、わざわざ都を選択する必要はない。儂が考える幕府とは、自由なものでありたいからな。1年という歳月は安土の城が完成するまでの期間、といったところじゃな」

「分かりました。お任せください」

「おお、これで信長様が幕府を……」

「正月も終えて随分経ちますが、今日は皆で酒を囲みたいですな」

「お主はただ飲みたいだけであろうに」

「ふふ、仕方ない、今日は無礼講といこうではないか」

「さすがは信長様、話が分かる!」

「くはは、褒めても何も出んわ」

「……そうかい、話が纏まったか、じゃあ俺はこの辺で……」

「これ待て横溝、貴様には命がある。全員分の天ぷらを揚げてこい。大至急な」

「はああつ!? 何で俺が……」

「ふんつ、將軍に無礼な口をきいた罰じゃ。ほれ、さつさとゆけ」

「信長……後で覚えてやがれよ」

その夜は一段と慌ただしくなった……。

なお、横溝は平定の間と炊事場を何度も往復させられ、日付が変わっても帰させてもらえず、結局そのまま倒れるように岐阜城で眠りこけたらしい。

しかし明智光秀だけはこの度の労役の成果を評価され早めに帰されたとか。

光秀は妻を亡くして以来、急に老け込むようになった。

今は従者を雇い、家の手伝いをさせている。長男である光慶が一人前になるまで死ぬわけにはいかないと零していたが、それも危うくなってきた。

信長は不意に、隠居せぬか、と尋ねてみたが、光秀はそれを断った。私は死ぬまで織田家の家臣を務めたいです、と答えた。

しかし老齡の身である。はたして彼の最後の希望が叶う時は来るだろうか……。

それから数か月。

本願寺は幾度となく延暦寺に書状を出したが、完全になしのつづて。

この状況に、流石の將軍義昭公も動かざるを得なかった。

延暦寺は『逆賊』である。という命が下された。ただし、願わくば最後の最後まで交渉の場を設けるようにと伝えられた。

しかしこの状況においても延暦寺は全く話を聞こうとしなかった。
——4月。雪解けも始まる畿内において、遂に織田軍が2千の兵を用いて延暦寺を取り囲んだ。

大將は、織田信長自らが赴いた。

「これより、比叡山延暦寺を攻略する。寺を焼き、女子供も逃さず殺せ。さすれば公家衆や帝の一族への見せしめにもなろう」

信長の皆殺しの命令に一同がざわめいた。

「待ってください。信長殿。願わくば、私めに最後の通達を……」

織田軍には本願寺顕如も同行していた。

「勿論そのつもりじゃ。顕如よ、あの分からず屋をなんとかしてまいれ」

「言われるまでもありません。では、しばしお待ちを……」

顕如は従者数名と共に延暦寺に赴いた。しかし待つこと僅か10数分、踵を返して戻ってきた。

「ははは……門前払いでした。もはや延暦寺は誰の言うことも聞く気もないようです」

「ふふ……当然よ。そうでなければここまで状況を悪化させるものか」

「どうやら延暦寺のお偉いさんは最後の最後までたわけ者のようだ。」

「これより、延暦寺を焼き討ちにする！」

周りからウオオオオオオツッ！という声が出た。

「横溝、そちは天台座主を殺れ」

「……ほう、俺に天下の大罪人になれ、と？」

「どうやら分かっているようじゃな。天台座主を殺るといふことがどういうことか」

「まあな。だが、承知した。せっかくだからクリムゾンでハチの巣にした拳句、首を斬り落として持ってきてやるよ」

「横溝殿……」

顕如が不意に声をかけた。

「顕如さん……。なあに、心配することはないって。所詮俺は織田の番犬よ、やれ、と言われたら誰にでも噛みつかなきやなあ」

「……………武運は、祈りませんぞ」

織田軍の焼き討ちが始まった。まだ冬の名残もある乾燥した空気で、火の手は一瞬にして延暦寺を囲んだ。

先ほど顕如を門前払いした門番は織田兵の槍で殺された。

織田軍が寺院内に侵入する。

「蟻の子一匹逃すな！間違っても敵に同情などするなよ！」
信長の檄が飛ぶ。

武装した僧の姿もあったが、織田軍の精鋭部隊の敵ではなかった。火の手は延暦寺本寺院まで広がり始めたところで、横溝と織田兵が一斉に突撃した。

許しを請う女がいた。助けてと泣き喚く子供もいた。全員殺した。当然である、ここにいる女は、子供は、犠牲になったのだ。延暦寺座主の面子の犠牲に。

そして、遂に、延暦寺座主を横溝が追い詰めた。
「よう座主さん、こうして会うのは初めてだな。ぶっ殺しにやってきたぜ」

「ぎ、貴様あああつ！この儂を誰だと思ってる!?!」

「は？自分の面子のためにあらゆる人間を犠牲にした無能な阿呆としか思っていないけど」

「くっ……………」

「おうおう、お互い、背中に罪が這い寄る感じがしないか？早く地獄に來い、待ってるからとな」

「ぐ……………ぎぎ……………!!」

「ま、あの世で仲間の皆さんに詫び続けるんだな……………!!……………クリムゾン・マシンガンモード！発射！」

真紅の銃から放たれる秒間15連射が座主をハチの巣にする。

座主は成すすべなく穴だらけにされ、絶命した。

瞬間、横溝の体に激痛が走った。

「くっ……………! クリムゾンよ、もはや渡人じゃなくてもお構いなしつてか？上等だこのやろう！」

横溝は腰の刀を抜き、走る。体を穴だらけにされ、とうに絶命した座主の首を、一閃、斬り落とした。

「殺ったぜ!!」

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏……。この寺院が再興された時、清らかな水の如き人々が仏を信じ、形だけではない信仰を行うことを願う……」

本願寺顕如は、燃え盛る延暦寺に対し、一人祈りを捧げていた。

「よう、信長」

「横溝か」

「ほらよ。天台座主の首だ。受け取りな」

横溝は生首を、ほいつ、と投げてよこした。

「これ、投げる奴がおるか!」

「別にいいじゃん。なー。で、顕如さん、これからあなたは どうするつもりかな?」

「そうじゃな。顕如よ。ここまでやったのじゃ。お前さんもそろそろはつきりさせてもらいたいところじゃな」

「そうですね……。まずは延暦寺の復興、それに力を貸したいと思っております。それが終わったら、関東の方に参ろうかと……」

「従者や信者にはよく言い含めてもらおうぞ」

「相変わらず抜け目がない……。いいですよ。決して一向一揆の類は起こさないように伝えます。力を失った本願寺がどこまでやれるかは未知数ですが……」

「だが、やってもらわねば困る。よいな」

「……頑張りますよ」

こうして、石山本願寺と織田の確執と長きに渡る戦いはひとまず幕を閉じた。

正史では10年にも渡る泥沼の戦いが、最後はあっさりと終わってしまったのだ。

これも横溝の自覚なき外交手腕と短気の信長が律義に義を通した

ことに他ならない。

「あ、そうそう、横溝殿」

「ん、どうした？」

「……横溝殿が作ってくれた、天ぶら、美味しかったですよ」

「はははっ、あの程度でよければ幾らでも作ってあげるよ。何なら安土城が出来たら一度来なさいな。ご馳走で祝いましょうや」

「……そうですね」

（こやつめ、案外、いや、間違いなく『たらし』じゃな……）

信長はふと、そう思ったのだった。

徳川編①

今日の岐阜城城下は慌ただしかった。

信長念願の畿内城、安土城の建立の目途が立ち、資材や人材などが動き始めたからだ。

一口に城を築くといっても、それは簡単にはいかない。

まず木材がいる。瓦がいる。鉄がいる。鉋がいる。鉋がいる。

城内にも畳みがある。飯炊き場がある。応接の間がある。寝所がある。

そしてなにより、城と、城下を発展させるために多くの人々がいる。商いをする者が必要になる。

信長の理想は安土を堺以上の大商い場にすることだった。ただ城を作ればいいものではない事は明らかだった。

とはいえ、基本的な政務はまだまだ岐阜で行わなければならない。

信長も家臣一同も基本は岐阜に留まる予定になっている。無論、横溝もだ。

「しかし、随分な大移動だなー」

「これら全てが新しい築城のために使われるのですね」

「岐阜も寂しくなるかもしれませんね」

大通りの大八車の大移動を見物していた横溝たちは、その壮観な人通りを見物しにやってきていた。

（年度末にクソゲーがいっぱいできるくらい慌ただしいな……）

「おや、横溝殿ではありませんか！」

ふと、大八車の群れから見知った男が顔を出し、駆け寄ってくる。

「よお、長政殿、ご健在でいらっしやっただか」

浅井長政。元浅井領の領主であり、信長と戦った男である。

その時、長政は捕らえられ、横溝の機転で大工の棟梁に転身した。横溝には返せない程の恩がある。

今でも横溝の所を訪ねては酒とつまみで飲み明かしたり、家の修理を頼んでもいないのにやってくれたりしている。

「あんたがここにいるってことは……」

「ええ、この浅井組、安土城の建設に一役買う一人に選ばれました。信長様の命令でしてね」

「信長が？」

「確か、信長と長政の仲は城の敷居を跨ぐことすら許さない程険悪な仲だったはずだが、

「いやなに、勿論今も岐阜城には出入りさせてもらえませんが。ただ、新しく作る城なら、ということでした」

「そうかあ。良かったじゃないか」

「あら、横溝様ではないですか」

「おお、市か。おまえもこちらに来て挨拶するんだ」

「お市。長政の妻にして信長の妹である。かつて、浅井と織田が戦う道を選んだ時、長政は市を織田に帰るよう言った。しかし、市は断つた。死が二人を分かつまで一緒にいると決めた。

そして夫が大工に転身した後も、長政を支えている。無論、彼女も岐阜城の敷居を跨ぐ許可は得られてないが。

「実は私たち、このまま安土へ住もうと思うんです。あそこは浅井領にも近いですし、思い出も多いですから」

「そうか。ま、新天地で仲良くな」

「あ、そういえば、万福丸の姿が見えないな」

「ああ、あいつでしたら……」

「万腹丸は大工ではなく武士として生きる道を選びました。今は諸国放浪の旅で腕を磨いているようです。時々、手紙が届きます」

「そうか、武士として生きる、か。らしいっちゃらしいかな」

「そういえば、横溝殿、子供はいかがです？ 子供を作るのもいいものですよ」

「よく見れば、お市さんのお腹が、少し膨らんでいるようにも見えた。確かこれで三人目になるはずだ。

「んー……俺はいいや。そういう柄じゃな……っ痛！」

謙信と愛が横溝の足を軽く蹴った。

「横溝殿、今日は精のつく料理を用意しますので、期待しててください」

「いいですね、銀姫様。私も是非夜は同伴したいものです」

「……おかくさくん……おかくさくん……おか……おか……おかくさくん……」

今日のネタは東方見文録だった。ちなみに横溝は暇さえあれば謙信達にクソゲーとはこういうものだとか教えている。

謙信は、あなたのいた時代にはそれはもう酷い遊戯があるので、ね、と感心を持って話していたが、愛はもう勘弁してくださいと言っていた。

「はっはっは、横溝殿も女性は苦手と見える。ま、期待していますよ。色々」と

「あちらに着いたら、お手紙をお書きしますね」

「あ、ああ、よい旅路を」

「行ってしまわれましたね」

「岐阜にその一家ありとまで有名になった浅井の旅立ちか……。安土が出来たら、本格的に移動を始める人々も多いんだろうなあ」

「やはり、ここも、寂しくなりますね」

（俺の、渡人としての目的も終わる時が近づいてきたか。そうだったから信長は俺を許すまい。さて、俺はどうなってしまおうだろうか……）

「徳川家を岐阜城へ？」

「うむ。まあ俺が征夷大將軍になる前の軽い会食の場を設けたいと思っただけ」

翌日、皆を集めた会議の場にて、信長の口から会食の話が出た。「拙者は良い案だと思えますが……、堅物で有名な三河武士がそれに答えますかね？」

「そうか？ 俺は今でも家康は忠実な部下だと思っただけが」
「……………」

横溝は終始無言だった。

信長は知らない。最後に天下を取るのが徳川家康だったことなど。どうせやつらは三河・遠江の知行で満足する奴らではない。信長は

武田を滅ぼし、甲斐をくれてやる腹づもりらしいが、果たしてその程度で家康が満足するか。

だが、事実として甲斐からは離反者が続出しており、一部は織田、徳川、旧朝倉などに出奔しているそうだ。

無理もない。甲斐は色々言われているが武田信玄入道のカリスマで豪族を一纏めにしてきた地方だ。

しかし信玄はもうこの世にはいない。武田は現在、四郎こと武田勝頼と一部の武将が切り盛りしている有様だ。

人は城、人は石垣、恨みは敵、情けは味方。信玄公の言葉である。しかし信玄が亡くなった今、その言葉も過去のものになりつつある。

甲斐も、信濃も、いつでも取れる。武田など、いつでも滅ぼせる。これが甲斐近辺の武將たちの共通見解だった。

山は深く、畑を耕すにも難儀し、海もないので、塩も取れない。上杉謙信が武田信玄に対して「敵に塩を送る」という逸話は、横溝

がいた時代にも脈々と流れついている。しかしそんな地でも奪い、滅ぼさなければならぬ。

横溝は男と男が凌ぎを削って戦う姿が好きなのだ。一方的に相手を蹂躪するのはレ○プも同然だと考える。

「……とまあ、そういう話が持ち上がっていてね」

「成程……。横溝殿は命を張るに値する戦以外は好みではない、と。中々難儀な性格をしておりますな」

腹の虫が収まらないので、横溝は利休殿の茶席に来ていた。相変わらず、利休が作る茶は美しい。

「すまんな、愚痴ばかり零して……」

「いえいえ、男子たるもの、そういう時もあります。茶席に上下はありません。般若すら手懐けて見せますとも」

今日の茶は美味しいが、『何か』は見えない。どうも自分の心は曇っているようだ。

「しかし、家康殿がそこまで野心家である、と。横溝殿はそうおっしゃられるのですか」

「戦国の世は、昨日の友は今日の敵。そんなもんだらう」

「ふむ、確かに、野心を持つ者が目上の者に征夷大將軍という天の座に位置される、というのは、あまり面白いものではないでしょうな」

「会食なんてしなければいいんだよ。家康の部下だって、あまりいい思いはしない筈だ」

「ふむ……これは私の勘にすぎないのですが」

利休はふと、空を見上げた。

「その会食、あまりうまくいかないかもしれないかもしれませんが」

「……俺もそうあってほしいがね」

「毒を盛らずとも毒を盛る方法は幾らでもある、ということですよ」

「ああ、そうか。当日は利休さんは飯炊き場に泊まり込みになるんだよな」

「ふふ……期待しててください。自由奔放な信長様と堅物揃いの三河武士が衝突する場を作ってごらんにいれましょう」

「おいおい、やんちゃは止めとけよ。俺も利休さんには死んでももらいたくないからな」

「はっはっは。ご安心なさってください。所詮私など一介の茶人に過ぎません。されど野心はあります。茶が政に深く関わるような世の中にしたいという野心が」

「……………」

寛ぎの間にも政心と皮肉を。そうなれば確かに利休の望みは叶うかもしれない。

危ない橋を渡るのは覚悟だが。

「まあ当日を楽しみにしててください」

「そうだな。俺も参加するよ。飯一つ取っても我々はお前たちより上だということを書いてやらせたい」

「その意気ですぞ、横溝殿」

利休は絶えず笑っていた。

一方、こちらは徳川陣営。

上司も同然である織田信長から会食の依頼を受けて、さてどうするか、というところである。

「……………」

徳川家康は、まず無言で話し合いを始めた。

当然と言えば当然である。

史実でいえば、日ノ本の天下を取ったのは徳川家であり、幕府を開いたのも徳川家である。まさに、板挟みの状況であるわけだ。

「で、どうする気ですか？ 家康様」

その場の空気を一閃したのは、本多忠勝であった。

「う、うむ……………」

家康とて、此度の会食自体は問題ない。ただ信長様が奇襲とばかりに徳川重鎮達を手にかける可能性がある、それだけは危惧していた。「信長様は、会食によって、我々の懐柔を凶ろうとしている。更に足利義昭公から征夷大將軍の座を受けようとしてすらいる。家康様からすれば、いい話ではありませんまい」

「む……………」

一同全員が家康の話す言葉に注目していた。家康からすれば、胃が痛い状況ではある。

本多だけではない。榊原康政、酒井忠次。井伊直政、俗に徳川四天王と言われる者たちは皆家康の言葉に耳を傾けようとしていた。

有名な『清州同盟』も、実は同盟前から、徳川家は織田家と戦っているし、今川家とも争っている。最初から対等の立場ですらないのだ。

なにせ史実というなら、祖父の頃から殺しあってる中で同盟が結ばれるというのもおかしい話だ。

それまでの徳川側の経緯をみたら「織田は死ぬ。今川も死ぬ」である。

ただ駿河をもらったので、同盟はとりあえず結ばれたのであって、徳川側の腹の底につかえた憎しみは消えたわけではない。

そしてなにより、この時代、家臣達は目上の將軍こそ乱世の時代を終わらせ、天下を取るものだと思っただけで仕えている。

ここで弱気な姿勢を見せる者に、人はついていかないだろう。

「も……………」

家康は考えながら、少しずつ、言葉を選びながら、家臣に話し始めた。

「もし……信長様が天下の座に就き、日ノ本の国を裁定することになるのであれば、それはそれで仕方がない。平和が来ることを感謝しよう」

「ほう……」

家臣たちの血管が一回り膨らんだ。

「だが、織田家とて、決して幕府を裁定出来るほどの盟主ばかりではあるまい。耐えて耐えて耐え抜けば、必ず好機は来ると私は思う。事を起こすなら、その時でよい、と、私は考える」

「成程……」

「それであれば、我々は家康様に従おう」

「うむ。半端な口を開けばこの場で口諸共首を切り落としていたところだがな」

「叛逆の意思があるのならば問題なからう」

「……………」

家臣に言葉を選んで、とりあえず家康は肩を撫でおろした。とりあえず叛逆の意思あり、と内心あれば家臣は納得するであろうということとは話を始める前から大体分かっていた。

後はその後の日ノ本の未来をどうするか、まで話すだけであった。

しかしギリギリの綱渡りではある。家康も脇に汗をかいて一呼吸おかねば次の言葉を話せない程緊張していた。

「と、とりあえずは、会食は了承する方向で……」

「了解しました」

「うむ。くれぐれも、無礼のないような」

徳川編②

そして、待ちに待った会食の日がやってきた。

「信長様、此度の会食にお呼びいただきまことに有難うございます」

「うむ、苦しゅうない。頭を上げい」

徳川家康及び徳川四天王ほか甲斐から出奔してきた一部の武将、総勢16名が此度の会食に呼ばれた。

「儂は今でも家康は儂の忠実な部下だと思っておる。此度の会食はそう緊張せず、接待を受けるつもりで受けてもらえれば嬉しい」

「ありがたきお言葉であります」

徳川四天王は信長と家康の会話に目を光らせていたが、流石にいきなり斬りかかるわけにはいかない。

「思えば儂は、天下など気にもしていなかった。畿内を平定できればそれでよいと。それがどういうわけか征夷大將軍になってくれと言われて天下人の座よ。今でも尻がむず痒くなる気分じゃ」

「そうで、ありましたか」

「もつとも、全てが決まったわけではないがな。家康はこの後甲斐を取ってくれば良いと儂は考えておる」

「ははっ、お任せを」

「ではそろそろ、ゆるりと始めるとするか。立会人、部屋へ」

襖が開き、3人の男が入ってくる。

「此度の会食の全面を取り仕切らせていただく、明智惟任光秀と申します。よろしくお願いします」

「同じく、茶人の千利休と申します。よろしくお願いします」

「渡人の横溝だ。まあ俺の料理に期待していてくれ」

「なっ……渡人ですと!?!」

「うん？ 家康よ、渡人がどうかしたか？」

「あ、いえ、特に……。しかし渡人をこの場に参加させて、よろしいものなのかと……」

「何を言うか。渡人の持つ発想と技術は素晴らしいものだぞ。儂も大いに参考になった。奴の活躍なくして、織田の活躍はなかったと言っ

ても過言ではないな」

「そんな褒めるなよ。信長」

「お主、こういう場合は『様』を付けて話すものじゃぞ…」

(どういう事だ。織田家に渡人がいたことは知っていたが、この信頼関係は一体……)

「では、我々は炊事場へ」

「うむ、光秀よ、くれぐれも腐った食材を使わぬようにな」

「ははっ、お任せください」

三人が出ていくと、家康は改めて思った。

この会食、一筋縄ではいかない、と。

炊事場はまさに芋を洗う様にどったんばったんしていた。

侍女達も額の汗を拭いながら準備の真っ最中である。

「ふむ、この汁物……もう少々塩を足してください」

「はいっ！」

利休が味見をした汁に注文を付ける。

「ひゃーはっはっはっはっ！ 俺の油鍋が火を噴くぜ！」

「火を噴いたらダメでしょう、横溝殿」

横溝が天ぷらをガンガン揚げていく横で光秀が突っ込みを入れる。

「そういえば、ルイス・フロイス殿から此度の会食に是非にと、差し入れが届いていたのですが、横溝殿、これが何だか分かりますか？」

「ん？ ああ、パイナップルじゃないか。よくこんなもの仕入れてくれたな」

「ばいナップる？ どういう食材なのですか？」

「ん、まあこれ、強いて言えば果物だよ。硬い皮を切り、中央の硬い芯を落として、輪切りにして食べる。ちよっと貸してみな」

横溝がパイナップルをまな板に置き、へたと底を切り落とす。次に硬い皮を切り、中央の硬い芯を包丁を縦に入れて落とし、輪切りにしてみせる。

「はい、出来上がり。毒見よろしく」

「ふむ、これは、鮮やかな黄色ですな。見た目からは想像も付かない代物のようで……」

「とにかく、食べてみましょう」

光秀と利休はパイナップルに口を付けてみる。

「ほう……………」

「これは……………なんとも水々しい果肉、それでいてこの強烈な香り。これがぱいナップルですか……………」

「俺もこれは好きなんだけどね。食べられるところが少ないからつつい加工物を買っちゃうんだよな」

「ふむ、果物はこれで決まりですな。危険な賭けではありませんが……………」

それから焼き物、汁物、飯、野菜と次々に料理が選ばれていく。なお、横溝作成のバターはハコが不足するため、取りやめになった。仕方ないので昼の弁当にすることにしたという。

なにせ、岐阜の八百屋には横溝の案によってキャベツやレタスのような異国渡来の野菜まで売り出されている。導入したのは横溝の案だ。

比較的乾燥に強く、丁寧に虫を取ってやれば素晴らしいものが出来る。上がるとあつて、畑が出来上がるほどである。当然安土近辺にも畑が作られる計画だ。

「まずは前菜というわけかな？」

「そのつもりであります」

会食の場に、まずは前菜が届けられた。

「異国の野菜と白髪ねぎを始めとした『前菜』でございます。ごま油に酢を混ぜたものをかけてお召し上がりください」

「……………うむ。では、いただきます」

部屋にシャクシャクと野菜を噛み潰す音が響いた。

「これが、異国の野菜ですか。随分と水々しいですな……………」

「ふむ、最初に食べるには、まあ、良いのだろう……………」

「うむ、美味しい。ごま油に酢を混ぜたものが淡泊な味に一つ入れ知恵をしてるかのようだ……………」

信長も上座にて野菜を頂いている。

「次はなんじゃ？」

「横溝殿の天ぷらに御座います」

「ほう、あれか……！」

信長の口元がにやりと曲がった。

「信長様、『天ぷら』というのは……」

「まあ見ておれ、家康」

しかし史実がどうなら家康に天ぷらとは何とも皮肉な代物である。

「待たせたな」

襖を開け、横溝と侍女が入ってきた。

「こ、これは、一体……」

家康の前に置かれたのは、本人にとっては何とも風変わりな料理だった。しかも今回は、鯛を使っている。

「白身魚の鯛をすりおろし、小麦粉を水でいた衣で包み、高温の油で一気に揚げた代物で、『天ぷら』と言う。横にある、醤油とだし汁を混ぜたものにつけて、召し上がってください」

「し、醤油……？ よく分かりませんが、む、これをこうして、こうだな」

はむっ！ 家康が天ぷらを口に運ぶ。

「こ、こ、こ、これは、何という美味さじゃ!? 震えが止まらぬ！ 皆も冷めないうちに食べるといい、ほれほれ！」

「自分はいりませぬ。三河武士の食べるものは三河のものと決まっておりますゆえ」

「……本多様、それでは流石に失礼にあたりますぞ、殿も言っているのだから皆で食べましょう」

横から松平家忠が言う。

「くくつ、相変わらず三河の武士は窮屈じゃなあ。そんな奴らを一泡吹かせてやるための会食でもあるのだがなあ、家康よ」

「す、すいませぬ。ほれ、本多、早く食わぬか！」

（ふむ、やはり家康はともかく、部下の三河武士達は一筋縄ではいかぬか。飯一つで懐柔されるほど甘い人間ではないぞ、と主張してるのかようじゃ。さて、今度はどうするか……）

「正直なところ、わたしは豪華な料理などいりませぬ。飯一つあれば十分なのです」

「ほう、つまり飯があればいいのじゃな」

「そ、そうです」

「ならあれを出そう、そろそろ焼きあがっているはずじゃ」

「は、はあ……（今、焼くと申したか。信長様は。炊くではなく、焼く……？）」

襖が開き、今度は明智光秀が入ってくる。

「お待ちしました。これより、おにぎりの配膳に入らせていただきま
す」

「お、おにぎりですと？」

「そうじゃ。おにぎりじゃ。といっても、火を通してある」

「火を？」

「はい。握ったおにぎりを炭火の上に置いた網で両面をじっくり焼
き、甘味噌を塗って仕上げました、『焼きおにぎり』です。熱いですの
で、皿に移してほぐしながら食べてください」

確かに、目の前に置かれたおにぎりには、こんがりと焼き色が付い
てある。それにこの香りは確かに焼いた味噌の香りだ。

「む、これは美味しい！」

この味には、徳川四天王からも称賛の声が出た。

「どうじゃ？ これまで米といえば、乾いた飯や兵糧を鍋で似た粥が
殆どじゃった。だが、ここにきて農達は「飯そのものを焼く」という
ことを学んだわけじゃな」

「成程。流石は、信長様……」

「いや、これも渡人、横溝の案じゃよ」

「あ、あやつが……」

「奴は日ノ本の遠い未来から来たという。農は幾度となく奴と話し、
あらゆる技術を手にしてきた。その中でも、もっとも手っ取り早く効
果がある物が「食べるもの」じゃった」

「なんと……」

「こうしてしまえば、おにぎり一つがご馳走となる。これだけでも人
を接待するに値するものが出せる。結果は見ての通りよ」

「む、むう……」

「どうじゃ？ 三河武士達よ。おまえらの食いたい『飯』は出したぞ。

感想を聞かせてほしいものじゃな」

「……………おいしゅう、ございました…………」

「そうかそうか。ならばよい。うむ」

（くっ…………おにぎり一つでぐうの音もでなくするとは、やはり織田信長、恐ろしい相手だ！）

（だがこれは確かに美味ではあった。今度城でも作らせよう）

その後も会食は続いた。

魚の骨で出汁を取った『吸い物』、魚から『岩魚の塩焼き』、肉から『鶏の照り焼き』、あらゆる料理が振舞われた。

「ふむ、流石に腹が膨れてきたのう。そろそろ利休に茶をいれさせるか…………」

「お呼びですか？ 信長様」

「うむ。会食も盛り上がってきたが流石に食いすぎた。宴もここまでにして、茶の準備をしてほしい」

「分かりました。では最後に、果物の配膳をさせていただきます」

「なんじや、まだ何かあるのか？」

「ええ。ルイス・フロイス殿からの差し入れ品をご賞味いただきました…………」

「ああ、あの珍妙な形をしたものか。あれは何じや？ 本当に食べ物か？」

「ええ。横溝殿の話では『ぱいなつぷる』という果物だとか」

「あれが果物じやと!? ほう、面白い…………是非締めには皆で味わってみようではないか」

「有難うございます。それでは、最後の配膳に入らせていただきます」
こうして運ばれてきたのは、確かに変わった黄色の果物だった。

「ほう、これが…」

「異国の果物…………」

これには徳川陣営も興味津々半分、半信半疑半分といったところであつた。

「では、いただきます…………」

家康が箸を取る。次いで、徳川陣も箸を取り、慎重に口に運ぶ。

だが果肉を一齧りしたところで、ぺつと吐き出した男がいた。本多忠勝だ。

「ぬううううううううっ！ 利休殿、これはどういうことですか!？」
「はて、どういう事とは?」

「この果物とやら、酸味が強すぎます。腐っているのではないですか!?! それに味もわけがわからぬ。さては毒を仕込みましたな!?!」
「……………」

利休は怒気をはらんで睨み付ける忠勝をじっと見つめる。

「……………いえ、腐ってなどおりませぬし、毒を仕込んでもおりませぬ。それがこの果物本来の味なのです」

「嘘を言うなあ!」

本多忠勝は配膳されたものを立ち上がり、蹴り飛ばした。

「忠勝! 少しは落ち着け!」

しかし家康の言葉も忠勝には届いていないようだ。

「……………ならば儂が毒見しよう」

その場を収めたのは、なんと信長だった。

「もしこれが腐っているというのであれば、毒が入っているのであれば、儂が食えばひとたまりもあるまい」

「信長様……………」

「しかし本多忠勝よ、此度のおまえの態度、目に余る。もしこれで何事もなかったら……………その時は覚悟せいよ」

「っ! ふんっ……………」

信長は怒っていた。それも珍しく本気で怒っていた。普段の信長なら怒声を浴びせて怒っていた。この静かな怒りは、本気の印だった。

そして信長は『ぱいなっぷる』を箸で摘み、口に運ぶ。そして、もぐもぐと咀嚼した。

「……………ほれ見ろ、腐ってもいないし、毒も入っていないではないか。……………しかしこれはなんとも水々しい果物じゃな。それでいて香りも強烈ときてる。これが異国の果物か。たまげたわい」

「なっ……………」

「……………」

徳川陣営は啞然としていた。まさか、毒が入ってるかもしれないというものを本当に食べるとは、と。

利休に対して信用がなければできない行為だ。信長様は、そこまで一介の茶人をかけているのか、とも誰もが思った。

「さあ、これで疑惑は晴れた。忠勝よ、覚悟はできているのであろうな？」

「くっ……………」

「お待ちください、信長様」

信長がまさに刀に手をかけようとしたその時、信長を止めようとしたのは他でもない千利休だった。

「なんじゃ利休よ、こやつは貴様の面子を汚した張本人ぞ」

「いえ、此度は疑惑を起こしかねない料理を出した私の責任でもあります。何卒、ご容赦を」

「ふむ、利休よ。お前はそれでよいのか？」

「斬るなら私めにしてください。それでこの場が収まるのなら、この首幾らでも差し上げます」

「言うたな……………」

信長が刀を抜こうとしたとき、その場に転がり込んできた男がいた。横溝だ。

「待ってくれ待ってくれ信長。責任というなら俺にもあるんだ。この首、くれてやるから落ち着いてくれ」

「ふん、お主は首を斬り落としても死なぬ身であろう」

「それはそうだけどさあ、頼むよ。利休殿は俺にとっても良き茶飲み友達でもあるんだ。怒ってるのは分かってる。でも、今回ばかりは気を静めちゃくれないか？」

「むう……………」

「頼む……………」

「……………」

「……………」

「ふんっ、そこまで言うなら此度の騒ぎ、全て不問としてやる。利休と

横溝は深く反省するように。そして本多忠勝、命を救われたことをありがたく思えよ」

「も、申し訳ありません信長様、此度の件、全ては上の者である、私、家康に責任があります。深く反省させますゆえ。ほれ、忠勝、お前も頭を下げぬか」

「くっ……申し訳ありません……」

「忠勝様、さすがにおいたが過ぎますよ。少しは場の空気というのを読んでください」

「そうだな、おまえは常に頭に血が昇りっぱなしだ。少しは落ち着け」
身内から庇われ、説教を食らい、何とも屈辱的な忠勝であった。

徳川編く③く

利休の茶席が始まった。

先ほどの喧騒はどこへやら、室内の空気は落ち着いている。

これもまた、横溝の発案で、琴や三味線弾きを招いて音を弾かせているからだ。

「ふむ、よい音色よのお……」

信長が三味線の音に耳を傾け、一人浸っていた。

「さあ出来ました。徳川の皆様も茶を飲んでください。茶の湯は楽しきもの。能面をもてなしたとあつては茶が勿体ないですからな」

利休が作った茶が徳川勢の目の前に置かれていく。今回は利休の発案によつて、名物などは使っていない。あくまで平等な茶席であれという、利休の考えだ。

「ふむ、では、いただくとしましょう……」

まずは家康が見様見真似で茶器をくるりと回し、少し口に含んでみる。

「ほう、美味しいですな」

「そうですか。それでこそ、茶も喜んでいるというものです。おかわりを作りますから、どうぞ遠慮なく」

徳川勢も茶を回される。しかしそこは力が自慢の田舎者。手先もおぼつかないし、苦みに眉間にしわを寄せる者もいた。

「なんじゃ、やはり徳川には酒の方が都合が良かったか？」

「い、いえ、決して、そういうわけでは……」

信長が揶揄う。

「茶菓子を用意するべきだったんじゃないかい？ 利休さん」

「ふむ、では団子でよろしいですか？ もうすぐ出来上がる頃合いです」

横溝が利休に言う。

「む、しかし……信長様は随分と渡人を買っているのですな」

「うむ。当然じゃ。奴は儂にとつて最高の部下になってくれたからな」

「またまた、俺が活躍したって俺の寿命が縮むだけだろうが……」

「渡人か……。まあ徳川にも以前いました……。あつ！」

「こら、榊原！ それは言わないけじめであったらうが……。あつ！」
信長がそのやり取りを見逃す筈がなかった。

「なんじゃ？ 徳川にも渡人がおったのか？ そりや面白いのう。どうして連れて来なかった？」

「そ、それは……。その……」

「ふん、部下に聞いても埒が明かぬか。これ、家康、そちが話せ」

「そ、それは、ああ、いえ、その、むう……。わ、分かりました」

始まりは遠江の城の近くであった。

男は怪しげな者として捕らえられたが、自分は決して怪しい者ではないと、自分に捕らえられる非はないと、意固地な男であった。

名を聞くと、男は、杉山 智一と答えた。変わった短筒を持つ、短筒使いだった。

もしよろしければ徳川の末席に加わりたいと男は答えた。頑固な三河武士は認めなかったが、家康の一存で家臣に加わった。

だが、男が活躍する場はなかった。時は、武田信玄京へと上洛。つまり、三方ヶ合戦の直前であったからだ。

家康は土足で自分の領地へ行軍する武田勢が許せなかった。その為、意地と三河武士の誇りをかけて信玄に戦いを挑むと決めた。

少し時間が経てば信長様の軍も追いつく。それなら勝機はある、という算段からだった。

だがこの結果は最悪の玉砕という形で結末を終える。家康は渡人を置いて、脱皮の如く逃げ出すしかなかった。

そして智一は武田軍に捕らえられた。

武田軍にも渡人の噂は届いていた。首を斬り落とされても死なない、恐ろしい存在だと。

だから武田軍は、普通に殺すことはなかった。普通にやって死なないなら、そやつを心を折ってしまえ、と。

拷問が始まった。杉山は目を潰され、耳をそがれ、鼻を削られ、歯を一本残らず抜かれた。

四肢を切断され、手足を茹で上がった湯に付け込まれた。手先も足先も残らず切られ、爪は剥がされた。

その一部始終を、同じく捕らえられた徳川兵はずっと見せられるしかなかった。杉山の絶叫と流れ出る血で、拷問の場は血と肉の欠片でまみれた。

杉山の傷はじわじわと再生するからこそ、この生き地獄は続いた。もう止めてくれ。許してくれ。そう言っても、武田軍は聞き入れなかった。

そして一通り拷問が夜明けを跨いで続いたところで、杉山は捕らえられた徳川兵と共に解放された。

武田軍は何故か上京することなく、甲斐へと戻っていった。この時点では、原因は不明だった。なお、この後武田軍は上杉軍との戦いで歴史的惨敗を喫し、信玄公も死亡することとなる。

家康の元へと戻った杉山は、もはや廃人となっており、「あ……ああ……あ……」と喋るだけで、食べる手もおぼつかず、失禁、脱糞が止まらず、結局今は城の牢獄に置かれている。

これが渡人・杉山智一の現在の有様だった。

しかし徳川兵や四天王は元々戦力として計算に置いてなかったからどうでもいいと考え、適当に扱い、今に至るそうだ。

「……………」

「……………」

「……………」、この、大馬鹿者があ!!!」

激昂したのは織田信長だった。

「よくも渡人をただの人柱にしおつたな！ 家康よ、それが所詮貴様の将としての限界だということよ！ 茶席はこれで止めとする！ 貴様らはさっさと帰れ！ そして甲斐を奪ってこい！」

「そうだな。俺も流石にキレそうだ。武田軍も酷いが、見捨てたあんたらも酷いよ」

横溝が家康たちを睨み付けながら言う。

「おう、当たり前だ。そもそも私は此度の会食は否定的だったのだ」

「我々を都合の良い部下などと扱いおって、我々は家康様こそ天下を

取るものと信じて神輿を担いでおる。信長よ、おまえの思い通りにはさせぬぞ！」

「言うたな。ならば同盟は破棄じゃ！ 貴様らは必ず引導を渡してくれるわ！」

「あ、あわわつわ、信長様も落ち着いてください。本多、酒井、お主らも興奮し過ぎじゃ。落ち着け！ 儂の立場がなくなるではないか！」
「……………」

（やれやれ、大変なことになっちゃったねえ……）

「横溝殿、何処へ？」

「なあに、作りかけの大量の団子を平らげてくるだけよ」

「まったく、奴らめ、あそこまで言われたら儂も後には引けんではないか！」

その日の夜、信長は風呂に浸かっていた。その横には、横溝と利休の姿もある。

「しかし、利休さんの言ったとおりになったねえ」

「いえいえ、流石に私もここまで話がこじれるとは思っていませんでしたよ」

「なんじゃと!? お主ら、裏でこっそり此度の会食に一服盛っていたのか!? 本当にずる賢い奴らじゃわい！」

「いえいえ、私はただ『ばいナップ』をお出しただけですよ」

「向こうが勝手に自爆したようなものだろ。ボンバーキングは自爆に注意と……」

「うぬぬ……」

信長の怒りはまだ冷めやらないようだ。無理もないが。

「あちら、殿、随分ご立腹のようで。私もご一席よろしいですか？」

三人が風呂に浸かっているところに、一人の女性が入ってきた。帰蝶だ。

「おや、濃姫様ではありませんか。信長様のお背中でも流しにこられましたか？」

「こ、これ、帰蝶！ 風呂に入るときは儂と二人きりの時にしろと言っ

ておるではないか！」

「いやー、布一枚の艶姿もいいもんですなー」

「こら、横溝！ 見るな！ 帰れ！」

「あらら、うふふ……」

結局、四人は同じ風呂に入ることになってしまった。信長としてはなんともこつ恥ずかしい。

「しかし、今考えるとあれじゃな、徳川がここまで我が儘とは思わなんだ」

「そりゃあねえ、今は乱世の時代、戦国の時代だ、家臣は誰もが仕える將軍が天下を取るものと思つて仕えているわけだしなあ」

「家康様とて腹の内はさらけ出したくはなかつたでしょう。が、今回は家臣が先走りしましたな」

利休は冷静に今回の会食の場を分析する。本多忠勝の態度といい、徳川家は間違いなく此度の席で『やらかし』たのだ。

「うぬぬ、奴らめ、本気で織田と敵対する気か？ 今やれば間違いなくうちが勝つぞ」

「北条家を引きずり込めば分からないけどな。まあ、それは多分ありえないが」

「北条家は身内で完全に土地と家が完成していると聞きます。表立つて行動を起こすことはないでしょう」

「うむ、確かに、北条は儂も詳しくは知らんが、あまり天下に興味がない家柄と聞いておる。徳川に手を貸す可能性はないじやろう」

ならば可能性があるのは残った武田を完全に滅ぼすのではなく、吸収し、軍に加え入れる道だ。

しかし甲斐を取るのであれば、武田は完全にただ働きとなる。果たしてこの条件を武田が飲むだろうか……？ そうは思えない。

「殿……」

横から帰蝶が声をかける。

「私は戦国の習わしはよく知りません。ですが、殿の一声が織田の声です。くれぐれも、間違いを犯さないようにしてくださいね」

「む……」

信長は茶を一口飲んだ。風呂の湯で温められて、飲みやすいぬる温になっっている。

(……儂は天魔と呼ばれた男じゃ。その一声は敵も殺すし、部下をも亡き者にする。ならば今この状況で放つ一声はなんじゃ……?)

思えば自分は部下の言葉など殆ど耳にしない我が儘な男だった。だからこそ、その一声に失敗は許されない。

(知恵を絞れ、何度も推敲して考えろ、好時魔多しと言うではないか……)

信長は湯に浸かりながら、考えて、考えて、考えて……、のぼせた。

「うつ……うつ……」

「あらら殿、湯にあたりましたか」

「しようがないなあ、利休殿、手を貸してくれ。とりあえず信長を湯から引きずりおろす」

「はっはっは、しようがありませんなあ」

「……………」

織田信長。今回ばかりは失態だった。

「まったくおまえら、くれぐれも粗相のないようにと言ったではないか！　これで織田家を敵に回すことになれば、徳川は早晩滅ぼされるぞ！」

城に戻った後も、家康は機嫌が直らなかつた。

此度の会食、信長様はこちらの腹の内を読もうとはしてくるもの、いきなり斬り殺してくることはないと思っていた。

しかし結果はどうだ。部下の激高に信長が反応し、最悪の場を作り上げてしまった。

「し、しかし……」

「しかしも案山子もないわ！　いかに精強な三河武士といえど、頭の中まで筋肉が詰まってしまったか!?　こういうのは口には出さず、事は静かに進めるものじゃ！」

「ですが、我らの渡人にあそこまで信長が怒り狂うとは思いませんでした。あのような、使えない雑魚を」

「そうじゃな。だが信長様にとって、渡人は天下の為の絶対条件だったのだろう。そのくらいあの男は珍重されていた。ええい、儂の見る目が足りなかったという事か……!」

「で、我々はどうすれば」

「最早一刻の猶予もない。武田を滅ぼし、甲斐を取る！そしてあわよくば戦力の増強を狙う！それしかなかろうて!」

「はっ、承知しました」

「だが、徳川四天王は出向くなよ。この程度の戦力、精銳が出向かずとも充分と見せつける必要があるからな。甲斐から出奔した武将と連合を組み、速やかに滅ぼすのじゃ。良いな!」

この時、徳川家康は焦った故に見誤った。

失うもののない少数の軍勢がどれだけ恐ろしいことを……。

それから数カ月が経過した。

信長は安土城の建立の動向を一度見ようと現地である安土まで赴いていた。

「ほう……」

途中までとはいえ、信長はその出来栄に一息が漏れた。安土山に造られた城は天まで届くような高い天守閣を持ち、そこかしこに石垣が掘り込まれている。

城郭の規模も高く、城の出来栄は現在の日ノ本一と言っている。居住性も充実しており、部下たちをここで休ませることもできるだろう。

自分の住居は、やはり最上階か……。ここから遠眼鏡で見る琵琶湖はさぞ美しいだろう。

「信長様、いらっしやいましたか」

「おお、長秀か、総奉行の働き、ご苦労である」

「はっはっは、おかげで久々に苦労のしっ放しですよ。秀吉様は名誉挽回とばかりにはりきっていらっしやいましたな」

「ふん、猿め、少し締め付けがきつかったか？ まあよい。一日も築城を完成させることを願っておる。精進してくれ」

「勿体ないお言葉です。ところで信長様、ここなのですが……」

長秀が設計図の一部を見せる。こういう時こそ、城主となる男の判断が必要になる時だ。

「ふむ、よい案じゃ。儂が許す。大工棟梁の岡部にはそのようにと言っておいてくれ」

「分かりました。万事、そのように」

「……………」

（思い返せば、本来この城は早すぎる築城だった。越前の加賀・一向宗と越後・上杉の牽制、それに石山本願寺の対抗の意味もあった。

だが越前は崩れ、上杉家は我が織田家の所領となり、本願寺も別の道を歩み始めた。順調すぎて怖いくらいじゃ。

ここまで順調なのは、横溝の介入のせいか……？ ふん、馬鹿らしい。たった一人の渡人が織田家以上に世の混乱を裁定などできるものか……)

「信長様、いかがなされましたか？」

「……む、いや、何でもない。ああそう、やはり、井戸や石落としなどは大目に作成してくれ。慢心は禁物じゃ。ここも戦乱に巻き込まれる可能性はあるからな」

「分かりました。城内の道も最終的には細長くしましょう。大手門の辺りには障害物を置きたいところですね」

「ああ、そうしてくれ。儂は次は城下を見てくる」

「ふむ、とりあえず城下に大きな混乱はないようだな」

「おお、織田信長様だ！」

「ええっ!! あれが織田信長様なのかい!？」

この時代、テレビも新聞もラジオもない。織田信長という男が何者なのか？ 人々に知る手立てはない、筈だった。

そこで信長は、少々こつ恥ずかしいのだが、自画像を絵師に描かせて安土に来る人々に配り歩くよう命じたのだ。

これで誰が織田信長という男なのか？ 城下で商いを始めようとする者、暮らそうとする者にはある程度顔が知れるようになった。

「皆の者、安土の城下にお来しいただき、誠に感謝しておる。儂はここ

でも樂市樂座を奨励し、関所も作らぬつもりじゃ。

遠慮なく商いをしてくれ。米や塩、油もある程度はこちらで工面するからかう」

「おお、太っ腹ですな」

「それじゃあ私は米問屋を開きましょう。飢饉が来ても堺の連中のように値段の釣り上げはいたしませんぞ」

「私はいち早く畑を手に入れましたからな。そこで取れたての野菜を並べましょう」

「俺は……どうするかなあ？」

「これっ、あんたはいつも優柔不断が過ぎるよ！」

「はっはっは」

（ふむ、皆の顔が明るい。この分では安心じゃな）

「町の周りは鉄柵で囲んで安全の保障もする。戦火を被るようなことは出来る限りさせんからな。重ね重ね言うが、安心して商いをしてくれ」

「おお、さすがだ」

「信長様ばんざーい」

「ばんじゃーい」

とりあえず信長の顔見世は大成功に終わった。

翌日、信長は岐阜へと戻ると伝えた。

しかし途中大雨に会い、近辺の宿屋で一夜を明かすこととなった。出てきた岩魚の塩焼きは美味かった。横を見ると、川の水が勢いよく下流へと流れていくのを見た。

「まるで尾張じゃなあ。あそこは川だらけで大雨が降るとすぐ増水して河川が氾濫したもんじゃ」

そういえば、横溝の奴が何か言っていたような気がする。ダム？ だっただろうか。

川の上流に造る巨大なため池で、これさえあれば川の水は一定で低きに流れ、飢饉で川の水がなくなることもない、だったか。

（要は治水工事じゃな。しかし今の織田家には流石に奴の望むくらいの見事なものは作れまいて。精々川の幅を太くするくらいか……）

「……ままならんものよなあ」

信長は雨が降りしきる夜の外を見ながら、一人茶を啜るのだった。数日後、信長は無事岐阜城へと帰ってきた。

城を空けていた頃に、特に問題はなかったらしい。ただ今年は雨の量がやや少ない。飢饉が起こるかもしれない。それだけは伝えられた。

一方、渡人・横溝は新たなものを発明していた。

何でも麦で作った酒らしい。水のようにさらさらとしていて、苦みがあるのが特徴で、ビールというらしいが、信長は下戸なので飲むのは断った。

（ふむ、飢饉の可能性、であるか。確かに尾張のように水だらけの場所ならともかく、畿内は水不足に苦しむ農家が出てもおかしくはないな）

信長は最終的な判断として、兵糧を配る可能性も示唆するとして、会議は終わった。とにかく極力土一揆は出さないよう、領民を諫めるように、と。

（まあ……までが順調に行き過ぎたわけだからな、そろそろ飢饉や疫病の類が問題に上がるとは思っておったわい）

だが数日後、それとは違う大きな問題点が顔を出した。

それは伝令役の男の口から発せられた。

「申し上げます！ 徳川勢、信濃及び甲斐に進軍。武田勢の壊滅を目論んでいたようですが……その……失敗に終わったようです」

「はあ？」

「失敗？ まことか？」

「あれ程会食の場で啖呵を切っていたにも関わらず、か」

「徳川勢も大したことありませんな」

家中から発せられる罵詈雑言。

「ふん、大方、戦力の逐次投入でもしたんだらうよ。こういうのは主力全部ぶつけてガツンとやらなきやいけないのにさ」

横溝が横から呆れたような声で感想を述べる。

まったくもって言う通り。徳川勢力を持つてすれば武田勢を討ち

取るなど造作もないと思っていた。慢心、過信、油断、増長、表現は色々あるが、どうやら徳川は此度もやらかしたようだ。

「……………」

（家康め、家臣の気持ちどころか自分の目論見すら達成できんとはな）
「それとあと、家康様から書状が届いております」

信長が書状を読む。内容はかいつまんで言うと、以前の会食の無礼は許してほしい。そして武田を叩くために援軍をよこしてほしい。この2点だった。

（あやつめ、なんと面の厚い男か……………！）

だが、ここで信長の行く道は決まった。ここまでだな、信長はそう思った。

「おい、徳川の援軍の準備をしろ。ざっと10万以上でな」

「と、殿、本当に徳川の要請に答えるつもりでありますか」

「阿呆が。勿論そんな筈ないだろう」

信長はぎっぴりと言った。

「徳川を、殺るぞ」

徳川編④

所変わって、こちらは武田陣営。

何とか徳川陣営を退けたものの、部隊はボロボロだった。

当然と言えば当然である。なにせ徳川陣営には武田から出奔したものが内通者として存在するのだ。こちらの手の内はほぼ丸裸だった。

それでも武田は何とか辛勝を収めたのである。天晴と言うべきか。

「勝頼様……」

武田に残った家臣の一人、跡部勝資が四郎こと武田勝頼に声をかける。

「……勝資よ、以前のように四郎でよいのだぞ。この戦、長引けばこちらに勝機はない。しかし討って出る力はない。最初から決まっていたのだ」

「そんなこと言うなよ。俺たちは十分に頑張っているつもりだぜ。あんなだってそうだ。此度の戦、あんたが前線に出て死に物狂いで戦わなかったら俺たちは今頃甲斐の畑の肥やしだぜ」

「ふっ……武田は他所からの略奪でこの貧しい大地を回してきたのだ。全滅も当然の報いだろう。だが、今だけは出来ぬ。皆が私を担いでくれているうちはな」

「だろう？ 喜兵衛……真田の兄ちゃんも頭回して何とか戦ってくれたんだ。今更降りるわけにはいかないよな」

小宮山友晴、跡部勝資、土屋昌恒、そして嫡男武田信勝、皆想像を絶する死地に赴いたにも関わらず、生きて戻ってきた。

鈴木主水重則と矢沢頼綱と息子矢沢頼康は沼田にて北条氏の進行を食い止めてくれた。

出奔、裏切りでボロボロにも関わらず、よくもまあ自分みたいな男に付いて来てくれると内心勝頼も思っていた。

（信頼出来る部下に囲まれる、勝頼は幸せな男だな。おかげで死線から生き延びてしまったよ……だが）

「勝資よ、今だから言うが、私は甲斐を今のようなままではいかぬと

常々思っていた。人を愛し、慈しみ、奪うのではなく与える道を歩まねば、と……。

無益な暴力を信仰させれば、人はやがて甲斐から離れる。実際、今の状況がそうだ。忠義心などないから人は平気で甲斐から離れた……。

これでは、余りにも空しいではないかとな……」

「勝頼様……あんたがあんなに悲しそうに、苦しそうに戦うのは、そういう事だったのか……」

「おそらく徳川は織田に救援を願うだろう。その時が……いや、みなまで言うまい……」

「何処へ……?」

「松姫様の所へ行ってくる。あの方だけは生きてほしいからな」

勝頼はその場を去っていった。

「……信玄公よお……あんたが道を示さなかったおかげでうちの大将はこんなに苦しんでいるんだぜ。夢の中でいいからよお、何とか言つてやれよ、なあ」

「松姫様……」

「勝頼ですか。此度の戦、お疲れさまでした。皆が帰ってきたら喜んでくれないかと、兵糧の一部でおにぎりを作った甲斐がありました。あいにく塩も入れられませんでした……」

松姫。あの信玄公の娘であり、信長の息子、織田信忠の許嫁であった女性である。

史実では北条家の領地に生き延び、その後信忠の恋文を貰ったというが、織田信長は明智光秀の本能寺の変で落命。信忠もほぼ同時期に光秀に二条を攻められ切腹している。

当時、信忠は11歳、松姫7歳の頃に婚約が成立してたと言われ、信忠も正室を迎えずに松姫をずっと待っていたと言われているが。

「今からでも遅くはありません。織田信忠殿の元へ行ってください。二人はずっと愛し合ってた仲ではありませんか」

「……………。さあ、どうでしょう?」

松姫はとぼけるような口ぶりで言った。

「あの、松姫様？」

「確かに私が信忠様の元へ行き、やがて子を産むようなことがあれば、仮に武田が滅びてもまた再興することはできるでしょうね」

「そこまで分かっているながら、何故です!？」

「嫌だからです」

「……は？」

「私、そういう武家の倣いみたいなもの、大っ嫌いなんです」

松姫は、それはもう、にこやかに微笑んだ。天然というか、これで正気というか。

「それに信忠様は織田の者なのです。今の段階では武田の敵ですから。それに格好いとは分かりませんし、気が合うとは限りませんし、もし己の欲望しか考えない御仁だったのであれば……」

「あれば……？」

「織田なんて糞くらえ、と唾の一つでも吐いてやります。そして武田と運命を共にしようかと。ああ、なんて可哀想なわたくし……」

「……松姫様」

そろそろ勝頼も呆れの限界に達してきた。

「まあ、とりあえず今は出たとこ勝負つてところですね。勝頼は次の一戦も頑張ってください」

「は、はあ、分かりました。では、これにて失礼……」

勝頼は去っていった。

そこには夜空を見上げる松姫がいた。

「……お父様、どうして松は女なのでしょう。男なら皆と共に戦うことができたのに……どうして……」

叶わぬ願いを一人星に願う松姫だった。

それからおよそ一か月が経過した。

徳川は織田に戦力の増強を希望。信長はそれに答える形となった。俗にいう、『長篠の戦い』である。

といっても、堀も掘ってなければ三段撃ちも必要ない。ただ一方的

に何倍もの勢力で蹂躪するだけの、つまらない戦だった。

「家康、来てやったぞ」

「おお信長様、お待ちしておりました。いやはや情けないことに先の戦いでは不覚を取りまして、信長様に助力を願おうかと……」

「そうじゃな。お主は情けない。会食で言つたな。それがお主の将としての限界だと。少しは反省するのじゃな」

「は、はい……（くそつ、信長め、徹底して上から目線か……!）」

「まあ我々はあくまで後詰めとして参加させてもらう。それで構わんな?」

「わ、分かりました。徳川の意地、とくにご覧にいれましょうぞ」

（くそつ、織田はあくまで高みの見物ということか! 一体なにをしに来たというのだ!?)

この時の戦力は、徳川5万、織田10万、対して、武田は戦える負傷者含めておよそ8千。

戦力差は明らかだった。

「申し上げます! 織田陣営、戦力およそ10万、後詰めとしてこの戦に参加するものと思われます!」

武田側の伝令役が大急ぎで帰ってきた。

「10万か……!」

「いよいよ、いけませんな」

参謀に付いていた真田昌幸が絶望しつつある自陣を見つめる。

なお真田昌幸が家督を継ぐのは長篠の戦い以降なのだが、これは長篠とは程遠い戦なのでこのまましていく。信綱? 昌輝? 知らんがな。

「うむ、喜兵衛、いや、昌幸と呼ぶべきだったかな」

「こんな状況です。呼び捨てで構いません。ただ、昌幸と呼んでくれたのは素直に嬉しいですな」

「……皆をここに集めてくれ」

「皆よ、武田に付いて来てくれた勇士達よ!」

武田勝頼の言葉に、一同が注目する。

「状況は、はつきりいつて絶望的だ。だが、心まで絶望することはない。私がそうだ。こんな状況なのに、心は冬の雪のように透き通って

いる。

今こそ勇気を振り絞れ。例えあの世に行ってもこう言える。戦って死んだと。友を、家族を、隣人を守って死んだと。

私は武田の子として生まれた。辛く、苦しい、山岳を登るかのよう
に険しい道だった。それでもおまえ達を見捨てることはできなかった。
それが武田の矜持だからだ。

今一度思い出せ。信玄公の言葉を。人は城、人は石垣、恨みは敵、情
けは味方。父上の言葉は今も人の心と甲斐に脈々と息づいている。

武士の魂、見せてやろうではないか！ 想いを胸に！ 勇気を足に
！ 誇りを腕に！ ここに、我らの心は一つになるであろう！」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！

勝頼の鼓舞に、一同が吠える。

皆とて状況が絶望的なのは分かっているのだ。しかし玉砕で散る
のも悔しい。だから勝頼は人を守って死んだんだ、と言った。あの世
に誇りを持っていけると言った。

(ふっ……我ながら酷い将もいたものだ。死地に赴く覚悟と死ぬ覚悟
は違うというのに……)

「おまえ達に伝えておかねばならないことがある。今一度耳を傾けて
くれ！」

今度は真田昌幸が叫ぶ。

「我々は織田とは決して戦わない。徳川のみと戦う。それならば勝機
はある。そして織田が動き出したのを見計らって、織田に降伏勧告を
出す！」

一同が驚愕する。

「もう一度言う。織田とは戦うな。徳川のみと戦え。それが勝利の鍵
だ！」

この時、真田は一つの策を考えていた。戦力差が圧倒的な時、それ
を覆すにはどうしたらいいか……？

向こうは圧倒的物量差をもって巨大な石の如くこちらを蹂躪しよ
うと迫ってくるだろう。

ならば、包囲戦ならいけるのではないかと。

そう、はるか昔、活躍した伝説の名将・ハンニバルのカンナエを考えていた。

それでもかなり厳しい綱渡りではある。果たして8千で5万が包めるのかは未知数だ。しかし策は昨日徹夜して考えてもこれ以外見当たらなかった。

包めなくても駄目、織田が早期に動いても駄目、三河兵に風穴を開けられても駄目、成功確率はおよそ1分に等しいだろう。だが、真田はその1分に賭けた。

「天よ……願わくば武田に恩恵を……！」

かくして、戦は始まった。武田は両翼を深く、徳川は単純な前衛を厚くした足軽中心の布陣だった。

グーとチョキが相まみえれば、勝つのはグーで決まっている。武田勢は一刻も早くパーに変えなければ勝機はない。

幸い、前衛は跡部勝資と小宮山友晴が頑張っている。槍で武装した足軽部隊の突き合いは、まずは武田に軍配が上がった。

しかし武田はここから陣形を変更しなければならぬ。戦中を縦横無尽に動き回らなくてはならないのだ。層は次第に薄くなっていく……。

「我こそは武田家嫡男武田信勝！ 若輩者と思うのならばかかってくるがいい！」

「おお、信勝殿はりきっておられる。ならばこの勝頼、真正面で立ち向かうほかないであろう。さあ来るがいい」

勝頼はいつもの如く最前線で戦っていた。極めて危険な、いや、無謀な立ち回りである。しかし戦力に乏しい武田勢では後ろに座って戦局を見つめている暇などない。

（大丈夫だ……。喜兵衛なら必ずやってくれる。信じるのだ。父上が我が目に等しいとまで言った男の戦術を……！）

「信長様、戦局はまずは武田有利で始まったようでごさる！」

高台の木の上で遠眼鏡で戦局を見ていた秀吉が叫んだ。

「……ふん、だがすぐにボロが出るだろう。結局、戦は数よ。ましてや武田は負傷者も人数に入れているのであるろう？　ならば後から体力が持たぬ者が出る筈だ」

「まったくもって殿のおっしゃる通りですな。この戦、武田に勝ち目はないでしょう。普通ならば……」

「そう、普通ならば、な」

「信長、そろそろ行くかい？」

横溝がウズウズしだした。織田勢も戦がしたくて号令を待っていた。なにせ久々の昇給首を取れる好機である。

「ふん、ここで儂らが動き出したら両陣営はさぞ驚くじやろうなあ。よし、やるぞ！　法螺を吹け！」

ブフオオオオオオオオオオオオ！　ブフオオオオオオオオオオオオ！

「全軍、突撃開始！」

徳川編⑤

「な、何事か!？」

「敵襲です！ 織田がいち早く動き始めました！」

「なんじゃと!? くっ……こうも早く動くか。織田信長……!？」

真田の背中に一筋の汗が垂れた。最早ここまでか。開始早々諦めの覚悟をしなければならぬとは、天はやはり残酷なものか、と。

だが、織田軍の動きを見た瞬間、真田は思いがけない好機を手にすることになる。

「あれは……。ど、どういうことだ。何故、徳川と織田が戦っているのだ……!？」

だが迷っている暇はない。真田は至急伝令を出した。

「これより、我が武田軍と織田軍は合同で徳川軍を叩く！ 挟撃だ！

挟撃を行うのだ！ 早く！」

「は、はい！」

「……これは、僥倖、なのか？」

「徳川軍は精強な軍勢だ。ぬかるなよ！」

「勿論でござる。昇給首をたんまり奪ってくるでござるよ！」

「続け続け——！」

「おらおら、年末の魔物のお通りだ！ ダメジャー2でも魔法少女アイ参でも好きに持ってけこの野郎！」

「な、何事か！」

「大変です家康様、織田軍が我が徳川軍に強襲、背後を取られ、我が軍は混乱しております！」

「何だと……!？」

「更に武田軍はあつという間に陣形を立て直し、挟撃の態勢を取りました。このままでは危険です！」

「くっ……信長……織田信長あああつ!!!」

戦局は瞬く間に変化した。なにせ織田軍10万が背後から突撃をかけてきたのである。

更に前方には武田勢が態勢を立て直している。完全に挟まれた状

態になった。

野戦でもつとも効果の高いのは追撃戦と包囲戦だと言われている。織田は10万の軍勢を持って徳川を囲み始めた。仮にこの包囲が完成すれば、逃げている隙間はなくなる。

前方を叩けば後方から叩かれ、後方に対応しようとすれば前方の敵から攻撃される。左翼を攻撃すれば右翼から攻撃が来る。その逆も然り。

そして、四方八方に気を配れば四方八方が手薄になる。

徳川勢は完全に戦場から孤立してしまった。

「おのれ、織田め、我々を裏切るとは、この卑怯者があつ……!」

「何を言うか、会食の場で啖呵を切ったのはそもそもお主達ではないか。こうなるとは思わなかったのか?」

「くっ……!」

「腹は切らさぬ。この場で死ぬがよい」

「黙れ! この井伊直政、そう簡単にやられはせぬわ!」

「ならば一個部隊の敵を殲滅した後、奴を殺せ! 貴様には孤独な死がお似合いだ!」

「貴様らあああつ!」

付き添いの足輕を殲滅した後、槍数十本で串刺しにした後、首をはねた。

井伊直政の最期、まずは昇給首を取ったのは滝川一益だった。

「ふふ、久々の戦もいいものだな。安土城の建立をしている丹波殿にもいい土産話が出来そうだ」

赤備えの井伊に鮮血の結末とは実にいい土産話になりそうだ、滝川はそう思った。

しかしここで徳川も負けてはいない。徳川勢である意味最凶の男が出しやばる。本多以上の戦鬪狂、水野勝成が。

「フン、なにが織田だ。俺に言わせれば所詮は烏合の衆よ。徳川に歯向かうのなら俺が全員殺してやる!」

「ほう……なら俺が相手をしよう」

ここで織田の切り札が動く。信長が、万が一奴が動いたらでしやば

るな、とまで言わせた男。渡人・横溝由紀である。

「貴様が織田の渡人か。信長に随分可愛がられているようだが、俺は容赦せんぞ！」

「命令を全く聞かない単細胞だと聞いた……。そんな阿呆が俺の首を取れるかな？」

「ぬかせ！」

水野が間合いを詰める。横溝は激痛に耐えながらクリムゾンで射撃を行う。しかし強い痛みが、クリムゾンの照準をズラす。弾は当たらず、水野を間合いに入れられてしまう。

「馬鹿め！ 貴様は終わりだ！」

水野の刃が横溝の左肩口から腹部をバツサリと斬り落とす。

正直、水野は勝った！ と思った。しかしここからが本番なのが渡人戦である。

「……………だからどうだというんだ？」

「なっ…………！」

そう、渡人はそう簡単に死にはしない。戦場においては無敵の盾である。しかし徳川の渡人のように心を壊されては意味がない。

横溝の持つクリムゾンは持ち主の精神を蝕み、狂わせ、最終的に死に至らせる呪われた銃である。

だからこそ持ち主には絶大な精神力を問われる。どれだけ痛くても、痛いと言ってはいけないほどの。

「戦だけに狂うようじゃ、俺には勝てないなあ…………」

横溝は残った右腕で腰の刀を抜き、お返しとばかりに肩口から腹部までバツサリと斬り落としてやった。

「ぐああっ……………がっ……………!!」

「中々の手練れだったが、相手が悪かったな…ああ、そうそう。お前に伝えておかなければいけないことがある」

「な、何だと……………!?!」

「上杉の渡人を殺したときにクリムゾンがまた進化してな、この際だから使つてやるよ。クリムゾン・ボムファイア！」

横溝は片手でクリムゾンの爆弾が仕込まれた弾丸を水野の腹に打

ち込む。そしてそれに追撃の一発を放つと、水野の体はしめやかに爆発四散、肉片が飛び散って絶命した。

ゴウランガ！ おおゴウランガ！

「横溝殿！」

「大丈夫ですか!?!」

負傷兵の手当てをしようとした兵たちが集まってきた。

「……あー、やれやれ。……やはり再生速度が落ちてるな。俺も耄碌したもんだ」

本人はいたっていつも通り、和やかに笑っていた。

包囲は着々と完成しつつあった。

織田軍が包囲を行おうとしているのを知った武田軍は挟撃を行うと同時に両翼に軍を展開し始めた。最初は8千という絶望的な数であったが、織田が徳川を食うのであれば問題は無い。

「騎馬隊を再編成しろ！ 負傷した者は下げてよい！」

「急げ！ ここですでに足りない恰好を見せては、徳川の次に我々が食われるぞ！」

勝頼と昌幸が伝令を出す。この好機、逃しては勝ち目はない。しかし勝ちの勝率は未だ1分、成る道はまだ先だ。

そして戦場において、好事魔多しとはよく言ったものである。

手薄な武田軍を食い破り、挟撃を破砕しようと、一人の武将が武田軍の前に立ち塞がった。

「随分と苦労しているようだな。武田勝頼」

「っ！ おまえは、徳川軍一の武将と讃えられた、本多忠勝！」

「いかにも。おまえ達の思い通りにはさせんと、徳川様から勅命を言い渡されてきたわい」

なお、先日の会食で一番やらかしたのもこの男である。よく信用があったものだ。徳川家康もやけになったか？ それともこの状況を打破するなら誰でもよかったのか？

「拙者、本多忠勝がお相手申す。武田勝頼よ、剣をとるがいい」

「……。良かろう。この武田四郎勝頼が相手をしよう」

「勝頼様、いけません！　あなたが死んでは武田軍は瞬く間に瓦解しますー！」

「ここは退いてください。一騎討ちなど御止めくださいませ！」

「いや……、私は、逃れられない。やらせてくれ、皆よ！」

「勝頼様……！」

確かにここで戦局を一変させかねない一騎討ちなど愚の骨頂ではある。

だが、勝頼は、今、ここで、この男の首を、取らなければいけないと分かっていた。

何故なら、ここで勝たなければ武田はどのみち織田によって滅ぼされるだろう。しかし戦って勝ったのであれば話は別。信長は必ずこの事を評価してくれる筈。勝頼はそう思った。

「あいにく拙者には時間がない。ものの数分で終わらせてくれる」

「どうかな、忠勝殿、増長は死に繋がるぞ」

（……父上、兄上、甲斐の民達よ、私に力を貸してくれ……！）

（拙者は負けられぬ！　私には徳川の命運が掛かっているのだ！）

「参るううううううっ！」

「はあああああつあつー！」

この戦の一番が始まった。武田勝頼VS本多忠勝。

本多忠勝は性格は別にして鹿の角に見立てた兜を被り、戦場を縦横無尽に暴れぬいたことで知られる稀代の猛将である。

対する勝頼はこの戦が長篠であれば織田と徳川の連合軍に大敗し、歴史の影に埋もれたまま、血みどろになつて最期を迎えた悲運と哀愁の武将である。

その背景には大きな差があった。この勝負、誰もが本多有利と思っていた。だが、この不利が覆る大事が起こる。

「勝頼様ー！　頑張ってくださいー！」

「お前、いきなり何を！」

「いや、この勝負重要なのは何をどれだけ背負っているかだ。我々も勝頼様を鼓舞するぞー！」

「勝頼様ー！　頑張れー！」

「勝頼様——！ 負けるな——！」

「勝頼様——！ 頑張ってください——！」

武田軍が大きな声で勝頼を必死に応援する。その声援に答えようと、勝頼の刀を振るう力に魂が乗った。

（有難い……。この声があれば百人力じゃ！）

（おのれ、勝頼め、調子づきおって……！）

激しい攻防が続く。忠勝の槍さばきに苦戦しながらも、勝頼は持っていた張り小手で、一撃の機会を待ちながら攻撃を必死に凌ぐ。

周囲からは勝頼への必死な声援が飛ぶ。この声は、間違いなく周囲の者たちが勝頼を侍大将と認めた証拠である。

そして、遂に、勝頼に好機がやってきた。

態勢を崩しながらも槍で応戦しようとした忠勝の力のない槍を小手で弾き返し、刀の突きが忠勝の喉笛目掛けて迫る。

「くっ……！！」

「いけえええっ——！」

ザスツと鈍い音がした。勝頼の突きは忠勝の喉笛を深く突いた。

動脈を切られ、喉からおびただしい鮮血を吹き出し、苦しむ忠勝。

「……！！……！！……！！」

忠勝は声帯を切り裂かれ、もはや喋ることも出来なくなっていた。

そして、勝頼に向けて、にやりと笑った。その笑いが何を意味するのか、戦った勝頼のみが知っていた。

「……！！……！！……！！」

忠勝は暴れるような振る舞いで鎧兜を脱ぎ捨てると、馬から降り、脇差を深々と己の腹へと導いた。

「……本多忠勝、見事也——！」

勝頼は忠勝の首を渾身の一撃で刈るように斬った。

それが、猛将本多忠勝の最期であった。

ワアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！

付近からは勝頼の勝利を讃える声援が沸き起こった。

しかし本人は勝利に酔いしれる余裕はなかった。それだけギリギリの勝負だった。

「お前たち、戦いはまだ終わっておらぬ、さあ、最後の仕上げじゃ！」
「は、はいっ！」

「うぬ、うぬぬぬっ！ な、何という事じゃ……！ クソツ！ クソツ
！」

包囲陣が完成し、もはや逃げる隙間など何処にもなくなった戦場の中央で、徳川家康はただひたすら歯ぎしりしていた。

時間が経過するたびに我ら三河の猛将たちが悉く撃ちとらえられていくのを伝令役が報告するたび、もはやどうにもならなくなっていくた。

「馬鹿な……！ 儂の部下が……！ 三河の精鋭部隊達が……！ こんなにも……！ クソツクソツ！」

「家康様、いかなさいますよう！ 我が軍、残りおよそ500、もはや戦鬪の続行は出来ません！」

「ふざけるな！ 最後の一兵まで奮戦せよ！ この徳川家康のために戦えることを、無上の喜びとせよ！ さあ、行け！ ほら、行け！」
「し、しかし……！」

「しかしも案山子もないわ！ さあ行け、行って死んで来い！」

「い、嫌です！ 自分は死にたくありません！ あなたに付いていくのはこれが最後です！ 我々は降伏します！」

「貴様らあ!!」

それが、狸と呼ばれた家康の最後の命令であった。

家康は捕まった。

「無様なものよのう、家康」

「織田信長……織田信長あ……！」

「おうおう、狸が粗末なちんちんではなく顔を赤らめておるわ。まったく、お主は最後まで醜態を晒しておるのう」

「くそっ……！」

戦場のど真ん中に家康は縄で縛られ座らされていた。家康からすれば屈辱的な姿ではある。

「父上……」

信長の息子、秀忠も信長の側にいた。今日の秀忠は榊原康政、酒井忠次といった徳川四天王を討ち取った獅子奮迅の大活躍であった。

「秀忠よ。よく見ておけ。捕虜がどうなるかをな」

「せ、切腹させろ……！ もしくは辞世の句でも読ませろ！」

家康は言う。

「阿呆が、人ならともかく、狸にそんな温情を与えらると思つたか。貴様の逝く先は既に決まつておるわ」

「何だと……!?!」

「こやつに油をかけい！」

言われるまま、部下は家康に油を塗りたくる。

「貴様には切腹も辞世の句も似合わぬ。生きてまゝ火葬にしてくれるわ。火を付けろ！」

「信長あああああつ！」

火が付けられた。家康はその場でのたうち回った。油のせいで、よく燃えた。

「お、覚えておけ信長あ！ この徳川家康……何百年と続き、織田家に崇めてくれるからなあ……!」

「かっかっか、この天魔を呪い崇ると申すか！ 面白い、楽しみにしておるぞ、家康！」

「信長あああああつ！」

これが、徳川家康の最期であった。正史であれば最後に天下を取る筈の男の、あまりにあつけない最期であった。

「しかし信長、おまえさん、本当に火炙りが好きだな」

「かっかっか、横溝、褒めても何も出ないぞ。かっかっか！」

徳川編⑥

戦いが終わり、織田軍と武田軍が会合する時がやってきた。

武田軍からすれば、こちらを滅ぼされかねない緊張の会合である。「初めまして。武田四郎勝頼と申します。此度の野戦、結果的に我々を救っていただき感謝しております」

「苦しゅうない。儂が織田前右府信長である。まあ楽にしてよい」

楽にしてよい、とは言われたが、勝頼からすればとても楽に出来る状態ではなかった。なにせ織田は実質徳川家を滅ぼしたのだ。ならば勢いに乗って武田も、そう考えてもおかしくはない。

「……しかし、分かりませぬ。信長様は何故徳川家を裏切ったのですか?」

「ん、それは簡単な話じゃ。徳川と武田を天秤にかけて、武田を取った。それだけじゃ。他に何かある?」

「なんと……。では信長様が武田に求めるものとは何でしょう?」

「ん、そうじゃなあ……」

あいにく、武田に出せる条件など殆ど残っていない。強いていえば信濃の割譲だろうが、そんなものは武田を滅ぼせばすぐにも手に入る。

(やはり、武田もこれまでなのだろうか、せめて戦ってくれた兵士達の命だけは救ってやりたいが)

「うちの信忠とそっちの松姫と婚姻の儀を結びたい。求めるものは以上じゃ」

「え……っ?」

これは流石に驚いた。信長という男は、領地には興味がないのか?

勝頼はそう思った。

「たった、それだけですか?」

「ん? それだけじゃよ。なにせ儂らは徳川の領地、三河、遠江、駿河三国を丸々奪えるんじゃからのう。それ以上他にいらん」

「は、はあ……」

「武田は改めて甲斐と信濃を治めるとよい。何なら、米と塩も融通し

てやる。問題なからう?」

「むむむ……分かりません。何故そこまで破格の待遇を? 私には理解が出来ません」

「あーそのことかあ……」

信長は頭をぽりぽりと搔いた。

「いやな、ここだけの話、義昭公から、「同じ源氏たる武田に憐憫の情をかけてはくれぬか?」と言われててなあ。まあ、そういうことじゃ」

「なんと……」

「まあそういうわけだから、これまでの事は水に流し、同盟を結ぼうと思う。異論はないな?」

「勿論です。この武田軍、織田軍の末席に加えさせていただきます!!」
勝頼は織田の破格の待遇に気を良くした。とはいえ、信頼を崩せば戦場でも裏切られると分かっていた。此度の徳川のように。

だがこれだけの事をしてくれたのだ。勝頼も男だ。織田を支える一部になつてやろうじゃないか、そう強く思ったのだつた。

(ふむ、とりあえずは安心か……。しかし織田信長という男、2国を取るより3国の方が都合がよいとは、強欲なことよ。武田もまだまだ緊張状態が続くようだな……)

その光景を見ていた真田昌幸だけが、冷静に事を見ていた。なにせ、甲斐は未だボロボロなのである。これは苦勞しそうだな、と。

そしてここからはラブラブ(?) イベントである。

「松姫!」

「まあ、あなたが、織田信忠様でいらっしやいますか?」

「よくぞ生きていてくれた。こうして会えるなんて、思わなかった!」

信忠が松姫の手を取る。しかし松姫は、

「くんくん、血の匂いがしますね」

「え、あ、こ、これは、戦場からすぐ来たから……」

「でしたら、是非温泉に入ってきてください。甲斐にはいい温泉があるんですよ。ああ、勿論お湯代は甲斐の復興のため徴収しますけど」

「あ、ああ……」

「そしてその後は……ああ、獣と化した信忠様に辱められるのですね……ああ、可哀想なわたくし……」

「ま、松姫……？」

「信忠様、子供は3人ですか？ 5人ですか？ あまり求められるとわたくしも腹上死してしまいますので程々に」

「……………」

「わたくし、武家の倣いみたいなの、嫌いなのです。信忠様はそんな卑劣漢ではありませんよね？」

「あ、ああ、も、勿論。ちやんと、愛するから、松姫は何も心配する必要はないから……」

「有難うございます。では婚姻の儀の前にするのですね……ふふ……」

「……………」

(あ、そうだった。松姫の性格を信忠様に教えるのを忘れていた……)(まあいいではありませんか。あれはあれでよい伴侶になるでしょう)

その後、まあ後日談になるのだが、松姫は早速男の赤ん坊を産んだという。そりやもうずっこんばっこんである。信忠様も好きよのう……。

その後、信長は本格的に徳川領地侵攻を開始する。もはや将はいない軍隊である。次から次へと降伏した。

そして三河の城を攻め落とした時の事である。

なんとこの城に、渡人・杉山智一が地下牢にいと聞いて早速信長と横溝は行ってみた。

「臭いな……」

「臭いな」

地下牢は糞尿の臭いで酷いことになっていた。火薬の材料になりそうである。

「いた、こいつか……」

地下牢の最奥、男の姿はあった。糞をそこらにし、あ、ああ……と低いうめき声を口にし、涎を垂れ流し、目は虚ろ。まるで麻薬中毒者かと思うくらい哀れな姿だった。

しかし男は信長たちの姿を見て更に動転する。懐の銃を取り出し、今にも発砲しようとしたのである。

「信長、下がってろ！」

「む、分かった……！」

横溝と杉山の目が合う。

「へえ、デザートイーグルか。いい銃持ってるじゃん」

「あ、ああ、あああああああつ！」

杉山は銃を発砲した。

一発、二発、三発、そのうち一発は横溝の肩に命中したが、それ以外はまるで狙っている様子もなかった。

いや、狙ってはいたのだ。狙ってはいいても気が狂いすぎて照準がまるで合っていないのだ。あまりに、あまりに哀れである。

(信玄公は酷いことをしたなあ……)

「……ちっ、流石はマグナム弾だ。痛いな……」

「……横溝」

「ん？」

「……楽にしてやれ」

「ああ、そうだな」

横溝がクリムゾンを構える。杉山は怯えていたが、銃を撃とうとはしなかった。

「あばよ。できればおまえさんとは、友達になりたかったぜ」

ズドンッ！

クリムゾンの一撃が、杉山の眉間を貫いた。そして体は崩れ、銃と共に土くれとなり、そこには何も残らなかった。

「終わったのか？」

「ああ。でもな、あいつ、かすかにこう言ったんだよ。『ありがとう』って……」

「死のみが救いの道か……哀れなものよな」

「まったくだ。信玄入道も地獄で精々反省するといひぜ……………うっ!!」

クリムゾンが紅く輝いた。渡人を殺した罰を与えるために。

「ぐっ……………うううううっ……………ぐあっ……………つつつつ! ……うあああっ! ……あああっ!!! ぐあっ! あああっ! あああっ! ひいつ! ううううっ……………ぎぎっ!!! あああっ!」

全身の神経が逆立つようにうねった。血液はごぼごぼと沸騰し、毛穴を含めた穴という穴から蒸気となって吹き出す。

脳がミシン針で裁縫されるように貫かれ、四肢は破裂するかのよう痛み、眼球ははじけ飛ぶ錯覚に襲われる。

何も見えない、何も聞こえない、何も喋れない、その中でただ全身を覆う強烈な激痛が横溝を絞るように包み込んでいた。

「よ、横溝!」

「来るな! 信長! うっ、ぐぐぐうううっ……………!! がああああああああああああっ!」

強烈な激痛の中、信長の声が聞こえたような気がした。

そして毛穴から噴き出た蒸気がようやく収まりつつあったその時、倒れこんでいた横溝がふと呟いた。

「う……………うう……………、俺は、生きて、いるのか?」

「横溝、お主、その姿……………?」

「えっ……………?」

「か、鏡を持てい! 今すぐに!」

「は、はいつ!」

「どうしたんだよ、信長?」

「お主、分からのか……………?」

「も、持ってきました。手鏡ですが、よろしいですか?」

「充分じゃ。ほれ、横溝、お主の顔を見てみろ!」

「な、なんじゃ、こりゃあ……………」

横溝は生きていた。強いてさつきと違うところがあるとするれば、

総白髪の人老のような姿になっていたことか。

「……………。は、はは、なんだよこれ、これが俺の姿だったのか? ふ

ふふ………くくく………はーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!!

そうか、クリムゾンよ、いよいよ俺を殺しに来たってか!? こりや傑作だ! はっはっはっはっはっはっはっはっはっ!!」

「横溝………」

地下牢で老人のような姿のまま笑う横溝を見ながら、狼狽える織田信長であった……。

毛利編①

その日、京の都から随分装飾が鮮やかな、一言で言ってしまうれば雅な屋根付き馬車が数台出発した。

町人は随分と見惚れ、きつと中には相当位の高い人が乗っているに違いないと誰もが思った。

それもそのはず、中に乗っていたのは日ノ本の頂点である、天皇。
正親町天皇その人である。

事の発端は、信長が征夷大將軍の官位讓渡の儀式を築城が完成したばかりの安土城で行いたいという意向を天皇が飲んだことである。

天皇が京から出るのは極めて異例なことではあるが、信長は、天皇専用の部屋も作ったため是非お越しく下さいと言ってきたので天皇はそれを許諾した結果となる。

横には、現征夷大將軍である足利義昭公も乗っている。

道中は多少長くなるだろうが辛抱してほしいと御付きの者からは言われていた。

「……しかし、あれじゃな、儂は信長が征夷大將軍になるとは思わなかった」

「そうなのですか？」

「うむ。征夷大將軍は武家の位としては高いが朝廷での官職としての位はあまり高くはない。果たして、信長がそれを望むものかとな」

「成程……。正親町様はそうお考えになっていたと」

「そうじゃな。武士の台頭によって公家の時代も終焉を迎えた。あの男が天皇を大事にするかは未知数じゃった。…延暦寺の件もあるしな」

「……あれは私自身が逆賊として討伐を命じました。正親町様がお考えになることではないかと……」

「そうじゃったな。政権を武士に渡す……それはつまり武士がその先、少なくとも百年はその時代を動かすということじゃ。これですます公家衆は肩身の狭い時代になるわけだ」

「……………」

征夷大將軍になってほしい、そう頼んだのは他でもない横の義昭である。果たして、自分の判断は間違っていたのか、何度も考えた。

しかし答えは出なかった。結局、義昭は自身が自由になることだけを望んだのだ。この度の譲位は公家衆にとどめを刺す行為になるかもしれない……。

「まあ、お主がそう苦しむことはない。お主は十分に頑張った、儂はそう信じておるよ」

「勿体ないお言葉であります」

義昭はとりあえず一安心した。

「……儂もこのところ体調が悪い。これが、儂の最後の仕事になるかもしれない」

「なんと……」

「お主と同じ、儂も腸に一物抱えているようだ。お主との違いは、……もう長くはないかもしれない、ということだ」

「そんな事を……」

「出来れば、信長に譲位の依頼を出しておきたいのだ。誠仁親王さねひとのな」

「信長は、受けるでしょうか？」

「儂は受けると考えておる。あくまで、希望的なものではあるがな」

「遂にこの時がきたか……」

安土城天主、織田信長は安土城の最も上部で琵琶湖を遠眼鏡で見ながら気を落ち着けていた。

ここまで来るのは長かった……。

だがそれにも増して辛いことが何度もあった。

安土に拠点を移して以降、信長は織田家を中心に大々的な構造改革を行った。

その一番目に行ったのが、家臣であった佐久間信盛や林秀勝の所領の没収だった。

結局、最後に頼りになるのは力のある親族だ。そして土地は有限であり、貴重なものだった。だから何としてでも所領の没収と親族への

分配はやらなければならぬと信長は考えた。

だが、当然佐久間らは反発する。

「そんな……我々が何をしたというのですか!？」

「提案に乗らなければお前たちは追放だ。文句は言わせん」

「織田家の為に尽くしてきた結果がこれだというのですか!？ 私は納得がいきません!」

「落ち着け、林。信長様にはどうやらお考えがあるようだ」

「佐久間様!？」

佐久間はそろそろ家老の座を降りるのではないかと噂されていた。それだけに此度の所領没収には何か一言あるようだ。

「聞かせていただけますかな？ 信長様のお考えを……」

「言わぬ、と言っただらどうじゃ?」

「それでも聞きとうございます。ひよっとしたらこれが信長様への最後のお願いになるかもしれないのですから」

「……………」

信長は一呼吸置いた。

「……儂は、これほどまでに日ノ本の国が荒れたのは、つまるところ幕府に大きな力がないからだと考えた」

「ほう……………」

「室町幕府初代將軍は所領の大盤振る舞いをしてしまったと言われている。それゆえに乱世の世、詰まるところ、国盗りの世は始まったのではと考えた。」

しかし土地は有限だ。所領には限りがある。それを儂の息子たちに分配しなければ、新しく出来る織田の幕府も大きな力を持たず、再び国は荒れる。そう考えたのじゃ」

「成程。確かに理屈は通つてますな。その為に、何としてでも一部の家臣の所領を奪わなければならなかった、と……………」

「そんな……他に方法はなかったのですか!？」

林秀勝は信長の言葉にまっこうから反発する。

一方で、佐久間信盛は冷静に場の空気を読みながら信長の言葉を聞いていた。筆頭家老の座は伊達ではない。この程度の言葉、自分の中

で咀嚼できねば今の地位には付いていない。

「佐久間よ。儂の言葉は伝えた。さあ、どうする？」

「……………ふむ、分かりました。この佐久間の所領、信長様にお渡しいたしましょう」

「佐久間様……………」

「林よ。おまえの憤慨する気持ちも分かる。だがここは儂と運命を共に出来ぬか？」

「そ、それは……………」

「昔、誰かが言っておりましたなあ。信長様の強さは、どこまでも非情になれることだと。敵にも、味方にも……………」

「……………」

信長は覚えていた。あの時は頭に血が昇ってはいたが、その言葉、しかと頭に焼き付いている。

「私は信長様の敵にはなりたくありません。ですが、これが縁の切れ目です。私は織田家から追放ということでもよろしいですか？」

「う、うむ…………。じゃが佐久間よ、お主これからどうする気じゃ？」

「そうですねあ、安土の城下で団子屋でも開こうと考えております。隠居先にはいい判断かと」

「わ、私は、正直、まだ納得はいきません。ですが、信長様の敵にもなりたくありません。…………是非もなし、です。私も追放をお願いします。城下で呉服屋でもやりますかな。はあく」

こうして、武士から商人に鞍替えすることを決めた佐久間と林は追放という名目で所領を没収された。

ここは信長本来の非情さが出た形になったわけだが、信長は佐久間のあの言葉が耳から放れなかったという…………。

(…………横溝)

そして構造改革2つ目が、明智光秀の隠居の薦めであった。

それはお互い良き日和の中、庭を見ながら始まった…………。

「…………よい日和ですなあ、信長様」

「うむ、まあな……………」

信長は正直、この言葉を光秀に伝えるべきかどうか迷っていた。しかし、ここは奥歯を噛み締めて耐えてでも伝えなければならぬと考えた。

「光秀よ……」

「はい……」

「……お互い、年を取ったものじゃなあ」

「……ですな。私も、鬚を結えなくなって久しゅうございます。なのに、所領の丹波の民達はそれはもう我が儘でして。なんとか治水工事に勤しんだりして緊張をほぐすほかありません」

「……。お主は、このままでいいと考えておるのか？」

「はて……？ 私は与えられた仕事に勤しんでおるだけですが」

はぐらかすような言葉だった。光秀の言葉に何が含まれているのか、信長は計りかねていた。

ここから先はあまりに辛いことを話すことになる。

「……光秀よ」

信長が光秀の肩をがしりと掴んだ。

「……お主、また倒れたそうじゃな」

「おやおや、信長様には隠し事はできませんなあ」

「もし、儂がお主に隠居を勧めたら、お主は受けるか？」

「……難しい問題ですな。息子が成人するまでは死ぬわけにはいきませんが、果たしてそこまで生きられるかどうか……」

「なら、なおさらじゃ。隠居せよ。これは儂の命令だ」

「……信長様。私は死ぬまで織田家の武将であると以前伝えた筈です。それでも私は不要と申されますか？」

「これは、お主を思つての事じゃ。これ以上、老いて朽ちるお主を儂は見たくはない。息子に対しても最大限の加護を与える。その条件で今の地位を降りてはくれぬか？」

光秀にとつては、とても難しい提案だった。

今、首を縦に振れば老後の待遇は手に入る。だがその代償として、家老の座と、自身の追放が付いてくる。

自分はお役御免ということか、それとも……、

「……私は今の座を降りた方が信長様には都合がいいと？」

「……嫌な言い方をするな。……そうじゃ」

「……………」

光秀は、覚悟を決めた。

「……分かりました。命に寄つて隠居させていただきます」

明智光秀、この時引退を決意する。

「お主はこの後どうするつもりじゃ？」

「そうですねあ……。丹後の細川殿の元へ寄り添おうかと思えます。

あの方なら私を受け入れてくれるかと。ああ、細川殿には丹波の増領としておいてください。細川殿も喜ぶでしょう」

「分かった。委細、そのようにする」

「それと……、信長様に提案が」

「なんじゃ？ 申してみよ。大抵の無理は聞くつもりじゃぞ」

「では……、牢獄にとらわれた横溝殿、彼を出獄させる気はありませんか？」

「……………！ そ、それは……………」

「あの方と戯れている信長様は、いつも楽しそうでした。私にはそう見えませんでしたぞ」

光秀は去っていった。

(横溝……あやつか……………)

そして最後に手を打ったのが、渡人・横溝由紀の入獄だった。

それは謙信と愛と三人で仲良く安土の城下に訪れて間もない時であつた。

岐阜城下の町民たちは誰もが別れを惜しんだ。

それと同時に、老人のような姿となつた横溝が放つ悲壮感には皆が複雑な気持ちであつた。

土産を多く渡され、元気でな、と抱き合い、横溝一向は岐阜を後にした。

そしてここが安土か、ここが俺の新しい居住地か、と色々考え、初

日は謙信と愛で鍋を囲み、団欒を楽しんだ。

それから間もなく、である。

渡人・横溝、謀反の疑いあり。安土の城の方で入獄させる。これが安土から来た信長の兵による通達だった。

当然、隣人である謙信と愛は強く反発した。横溝殿がそんなことをする筈がない。これは何かの間違いだ、と。

しかし通達を聞いた横溝は冷静であった。やはり、この時が来てしまった、と。

横溝は謙信と愛に言った。これから信長は天下取りではなく天下の為に動かなくてはならない。その時に、不死身の家臣など邪魔ではない。信長は、邪魔者を放置するほど甘い男ではない、と。

だがそれを聞いてもなお謙信たちは反発した。あなたはわたし達にとって大切な家族である。それを奪われては生きてはいけない、とまで言った。

横溝は謙信を抱き寄せ、ただ一言こう言った。有難う、と。謙信は涙を浮かべた。愛も泣いた。

配下の者に、横溝は、準備は出来た。連れて行ってくれと言った。

謙信は毎日でも返してくれるまで安土城に行くと強い想いで言った。横溝は笑った。

「ふう……」

横溝は便を済ませ、一呼吸置いた。こんな時代である。ウオシユレットなどあるはずもない。和式の便座には慣れたが、牢獄の便所にするのはまだ慣れない。

ただ、便を土にするというトイレの習慣があるからまだ良かった。日本でヨーロッパのようにペストが流行らなかったのはひとえに厕所の存在に会った。

もし日本がヨーロッパの都心のように出した大便を窓から捨てていれば、疫病の頂点である黒死病が蔓延し、日ノ本の国は大混乱に陥り、戦どころではなかっただろう。

「……………あのベルサイユ宮殿にもトイレはないらしいからなあ……………」

食事は乾いた飯に具のない味噌汁、おかずが一品。粗末なものである。そういえば、クリームゾンの所持者は食事を満足に与えられない状況に陥ったらどうなるのであろう。

そのままやつれて死を迎えるのだろうか。自分で試してみるのも、この際悪くはないか、横溝はふとそう考えた。

(今日も謙信たちは俺を連れ戻そうとここに来ているのかな……迷惑かけるのは嫌だな……)

「クリームゾンよ、おまえは俺をどうするつもりだ……？」

ホルスターに入れられたクリームゾンは紅く輝くことなく、静かに眠っていた。

なお、一度自殺を試してみたが、結局、脳がはじけ飛んでその後再生しただけだった。あの時は痛かったなあ。横溝はふと思いついた。「まあしようがない。もはや俺はお役御免だ。天下の舵取りは信長が行う。俺は見守るのみ……。餓死でもすれば終われるかもな」

(信長……お前さんの事、嫌いじゃなかったぜ)

毛利編②

「もうすぐ安土城が見えてきます」

「ほう、そうか」

馬車の中で正親町天皇おわぎまちは内心少しはしゃいでいた。なにせ信長が天下の為に建城した城である。さぞ外飾にも気を使っているのだろう、と。

「噂ではさぞ美しいものになっているとか。見るのが楽しみですな」
「うむ、楽しみじや、楽しみじや。信長が新しき城をどのように見たてたのか、それが分かるというものよ」

事実、安土城は政治的な意味合いが強いと言われている。同時に城下はとても賑わい、芝居をやる舞台もあつたそうだ。

更に城はお金を払えば誰でも城内を見て回れたとか。

「見えてきました。おお、こ、これは……」

「おお、どれどれ、儂も少し覗き見してみるか」

「では、私も……。お、おお、こ、これは……」

安土城を見た天皇と将軍は感嘆した。成程、確かにこれは素晴らしいものだ。

天主は黄金色で瓦まで金箔が張り巡らされている。だが、やはり驚くのは色より高さだ。

「これは、一体どれだけ高いのじゃ……？ 青色、赤色、白色、黒色、と染め上げているから5階建てか？ しかし高さまではまったく見当がつかぬ」

「遠くから見てこれでは、実際はどれだけ高いのでしょうか。いや、山城ですから高さは予想がついていましたが、これ程とは……」

「無粋な物言いだが、銭がかけられとるなあ。儂らでは逆立ちしても出せない銭が使われてやつと建立できたのだろう」

「ですな……。信長は交易で金を流通させ、街は自由に商いをさせているというから、一体どれだけ銭を徴収できたか分かりません」

「最後に物を言うのは銭、か……。やはり儂らの時代ではないのかも
のう……」

「天皇様、何もそこまで自己卑下なさらずとも……」

空から降ってきた銭を拾い集めていたのが現在の公家衆の有様だ。それに比べれば武士と商人は金を産みそれで生きながらえてきた。比較にならない。

（武士の時代かと思っていたが違うな……。これからは武士と商人の時代だな）

「ここからは坂になります。ご注意ください」

馬車が安土城の1階にあたる平地目指して歩く。そういえばこれまで、山賊が襲い掛からなかったのも奇跡かもしれない。

信長は一応家臣に防衛にあたらせるよう命じたが、天皇側がそれを断った。大丈夫だと。今回は天皇の威光が賊をはねのけたのかもしれない。

「もうじきじやな」

「ええ……」

かつぽかつぽと馬車が歩く。そして窓からは琵琶湖の美しい景色を見ることができた。

「綺麗じやのう」

「全くで。これを毎日見れる信長は幸せものですな」

そして遂に……、

「正親町^{おおぎまち}天皇、並びに、將軍足利義昭公両名、ご到着ー!!」

「着いたか……」

「ここからは公務の時間ですな」

「天皇陛下、將軍義昭公、お待ちいして、おりました。今回お二方のご案内を務めさせていただきます、小姓の森乱丸でござります。（囁んだな……）」

「うむ、苦しゅうない。乱丸殿、よろしく願いますぞ」

「勿体なきお言葉です。それでは安土城について軽く説明しますの
で、ゆるりと聞きながら城内にお入りください」

「座敷は全て金で装飾されておりまして、中には狩野永徳ほか狩野派の絵師達が技量を尽くした風景画が描かれております」

「ほう、これは何とも素晴らしい」

「山あり谷ありと言いますが、田園なども描かれていますなあ」

「そしてこちらが、天皇陛下が安土へお越しいただいた時を考えて作られた『御幸の間』でございます」

「おお、これは何とも雅な……」

「我々がお休みできる部屋を用意するとは、信長もやりますな」

「どうかこちらで、お時間までお休みください。予定では2刻後に、儀式に入らせていただきます」

「ふむ、では、時間まで休ませていただこう。やはり儂も年だな。長旅になったので腰が……」

「私は城外を案内させてもらいたいですなあ。乱丸殿、お願いできませんかな？」

「は、はい！ では將軍様には石垣や瓦についてお話します」

「ふう……」

御付きの者に水を一杯いただき、天皇陛下は一息付いた。

（何とも美しい部屋だ。信長が天皇という存在をどう思っているかが分かる……奴め、儂のことなど気にもとめてなかったと思っていたのだが、案外気を使っていたのかもな）

思い返せば信長という男は朝廷への献金などは惜しまない男であつた。ならばこの部屋の出来にも納得がいく。

「……信長よ、お主は私に見定められるに値する十分な男だったようだな」

「天皇様、どうかしたのですか？」

「あ、いやなに、独り言じゃよ」

（儀式も、滞りなく終わりたいものじゃな）

「失礼します……」

「む、誰かな？」

「遠いところわざわざお伺い有難うございます。私、信長様の元で茶人をしております、利休と申します。この度は天皇陛下に茶を啜っていただきたく、不束者ですが参上いたしました……」

「ほう、茶とな。面白い。利休殿。お願い申し上げますぞ」

「勿体なきお言葉です。では。今回はこちらをお使いさせていただきます」

そう言うと、利休は茶道具を取り出した。

「こ、これは……！」

「茶壺には『三日月』、茶碗には『白天目』、茶入には『九十九髪茄子』を、ご用意いたしました」

「三日月か！ 利休殿、よくぞこれを手に入れてくれた。義昭も喜ぶだろう」

「その義昭公にも後で拝見させてもらおうとしましょう。では、お時間を」

利休の茶が始まった。

実は言うと、此度の茶席に信長の許可は得ていない。利休は天皇陛下に茶を煎れてみたいという『独断』で来たのだ。これも利休が目指す『業』の在り方か。

もう一つ言うと、利休は信長が横溝を捕らえたという話を聞いて、随分委縮してしまった。あの方からはまだまだ学ぶべきことがあった筈なのに、と。

（横溝殿、私はせめてたった一人でも信長様に反抗してみせますぞ。例え首から上をなくすことになろうとも……）

「出来ました。どうぞ」

利休は茶碗をそっと陛下に差し出した。

「うむ、いただきよう」

陛下は茶碗をぐるりと回し、一口茶を啜った。

「……………美味い」

「ほう、分かりますか」

「うむ。眼福ものの茶器に目が行きがちだが、茶はしかと言葉を紡いでくれる。新たななる時代に相応しい『光』が見えた。今日はまこと、良い日になりそうじゃ」

「有難うございます。陛下にここまで言ってもらえるのであれば、感激の至りでございます」

「うむ、利休殿よ、これからも信長殿に仕え、茶の湯の道を歩んでくだ

され。今日のように、内緒で茶を煎じる必要がない時代が来るよう祈っておりますぞ」

「……！」

陛下は全てお見通しだったのだ。何とも恥ずかしい。

「ははっ、これはまた、一本取られましたな……」

「どうも利休殿は猪突猛進のところがありますな。そんなことでは名物が逃げますぞ。はっはっは」

利休は思った。陛下が茶飲み友達になってくれたらどれだけ気が楽になっただろうと、道化である自分をさらけ出せる人が側にいてくれたらと。

（いや、それは詮無きことすな。次は横溝殿のところに参加しよう。獄入りの者に茶を啜らせるのも一興すな。ふふふ）

その後、義昭公は石垣や瓦積みに関する説明を受けて戻ってきた。瓦は全て安土で地産されたものだったと聞きました、と天皇に報告していた。

正親町天皇はお前がいない間、茶人が来て『三日月』を持ってきてたぞ、と言った。義昭は驚いた。できれば返してほしいと願ったが、天皇は、それはないだろう、とだけ言った。

そして2刻が経過した。お付きの者が準備を促した。義昭は信長に被せる鳥帽子は私のお手製なのですよ、と自慢げに言った。

二人は天主へ上った。

そこには信長がいた。儀式前に顔を見せられなかったことを、信長は詫びた。天皇は、気にしなくてよい、気楽にしておれ、とだけ言った。

將軍宣下は滞りなく始まり、そして終わった。正親町天皇が自ら文書を読み上げ、最後に、織田前右府信長を征夷大將軍に命ずる、とし、信長がそれを奉^{うけたまは}るとした。

その後、義昭公が自作した鳥帽子を信長に被せ、絵師達が信長の姿を描き上げるのである。

その間、信長はずっとポーズを取らせられ続けた。信長は緊張の間何度も乱丸に汗を拭くように命じた。

その姿を、天皇陛下と義昭公はずっと微笑ましく見ていた。義昭公はこれで將軍ではなくなり、さらに足利を抹消することを決めていたので、これからはただの義昭である。

夕刻が過ぎ、太陽が完全に落ちる頃、信長と天皇と義昭は夕膳を取った。祝いの豪華な食事が山ほど並べられた。

天皇は、全部食べては腹が焼け落ちてしまうなあと思し、少量を頂いた。

「ところで信長よ、実は提案があるのじゃが……」

話の始まりは正親町天皇から申し上げられた。

「何でしょう？」

「実はのう……儂もこのところ体調が優れず公務を休むことも多い。その代わりを誠仁まことひとにやらせておるのじゃが、もう限界と考えておる。そこで、じゃ……」

「親王様に天皇の譲位を行いたい、と？」

「随分察しいいな。その通りなのじゃよ。ついては京に邸宅を作り、儂はそこに隠居したいと考えておる。そこでなのだが……中々言いにくいものじゃなあ」

「いえ、言わずとも分かります。邸宅を建立する資金を出してもらえないか、そういう事ですか？」

「う、うむ。だがお主も安土の城を建城したばかり。あまり贅沢なこととは言いにくいのだ。しかし、我が願い、叶えてもらえないか？」

「ふむ、分かりました」

信長は即答した。

「不肖信長、天皇陛下の為ならば喜んで身をちぎりましょう。で、おいくら入用なのですか？」

「そうじゃなあ……銭2万貫程必要になるか、と」

「天皇陛下の見立てがその程度だとすれば、おそろくなんやかんやでその倍はかかるでしょう。つまり、銭4万貫ぐらいにはなるでしょうな。私が安土の城を建てた時もそうでした」

「よ、4万貫……！」

「陛下、元室町の私が言うのも何ですが、私が逆さに降って出せるのは

5千貫が限度です」

横の義昭公が言った。

後、願いを出せるのは本願寺くらいなものだ。それでもあそこは現在延暦寺の復興を行っているため多くは出せない。出せたとしても、おそらく1万貫が限界か。

「つまり単純にそろばんを叩いたとして必要な銭はおよそ2万5千貫といったところですか……」

信長は再考した。2万5千貫、出せる自信はある。ただ時間は掛かるかもしれない。

天皇陛下の邸宅となれば、単純な宮大工では話にならない。多分注文が着く度にお金が更に出ていく恰好になるか。

それでも天皇陛下の希望とあれば受けないわけにはいかない。信長はこれを承諾した。

「済まんな、わざわざ安土まで来て、お願い事が銭の工面とは情けない」

「いえ、ご心配には及びません。讓位の事はそちらで済むのであれば、あとは単純な銭金の問題になります。大丈夫です。何とかしてみせますとも」

「そうか、有難い。感謝するぞ。新しき征夷大將軍よ」
「いえいえ……」

信長はそう言うと、天ぶらを口にした。そういえば、天ぶらと言えば横溝だったな。儂はまだ気にしておるのか、あの一介の渡人を。

(横溝よ……儂のことをいくら恨んでも構わぬ。だが、最後には許せ。それがお主の為じや)

極めて傲慢なことを望む信長なのであった。

翌日、天皇陛下一行は、朝餉を軽く啜ると、安土城を後にした。これからは日ノ本の国のため公務に励んでくれ、と残した。

そういえば、新たな幕府の名前は考えておるのか、と聞いた。信長は勿論決めている、と答えた。

「天下布武、略して天布幕府です。これからは天を布で包むかのよう

な日ノ本を目指します」

天皇陛下は、お前さんらしいな、とだけ答えた。そして陛下は去っていった。

「ふう……」

信長は大きく息を吐いた。ここまで緊張のし通しだったからだ。できれば今日は早めに休みたい。

「殿……」

「おお、帰蝶か」

「天皇様は、心優しいお方でしたね」

「そうだな。目下であるはずの儂に頭を垂れてきた。頭でっかちな公家衆とは違うわ」

「天皇様の気品を殿が真似できるとは思えませんわ」

「む、そ、そんなことはないぞ。儂とて年相応の気品の一つぐらい……」

「ふふふ……」

さて、明日からは早速公務が始まる。部下へ息子達、そして遠出に向かっていた家臣達も一度安土へ戻ってくるはずだ。旧朝倉や上杉、武田も……。

（できれば北条家には来てほしいものじゃな。状況次第では逆賊として裁かねばならん。もしくは権力の持たせすぎをかねて分裂させるか、毛利は特に分裂させたいな。やはり中国が肝か）

「信長様！」

門番を任せていた兵が一人昇ってきた。

「どうした？」

「上杉謙信様と直江愛様から、これを、横溝殿へと……」

兵が取り出したのは弁当だった。どうやら二人は毎日のように朝通っては横溝を連れ戻すべく来ているのだとか。

「ちつ、こんなもの……」

「殿、それを捨てては、殿の度量がしれますわ」

「帰蝶まで……ええい、分かった。きちんと渡すから今日は帰れと言ってくるわ」

「では私が直接横溝殿にお渡ししますね」

「いや、帰蝶、お主が行かんでも」

「私、横溝殿の事は嫌いではないのですよ」

帰蝶はにっこりとほほ笑んだ。

「……………」

(この人たらしぶり……やはりあいつは危険じゃ。危険な、筈、なの
じゃ)

信長は自分に言い聞かせるようにぽつりと呟いた。

毛利編③

こうして、征夷大將軍となった織田信長の公務の日々が始まった。朝は早くから起き、体を少し動かし、朝餉を食い、公務に励む。

まず手をつけたのは、戦乱で荒れ果てた畿内をいち早く立て直すことだった。信長はやる気に満ちた顔で日々励んだ。

(顕如とは事実上和解したとはいえ、浄土真宗の思想はやはり危険じゃ。死ねば極楽浄土へ行けるということは、誰もが死兵となり、一揆を扇動するということだからのう)

しかし宗教としてよい部分は多くある。人が集まる事、献金で土地が潤う事、人々が団結する事、等だ。

だが当然悪い部分もある。信長もまた、一向一揆には大いに苦しめられた。だからこそ信長は人を魅了する城として安土城を建てた。

この城には世の中そんなに捨てたものじゃないぞ、という意味合いが含まれている。

(この城と華やかな街を見れば、人もまた生きていく余裕が生まれるわけじゃな)

他にも検地のやり直しや、年貢の割合などを領地ごとに再構築していく。

だが、ここにきて遂にあれが起こった。

飢饉だ。

「ぬう……これは儂が上に立つ者として最初の試練というわけじゃな。よかろう、やってみせるわい」

信長がいる安土近辺は琵琶湖の水源のおかげで大きな問題にはならなかった。しかし放っておけば各地で土一揆が頻発するだろう。

信長はひとまず今年の年貢の取り立てをやめにし、蔵に貯蔵されていた米の分配を行った。

「それから今年は米の相場を極力動かさないようにな、米の取引は禁止するよう御触れを出すのじゃ。堺の商人共にもきつく言っておけ。逆らうのなら堺丸ごと焼き払うと脅しを入れてな」

「しかし、殿、蔵の兵糧まで配っては今後どうなるかと。何より戦が出

来ません」

筆頭家老に上り詰めた丹波秀長が言う。

「いや、今年はこれで良いのじゃ。どうせ毛利もしばらくは戦どころではあるまい。兵糧を出して米の相場の高騰を出来るだけ抑える。今はこれでよい」

信長の案によって小さな村にも少しばかりの米が分配され、領民は諫められた。

それから数日後、息子の織田信忠が安土城にやってきた。

「父上、この信忠、寄せられた書簡、しかと受け取りました」

「そうか、尾張や美濃の具合はどうじゃ？」

「尾張は元々水害が華ともいうべき場所ですから、河川も相変わらずの水量です。今日は報告だけの予定でしたが、……父上、この信忠を呼び寄せたからには何かあるのでは？」

「ほう、分かるか。実はな、おまえに近々二代目の征夷大將軍になってもらえないかという話をしようと思っただけ」

「ええっ……!?!」

「さすがに驚いたか。儂は裏で権力を握り、表向きはおまえが政務をこなす。織田がこの日ノ本の頂点に達する家柄だと世に知らしめたいのじゃが……どうじゃ」

「お断りします」

「即答か」

「織田家頭領の身なれど、私はまだまだ若輩者。父上と同じ立場にはなれません。まあ、取り上げられた能道具を返してもらえるとというなら話は別ですが……」

「こら、公務を行うものが私的な欲を入れてはならん。やれやれ、おまえもまだまだじゃなあ。当分は儂が畿内の面倒を見るほかないか」

「ふふ……冗談が過ぎましたか。まあ、考えておく、ということにしておきましょう。それでは本日はこれにて失礼」

信忠は去っていった。

（くつくつく、奴め、まんざらでもなさそうじゃったな、後はもう一押し、か？）

その後は日を置いて次々と人が押し寄せようになった。

「山崎よ、旧朝倉領地の再検地の御触れの整理、頼んだぞ」

「勿論です。信長様、一向一揆に荒れ果てた旧朝倉領を立て直すことは家老であった私の悲願です故」

「武田勝頼よ、甲斐の調子はどうじゃ?」

「甲斐は貧乏には慣れてますゆえ、飢饉といっても苦しいうちには入りませんよ。いや、とても苦しい、でしたかな」

「ふん、ならば遠江の方から米と塩をまた送り付けてやる。これで領民を諫めよ」

「有難うございます。この恩、いつか必ず返しますぞ」

上杉からは上杉景勝・景虎両名が安土の城へ訪れた。

「越後は上手くやっておるのだろうか」

「無論です。一向一揆もなく、憎き渡人も消え、平和でなによりの日々です」

「ですが、聞くところによると、謙信と直江愛は信長様に迷惑をかけているとか……」

「迷惑、とは違うな、横溝の奴を返してほしいと毎日安土の城門まで来ているだけじゃよ。後で会ってやれ」

「え……、幽閉しているのでありますか? 一体何故に?」

「ま、その、色々あってのう。この話はこれ以上詮索するな。越後にとっては英雄でも織田にとってはたん瘤なんじゃよ。あいつは」

「は、はあ……」

今日は大和の国から松永久秀がやってきた。

「久秀よ……、儂はてつきり、お主が儂に対して謀反を起こすかと思うておったぞ」

「はっはっは、そのつもりでしたが、機を逃しましたかな」

割と冗談になってないことを久秀は言った。信長は今でも久秀はたいそうな男だと本気で思っている。

「実はですな、今日は信長様に私の隠居を報告するつもりで参りました」

「ほう、では大和は息子に任せるのか?」

「いえ、松永家は政治から身を引こうかと思えます。以降の大和は、筒井順慶殿に任せようかと」

筒井順慶。信長の部下としてはマイナーだが、多聞院日記では幾度となく名が出てくる教養人である。

「随分すっぱりいくのう。藁にもすがるつもりもないのか？」

「もう私の時代は終わりました。これからは好きな茶の湯で茶席を設けて過ごそうかと思えます……」

「腹に抱えているものはないのじゃな？」

「はい。強いて言えば、横溝殿の安否ぐらいですかな」

「……む。分かった。委細承知した。松永家は政治から身を引く。それでいいな？」

「はい。ではこれにて失礼……」

「ああ、待て。一つお主に聞きたい」

「为什么呢？」

「横溝の事、どう思っておるのじゃ？」

「それはもう、大切な友であります。では改めて、失礼させていただきます……」

「……………」

「殿、関東の北条氏の方々が来ました。お目通りをお願いできますか？」

「おお、遂に、北条氏も来たか。良いぞ。ここに来させい」

「分かりました。ではそのように……」

（丹波の奴も家老の座が板に付いてきたな。後は寺子屋で新しい芽が芽吹くのを待つのみじゃな）

「本日はお目通りを承諾いただき誠に有難うございます。後北条氏第2代北条氏康です」

「息子の北条氏政です」

「うむ、儂が天布幕府初代征夷大將軍である織田信長である。遠路はるばるようこそおいでなされた。まずは顔を上げよ」

「勿体ないお言葉……」

「北条は上杉や武田とは色々因縁のある家柄と聞く。だがそれをうやむやにせず、スパツと退いてほしい。それが農からの願いじゃ」

「徳川が織田に討たれたと聞いたときは驚きました。次は北条では？
そう思いましたが、……分かりました。上杉や武田とは円満な関係
を築こうかと思えます」

「うむ、そうしてくれ。ではお近づきの印に茶席を用意させよう。利
休を呼ぶか」

「なんと、かの名茶人である利休殿の茶を頂けるとは！」

「うむ、ゆるりと楽しんでくれ。だが、一方で関東は未だ戦乱の最中
であると聞く。くれぐれも身内で争うような馬鹿な真似はしないよう
にな」

「ははっ！ 承知しております！」

「お呼びですか？ 信長様？」

「おお、利休か。こちらが北条氏の者じゃ。茶を煎れてもらえぬか？」
「ほう、遠路はるばるようこそおいでくださいました。では極上の茶
を目指して煎れさせていただきます」

「うむ、その後は飯じや。侍女に飯炊きを至急やらせよ。くれぐれも、
腐ったものを出さぬようにな」

「……信長様」

「ん？ どうした？ 氏政、といったか？」

「我々は接待を受けるために安土に来たわけではないのですが、およ
ばれしてもよろしいのですか？」

「ああ、いいのじゃ。これが天布幕府流よ。もてなしの心は忘れずに、
されど、相手には臣従を誓わせる、これが流儀じや。異存はないな？」
「む、無論です。北条氏は織田に臣従します。その為に来たのですか
ら……」

結局、北条氏両名は利休の茶と豪華な飯、そして風呂と艶やかな寢
室で一日を過ごした。

翌日、昨日の事は本当に有難うございました。どうか、新しい幕府
が末永く続くように祈っております、と残し、北条氏は去っていった。
「これで北条は良し。後は毛利だが……、おそらく臣従はせんだらう。」

その時は逆賊として討たねばならんな」

「御意……」

「ところで、四国の長宗我部元親はどうした？ 息子の信孝に四国を割譲し統治させようと思っていたが」

「話によると、割譲は飲むので兵は退いてもらいたい、との事ですが……、いかがなさいますか？」

「む……まあ一度は謁見しろと伝えろ。奴らは毛利と手を組む可能性がある。いや、儂ならそうする。ならば可能性は潰さねばならぬ」

「承知しました。ですが、その親書は……」

「ああ分かっている。儂が書く。だから今日は休ませてくれ。やれやれ、年は取りたくないものじゃなあ」

「お戯れを。殿はまだまだお若いはずぞ」

一方で、こちらはすっかり影が薄くなり、もはやどうでもいい存在となった渡人・横溝。

「そうか、北条氏が謁見を……」

「信長様に面と向かって敵対しようとするのはもはや毛利と九州勢力くらいのものです」

「だろうね」

そう言いながら、横溝は利休の貸してくれた小刀で髭を剃っていた。鏡などなくてもやりようによつてはやれるものだ。

どうせ誤って首を斬ってもすぐ再生して大事には至らないのだから。

日の光を浴びられず苦しい日々が続いているが、利休が度々茶を煎れてくれるので暇を潰せるし、謙信達は毎日のように弁当を届けてくれるので、肌の色つやはいい。

「しかし、横溝殿はいつまで牢獄人生を楽しんでいるのですか？ 出ようと思えばいつでも出れるでしょう。その、腰の短筒で」

「ん、まあな。だが信長が出ていいと言うまではしばらくここに厄介になるさ。なあに、週に一度風呂にも入らせてもらえるしな」

「横溝殿も、意外と頑固な御方ですな」

「いやあ利休殿には負けるって。ははは」
「ほっほっほ……」

友人同士の他愛のない話が弾んだ。

その後、四国から長宗我部元親が訪れた。四国の調子はどうか？
と信長は尋ねたが、飢饉のおかげでため池も干上がってしまい、厳しい状況を迎えているらしい。

「ところで、割譲の件は何とする？ お主の言葉次第では四国を本気で討たねばならんが」

「阿波、讃岐は信長様に譲渡しようと思います。なので兵は退いてもらいたいです。我々は信長様に仕える準備があります」

「ほう……これほどの屈辱を味合わせられて臣従するとはどういう意味だ。腹に一物抱えているのではないのか？」

「是非もなし、というやつです。それに、毛利からは親書も使者も来ません。四国は見捨てられたのです。ならば信長様に仕えた方が都合がいいと考えております」

「ふむ……ならばよし。四国は伊予と土佐の減領とし、以降は儂に従え。それで問題はないな」

「はい……」

(妙じやな……儂なら戦になつてでも突っぱねる案件じゃぞ。元親がそこまで臣従する様子を見せるのは何故じゃ?)

「実は、織田から追放された明智光秀殿が四国に来まして」

「何？ 光秀がか!?!」

「はい。腹を割って一昼夜話し合いました。あの方は一度は同盟に立ち会ってくれた恩人ですから。そこで初めて臣従してほしいと頭を下げられたのです」

「あいつはもはや織田の者ではない。そんな男の戯言を耳にして臣従するとは、のう……」

「ですが、その一件でこちらも態度を軟化させたのも事実です」

「そうか……(奴め、また倒れるぞ……)」

「あい分かった。お主の言葉を信用する。その上で割譲は予定通り行

うがそれでよいな？」

「是非もなし、です。ただ土佐一国だけは認めてもらえれば私としてはよろしいかと」

「む……そうか。まあこの話は検討中ということ、今日のところは帰れ。あーだが、茶と飯と一晩明かすだけの寝所は用意してやる。これがうちにできる最低限だからな」

（まさか光秀が動いていたとは……儂にとっては好都合ではあるが、出された飴玉にしゃぶりつくようが良い気はせんな……）

帰蝶「よい部下を持ちましたね、殿」

利休「それはよいことです。是非茶でおもてなしいですな」

横溝「光秀さんなら当然だろ。あの人は今でも織田に仕えたことを誇りに思ってるはずだぜ」

「……………」

信長は今も光秀に人気が集まっている状況を不思議がった。

光秀は既に追放された身の筈である。それでも織田の為に動いた。

（本来なら気味が悪い程の忠臣ぶりなんじゃがなあ……ふん、今度酒でも送ってやるか）

毛利編④

それから一年が経過した。しかし毛利は依然動かないままだった。親書も使者も送らないまま、である。

「どうやら、ここまでじゃな。奴らを逆賊と見なして成敗する時がきたわい！」

信長は秀吉を呼んだ。

「猿、お主を陣頭指揮に選ぶ。毛利の首を取ってまいれ！」

「かしこまりました信長様。この秀吉にお任せを！」

「部下は他に別所長治や荒木村重を起用する。お主の力で動かして見せよ」

「えっ、信長様、その者たちは……」

秀吉は驚いた。正史なら別所も荒木も信長に謀反人として戦い、最後は悲惨な死を遂げた男である。

「なあに、奴らが此度の戦が、出世の最後の機会であることは知っておる。死に物狂いで戦うだろう。そして仮に戦場で倒れたら……儂が切り取る」

「成程、信長様も中々の悪ですなあ……。いいでしょう。つまり拙者の命に関わることになれば肉盾になっていたと思いますが、よろしいですか？」

「阿呆が。起用とは、お主だけが助かりたいがために連れまわすわけではないぞ。毛利を侮るなよ」

「なあに、毛利如きに不覚は取りません故。では行って参ります！」

「うむ、道中は気をつけてな」

「ははーっ！」

「ふっ、秀吉め、久々の戦で勘が鈍ってなければよいがな。ま、いざとなったら儂が直々に行くしかないか」

「殿、殿が直接行つては兵たちが緊張して動きが鈍りますわ。あなた
の代わりは他にいないことを考えてください」

「帰蝶よ、なあに心配するな。いざとなったら信忠が次を引き継ぐまでじゃ。織田に何も問題はない」

「そういう意味ではないのですが……」
「今は待つしかないが、猿なら多分大丈夫じやろう」

一方で、ここは横溝のいる牢獄。

「そうか、信長は秀吉さんを中国に向けたか」

「毛利も絶体絶命、というやつですか？」

「そうでもないさ利休さん。尻に火が付いた人間というのは案外強いもんだ。手負いの人間もそうだがな」

「ふむ……しかし此度の戦は臣従の意思を見せなかった毛利側に責任があるのでは？」

「そうなんだがなあ、いつの世も順調にいつてる時こそ嫌なことは起こるものさ。あ、茶が湧いたようだぜ」

「おや、これは失礼……では、どうぞ」

「いただきます」

（信長にとっては最後の詰め作業か。渡人が来たことで日ノ本の歴史は大きく変わった。）

信長も征夷大將軍になったし、光秀さんも追放されて謀反を起こすこともなくなった。ならば普通に毛利の首は取れるか？

その時である。腰のホルスターに収められたクリムゾンが不敵に紅く光を放ったのは。

「……！」

「横溝殿、これは……！」

「ああ、何か嫌な予感がする。だが牢獄の中ではどうすることもできないな」

「ならば信長様に牢から出してもらう様に私が進言します」

「馬鹿な！ やめとけ！ 利休さんの首が飛びかねない。あんたは俺にとつて大切な友人なんだ」

「友人だからこそ、出来ることありますよ、横溝殿」

「お、おい、待て、待てったらー！」

「信長様！」

「利休か。何用じゃ?」

「渡人、横溝殿をどうか牢から出してください」

「はあ? 今更何を言っておるのじゃ? 奴を牢から出さんのは儂が決めた事じゃ。儂は前言を撤回する気はない。去れ」

「……………」

(そうだ。信長様ならそう言うだろう。ならば、どう言えばいいのだ。あの方に尽くす、最高の言葉は……!?)

「去れと申しただろう。利休! 去らんというなら今すぐこの場で儂が貴様の首を刎ねる!」

「信長様……………」

「何じゃ? 覚悟ができたか?」

「横溝殿が言っておりました。信長様は、天下人になれたかどうかも分からないのに友達に対して酷いことするよな、と……………」

「……………」

「!!?!」

信長は手にした刀をぽろりと落とした。そしてがくがくと震えだした。

しかしそれは怒りではなかった。怒りとは違う、別の感情が、信長を取り巻いていた。

横溝由紀。

かつて、浅井との戦いに敗れ、岐阜城内が落ち込んでいた時に現れた『渡人』。

無礼千万だが、極めて忠臣であり、もたらす技術は数知れず。

朝倉を破り、本願寺との交渉を取り次ぎ、上杉を破り、自分を征夷大將軍になってほしいという將軍からのお達しに賛同してくれた男だった。

しかし時が経てばその間にも変化が生じるもの。何より不死身とというのが厄介だった。

もし奴が敵になれば、信長はそれを恐れた。だから入獄させた。奴もまた、それを受け入れた。

それで全てが終わったかと思っていたが…………。

「儂は、馬鹿じゃ…………奴にあの事を問いただすのを忘れておった」

信長は走り出していた。

(どうしてこんな簡単なことに気付かなかった？ どうして奴はあんなにも忠義を見せてくれた？ どうして儂はここまでの男になれた？)

信長は慌てた勢いで階段からずり落ち、膝をしたたかに打ったのも気にせず、一心不乱という表情で地下の牢獄を目指していた。

「横溝お!!」

横溝は脱糞の真っ最中だった。

「……どうした信長？ 俺は今糞の最中だ。少し待ってくれ」

「いや、今じゃ。お前に聞きたいことがある!!」

「何だよ？」

「お前がいた時代……儂は、天下人になれたか!？」

「……!」

「どうなんじゃ!？」

「……」

横溝は、首を振った。横に。

「いや、駄目だった。お前さんは、志半ばで、死んだ」

「……。やはり、そうか……」

信長はため息をつきながら言った。

「けどな、それは俺がいた時代の話だ。俺が、渡人が、やってきた時点で、歴史は……」

「同じ事じゃよ」

信長は横溝の目を見つめた。出会った時と変わらない真っすぐな目だった。思えば自分は最近部下の目すら見ない將軍になっていたな、とふと思った。

「儂は思ったよ。お主はどうしてここまで儂に仕えてくれていたのか、とな。これで合点がいった。お主は儂に、天下を取らせたくてここまでやってきたんじゃないか」

「……あんまり担ぐなよ」

「儂は別に天下なぞ欲しくもなかった。だがお主は儂に天下という日ノ本の頂点たる存在になり、織田が未永く暮らせる時代を作ろうとし

てくれたんだな」

「ま、結果的にそうなったただけだけどな」

「牢屋の鍵を持ってこい！」

「え……」

「出る。釈放じゃ」

「いいのかよ」

「よい。そしてお前に頼む。儂に本当の意味での天下を取らせてくれ。儂が生きている間に」

「……。ああ、いいよ。けどその前に、骨を折ってくれた利休さんに有難うを言わなきゃな。そして、久々に謙信達に顔を見せてやらなきゃ」

「構わん。そうしてこい」

こうして、横溝は無事、釈放となった。

慌てて駆け下りてきた利休に心から感謝をし、もう2度と危ない橋は渡らないでくれと固く誓ってもらった。利休も、勿論です、と答えた。

その後は、馬で、我が家に帰った。謙信達は泣きながらお帰りなさいと泣いた。横溝もただいま、と返し二人を抱きしめた。

その夜は家族で鍋を久々に囲み、深夜は激しく愛し合った。クリムゾンも光らなかつた。

翌日は、髪を切り、獄中生活で鈍った体を痛めつけるかのように走ったり、木刀で素振りをしたりして汗を流した。

その後は信長と面会。横溝は別所と荒木を入れたのは良い案だと答えたが、謀反を起こされる危険性も考えてなど伝えた。

信長は、やはりあの二人は危険か、と言ったが、お前さんの締め付けのきつさというか地方領主の軽視も原因だと答えた。

さて、一方の秀吉である。

「さあ、気合入れていくでござるよー！」

「はは、相変わらず秀吉殿は元気ですね……」

荒木「……（思うところは色々あるが、今は武勲を上げること専

念しよう)」

別所「……(いざとなつたら、秀吉の背中を討つか? いや、それは早急すぎる。今は戦いに専念せねば)」

秀吉はまず播磨に進出。前もって配下に引き入れていた黒田官兵衛を中心に姫路城を中心に、まずは赤松を討つ。

しかしここにきて病弱だった竹中半兵衛が陣にて病没。長きに渡って秀吉を支えてきた半兵衛の死は秀吉に暗い影を落とす。

半兵衛は黒田に「後を頼みます」と言い残し、黒田もそれに従った。宇喜多直家は織田と秀吉の力を知り、秀吉に降参。さらに秀吉は勢力を進行させ、備前を取った。

こうして勢力を拡大したまま秀吉は中国入りを果たした。

ある日の夜、陣の中で酒盛りが行われ、主力の者は全員集められた。「いやあ、懐かしいでござる。昔は酒盛りの時は信長様に無茶ぶりをされて困ったものでござるが、今は信長様はいない。少し羽を伸ばしてもいいかもしれんなあ」

黒田「そうですね。息抜きというのは必要ですから」

荒木「ふむ、やはり秀吉様も今でも信長様には頭が上がらない様子で……(山名豊国を討てたのは僥倖だったがその後が続かん。このままではまずいな)」

別所「いやはや、何とも……(ここまで成果といった成果なし。それもいいところは全部秀吉に持っていかれていく。やはり儂にとつて秀吉は目の上のたん瘤か!)」

「まあまあ今日は大いに飲むでござるよ。荒木も、別所も、これ以上後ろから睨まれるのは勘弁してほしいでござるからして」

「え、そ、それは……」

「いや、私は……」

「まあ、二人が拙者に対してあまりいい感情を持っていないことは分かっているでござる。だが、二人も中国攻めには貴重な戦力。ここは腹を割って話しあおうではないか。ん?」

「は、はあ、分かりました」

「どうぞ、お手柔らかに……」

秀吉は数時間かけて荒木と別所の懐柔を試みた。最初は頑なだった二人だが、やがて、ついていくと答えるようになった。

秀吉は、そうそう素直になるのが一番、その上で付いて来てほしいと二人に話した。荒木と別所は、首を縦に振った。

（よしよし、これで背中から討たれる事はなくなったでござる。後はきりのいいところでばいっと捨ててしまえば織田家の増領になるわけ……）

言葉とは裏腹に、腹黒いことを考えている秀吉であった……。

山陰道を整備した秀吉はいよいよ毛利勢力下の備中へと入る。

しかしここで大きな敵が現れる。当時としては珍しい、低湿地を利用した平城である備中高松城の清水宗治である。

「おのれ、清水め、備中だけでなく備後二か国をやるといったのにそれでは足りないと言うのか……！」

「清水は毛利勢、三村勢、宇喜多勢で争っている時から毛利に従っていた武将です。忠義には厚いでしょう」

調略は失敗に終わり、秀吉は力攻めを行う。しかし宇喜多勢を先陣にした総勢3万の武力で城を囲み、攻め続けるも高松城は全く落ちる様子はなかった。

「う~~~~~~~~む」

秀吉は考えていた。敵の城は騎馬にも鉄砲にも強い。沼地と湿地ばかりの天然の要塞。正攻法では落とすのは難しい城だった。

「ならば奇策を考えよう。……そうじゃ！ 昔読んだ本で水攻めというのがあったぞ。あれを試してみよう！」

「水攻め……ですか？」

「そうじゃ。水攻めじゃ。これなら沼地も同然の高松城は水浸しでまともに機能しなくなる。言わば天然の兵糧攻めじゃな」

「成程、面白い考えですな」

「よし、早速取り掛かろう。この辺の立地に強い宇喜多を中心に、川の流れを変えさせるように命じろ！」

水攻めといえど中国の古い文献でたまに出てくる。曹操が呂布を攻めたときに使われたのがもつとも有名だろうか。

それから数か月後、高松城は秀吉の目論見通り水浸しとなり完全に孤立してしまった。

「ようし、計算通りじゃー!」

「この後ですが、どうしましょう?」

「待つてもいいが、まずは毛利家と和睦交渉に入れ。そしてこつそりと嘘を織り交ぜるのだ。『もうじき信長様が10万の兵力で中国に現れる。その時が毛利家最期の時だ』と」

「成程、して、和睦の条件とは?」

「三か国程度の割譲じゃな。そして清水の切腹じゃ。この農達をなめた真似をしたのじゃ。ただではおかん」

「ほほう、つまり、清水には『あなたが腹を切れば毛利を救える』ということにするわけですな。秀吉様も中々悪いお方だ…」

「うむ、ではそのことを書状にし、外交僧の恵瓊殿に伝えよ。そして必ずや和睦を成立させるのじゃ」

荒木「……………(これで高松城城主、清水宗治も終わりか)」

別所「……………(諸行無常とはこのことだな。負けてないのに負けたことになるとは)」

その翌日。毛利家の外交僧である安国寺恵瓊がやってきた。

「成程。では仔細そのように、毛利家に伝えてきます」

「そうしてくれ。そしてその後は清水の元へ行って来てくれ。お前さんが腹を切れば毛利を救える、とな」

「了解しました」

「ふふ〜ん」

秀吉は上機嫌であった。これで中国も事実上織田家の傘下に入る。信長様が逆賊とした毛利はいつでも討てるので問題ない。万事は上手くいった。

……………筈だった。

毛利編⑤

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!

「な、なんじゃ。何事じゃ!？」

「大変です秀吉様! 西方から援軍と思わしき大軍が襲来中です!」

「はっ……? 一体何処のどちらさんが来たというのじゃ!？」

「今確認してきました。あの十字柄は……島津です!」

「島津じゃとお!？」

「ふっふっふ、織田め、まさか我ら島津が既に九州を平定し、毛利と手を組んでいたとは思うまい」

「ここで秀吉の軍にぶつかれば、相手は脱皮の如く逃げ出していくだろうなあ」

「何が天下だ。征夷大將軍だ。そんな事は我ら島津を倒してから言うてほしいよな」

「さあ、行くぞ、秀吉軍に噛み付きにな!」

「まさか島津が来るとは……毛利が中々織田に従わなかった理由はこれか!」

「いかなさいますしょう? 秀吉様?」

「当然逃げじゃ! 逃げ! 脱皮の如く、東に向かって後退じゃ!」

だがその後退もそう簡単にはいかなかった。島津軍の向こうに、なにやら怪しげな影があった。

それは身の丈12尺はありそうな巨体のトカゲの形に似たからくりだった。

キョエエエエエエエエエエエツ!!!

そのトカゲが、叫んだ。嘘ではない、確かに叫んだのだ。そして、かつてのガトリングに似た、弾丸の連射をしてきたのだ。

ドガガガガガガガガガツ!!!

「うわあああああああああつ!!」

「た、助けっ……!」

弾丸の台風を浴びた陣営は、瞬く間に死傷者多数。その中には、別

所長治の姿もあった。

「別所殿お!!」

荒木が叫ぶ。しかし言葉はもはや届いてはいなかった。

「逃げましょう、荒木様! ここは危険です!」

「……くそつ、別所殿、仇は必ず討ちますぞ……!」

「おーおー、驚いてやがる。まあ、当然か」

「このトカゲがいなきや、我々が九州の平定をするのは難しかったからな」

「もつとも、肝心な時に動いてくれなくて苦勞してたがな」

「まあよい。こいつで信長の首を取れさえすればいい……」

「さあ、追いかけるぞ。島津のしつこさ、特と味わうがいい!」

島津の進軍が始まった。トカゲは動かなかった。しかし瞬間移動できるらしいので問題はなかった。

そして、トカゲはこう言った……ような気がした。

『クリ……ムゾ……ン、ヲ、トリ……カエ……セ。ヨコミゾ……ユキ、カラ、トリカ……エ……セ……!』

秀吉軍の予期しない、中国大返しが始まった。

備中から慌てて撤退し、備前の沼城に至る。

姫路城にたどり着く頃には大雨で洪水し、河川が氾濫していた。

だが、ここまですれば一安心かと思いきや、姫路城の城の外には島津軍が同じく強行してきた。秀吉、そんな馬鹿など思いながら慌てて逃げることを決める。

殿役は荒木村重が引き受けた。荒木は戦いで散るなら本望とだけ語り、最後まで戦って、死んだ。

昼夜の境もなく、人馬も休めず、ただひたすらに走り続け、明石、尼崎まで至る。

もはや秀吉軍は限界だった。

「も、もう歩けぬ……」

「馬も既に限界じゃ。もうこれ以上は走れませぬ」

この強行だけで、秀吉軍、8千の軍を擦り減らす。信長が知ったら

首を刎ねられかねない失態だった。

(何故じゃ……? どうしてこうなった? どうしてこうなった……?)
本来ならとうに毛利家との交渉の場に付いて和睦の話をしている筈じゃ。それなのに……)

別所も荒木も死んだ。しかし到底喜べるものではなかった。

(儂がバカだったんじゃ。上手くいけば二人纏めて、とか思ってたからバチが当たったんじゃ……)

「報告です!」

明石近辺を探っていた偵察役が戻ってきた。

「島津軍、毛利軍を吸収し、更に東へ。こちらに近づきつつあるようです!!」

「な、なんじゃとおお!?!」

秀吉もこれには困惑した。これだけ強行すれば兵站も滅茶苦茶、疲労でまともに動けない筈。

「秀吉様!」

黒田官兵衛が秀吉に判断を急がせる。

(何故じゃ……!?! 敵もはやまともに動けぬはず。何故こうまで強行に軍を急がす……!?!)

「……………あ、あああああああああああつ!」

秀吉が立ち上がった。

「ひ、秀吉様?」

「分かった。あいつらがここまで軍を急がす理由が分かった!」

「そ、それは如何に?」

「京じゃ! あいつら京入りを果たし、御所を抑えるつもりじゃ!」

「なんと、では……」

「やむを得ない。こちらは疲労困憊でまともに動けぬが、やるしかない! 何としてでもここで奴の進行を止めねば!」

「しかし、奴らが止まるでしょうか……? 島津はともかく、毛利まで止めるには兵の数がありません!」

「くっ……! だが、やるしかない! 奴らを京に上げれば、信長様に合わせる顔がない! やるしか……」

正直、秀吉は自身の最大の危機を迎えていた。逃げてきた兵はおよそ2万程度、うち1万は逃げ遅れておいてきたのだ。

なによりも兵たちは疲労でまともに動ける状態ではない。

「やむを得ない。兵を一人連れてこい」

「秀吉様、私を呼んでどうするのですか？」

ただの一兵に過ぎない者を呼び、秀吉は荒らしく言った。

「おまえに命を授ける！ 大至急、信長様にここの状況を伝え、信長様自らお越しく下さいと伝えるのだ！」

「……！ 秀吉様、しかしそれではあなた様の立場が……！」

横の黒田が困惑する。

「構わん。ここで首を刎ねられるのも、信長様に首を刎ねられるのも一緒よ。頼んだぞー！」

「は、ははあ！ 必ずや安土まで帰還いたします！」

「秀吉様、大変です！」

「どうした、島津が遂に来たか!？」

「い、いえ、違います。明智光秀様が秀吉様に面会を希望しております」

「なんじゃと!? 明智殿が!？」

明智が家老の座を降りたからこそ、自分は家老になれた。しかしその意趣返しとは思えない。では、何故この状況で……？

「やあやあ秀吉殿、お久しゅうございますな」

明智光秀は陣にひよっこりと現れた。心なしか、最後に見た時より老けたように見える。

「細川殿から軍を借りてきました。さあ、これで島津を押し戻しましょう」

「なんですと!? で、では、明智殿は相手の狙いが？」

「ええ。京入りでしょう。それを成し遂げられてはもはや詰んでしまいます。さあ、秀吉殿、もうひと踏ん張りしましょう」

「……！ え、あ、ああ。分かった。兵たちに伝えよ。何としてでも島津を押し返す。ここで命を賭して戦え、と」

秀吉はまだ半信半疑だった。何故、明智殿はこちらの状況が分かっ

たのか？ 何故細川殿から兵を借りるといふ大胆なことができたのか？

しかし深く問いただしている時間はなかった。

「全軍、前に出ろ！ いいか、勝つ必要はない。負けなければいいのだ。そうすれば信長様の軍が来てくれる」

オオオオオオオオオオオツ！！

秀吉と光秀は必死に全軍を鼓舞した。

一方、伝軍に出ていた島津側も、織田軍の援軍に驚いていた。

「何と!? 織田に援軍が!? 奴らめ、打ち出の小槌でも振ったというのか？」

「ですが、事実です。率いている武将は分かりませんが、織田の軍で間違いないようです」

「ちつ、ひたすら秀吉の軍を追いかけるついでに京を抑えるという、我らの目論見が見破られたか……」

「しかし援軍はともかく、秀吉軍はもはやまともに動けぬ筈。状況的には五分では？」

「しかしなあ。あのトカゲの化け物がどこに行つたかさっぱりじゃからなあ」

その言葉通り、例のトカゲのからくりはかき消すように姿を消していた。いつはぐれたかもわからない。まあ、あいつはこれまでの状況から、突然戦場に現れるのだが。

「今回は奴の力を借りるのは難しいかもしれないな」

「なに、策が敗れても我ら島津は健在。一気に押し潰してしまいましようぞ」

「そうじゃな。よし、こちらも一気に東へ攻め入る。こちらも総力戦と思えよ！」

かくして、島津&毛利と、秀吉&光秀の織田連合軍の総力戦が始まった。

しかし、この戦い、意外にも織田側に有利に働いた。

天気は雨脚が強く、種子島が使えないことが響いた。ならば足輕を

中心に騎馬隊で押し込もうとするが、織田軍の兵も厚い。

秀吉の軍は機能するのがギリギリの状態であったが、何とか食いしばった。

光秀の借りてきた軍も、織田には何の義理もない、と思いきや、細川が明智の統治していた丹後の増領としてきたことで、織田のために戦ってくれた。

そして何よりも決定的だったのが、四国から安土へ報告に向かってきた織田信孝が山崎から強行してきて兵を連れてきたことだ。

「さあ、逆賊を追い詰めるぞ。我に続け！」

「おお、信孝様、感謝いたしますぞ……」

「……（信孝様には無理を行って来てもらったが、どうやら間に合ってくれたようだ。あの方がいれば後の織田も安泰か……いや、止めよう。今は敵を叩くのが先決だ）」

そして島津・毛利連合軍にとって、地の利がある織田軍の増援は致命的だった。

「駄目です。兵が押し戻されています」

「くそっ、ここまでだな。これ以上攻めれば兵が逃げる。やむを得ない。一旦退くぞ！」

「ちっ、だが信長、京は必ず我ら島津が頂く。首を洗って待っている！」

「兵が逃げていくようです！」

「お、終わった、のか」

秀吉は陣の中でへなへなと崩れた。

「よし、まずは此度の戦は織田の勝ちだな！　しかし宴の準備はするなよ」

信孝は部下をしつけ、まずは父上が来るのを待った。

「た、大変です!!」

だが勝ち戦に浮かれる間もなく、突如兵がよくない知らせを持ってきた。

「何事じゃ!?!」

「陣の外で指揮をしていた光秀様が、光秀様が……」

「ど、どうしたというのじゃ？ 鉛玉でも喰らったか!？」

「い、いえ、そ、それが、く、口から大量の血を流して、倒れるように馬から崩れ落ちました……」

「なんじゃとお!？」

「……!!」

部下の話では、光秀に怪我はなかった。だが、口から吐血して、倒れてしまったらしい。

その時、細川の軍の一人がこう言った。

実は、光秀殿は、終始寝たきりに近い状態であつて余命幾ばくもない身体であつたという。それでも織田の為に最期の力を振り絞り応援に駆けつけてくれたというのだ。

まさに燃え尽きる直前の蠟燭の如く…。

「………」

秀吉も、信孝も、この秘密を聞かされた時は、何も言えなかったという。

その夜。織田信長が自ら陣に現れた。何でも横溝が「秀吉は苦戦するだろうから応援に行つてあげてほしい」と頼みこんだからだという。

伝令からの書状をしかと受け取り、信長は現れた。しかし、信長は気が気でなかった。秀吉のこともあるが、それ以上に……、

「光秀!？」

近くの宿場で寝ていた光秀をたたき起こさなければならなかったからだ。

側にいた医師からは、申し訳ありませんが今夜が峠だと伝えられた。

「お、おお……信長様ではありませんか。お早いお付きで……」

「こ、こ、この、大馬鹿者があー!」

「ほっほっほ……、相変わらず手厳しいですなあ……」

「そこまでしておいて、何故謀反の一つも起こさなかった!？」

「ははは……よしてください。私が信長様に勝てる筈ないでしょう……」

信長は光秀の狂気に満ちる程の忠臣振りに怖くなっていた。本来、そういう男は得てしてその刃を最後は上司に充てる筈だ。なのに……、

「お前という奴は……!」

見れば見るほど、光秀の顔は干からびていた。皺の数も増え、白髪だらけで、しかも顔は薄白く透き通っていた。死ぬ直前の者が見せる顔色だった。

「まったく、私も情けない……。光慶が元服を終えるまで生き長らえて見せると誓ったというのに、この様とは……」

「父上……」

息子・光慶はたまらず部屋から出ていった。

「それは、儂が誓ったから問題なからう。息子には最大限の加護を与えると」

「信長様を信じていなかったわけではありません。ですが父親として、息子が一人前になるところを見たかった……。それだけを夢に、余生を過ごしていたのですが……」

「お前さんの容態、細川は知っていたのか」

「ええ。ですが、固く口留めをさせていただきました。できれば信長様の耳には入れないでくれ、と……」

「お前さんとは長い付き合いじゃ。だが戦に出られぬ男に織田の家老の座はやれなかった……」

「分かっております。そのくらい……」

そこへ横溝がやってきた。

「信長、秀吉さんやほかの連中の収容、終わったぜ」

「……そうか」

「おお、横溝殿ではありませんか。殿に出獄させてもらいましたか……。良きかな良きかな……」

「光秀さん。俺はあなたとも長い付き合いだった。友達と言っているくらいだ。ここに信長を連れて来れてよかったよ」

「そうですね。有難うございます。確かに長い付き合いでしたな。あなたの奔放さには手を焼くこともありましたが、今となってはいい思い出です……」

「本当に、死んじまうんだな……」

「……ええ、ここまでかと」

三人の間を、静寂が包んだ。

「そうだ。辞世の句を考えなければいけませんなあ……」

「そ、そ、そうか……」

「なあ信長、辞世の句なんてそう簡単に思いつくものなのか？」

「お前は実質不死だから分かんがな、こういうのは教養と知識がものをいう。まあ、光秀なら大丈夫じゃろう」

「そうは言いますがな、なにせ虫の息です。頭がうまく回らないのですよ……」

「そうか……」

「……」

「……浮かびました」

「申せ」

「心しらぬ 苔むす岩も 清水と 写した安土の 琵琶に流れて」

「……良い句じゃ。この信長、しかと覚えた」

「恐縮です……」

「ああ、熙子。申し訳ない。だが、もうすぐ、お前の元へ……」

目は、覚めなかった。明智惟任光秀は、夜明けを待たずに、息を引き取った。

決戦①

「……………」

明智光秀を看取った後、信長は一人月を見ていた。

(光秀……。おまえは立派な忠臣だった。だが儂はお前の上に立つ將軍たりえたのか……?)

「信長……」

そこへ横溝がやってきた。

「決戦は近いんだ。少しは寝なきや駄目だぜ」

「分かっておる。分かっておるのだが……どうにも寝る気になれなくてな」

「……そうか」

横溝は信長の隣によつこらしよつと座った。

「時々だが、儂は部下の気持ちからなくなる。……いや、最初から分からないやもしれぬ。人の心とは難しいものよなあ……」

「そうだな。お前さんはそういうところには疎いと思うぞ。……ひよつとして、征夷大將軍に祭り上げるには早かったか?」

「ふん、早いも遅いもないわ。儂は儂の思うまま生きてきただけじゃ」
「どんな人間でもいつかは死ぬ。ましてや信長は人の行き死にを誰よりも多く見てきたという自負がある。」

正直、光秀の死は骨身にこたえた。だが、来る決戦に向けて、気を引き締めなければならぬ。

「儂は、許しは請わぬぞ、光秀よ。せめて安らかに眠ってくれ……」

「そう思うなら少しは寝るんだな。明日から忙しくなる。いや、明日が決戦かもしれないぞ。領地の部下には招聘をかけているのか?」

「無論だ。その辺は抜かりないわ。全軍に大至急来るように言っている。儂が安土を出発する前だから、既に文は渡つてある筈じゃ」

「当然だな。相手は毛利と島津。言わば中国と九州の大連合だ。戦力の逐次投入なんかしてたら骨ごと食われるぜ」

「うむ。御所にはネズミの一匹たりとも入れさせはせぬわ。必ず食い止めて見せる。そうでなければ命を張った光秀に申し訳が立たぬ」

だが信長は正直不安であった。果たして招聘した戦力は決戦に間に合うのか…？

全軍来れば互角に戦うことは出来るが、間に合うかは未知数だ。こればかりは天運を祈る他ない。

しかし、信長には少し安心感があつた。こうして尻を叩いてくれる間柄の男がいることを。

(こういう仲間じゃったなあ…：儂は酷い男じゃ。こいつは気にしてないかもしれないがな。と、そうじゃ)

「…お主はどうするつもりじゃ？」

「秀吉さんが言つてた、とかげのからくり、それと戦おうかと思う。いや、戦わなければいけない宿命といったやつかな。相手も俺が狙いな筈だ」

「覚えがあるのか？」

「出会ったことはないが、奴の標的は俺で間違いないはずだ。だから信長は安心して敵と応戦してくれ。それと…」

横溝は一つ咳払いをした。

「次が俺の織田家への最後の奉公になる。期待していてくれ」

「…っ！ そうか…：お前さんもいなくなるのか」

「ああ…」

「お前さんとも長い付き合いになつたな」

「そうだな」

「さよならは言わん。勝てよ」

「ああ」

何も言わず、二人は固い握手を交わした。

そして翌日、いよいよ決戦への準備が始まった。

翌朝、信長は部下を全員集め、会議を始めた。

「偵察隊からの報告はまだない。だが、奴らは必ず近いうちに仕掛けてくる。秀吉の伝えでは、島津は逃げる秀吉軍を存分に追撃しようとしたそうじゃ」

「いやはや、面目ない……」

「殿、敵は島津と毛利、両方とみて間違いないのですか？」

「九州を平定したとみられるのは島津じゃ。ならば九州軍は島津とみて間違いない。毛利も吸収したとみて間違いなからう」

「島津の噂は畿内にも流れております。恐ろしい程の戦闘集団だとか」

一説には織田と島津は同盟を結んでいたという説があるが、島津はそれを自ら破棄した。ならば島津は織田の敵だ。それは間違いない。「うむ。我々は敵に対し、万全な状態で立ち向かう他ない。できなければ負ける。我々は死ぬ。幕府も滅ぶ。御所も抑えられ、泥沼の戦乱の時代がまた来る」

「そんな未来には……なつてほしくありませんな」

「次の戦は織田の未来がかかっておる。天下を維持できるかがかかっておる。幕府の未来がかかっておる。何としてでも勝つぞ」

「ははーっ！」

「我々は尼崎の西方で陣を張る。東から軍が間に合ったら至急入れと言っておけ」

（だが、間に合うのか……？ 旧朝倉、上杉、武田、全てを掻き集めてもおそらく相手全軍に足りるかどうか……）

「信長様、我が軍に入りたいという者が来しました。お目通りをお願いできますか？」

「なんじゃ、何処の馬の骨じゃ？」

「それが、浅井長政と言っております」

「何い？ あのカタギが今更何をしにきおった!？」

「信長様、お久しぶりでございます」

信長の元に来たのは、間違いない、かつて戦った浅井長政であった。「長政、子供生まれて引退したのではなかったか？」

「そのつもりでしたが、信長様が危機と小耳に挟んだので、元浅井領で兵を募ったところ、協力を申し出てくれる者がいましたな」

「……………」

「浅井軍、千人、此度の戦に加わらせていただきます！」

「……ふん、焼け石に水じゃ」

「勿論後詰めですよ。今更前衛には加わりません。なにせ、今日は万福丸の初陣ですからな」

「よろしくお願いします！ 織田信長様！」

「万福丸よ、今日から久政を名乗れ。父の名に相応しき立派な武士になるのだぞ」

「はいっ！」

（やれやれ……物見遊山で戦にきてはかなわんわ。しかし今更追い返すこともできん。仕方ない。上手く使ってやるか）

「あなただけに命は張らせませんぞ、長政殿」

「おお、これは山崎殿、お久しゅうございます」

「山崎か！ 旧朝倉の軍勢、どれだけ集められた？」

「2万と行ったところですか？ 信長様が手助けしてくれたおかげで、ここまで軍を引き連れることができました。此度の戦、何としてでも勝ちましょうぞ」

「充分じゃ。頼んだぞ、山崎」

「お任せください！」

「殿、上杉軍が到着いたしました」

「おお、そうか！ よかった。実によかった。早速ここに連れて参れ！」

「信長様、お久しぶりです」

「上杉景勝・景虎二人とも来よったか。して、何人集められた？」

「ざっと3万と行ったところですか。なにせ、越後は織田家に大きな借りがあります。力を貸してくれと頼んだところ、誰もが名乗り出てくれました」

「3万か。そうか。充分じゃ。此度の戦は前陣で頑張っしてほしいが、構わんな？」

「いいでしょう。ただ……問題が……」

「どうした？ 何か不満でもあるのか？」

「いえ、そうではなくて……、ここに謙信の奴は来てますか？」

「謙信？　一応横溝の奴と来ておる筈じゃが、何かようがあるのか？」

「はい……」

「いた、謙信だ」

「おーい、謙信」

「……！　こ、これは兄上殿、お久しぶりでございます」

「ああ。我らはざつと3万の部下を率いて此度の戦に参るつもりだ。で、そのことなのだが……」

「3万。充分な数ですね」

横から直江が呟く。

「……おまえ、此度の戦に参加しろ。率いる武将が絶望的に足らんのだ。おまえの力を貸してくれ」

「ええっ!？」

当然謙信は驚いた。自分は二度と越後に戻らないと決めた身だ。それなのに部下が付いて来てくれるかと言われれば、いささか疑問である。

「しかし、私は……」

「それから、たまには越後に帰ってこい！　民にはよく言い含めておくから！」

「そ、それは……」

「謙信、おまえは今でも上杉謙信なのだ。帰ってくれば越後の民も喜ぶ。頼む……越後にはおまえが必要なのだ」

「………善処します」

「そうか。それなら有難い。此度の戦は前陣を任せられることになった。厳しい戦いになると思うが、頑張ってくれ」

「謙信様、私も軍師として働きます。あなただけを危険に晒すわけにはいきません」

「愛……」

謙信は、覚悟を決めた。

「分かりました。私でよければ、越後のため、織田のため、前線に立ちましょう」

「そうか、頼んだぞ。鎧も持って来てある。それに着替えるようにな」
「はいっ！」

「愛、すまないな」

「いえ、謙信様、私は梅であり、直江愛です。気にすることはありません。それに、私も毘沙門天様の加護を受けた人が戦で躍動する様を見てみとうございます」

「有難う、愛……」

その後、謙信は鎧に着替え、皆の元へ現れた。剣を取り、皆の元で檄を飛ばす様は、中々の見ごたえだった。

（横溝殿、私も戦います！　あなただけを危険に晒す真似はいたしません！）

決戦②

「殿、此度の戦に力になりたいと申す者が来ております。お目通りをお願いできますか?」

「何? どのどいつじや?」

「そ、それが…、雑賀衆、雑賀孫市と名乗っております」

「何いつ!? あの傭兵集団が何をしに来おったか!」

「うい、ここが本陣かあ? おう、信長さんよう、久しぶりだなあ!」

「孫市…本当にお前さんか?」

「おうよう、種子島の本場、島津と交戦できると聞いてなあ、わくわくしにきたぜえ!」

「お、おう……」

「勘違いすんじやねえぞう信長あ、俺たちは本願寺の顕如様に頼まれてきてやったんだからなあ。信長に何かあつたら力を貸してやれつてなあ! そうでなきや来るもんかよお!」

「……!」

(顕如が、儂にこいつらを紹介させたというのか? いや、何故じや。奴にはそこまでの義理はない筈……)

「ああ、横溝つて人はいるかあ?」

「ん? 俺が横溝だが」

「あんたかあ。老人みみたいな面してんなあ。顕如さんから手紙を預かってるぜえ。受け取りな」

「ん、あ、ああ……どれどれ……」

『横溝殿へ。』

織田が危機にさらされていると耳にしたので雑賀衆に頭を下げて戦ってもらうことにしました。彼らの実力は本物です。是非此度の戦いに役立ててください。

願わくば、あなた方にご武運がありますように。

追伸：山菜を揚げた天ぷら、美味しかったですよ!』

「はは、成程ね。顕如さんも応援してくれるってか。それじゃ、期待に応えないといけないな」

「ふん、奴らめ、お膳立てをしたつもりか？　なら意地でも勝たなくてはな」

「殿、までも援軍がきました」

「今度はどこじや？」

「四国から長宗我部元親殿が……」

「何い？」

「信長様、ご無沙汰しております」

「……元親よ、お前さん、どうしてここに來れた？　第一、何故、この戦いに気付いた？」

「秀吉様が中国を攻めている時でしようか……？　島津から使者が來ました。秀吉の背中を突くために拳兵してほしい、と」

「それで、お前さんはどうしたのじや？」

「はっはっは、首を斬り落としてやりましたわ。今更何を言うか、とね。そして島津が秀吉様を狙っているという報告を聞き、水軍を用いて淡路経由で何とか間に合いました」

「……軍の数は幾らじや？」

「5千が限界でした。ですが、信長様の軍に加わりますゆえ、ご安心を。無論、背中を突くような真似はしませんぞ」

「……ふん、ならば精々儂のために働け。じやが期待しておるぞ」

「分かりました。ところで、光秀殿の元へ行ってよいでしょうか？」

「ああ。行ってやれ。まだ死体は焼いとらん」

「有難うございます！」

元親は一度陣を離れていった。

「……………」

(光秀の忘れ形見、というやつじやな……。礼を言うぞ、光秀)

雑賀衆が本陣に現れてから、横溝は一度陣を離れ、周りの偵察に行っていた。

なにせ今回の戦は連合軍である、ふとした事で喧嘩が起こる可能性もあるからだ。

しかも知らせでは謙信も此度の戦に参加することが分かった。彼女を危険に晒したくはないが、事情が事情なのでしょうがないと言える。

（しかも長政さんも現役復帰だろ？ 事情とはいえ、皆を危険に晒すのは嫌だねえ……）

そうやってブラブラしていると、横溝は織田家の陣にやってきた。

「こんばんわー」

「おお、横溝殿ではないですか、歓迎しますぞ！ そのお前、茶を出してくれぬか？」

そこには織田信忠と織田信雄がいた。

「は、はいっー！」

「いやいや、お構いなく」

「いいですよ、横溝殿は父上の懐刀ですからな。無礼があつてはなりません」

（おれそこまでえらい身分じゃないんだけどなあ……）

「何でも朝倉、越後の軍が間に合い、他にも援軍が来ているとか。いや、父上の久々の戦に華を添えるようで、嬉しい限りですな」

「添えるのが菊の華じゃなきや、いいんだけどなあ」

「はっはっは。そうはなりませんよ。なにせ、織田にはこの私がいますからな！」

「気合入ってるなあ」

「そりやもう、松が見守ってくれますからな。もうすぐ子供も生まれます。死んでなんかいられません」

「それは羨ましいことで……」

「しかし、朝倉、越後の軍は大丈夫なのでしょうか……。ここまで来るのに馬も休めず来た筈です、体が持つかわかりませんな」

「……（へえ、さすがは信長の息子さんだ。良い眼を持つてやがる）」
確かに言われてみればそうである。戦は数だ。しかし、集めた軍はここまで来るのに、それは苦労したはずである。

なにせ到着したのが殆ど夜なのだ。星空くらいしか照明がない時代で、よくもまあ大軍を動かせたものだと思う。

(皆疲れている筈だ……だがそれは向こうも同じの筈。これは開幕から泥仕合の様相が見えてきたな)

「……はあ」

「む、どうした信雄、ため息なんぞついて。軍を率いる将がそんな面持ちでは兵にいらぬ心配をかけるぞ。もつとしやきつとせんか」

「す、すいません兄上、私は夜風に当たってきます」

「すぐごと陣から出ていく信雄。」

「様子がおかしいな」

「あいつめ……あの事を気にしているのか」

「あの事って？」

「いや、横溝殿、あまり人前では……」

「じゃあ俺が直接聞いてくる」

「あ、よ、横溝殿、待って……」

「よう、信雄殿」

「おや、横溝殿ではありませんか。何か御用ですか？」

「あなたがしよんぼりしているのが気になつてね」

「え、えー……い、いや、そ、そんな事は、ありませんぞ。私はそりや

もう元氣いっぱい……」

「カラ元氣も元氣のうちというが、明らかにおかしいな。どうした？」

「何があつた？」

「聞いてもらえるんですか？」

横溝は頷いた。

話によると、信雄は数か月前、領地である伊賀の土一揆にあまりに苦勞していたため、軍を率いてこれを平定しようとしたという。

しかし結果は惨敗。伊賀の軍はあちこちに調略を施しており、率いる軍は丸見えだったらしい。

当然信長は激怒した。これは信長の命ではなく、信雄の独断で行ったからだ。

したためられた文書は信長に頭を勝ち割られるかのような文章で、次失態を犯したら親子の縁を切るとまで書かれていたらしい。

「父上は征夷大將軍、兄上もいずれ父上の後を引き継ぐ偉大な將軍に

なるでしょう……。

ですが、私は織田の名を持ちながら、才能と呼べるものを持たないただのうつけ者であつたらしい。それが悔しくてね……」

「そうか、まあ優秀な上がいると下は苦勞するよな」

「ええ……」

「じゃあいい方法を教えてやる。今度の戦いで島津が銃を持って応戦してきた時にな、こしよこしよ……」

「え、えええ!? 馬鹿な! 島津に通用するとは思えませんが……」

「大丈夫。きつと上手くいく。向こうは銃には一日の長がある。そしてそれを自負しておる。そこが落とし穴だ」

「……わ、分かりました。やってみます。正直、上手くいくとは思えませんが……」

「うんうん。島津は輪番射撃って言って、撃ち役と弾込め役を前後に交替させながら撃つんだ。頃合い良しと思つた時にやれ」

「は、はい……」

「夜が、明けますね……」

「信長は少しは寝たのかな?」

横溝は信長のいた陣に戻ってきた。

丹波が出迎えた。

「戻つたよ」

「おお、横溝殿、信長様は一度仮眠を取りました。今はここにはいません」

「そうか、ちゃんと寝て良かった。なにせ大一番だからな。集中力が鈍つてはいけない」

「私たちは気分が高揚していて眠るに眠れません。ですが、殿は……」
「そうだな。少しぐらいいいだろう」

そして朝が来た。

皆が朝餉の準備をしていた頃、大和から筒井順慶が出遅れてやってきた。

「遅いぞ、筒井殿」

「も、申し訳ありません。出遅れました。ですが、6千の兵を集めるこ

とが出来ました。これで勘弁してください」

「うむ、では前陣を意識した中入りに入ってもらえるかな。殿もおそろくそうするだろう」

「ふわあ……ねむねむ……」

横溝は欠伸をした。流石に徹夜は慣れない。

「おや、横溝殿ではありませんか!」

横溝に声を掛けたのは、なんと松永久秀だった。

「久秀さん。来てくれたのか!」

「おお、おお、信長様に牢から出してもらえましたか。それは重畳……。私も引退した身ですが、流石にこの戦は放置できませんゆえ」
「有難う久秀さん」

「はっはっは、私は横溝殿の『親友』ですからな。友が危機に陥ってるのに、茶を啜っているわけにもいきません。勘が働いて良かったですな」

久秀は笑いながら答えた。

その後、久秀は横溝の為に茶を立てた。眠気覚ましの濃いめの茶だった。横溝は美味しいとだけ言った。久秀は笑顔で有難うございませと答えた。

横溝は茶席の最中、今回の戦が最後の奉公になることを伝えた。横溝の悲壮感に、久秀は残念がったが、ならば私も老体に鞭打って頑張らなければいけませんな、と答えた。

「皆の者、おはよう」

「おお、殿、おはようございませす!」

朝餉の香りにつられてか、信長が仮眠から目を覚ました。

「……武田はまだ着かんのか?」

「そ、それが、まだ到着しておりません。やはり畿外ゆえに遅れているかと……」

「武田は此度の戦の生命線じゃ。何としてでも来てもらわねば困る。しかし……」

(間に合わぬかもしれんな……)

信長の心に不安が広がった。此度の戦、戦力は幾らあっても困るということはない。そして武田の戦力は間違いなく生命線といえる。

「時間を稼ぐ戦をすることになるやもしれぬな……」

一方、こちらは島津、毛利軍。

島津義久とその4兄弟、義弘・歳久・家久と毛利勢、毛利輝元と吉川元春と小早川隆景が尼崎西方に陣を張っていた。

「まずは改めて、義久殿、危機に陥っていた毛利を救っていただき有難うございます」

毛利輝元はまずは感謝から入った。

「礼には及びません。毛利と島津は前々から繋がっていました故、毛利の危機にはせ参じたまでのことです」

島津義久は気にするなとばかり振舞った。

「我々の御所を抑える計画は依然継続しておる。信長の軍を倒し、京に入れば後はこっちのものじゃ」

「信長は気付いているようですが。とはいえ、今は秀吉の軍を追い回した疲れを取るには充分の休暇でしょう」

島津のタフネスぶりが伝わるかのような振る舞いであった。

疲れはある筈なのだ。しかしそんなものはないかのように振舞わなければ島津の将とは言えない。

「……さて、次の一戦ですが、毛利には前陣を担当してもらいたいのですがよろしいのですかな？」

「ふむ……我々でよければ喜んで身を犠牲にしましょう。借りもありますしな」

「家久、毛利の軍に加われ。『あれ』をやるから伝令役を頼む」

「分かったよ、兄者」

「歳久は左翼、義弘は右翼を任せる。儂は中央で指示を出す。良いな？」

「任せてくれ」

「あの陣が完成すれば、信長は慌てふためくだろうな」

「……ところで義久殿、あれとは一体……？」

「ふふふ……」

義久は口元をにやりと緩ませた。

「名付けて、『釣り野伏せ』じゃ」

「な、なんだあの陣形は？」

早朝、島津、毛利軍が織田連合軍より先に動いた。

それは毛利軍を大きく前に出し、奥に島津軍を待ち構えさせる奇妙な陣形だった。

「なんじゃ、あの陣形は。何とも面妖な……」

遠眼鏡で向こうを見ていた信長は相手の陣形に首を傾げた。

「ああ、あれは釣り野伏せだ」

しかし島津には誤算があった。向こうに『渡人』の存在があることを。つまり釣り野伏せの存在も知られているということ。

「横溝、何じゃ釣り野伏せとは？」

「見ての通りさ。前陣を大きく前に出し、囨にする。相手が突っ込んできたら退却し、縦長になった敵の軍を三方向から袋叩きにする。嫌な陣形だよ。島津の得意技なんだ」

「なんと……つまり、あれはあくまで囨で、後ろに下がるのが作戦だということか」

「十中八九そうなるな」

「ふむ……ならばどうするか……よし！」

信長は前衛の上杉軍、及び、信忠と信雄、そして信孝に伝令を出した。

現在、雑貨衆と旧朝倉軍、大和軍、長宗我部の軍は中入りで指示を待っている。

「こっちは武田の軍勢待ちじゃ。ならば遠慮なく時間を稼がせてもらうとしよう。こっちも釣り野伏せじゃ」

「嫌な策だな。信長……」

「何だと!? 向こうも釣り野伏せの陣を張っただど!?」

「馬鹿な!? 我ら島津のお家芸を信長が何故知っている!?!」

「むむむ……予定が狂ったな。まあ仕方があるまい。向こうも動くに動けぬ筈じゃ。このままじわじわと圧力を掛けるように指示を出せ。桶に張った水から先に顔を出した方が負けじゃ」

島津は動じなかった。お互い緊張の張り合いを望んだ。どっちが先に根を上げるかの勝負だった。

（むむむ……流石じゃな島津よ。これで根を上げてくれると思ったんじゃないが……）

（動くも戦なら待つのも戦じゃ。信長よ、作戦を台無しにするのはそっちになつてもらうぞ……！）

しかし、戦局は全く予期せぬ方向に動く。

キョエアアアアアアアアアアアアアツ!!!

「何じゃあの金切り声は!?!」

「あ、ああ……ああ……」

秀吉がその場にへなへなと座り込む。前回の事がいささかトラウマになっているようだ。

「どうしたのですか秀吉殿、お気を確かに!」

「や、奴じゃ。島津子飼いの、トカゲのからくり……奴が現れるぞ……!」

秀吉の予想は当たった。突如、戦場の東の方に、巨大なトカゲのからくりが現れたのだ。

「おお、奴が現れたか、これで戦局も有利に……」

島津側は安堵した。と、思った。が、トカゲのからくりはそこから全く動かなかった。

「あ奴か。秀吉が言っていたのは、いやはやこれは……」

「俺が行く!」

横溝が駆け出した。信長の制止も聞かずに。

その瞬間、横溝の体がふわりと宙を舞った。

「うおおおおおっ!?!」

そして引きずられるようにトカゲのからくりの所まで飛んでいく。

スタツ……。

横溝は草むらの上にひらりと舞い降りた。

「……やっぱりお前さんかよ。……デスビスノス！」

——デスビスノス。機械が究極の進化を遂げた姿であり、クリムゾンを手に入れるためにやってきた、言わばラスボスである。

キョエアアアアアアアアアアアアッ!!!

「お前のせいで俺の人生滅茶苦茶だよ。どうしてくれるんだ、ええ？」

横溝はこれまでの事を思い返していた。サバイバルゲームをやっていただけの大学生が、クリムゾンと共に戦国時代に飛ばされ、幾度となく体に致命傷を受け続け、今や老人の姿だ。

「この借りは全部まとめてお前に返してやる。覚悟しろよ、でっかいの!!」

「クリム……ゾンハ、ワタシ……ガ……トリカエ……ス……!」

横溝は感じていた。仮にこの戦いに勝っても自分に未来はないかもしれない。元の世界に戻れるかも分からない。

だが、この大一番だけはなんとしても勝つ。そう心に決めていた。倒すべき宿敵と対峙し、決意が震えた。

「……………」

まるで関ヶ原の戦いの大一番を見ているようであった。

機械が究極の進化を遂げたと言われる兵器・デスビスノスと、クリムゾンに見初められた男・横溝由紀。

両者は今まさに相まみえんとしている所であった。

お互い初対面でありながら、あまりにも深き因縁を持つ二人。そこには、ただ、張り詰められた空気だけが存在していた。

「ヨクモココマデキタモノダ……」

「ああ、来たぜ。冥途の土産を貰いにな」

「オマエハ……ワタシノスベテヲウバツテシマッタ……」

「そうかよ」

「コレハ……ユルサルベキハンギヤクコウイトイエヨウ……」

「そうかよ」

「コノ……サイシユウキチクヘイキトカシタワタシノチカラヲモツテ……キサマノツミニワタシミズカラガシヨバツヲアタエル……」

「そうかよ」

「……シヌガヨイ」

「そうだな。重ねた罪の数なら誰にも負けないさ。死ぬにはいい日だ。だがな……」

横溝がクリムゾンを構えた。

「……貴様も道連れだ!!」

キョエアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!

決戦③

「よし、あのトカゲのからくりは横溝に任せよう。儂らは島津軍に集中する」

「はっ、了解しました！　して、次の一手は如何に!？」

（むう……武田はまだ着かんのか？　あの釣りを崩すには増援が必要なのだが……）

「申し上げます！」

京へ出していた伝令役が戻ってきた。

「申し上げます!!　武田勝頼様の軍勢、今京へ到着。大至急こちらに向かうとのことですよ！」

「おお、そうか。待ちわびたわい。して、軍の数は？」

「2万程度です。ですが武田はいずれも精強、期待してもよろしいかとー！」

「ほほう。褒めるのう。まあいい。ならばもうしばらく時を稼ぐか……それとも埒を明けるか……ふむ、迷うのう」

「信長様、この戦いは遊びではすみませんぞ……」

横から丹波がツッコむ。

「よし、戦場の中央に砦を築くぞ！」

「ええっ!？」

これには丹波も驚いた。

「この状況で、戦時中央に、砦を、築くのでありますか？」

「うむ、そうなれば島津は釣り野伏せの陣形を崩さざるをえまい。すなわち先に根を上げるのは向こう、ということになる」

「し、しかし、成功するでしょうか……」

「成功するかどうかではない。砦を築こうとする事自体が金床よ。そして槌が我々織田軍じゃ」

「わ、分かりました……伝令にはそう伝えます」

「雑貨衆と朝倉軍は前陣に交じらせよ。頼むぞ」

「な、なんだあれは!？」

「と、砦か!？　織田め、戦場のど真ん中に砦を築くつもりなのか？　ふ

ぎけおって！」

伝令役から届けた状況を聞いた途端、義久は怒りに震えた。

しかしどうする？ あんなものの建造を許しては戦局は大幅に不利になる。かといって前衛を前に出せば、桶に張った水から顔を出すのはこちらが先ということになる。

「だがやむを……得ないか。前陣に指示を出せ、あの砦をぶち破る。後詰めの人々も動くぞ。陣をできるだけ崩さず、前線を押し上げるのだ！」

「やはり後ろも動いたか、釣り野伏せ敗れたり、といったところじやな。こうなれば否応なしに乱戦となる。うちはそういう戦いは望むところじやて」

信長はにんまりと笑みをこぼした。

「砦の建造は引き続き続けよ。我々は少し下がって前陣を招き入れる。後は雑貨衆の射撃の後に突撃じや。急げよ！」

「りよ、了解しました。伝令、伝令——」

一方、上杉陣営。

「信長様も大胆な戦術をたてる。まさか戦場のど真ん中に砦を作るとは」

直江愛が関心したかのように呟く。その横で、謙信が緊張した面持ちで馬に乗っていた。

「謙信様、緊張しておられますか」

「心配するな愛。何故か気分が高揚してくるのだ。怖いはずなのに、突撃が待ち遠しくて仕方がない」

「はは、それは良いことですね。大丈夫です。毘沙門天様が謙信様を守ってくださいります。絶対に死にませんよ」

「そうだな。横溝殿がああの大トカゲの化け物と戦っているのだ。人など怖くはない。そう思いたいな」

「ふふ……子供を授かれなかったことが残念ですね」

「いや分からないぞ愛。こういうのは偶然でほんっ、と授かるものなのだ」

「ふふふ……あ、そろそろ雑貨衆が射撃準備に入りますよ」

「いいかあ！ 出来るだけ引き付けろよお！ 射撃は2発、その後は側面にとんずらだあ！ いいなあ!?!」

「はいっ!」

「てめえら、種子島の本場の島津と撃ち合うまで死ぬんじやねえぞお！ よーし、構え！ まだだ……まだだぞ……撃てえ!!」

雑貨衆の種子島が火を噴いた。更に続けて後ろの男たちが前に出て、2発目の射撃を行う。

「よし、頃合いだ。上杉軍、突撃。ただし毛利が逃げたら追うなよ!」

「織田軍に後れを取るな！ 全軍突撃だ!」

「いざ行かん！ 毘沙門天の加護ぞある!!」

お互いの前陣、毛利と織田・上杉がぶつかり始めた。

そんな中、武田が遂に到着した。

「信長様、遅れました!」

「遅いぞ勝頼! 軍の調子はどうじゃ!?!」

「ここまではぼ休みなく駆け抜けてきたので疲労困憊です。ですが気力は充実しています。そして武田の軍勢はいずれも精鋭揃い。今すぐにも突撃できますとも!」

「言うたな! ならば行ってこい!!」

信長は一応こちらの戦略と向こうの釣り野伏せの警戒を怠るなどだけ伝えた。

「武田勝頼、参る!!」

武田の到着は毛利にとって致命的だった。数ではひけを取らなくても、勢いが違う。ましてや毛利は釣り野伏せを行うため一度下がるつもりでいたことも大きかった。

「くそっ、我々は前に出ればいいのか!? 下がればいいのか!? どちらなのだ!?!」

そして伝令役の不手際で毛利軍は戦場で完全に浮いてしまったのだ。

こうなれば後は織田連合軍に飲み込まれるだけである。筈なのだ
が……、

「まだだ！ この毛利輝元、そう簡単にやられはせんぞ!!」

これでも踏みとどまれるのが毛利輝元の底力だった。できるだけ弓矢を上から振らせ、上に注意が向くようにさせながらも島津の鉄砲隊を側面に回り込ませるように指示を出す。

「弓矢隊は矢がなくなるまで打ち続けろ！ 足輕は一旦下がらせろ！

騎馬隊の足で活路を切り開く！」

そんな中、小早川隆景と島津家久が次の指示を待っていた。

「家久殿。我々も前進しましょう。これだけ乱戦になつてはもう下がれませんか！」

「うーむ、そうなのだが……、兄者達も上がってきてる。だが間に合うかどうか……でも輝元殿を見殺しにはできないな。仕方がない。我々も前に出よう」

「その言葉も待つていました！ 我々も動くぞ！ 輝元殿を助けるのだ！」

粘る毛利軍に島津家久の鉄砲隊が参加する。

そして戦時中央からやや左翼に鉄砲隊が陣取る。

「この位置なら味方に被害が出ることなく撃てそうだな。よし、鉄砲隊構え！」

バアン！ バアン！ バアン！ バアン！

「ぐあああつ！」

「む、無念……！」

「……!? 何事か!?!」

「織田です！ 織田の騎馬鉄砲隊です！」

「乗馬しながらの鉄砲だ?!」

「ほ、本当に上手くいった……」

騎馬鉄砲隊を率いていたのは織田信雄だった。

信雄は事前に横溝に言われていたのだ。

『向こうが鉄砲隊を構えに入ったら、乗馬した状態で一気に間合いを詰めて鉄砲を一斉掃射しろ。大丈夫。必ず上手くいく』

もし戦場で構えに入った鉄砲隊を見つけられなければこの作戦は失敗に終わっていただろう。向こうがこちらに気付いたら敵は鉄砲

「おまえだな、毛利輝元は！」

「……貴様は!？」

「武田軍総大将。武田勝頼！ 御命頂戴仕る！」

「くっ……誰が、織田に下った負け犬なんぞに……!？」

「負け犬……？ それは違うな。我々は徳川に滅ぼされる身であった。しかし織田がそれを救ってくれた。織田には大恩がある。その為に甲斐からはせ参じたまでのこと！」

「坊主が調子に……坊主が……!？」

「そして、私には背中を支えてくれる者がいる。声を張り上げ応援してくれる者がいる。この命、簡単にはやらせはせぬ！」

「おのれえっ！」

「うおおおおおおおおおっ!!!」

勝頼が直線一気に間合いを詰める。そして、もはや刀を振るう力もなくなった毛利輝元の刀をはじき、その喉笛に刀を突き刺した。

「んっ……!! っ……!？」

「介錯してやる。腹を切れ、毛利輝元！」

(……もはや、ここまでか。……父上、私は間違っていたのか？ 私は

……私は……私は……!)

ザンツ!!

「毛利輝元、討ち取つたりー!!!」

戦場に勝頼の声が高らかに響き渡った。

「そ、そんな……」

「輝元様が……死んだ……」

吉川元春と小早川隆景が輝元の死亡を聞き唾然呆然とした表情でいた。

だが、戦いが終わったわけではない。降伏は出来ない。自分たちは島津に生かされている身だ。言わば一度死んでいるも同然の身。ならば……、

「行きましょう、小早川殿」

「吉川殿……」

「盃を交わした時に決めていた筈です。死ぬときは一緒だと」

「ははっ、そうでしたな。ではやるだけやってみますか」

「ええ、これ以上の戦いは無意味？ 冗談言っちゃいけない。むしろここからだということをお織田めに思い知らせてやりましょう！」

「いいですとも！」

二人に後悔はなかった。悲壮な思いで再び戦いを開始したのである。

そして二人の決意ある戦いの中、遂に島津の本陣が戦場に躍り出た。

「さあ、終わりの始まりだ」

両翼からの鉄砲隊が、既に織田家の軍を取り囲んでいた。

「……………しまっ……………」

織田信忠が一瞬視界に見えた時には既に遅かった。

「撃てえっ!!」

島津の台風のような輪番射撃が始まった。

「う、うわああああっ!!」

そんな中、信忠の肩に弾丸がめり込んだ。馬から崩れ落ちる信忠。

「信忠様！」

「うぐっ……………！だ、大丈夫だ……………」

「私が手を貸します。早く戦場からお逃げください！」

「くっ……………す、すまない……………」

信忠の負傷は織田軍に大きな動揺を与えた。早く逃げなければ、皆ハチの巣にされてしまう。

「退けー！退くのだー！」

「一旦退却せよ。態勢を立て直すぞ！」

朝倉軍・山崎と、四国軍・長宗我部が退却命令を出す。

「ふふふ、輝元殿が死んだらしいが、まだこれからよ。なあ、兄者」

「頼んだぞ。義弘、歳久。ここで敵を崩せばこの戦まだ勝敗は分からぬ」

「任せてくれ兄者。この義弘、その勇猛果敢ぶり、天下の織田にまで響き渡らせてくれる……………」

決戦④

織田連合軍と島津連合軍の戦いもいよいよ佳境を迎えてきた。

織田信忠が戦闘不能に追い込まれ、追突していた部隊も島津の種子島の前に退却を余儀なくされていた。

更に島津4兄弟の追撃に足軽が次々に食われていた。

「よし、このまま突き進め！」

「後ろを見せたら殺すまでだ！」

「くそつ、島津め、元気付きおつて！」

「深追いするな、撤退だ。撤退ー！」

信長の元にも伝令が届いていた。

「戦況を報告します。織田信忠様、種子島の一撃を受けて重症、他の軍も後退を余儀なくされているようです！」

「むう……。信忠がやられたか。しかし島津は強いろう。流石は九州の暴れん坊といったところか」

「信長様、褒めている場合では……」

「分かっておる。しかし信忠が心配じゃ。最後尾まで下がらせるよう命じよ」

「ははーっ！」

伝令役が再び走るのを見届けて、信長は一息ついた。

「まあ、攻めてくるならくるで、こっちは都合がいいんじやがな」

「よし、いいぞ、押している！」

「このまま突き進……」

バアン！ バアン！ バアン！ バアン！

何処からか射撃音が飛んできた。

「何いつ!? 種子島！ どこからだ！」

「あ、あれだ……！」

「……！ 砦。完成していたのか！」

そう、戦闘中に砦を築く。信長の奇想天外な策は完成されていた。

突き進んでいた島津の前に、巨大な砦がドオンと行く手を阻んだのだ。

このあたりは土木工事を得意とする織田軍の一日の長といったところだろうか。

「尾張は弱兵で有名でのう。どうすれば勝てるか何度も考えていたわけじゃ。付城戦術もその果てに生み出した。そしてこの砦の存在感、これは相手にとって脅威な筈じゃて」

「み、見ろ、あれは織田信長だ！」

「て、鉄砲隊、構えろ！ 奴を倒せば終わりだ！」

「おっと、そうはいくか。儂は顔を見せに來ただけじゃ。ま、儂自身による釣り野伏せじゃな」

そう、信長が築いた砦により、前方の守りはより強固になった。これなら射角を利用して弓矢も種子島も使える。

そして退却した一部は側面に回り込み、追突してきた島津を取り囲むように布陣をし直した。

これにより、三方向からの攻めが可能になったのだ。

「こ、この陣形は……間違いない、釣り野伏せか……！」

「覚えておらんのか島津よ。この勝負は釣り野伏せと釣り野伏せの戦いだ。攻めればどっちが不利になるか、忘れていたわけではあるまいな……」

「おあらあつ、おまえら、種子島構えろお！ 撃ちまくるぞお！」

「こちらは雨の如く矢を降らせよ！」

雑貨衆と大和の筒井軍が砦から一斉射撃を行った。これは島津にとって壊滅的な被害をもたらしかねない攻撃だった。

「うわあああつ!!」

「だ、駄目だ、防げ……」

「む、無念……」

調子よく突き進んでいた島津軍は砦から放たれる乱射に全く対応できなかった。

しかもこの位置では砦を壊すこともできない。それにいつ側面から態勢を立て直した織田連合軍が来るとも分からない。

「まずい……まずいぞ、兄者！」

大将・義久に義弘が問う。このままでは囲まれて島津は壊滅してし

まう。

「ぬう……ここまでか。このままでは軍は丸ごと織田に平らげられてしまう。……仕方がない。この戦、我らの負けじゃ。九州に戻って出直す！ 全員退却の準備をせよ！」

伝令役が動く。だが、義久は一步遅かったようだ。

側面から武田、上杉、旧朝倉、長宗我部が物凄い勢いで突撃してきたからだ。

「た、大変です、左翼から上杉、右翼から武田の軍勢が押し寄せてきております！」

「し、しまった……動くのが遅かったか……！」

後悔しても後の祭りである。両脇からは武田と上杉を中心とした軍勢。正面は砦と織田軍。このままでは完全に包囲されてしまう。

「……ふっ、どうやら、ここまでみたいだな。兄者、兄者だけでも逃げろ。今から俺は一世一代の『捨てがまり』をやって時間を稼ぐ」

「な、なんじゃと!? やめろ義弘！ おまえが死んだら島津は……」

「大丈夫だ。歳久も家久も無事逃がしてみせる。兄者達は一心不乱に西を目指せ。皆が九州まで戻れば、島津は幾世代掛かっても必ず織田に引導を渡す時がやってくる。兄者頼む。後生だ」

義久は分かっていた。こうなった時の義弘はテコでも動かない事を。

「………分かった。頼んだぞ、義弘」

「ああ。元気でな」

「兄者！」

「兄者……！」

歳久と家久が寄り添う。ここで別れの言葉を出せないのが心苦しい。

「おまえらも、元気でな」

「……兄者、九州でお待ちしています」

「無事で帰ってきてください」

「おまえら、このこの一、そうやって兄離れできないといつまでも島津の一員として恥ずかしいと思えよ」

「いくぞ、おまえら、命捨てがまるは、今ぞ！」

島津の長男と三男と四男が脱皮の如く戦場から逃げ出そうとしていた。

そして残るは次男・義弘ただ一人。だがその猛将、一騎当千にあり。「射撃はただの一度だけ行おう！ その後は白兵で攻める！ いいか、野郎ども、ぬかるなよ！」

「ははーっ!!」

「……！ 島津が逃げる？」

上杉軍にいた直江愛がその様をしかと見ていた。

「追うか、愛？」

「いえ、距離が遠すぎます。逃げ切られます。見逃しましょう、謙信様」

「……愛とは思えない程消極的だな」

「大丈夫です……織田には別動隊がいますから。それに……」

「それに？」

「横溝殿の戦い、終わったみたいですよ。一刻も早く行ってあげませんと」

「……！ そ、そうか。ふふ、戦場でも女たれと思わせる、困った軍師だな、愛は」

「いえいえ、それほどでも」

文字通り、島津最後の戦いが始まった。

種子島の射撃から始まり、後の白兵。島津は最後の最後まで抵抗した。この時義弘の兵僅か700。

しかし死兵となった島津軍は強かった。抵抗に次ぐ抵抗。一騎でも多く敵を倒し、一時でも時間を稼ぐために奮闘した。

武田の突撃すら一時跳ね除けたのは称賛に価した。

しかし、それだけでは戦局を覆すには届かない。

「はああああああっ!! 俺が誰だか知らないのか!」

四尺三寸の大長刀が、一撃のもとに島津兵8人を斬り伏せた。

「何だと!」

「あ、あいつは何者……うわあっ!」

「見えたぞ、島津の将が！」

「くっ、貴様、何者だ!？」

「……四国軍、長宗我部元親の嫡男、長宗我部信親……その命、貰い受ける！」

「島津が次男、島津義弘。この命、取れるものなら取ってみるがよい！」

一騎打ちが始まった。島津きつての猛将島津義弘と、土佐のサラブレッド長宗我部信親。

だが、この戦いは、あまりに早く終わった。

義弘の体力は限界に達しており、あちこちに弾や矢を受けていたからだ。馬ももはや限界だった。

たまたま、信親が近くにいただけで勝負の行方は分かり切っていた。

できれば満身創痍ではない、万全の戦いを欲していたが、これも戦場。信親に心残りはなかった。

「さらばだ、島津義弘。おまえの戦いぶりは今後末永く語り継がれるだろう……！」

信親の大長刀の一閃が義弘の体を捕らえた。義弘は体ごと真つ二つになり、戦場にごろんと転がった。

「し、島津……ば……んざい……ぐはあ……っ！」

一方、戦場から脱皮の如く逃げてきた島津義久と他2人の兄弟は山道まで辿り着いていた。

(義弘……すまない。本当にすまない……)

今でも思い浮かぶは戦乱の中兄弟で仲良く過ごしていた日々。明日命があるとも分からなくても、兄弟で楽しく過ごしていた日々。

その最期を見届けることすらできなかった己を、義久は悔いた。悔やんでも悔やみきれなかった。

「に、逃げるんじゃない……義弘の命を無駄にはせん。九州に戻り必ず再起を……」

その瞬間、矢が飛んできた。

「なっ……っ！」

「うわああつ！」

「……！」

ドスツとその一矢が四男家久の眉間に突き刺さった。

「家久あ！」

「だ、駄目だ、即死している……！」

「おのれえ、落ち武者狩りか!? どこのだいつが家久を！」

「我々だ！」

坂の上と山道の木々の隙間から、武装した兵たちがわらわらと現れた。

「浅井軍、参上！ 横溝殿の言う通りだったな。状況不利となれば捨てがまりを用意して逃げ切ろうとすると。先読みして回り込んでいたら本当に来たからな！」

「くつ、くつそおとおつ!!」

「全軍、一斉掃射！ その後は白兵だ。こちらは少人数だが、ぬかるなよ！」

「貴様らあああああつ！」

完全に不意を突かれた島津軍は次々に各個撃破されていった。

特に親の名を貰った万福丸こと浅井久政が獅子奮迅の大活躍を見せた。やはり諸国放浪の旅は何も遊んでいたわけではなかったようだ。

立派な武士になる。それだけを目標に久政は今日まで修行してきた。その刀のさばき方はもはや熟練の兵士そのものだった。

「一人たりとも島津を逃がすな！ 逃がせば我ら浅井の恥ぞ！」

「くつ……！」

狭い山道では弓矢は防ぎようがなかった。既に歳久は膝に矢を受けて重症。歩くのもままならない。

兵たちは瞬きする間にどんどん減っている。

「ええい、こうなれば一世代、死中に活を求めろわ！」

義久は馬で山道の上まで駆け抜けていった。しかし、そこにも浅井の足軽が……！

「どけええええええいつ!! 弓矢など、この刀ではじき飛ばしてくれ

る！」

「どかぬわあっ!!」

足軽隊の槍が、馬と義久を貫く。

「ぐおおおおおっ!!」

「死中に活なした！ 島津義久！」

浅井長政の刀が義久の首をズバツと斬り落とした。

それが、島津軍大将・島津義久の最期だった。

「……よしっ、ふふっ、市にいい土産話ができたな。さあ、後は烏合の衆、取り囲んでしまえ！」

浅井軍の最後の仕上げが始まった。

この時点で浅井軍800。島津軍200。それも残りは武装もまならない者たちばかり。降伏しようとするもそれは受け入れられなかった。全員その場で処刑された。

「悪く思うなよ。これも戦国の習いだ……。もつとも今の私は武士ではなく大工なのだがな」

こうして、毛利・島津連合軍は織田連合軍の前に一兵残らず壊滅した。

決戦⑤

「ふう、ようやく終わったか……」

「荒れ果てた戦場を砦から見下ろしながら、信長は一人呟いた。

「被害は大きかったが、何とか数で上回ることができたか。……光秀、地獄で褒美をくれてやる。有難く受け取ってくれ……」

明智光秀。彼の功績は大きかった。だからこそ褒美を取らせることができなかったことを、信長は悔いた。

（しかし、これで、儂の天下は不動のものになる。皆の者感謝するぞ）

「信長様、別行動を取っていた浅井長政殿が帰ってきました」

「おお、そうか……。で、戦果は？」

「島津大将、義久を討ち取ったとのことですよ」

「おお、そうか。見事なり。今度特別に安土城の『御幸の間』に寝泊まりさせてやるか」

「信長様、見てください。大きな首が取れました」

「これ長政、畑から大根を抜いたのとは違うのだぞ」

「はっはっは、そうですね。私も戦国時代に生きたものの一人ですが、生首や鮮血の類はどうにも慣れませんなあ」

「ふん、さつさと大工に戻るがよい。あーそうじゃ、その奴、長宗我部元親を呼んでまいれ」

「は、元親様でございますか？ はい……」

「おお元親か、そして横の者が信親じゃな。まま、近ごろよれ」

「改めまして、長宗我部信親でございます。信長様、今回は私めに働きの場を与えてくださり誠にありがとうございます」

「相変わらず堅苦しい奴よのう。育てが厳しいと、こども面倒くさくなるのかのう、元親」

「いえ、信親はじきに長宗我部を支える孝行息子ですから」

「何でも島津義弘の首を取ったそうじゃな。それでは褒美を取らず」

「はあ、何でしょうか」

「お主の四国滅封を解く。四国は好きに統治するがよい」

「ええ!？」

「どうした？ そんなに驚いて？ 何か不満でもあるのか？」

「い、いえ、それは全く。ですが、よろしいのですか？」

「ああ問題ない。最終的に中国は信孝にくれてやるつもりじゃからな。それで空いた四国をお主に任せたい。頼めるか？」

「も、勿論ですとも、この元親、この身にかえてもやり遂げましょうとも！」

「父上、私も頑張ります。共によい統治を目指しましょう」

「そうか。なら去れ。詳細は追って報告する」

その後信長は戦場をぶらぶらしながら各軍の報告を待った。

「武田は？」

「疲れた、とだけ残して皆土の上にはたりと倒れて寝てしまいました」

「……雑貨衆は？」

「目的は終わった、楽しい戦場を有難うと伝えておいてくれ、とだけ残して帰ってしまいました」

「……大和の軍と旧朝倉は？」

「残存軍に余裕があつたので後始末と事務処理を行ってもらっております」

「……上杉軍は？」

「上杉謙信様と直江愛様を待つて越後に帰るとか……」

「……秀忠は？」

「あまり具合がよくないようです。肩にめり込んでいた弾丸の摘出は終わりましたが、ひよつとしたら左肩が使えなくなるかもと医者が見……」

「そうか……」

信長は秀忠の事が気かりだったが、あえて気にしないそぶりを見せた。ばればれだったかもしれないが。

「横溝の奴はどうした？ あいつは変なトカゲのからくりと戦っていた筈じゃろう？」

「上杉謙信様が探しに行っているようです」

一方、謙信と愛は横溝を探しに行っていた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……。どこですか？ 横溝殿、おり

ましたら返事をしてください！」

「落ち着いてください銀姫様。こんなことを言いたくないのですが、おそらく横溝殿は……」

「そんなことは分かっている！　だが、このまま野ざらしにしておくのは可哀想じゃないか！」

「おーい、いたぞ謙信様」

護衛の上杉軍が横溝を見つけたようだ。

「そうか、でかした。横溝殿、今あなたの、元……へ……」

草むらに横たわっていたのは、間違いなく横溝だった。しかし、あまりに損傷が激しい遺体であった。

肉という肉ははじけ飛び、骨という骨は粉々に砕け、間接は折れ曲がり、もはや人間というより肉の塊に近かった。

「そんな、なんて、ことだ……」

直江愛はあまりの惨状にその場で泣き崩れた。

謙信は横たわる横溝をそっと抱き寄せた。

「おいたわしや……横溝殿。お疲れ様でありました。ゆっくりと、ゆっくりとお眠りください……私の胸の中で……」

謙信は抱き寄せた横溝の顔に唇を近づけ、そっと接吻をした……。

その後、横溝の姿を見た者はいない。

元の世界に戻って平穏な日々を過ごしたかもしれないし、完全に死んでしまったのかもしれない。

これを機に異世界転生を果たし何処とも知れぬ地で真紅の銃と共に戦っているのかもしれない。

だが、これだけは言える。

横溝由紀は、この時代で、間違いなく、死んだ。

そして、明智光秀と横溝由紀の四十九日を待って、織田軍は中国に再進出した。

もはや毛利もいない状態だけあって、統一は簡単に済んだ。統治は織田信孝と滝川一益の2人の統一となった。

そしてそれがひと段落したところで、織田軍はいよいよ九州制圧に向かった。

残存の島津軍は最後の抵抗をした。これが島津滅亡を意味するものであっても、である。

島津を滅ぼし、最後の残存兵力を始末し、九州は遂に織田に平定された。

織田信雄と羽柴秀吉の両名に任された。うまくやれよ、と伝えだが信長は正直不安であった。しかし、かつてコンプレックスと失敗で自責の念に囚われていた織田信雄は、そこにはいなかった。

「ふう……」

長い旅が終わった。安土に戻ってきた信長は風呂に入り、食事を取り、一息ついた。

自分が望んでいた天下統一。それが遂に現実のものとなったが、信長に笑みはなかった。

「殿……」

部屋に帰蝶が入ってきた。

「どうされました？ 最近の殿はため息ついてばかりだと皆が不安になってるそうです」

「いや、なに、天下統一といっても何処か寂しいものだと思つてな」

「そうですか……横溝殿が言っていた、燃え尽き症候群、というものでしょうか？」

「ふむ、そうかもな。確かに儂はやるべきことを全てやり遂げた。燃え尽きる程にな。そして孤独を感じておる。特に横溝、あいつがいないとこんなにも寂しいものかとなあ……」

「光秀さんのこともあります。殿は友人を二人も失ってさぞ辛いのでしょうね」

「そう思うか？」

「はい……」

帰蝶は信長を抱き寄せた。

「殿、私でよければ幾らでも話し相手になります。夜が明けるまで話

し続けて差しあげます。だから、元気を出してくださいな」

「うむ……。すまんな。帰蝶」

(……そうじゃな。儂は一人じゃない。そして支えてくれる者、支えなければならぬ者がいる。いつまでも女々しい事を考えていないで張り切らないとな)

「天布幕府の未来は、これからじゃ。気合を入れ直さねばな」

「その意気です。殿」

(儂はまだ何も成し遂げられておらんのだ。明日から公務をはりきらねばな)

風が吹く。戦場がなくなった日ノ本の国に。

織田信長。人間五十年を経つても生き続け、後の国に多大な影響を残したとされているが、所詮それは後日談に過ぎない……。

エピローグ

信長は九州から帰ってくると、また公務に勤しんだ。天下統一といっても所詮それは通過点に過ぎない。何よりも幕府を運営するには自分が張り切るしかないのである。

九州から戻って数週間後、北条氏が尋ねに来た。戦地に赴けずいませんでした、と。

信長は、あの位置では来るに來れないだろうということに気がしなかった。引き続き関東の方を頼む、と伝えた。

それから更に数週間後、奥州から伊達政宗がやってきた。初めての謁見であるが、中々どうして、堂々とした佇まいであった。

信長は、ここからは奥州は遠かろう、とした上で、願わくば我が幕府の末席に座ってほしいと願った。

政宗もそれを承諾した。そのつもりで来たのだ、と。

豪華な料理と風呂と寝所を振舞われ、流石信長様は金持ちですなあ、と皮肉った。

信長はお主らは身内同士で争うのはいい加減止めろ、みんな知っておるぞ、と言うと政宗もさすがに縮こまった。

一方、信長は息子、信忠に2代目を襲名してくれないかと何度か伝えた。しかし信忠は、この腕では……と、すぐには承諾をしなかった。

毛利・島津連合軍との大戦で肩に鉄砲の鉛玉を喰らった信忠は、その後リハビリを繰り返していたが、経過は芳しくなかった。今でも肩はともかく指先には力が入らない状態だった。

利き腕でないことが幸いしたが、この塩梅で幕府を一手に引き受けるのは厳しいと迷っていた。

しかし信長は、2代目はおまえしかいない、儂を信じろ、出来ないことは儂が現役なうちは手伝ってやる、と言ひ、信忠も迷った末に承諾した。

ここに天布幕府2代目将軍、織田信忠が襲名した。しばらくは親子の二人三脚での幕府運営となるが、これもまた有り

ではないだろうか。

後の事になるのだが、信忠時代は飢饉もなく、豊作続きで後継ぎにも恵まれ、満たされた時代となった。信忠はこれまで頑張った甲斐があつた、と一人泣いた。

一年後、九州から息子信雄と羽柴秀吉の両名がやってきて、九州の経過を直接伝えた。

九州に来て以来信雄は非常に張り切っており、統治をほぼ完ぺきにやつてのけていた。ただ、南蛮人との付き合いは慣れないらしく、そこだけが難点です、と父に伝えた。

その一方で秀吉は終始縮こまっていた。予期せぬ中国大返しで戦力を擦り減らすという大失態をやってしまった秀吉だが、これまでの活躍から首を刎ねられることはなかった。

その代わり信雄を補佐してくれと言つたが、謁見に来てもずっと下を向いてブツブツと何かを言っているだけであつた。

鬱状態かもしれない。あれ程出世に燃え、上昇志向を持っていた者が見る影もなくなっていたのは信長にとって計算外だった。

(人とはほんの些細な事で変わってしまうものよなあ……)

だが、他に適任者がいないことから、引き続き補佐役を続けるよう命じた。秀吉は、「はい……」とポツリと聞こえないくらい小さな声で言つた。

謙信と愛は越後に帰つた。

聞くところによると、謙信は妊娠していたらしい。横溝の残してくれた最後の忘れ形見を受け取った身として、元気な赤子を産むと張り切っているようだ。

信長は、無事生まれたら顔を見せに來いと文を出した。

(どうせあいつの血が流れた子供だからさぞひねくれ者に育つんじやろうなあ。謙信もきつと頭が痛い日々を過ごすことになるじやろうて……)

幕府お抱えの茶人に出世した利休は弟子を数名とった。

茶の湯のわびさびと己の業の深さをその胸にしかと座らせんと教鞭をたれた。自分は茶の湯は自由なものたれとは出来なかつたからこそ、弟子たちにはその道を歩んでほしいと伝えたらしい。

老いてますます盛ん、利休は今でも安土の城下に作られた横溝の墓の前で茶を作る時があるという。

それから更に数年後。

妻、帰蝶が亡くなった。

高齢と病が重なり、どうにもならなくなっていたが、信長は最後まで妻を看病した。

帰蝶は、殿の妻として生きられて幸せでした。一足先に待っています。と残し、静かに息を引き取った。葬式には多くの人々が参列し、幕府を支えた一人の女を讃えた。

「……………」

（一足先に待っています、か……。たわけめ、それは儂の台詞じゃ。儂が先に死んでいなきやダメじゃろうて）

安土の天主の寝所も一人になつてしまった。信忠は一つ下の階である。

（寂しいものじゃなあ……。だが心地よい寂しさじゃ。こんな人の心も分からない男に、色んな人間が付いて来てくれた。これほど有難いことはないわい）

「なあに、儂もすぐに行くわ」

しかしその時は中々来なかつた。

信長は周りが思っているより長生きした。

信長は儂はいつまで妻を地獄で待ちぼうけさせるつもりなんじゃ、と自虐った。

しかしついにその時が来た。

信長は病にかかった。

日に日に衰弱し、もはや医者の手ではどうしようもなかった。だが信長はこれでいい、と運命を受け入れていた。自分は長く行き過ぎた、と。

目を瞑れば色んな思い出が蘇る。

幼少の頃から親族に命を狙われ、毎日が気が気でならなかった。たわけ者と噂を流布させている間に、日々鍛錬に勤しんだ。

岐阜を取るまでに何年もかかった。

それから先も戦いは安定しなかった。自分が最前線に出て戦う戦も数多くあった。

そして日ノ本の戦の概念を丸々変えてしまった『渡人』の存在。

そうだ、横溝だ。あいつとはまるで腐れ縁のように接した。年は離れていたが、不思議と楽しかった。

そして多くの戦を経て、遂に幕府を運営するようになり、天下を統一できた。

(まさに波乱万丈よなあ……まさかここまで成るとはのう……)

「ふっ……」

休んではいられない、今度は地獄で天下取りになるのも悪くないな、そう思った。

そして深夜、信長は苦しむことなく息を引き取った。

織田信長。享年61歳。日本がもっとも血生臭い時代を駆け抜け、誰よりも人の生き死にを見てきた男が、永遠の眠りについた。

葬式は国葬という形で盛大に行われた。傲慢で気難しい性格ながら、民にはとても人気があった。

安土の麓に造られた大きな墓には、今でも献花が絶えないという。

なお、横溝由紀のその後を知る者は誰もいないもよう。

「ふぎけんな」





横溝は生きていた。しかし、ここではない、全く違う異世界に。

「……………」

グルルルル……。

目の前で獣人が喉を鳴らした。大きな竜の姿もある。自分は狙われていた。話が聞く相手ではなかった。

「あのさ、クリムゾンさ、お前何でここまでするの？ いい加減にしないとキレルよ俺」

クリムゾンは静かに紅く点滅した。

顔を見ればかつての20代の頃に戻っている。しかし、嬉しいとか、良かったとか、とにかくそういう気はさらさらなかった。

「あああああああつ！ 俺はいつになったら札幌のみんなの所に帰れるんだ!? 答えるクリムゾンよおー！」

横溝の悲壮な叫びが高らかに響き渡った。

これからこの先一生クリムゾンに運命を弄ばれるのかと思うと絶望した。

されど苦難の中でせつかくだからを貫け。それが持ち主に課せられた使命であった。

獣人が襲い掛かってきた。横溝は逃げた。

「異世界転生なんて、大っ嫌いだああああああつ!!」

TO BE CONTINUED…

「続かねえよ！ バーカ！」